

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第348集

稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書

中小河川改修事業関連発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

いなむら
稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書

中小河川改修事業関連発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、およそ10,000カ所にも及ぶ遺跡が確認されております。先人の残した文化遺産を保護し、保存していくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、快適な生活を送るための地域開発もまた県民の切実な願いであります。このような埋蔵文化財の保護・保存と地域開発の調和のとれた施策が今日的な課題となっています。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存の措置をとってまいりました。本書は、中小河川改修事業に関連して、平成8・9・11年度の三ヶ年にわたり発掘調査した稲村Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査によって、本遺跡は、徳丹城が創建される直前の奈良時代8世紀後半を主体とする大集落として、またそれ以前の縄文時代には、動物の狩り場として利用されていたことが明らかとなりました。この報告書が広く活用され、考古学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する関心と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました盛岡地方振興局・紫波町教育委員会をはじめとする、多くの関係各位に衷心より謝意を表します。

平成12年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 千葉 浩一

例 言

1. 本報告書は、岩手県紫波郡紫波町高水寺字稲村23番地5ほかに所在する、稲村Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、中小河川岩崎川改修事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会と盛岡地方振興局土木部との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡登録台帳に記載されている遺跡番号はLE57-1039、遺跡略号はIMⅡ-96・97・99である。
4. 発掘調査は、平成8年度・9年度・11年度の3ヶ年にわたり実施した。各年度の調査期間・調査面積調査担当者は次のとおりである。
 - <平成8年度> 6月22日～10月31日 5,950㎡ 濱田 宏・篠根敬志
 - <平成9年度> 8月5日～9月30日 2,000㎡ 濱田 宏・平澤里香
 - <平成11年度> 5月20日～7月15日 800㎡ 濱田 宏・小野寺正之
5. 本報告書の執筆は、Iを高橋與右衛門が、それ以外を濱田が担当し、編集は濱田が行った。
6. 遺物の分析・鑑定は次の方々へ依頼した。(敬称略)
 - (1) 石質鑑定 花崗岩研究会
 - (2) 樹種同定 早坂松次郎(社団法人岩手県木炭協会)
 - ◇ 高橋利彦(木工会「ゆい」)
7. 本報告書作成にあたり、次の方々にご協力・ご指導いただいた。(敬称略)
 - 井上雅孝(滝沢村教育委員会) 日下和寿(岩手県立博物館) 昆野 靖(岩手県立大迫高等学校)
 - 斎藤邦雄(岩手県教育委員会) 桜井芳彦(紫波町教育委員会) 三上 昭(当時紫波町教委嘱託)
 - 中村良幸(大迫町教育委員会)
 - 盛岡地方振興局 紫波町教育委員会
8. 野外調査では、地元紫波町の方々30名あまり、室内整理では、当センターの期限付職員にご協力いただいた。
9. 土層の観察は、「新版標準土色帖」(小山・竹原:1989)によった。
10. 遺跡内の基準点測量・基準杭の設置は、(株)吉田測量設計に委託した。
11. 調査成果の一部は、現地説明会資料や調査略報にその時点での概略を公表しているが、本書と記載事項が異なる場合は、すべて本報告書が優先する。
12. 調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターが保管・管理している。

本文目次

序

例言

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1. 遺跡の位置	3
2. 周辺の地形と立地	3
3. 基本土層	5
4. 周辺の遺跡	5
III 野外調査と室内整理の方法	
1. 野外調査	9
2. 室内整理	10
IV 検出された遺構と遺構内出土遺物	
1. 竪穴住居跡と出土遺物	13
2. 住居状遺構	60
3. 土坑類	65
4. 焼土	71
5. 溝跡	73
6. 陥し穴状遺構	78
7. 旧河道跡	98
V 遺構外出土遺物	130
VI まとめ	
1. 遺構	142
2. 遺物	144
3. 稲村Ⅱ遺跡の集落の変遷	146
付篇 分析・鑑定	
紫波町稲村Ⅱ遺跡出土材の樹種	148
稲村Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種	149
稲村Ⅱ遺跡出土ガラス玉の非破壊分析法による調査結果	151
報告書抄録	

図 版 目 次

図 1 岩手県全図	1	図 36 第 24 号住居跡	53
図 2 遺跡の位置	2	図 37 第 25 号住居跡	55
図 3 周辺の地形分類図	4	図 38 第 26 号住居跡	56
図 4 基本土層図	5	図 39 第 27 号住居跡	58
図 5 周辺の遺跡	7	図 40 第 1 号住居状遺構	60
図 6 実測図凡例	10	図 41 第 2 号住居状遺構	61
図 7 遺構配置図	11・12	図 42 第 3 号住居状遺構	62
図 8 第 1 号住居跡	14	図 43 第 4 号住居状遺構	63
図 9 第 2 号住居跡	15	図 44 土坑 (1)	66
図 10 第 3 号住居跡 (1)	17	図 45 土坑 (2)	69
図 11 第 3 号住居跡 (2)	18	図 46 焼土	72
図 12 第 4 号住居跡 (1)	20	図 47 溝跡 (1)	75・76
図 13 第 4 号住居跡 (2)	21	図 48 溝跡 (2)	77
図 14 第 5 号住居跡	22	図 49 陥し穴状遺構分類図	78
図 15 第 6 号住居跡	24	図 50 陥し穴状遺構 (1)	79
図 16 第 7 号住居跡 (1)	25	図 51 陥し穴状遺構 (2)	80
図 17 第 7 号住居跡 (2)	26	図 52 陥し穴状遺構 (3)	81
図 18 第 8 号住居跡 (1)	28	図 53 陥し穴状遺構 (4)	82
図 19 第 8 号住居跡 (2)	29	図 54 陥し穴状遺構 (5)	83
図 20 第 9 号住居跡	31	図 55 陥し穴状遺構 (6)	84
図 21 第 10 号住居跡	32	図 56 陥し穴状遺構 (7)	85
図 22 第 11 号住居跡	33	図 57 陥し穴状遺構 (8)	86
図 23 第 12 号住居跡	34	図 58 陥し穴状遺構 (9)	87
図 24 第 13 号住居跡	36	図 59 陥し穴状遺構 (10)	88
図 25 第 14 号住居跡	38	図 60 陥し穴状遺構 (11)	89
図 26 第 15 号住居跡	39	図 61 陥し穴状遺構 (12)	90
図 27 第 16 号住居跡	40	図 62 陥し穴状遺構 (13)	91
図 28 第 17 号住居跡	41	図 63 陥し穴状遺構 (14)	92
図 29 第 18 号住居跡	42	図 64 陥し穴状遺構 (15)	93
図 30 第 19 号住居跡	43	図 65 陥し穴状遺構 (16)	94
図 31 第 20 号住居跡	46	図 66 陥し穴状遺構 (17)	95
図 32 第 21 号住居跡	47	図 67 陥し穴状遺構 (18)	96
図 33 第 22 号住居跡	48	図 68 陥し穴状遺構 (19)	97
図 34 第 23 号住居跡 (1)	50	図 69 旧河道出土流木	98
図 35 第 23 号住居跡 (2)	51	図 70 旧河道断面図	99

図7 1	遺構内出土遺物 (1)	100	図8 8	遺構内出土遺物 (1 8)	117
図7 2	遺構内出土遺物 (2)	101	図8 9	遺構内出土遺物 (1 9)	118
図7 3	遺構内出土遺物 (3)	102	図9 0	遺構内出土遺物 (2 0)	119
図7 4	遺構内出土遺物 (4)	103	図9 1	遺構内出土遺物 (2 1)	120
図7 5	遺構内出土遺物 (5)	104	図9 2	遺構内出土遺物 (2 2)	121
図7 6	遺構内出土遺物 (6)	105	図9 3	遺構内出土遺物 (2 3)	122
図7 7	遺構内出土遺物 (7)	106	図9 4	遺構内出土遺物 (2 4)	123
図7 8	遺構内出土遺物 (8)	107	図9 5	遺構内出土遺物 (2 5)	124
図7 9	遺構内出土遺物 (9)	108	図9 6	遺構内出土遺物 (2 6)	125
図8 0	遺構内出土遺物 (1 0)	109	図9 7	遺構内出土遺物 (2 7)	126
図8 1	遺構内出土遺物 (1 1)	110	図9 8	遺構内出土遺物 (2 8)	127
図8 2	遺構内出土遺物 (1 2)	111	図9 9	遺構内出土遺物 (2 9)	128
図8 3	遺構内出土遺物 (1 3)	112	図100	遺構内出土遺物 (3 0)	
図8 4	遺構内出土遺物 (1 4)	113		・旧河道出土遺物 (1)	129
図8 5	遺構内出土遺物 (1 5)	114	図101	旧河道出土遺物 (2) ほか	130
図8 6	遺構内出土遺物 (1 6)	115	図102	遺構外出土遺物	131
図8 7	遺構内出土遺物 (1 7)	116	図103	稲村Ⅱ遺跡の集落の変遷	146

写真図版目次

写真図版 1	空中写真・基本略序	157	写真図版 1 8	第1 7号住居跡	174
写真図版 2	第1号住居跡	158	写真図版 1 9	第1 8号住居跡	175
写真図版 3	第2号住居跡	159	写真図版 2 0	第1 9号住居跡	176
写真図版 4	第3号住居跡	160	写真図版 2 1	第2 0号住居跡	177
写真図版 5	第4号住居跡	161	写真図版 2 2	第2 1号住居跡	178
写真図版 6	第5号住居跡	162	写真図版 2 3	第2 2号住居跡	179
写真図版 7	第6号住居跡	163	写真図版 2 4	第2 3号住居跡	180
写真図版 8	第7号住居跡	164	写真図版 2 5	第2 4号住居跡	181
写真図版 9	第8号住居跡	165	写真図版 2 6	第2 5号住居跡	182
写真図版 1 0	第9号住居跡	166	写真図版 2 7	第2 6号住居跡	183
写真図版 1 1	第10号住居跡	167	写真図版 2 8	第2 7号住居跡	184
写真図版 1 2	第11号住居跡	168	写真図版 2 9	第1号住居状遺構	185
写真図版 1 3	第12号住居跡	169	写真図版 3 0	第2号住居状遺構	186
写真図版 1 4	第13号住居跡	170	写真図版 3 1	第3号住居状遺構	187
写真図版 1 5	第14号住居跡	171	写真図版 3 2	第4号住居状遺構	188
写真図版 1 6	第15号住居跡	172	写真図版 3 3	土坑 (1)	189
写真図版 1 7	第16号住居跡	173	写真図版 3 4	土坑 (2)	190

写真図版 3 5	土坑 (3)	191	写真図版 6 1	遺構内出土遺物 (5)	217
写真図版 3 6	土坑 (4)・空中写真	192	写真図版 6 2	遺構内出土遺物 (6)	218
写真図版 3 7	焼土・空中写真	193	写真図版 6 3	遺構内出土遺物 (7)	219
写真図版 3 8	溝跡 (1)	194	写真図版 6 4	遺構内出土遺物 (8)	220
写真図版 3 9	溝跡 (2)	195	写真図版 6 5	遺構内出土遺物 (9)	221
写真図版 4 0	溝跡 (3)	196	写真図版 6 6	遺構内出土遺物 (10)	222
写真図版 4 1	溝跡 (4)	197	写真図版 6 7	遺構内出土遺物 (11)	223
写真図版 4 2	陥し穴状遺構 (1)	198	写真図版 6 8	遺構内出土遺物 (12)	224
写真図版 4 3	陥し穴状遺構 (2)	199	写真図版 6 9	遺構内出土遺物 (13)	225
写真図版 4 4	陥し穴状遺構 (3)	200	写真図版 7 0	遺構内出土遺物 (14)	226
写真図版 4 5	陥し穴状遺構 (4)	201	写真図版 7 1	遺構内出土遺物 (15)	227
写真図版 4 6	陥し穴状遺構 (5)	202	写真図版 7 2	遺構内出土遺物 (16)	228
写真図版 4 7	陥し穴状遺構 (6)	203	写真図版 7 3	遺構内出土遺物 (17)	229
写真図版 4 8	陥し穴状遺構 (7)	204	写真図版 7 4	遺構内出土遺物 (18)	230
写真図版 4 9	陥し穴状遺構 (8)	205	写真図版 7 5	遺構内出土遺物 (19)	231
写真図版 5 0	陥し穴状遺構 (9)	206	写真図版 7 6	遺構内出土遺物 (20)	232
写真図版 5 1	陥し穴状遺構 (10)	207	写真図版 7 7	遺構内出土遺物 (21)	233
写真図版 5 2	陥し穴状遺構 (11)	208	写真図版 7 8	遺構内出土遺物 (22)	234
写真図版 5 3	陥し穴状遺構 (12)	209	写真図版 7 9	遺構内出土遺物 (23)	235
写真図版 5 4	陥し穴状遺構 (13)	210	写真図版 8 0	遺構内出土遺物 (24)	236
写真図版 5 5	陥し穴状遺構 (14)	211	写真図版 8 1	遺構内出土遺物 (25)	237
写真図版 5 6	陥し穴状遺構 (15)	212	写真図版 8 2	遺構内出土遺物 (26)	238
写真図版 5 7	遺構内出土遺物 (1)	213	写真図版 8 3	遺構内出土遺物 (27)	239
写真図版 5 8	遺構内出土遺物 (2)	214	写真図版 8 4	遺構内出土遺物 (28)	
写真図版 5 9	遺構内出土遺物 (3)	215		・旧河道出土遺物 (1)	240
写真図版 6 0	遺構内出土遺物 (4)	216	写真図版 8 5	旧河道出土遺物 (2)	
				・遺構外出土遺物	241

表 目 次

表 1	周辺の遺跡一覧	7・8
表 2	遺物観察表	132
表 3	竪穴住居跡観察表	142・143
表 4	陥し穴状遺構集計表	144
表 5	遺構別環・堯類の特徴	145

I 調査に至る経過

岩崎川は、一級河川北上川の右支川で、その源を南昌山（標高848m）に発して東流する。その中流部で支川芋沢川と合流後南下し、国道4号線を経て支川の太田川と合流して北上川に注いでいる。流域面積は、68.88km²、流路延長15.6kmである。

流域の状況は、上流部が急峻な山地となっており、中流部には良好な水田地帯が広がっている。下流部は市街地に近接しているため、地域にとっては重要な河川となっている。

岩崎川は、古くは農業用水路として一部に護岸等が整備されているものの、河路断面が狭小で治水安定度が低く、大雨の都度溢水氾濫を繰り返してきた。

そのため、本川上流部においては、昭和53年から平成元年まで局部改良事業を、支流芋沢川では、昭和61年から災害関連事業を実施しているところである。

さらに平成4年からは、河積の拡大と流路の整備および河床の安定を図るため、北上川合流部を起点として岩崎川・太田川・芋沢川の延べ10.5kmを中小河川改良事業により施行し、現在に至っている。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成6年度から岩手県教育委員会と岩手県盛岡地方振興局土木部との間で協議が行われ、この稲村Ⅱ遺跡は、平成8年度・9年度・11年度の3カ年にわたり発掘調査された。

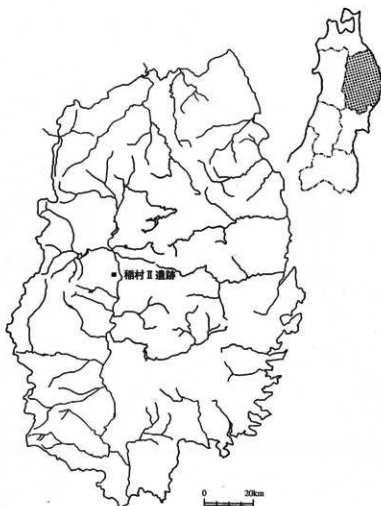


図1 岩手県全図



図2 遺跡の位置

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

稲村Ⅱ遺跡の所在する紫波町は、県都盛岡市の南約1.8kmに矢巾町を挟んで位置する。東は大迫町、西は雫石町、南は石鳥谷町に接し、総面積は238.32km²である。東西方向に長いこの紫波町の中央には、国道4号線が南北に走り、すぐ東側にはそれとほぼ平行して北上川が南流している。紫波町は、かねてから高い農業生産力を持ち、また内陸部の交通の要衝として栄えてきたが、近年は盛岡市のベッドタウンとして発展してきている地域である。平成10年3月には、東北本線古館駅と日詰駅の中間に「紫波中央駅」が開業し、宅地造成や公共施設の建設など、日詰西地区の開発がさらに進展していくものと思われる。

本遺跡は、矢巾町との境界にほど近い町の最北部、東日本旅客鉄道東北本線古館駅の北北西約1kmにある。その地点は、北緯39°34'53"、東経141°10'19"付近である。遺跡の東側には、南西方向に流れる岩崎川があり、一旦五内川と合流した後北上川に注いでいる。調査区は、この岩崎川に沿って南北方向約300m、東西方向には30～40mを算し、総調査面積は9,830m²である。

本調査区の西側では、平成6年度から平成8年度にかけて、宅地造成に伴う同じ稲村Ⅱ遺跡の発掘調査が紫波町教育委員会によって実施され、本調査区と同様の遺構群が確認されている。

この稲村Ⅱ遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「日詰」(NJ-54-13-15)および2万5千分の1地形図「矢幅」(NJ-54-13-15-1)・「日詰」(NJ-54-13-15-2)の図幅内に含まれている。

2. 周辺の地形と立地

本遺跡の東側1kmを南流する北上川は、盛岡以北を上流域、盛岡から一関間を中流域、一関より南を下流域と3つに大きく区分され、遺跡は中流域北部に位置している。西の奥羽山脈と東の北上高地とに挟まれた谷底平野を縦断するこの川は、主流部の幹線流路延長が249kmにおよぶ東北地方最大の河川である。岩手県北部にある西岳を源とし、県の中央部を縦断して宮城県に入り、石巻市追波湾で太平洋に注ぐ。紫波町は、これに注ぎ込む多くの河川によって解析された広い平野部を有し、これらに立地する遺跡は数多い。

この周辺には新旧の段丘群が存在し、北上川右岸によく発達している。中川ら(1963)によれば、古期のものから、石鳥谷段丘(高位段丘)・二枚橋段丘(中位段丘)・都南段丘(低位段丘)と呼ばれる。高位段丘に相当する石鳥谷段丘は日詰礫層で構成され、上部は風化が著しく赤色を呈している。この段丘は、日詰周辺および陣ヶ岡に残片的に発達する。中位段丘相当の二枚橋段丘は、上位の石鳥谷段丘の外縁に沿って分布し、日詰以南に広く発達する。また、滝名川西岸にも残丘状に認められる。日詰以北では構成層が欠くが、こうした段丘を中川ら(1963)は花巻段丘と呼び区別している。低位段丘の都南段丘は、花巻段丘の上部を侵食してつくられたもので、北上川本流周辺や支流である五内川・岩崎川下流域に分布する。上流ほど段丘座の比高が低く、下流に向かって大きくなる。構成層は、上部に砂・シルト・粘土を伴う礫層である。稲村Ⅱ遺跡は、都南段丘の先端部、岩崎川と五内川に挟まれた岩崎川西岸の自然堤防状の微高地に立地し、その標高は101m前後、周辺の沖積面との比高は2～3mである。

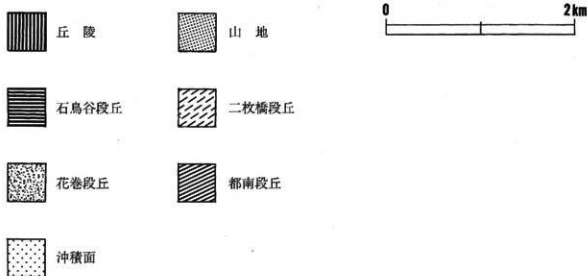
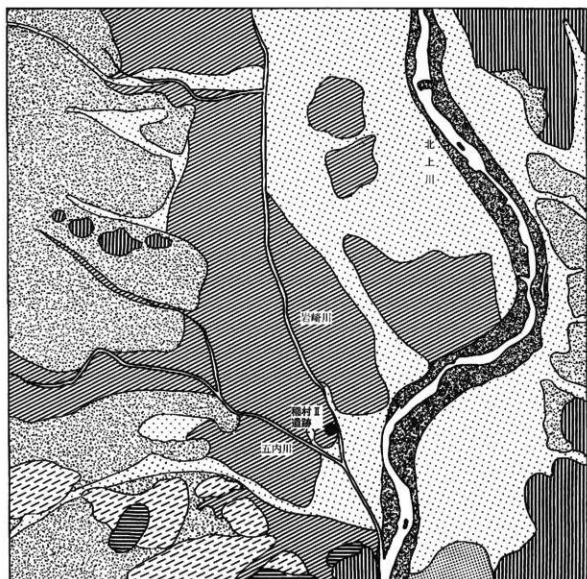


図3 周辺の地形分類図

3. 基本土層

遺跡内では、全域で次のような層序が観察された。

- 第Ⅰ層 黒褐色土（10YR2/3）シルト
表土および耕作土。草根・木根を含む。層厚25～30cm。
- 第Ⅱ層 黒褐色土（10YR3/2）粘土質シルト
粘性・しまりとも強い。本層上位から中位が古代の住居跡および縄文時代の陥し穴状遺構の遺構確認面である。層厚30～40cm。
- 第Ⅲ層 褐色土（10YR4/4）粘土質シルト
粘性のある地山で、細かい砂を含む。層厚20～25cm。
- 第Ⅳ層 暗褐色土（10YR3/3）細砂
河川の氾濫に伴う砂層で、褐色の小ブロックを全体に含み、粘性はない。層厚15～20cm。
- 第Ⅴ層 褐色土（10YR4/6）粘土質シルト
粘性が強く固く締まる。層厚は不明だが、下位に砂層が挟く。これ以下は砂層との互層となり、礫層に至るものと思われる。

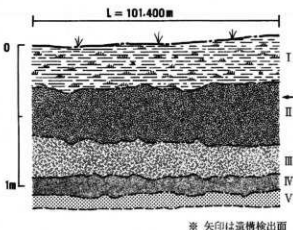


図4 基本土層図

4. 周辺の遺跡

『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』（県教委：1997）によると、本遺跡のある紫波町には、縄文時代から近世までの遺跡332カ所が登録されている。北に隣接する矢巾町では142カ所で、いずれも奈良・平安時代の遺跡が多い。その数は、紫波町では172カ所、矢巾町では94カ所（ともに複合遺跡を含む）におよび、前者でほぼ半数、後者で約7割近くを占めている。これは地形等の立地条件のほか、この2町が古代城柵「徳丹城」の周辺に位置していることも関係するものと思われる。前述のように、本遺跡は紫波町の最北部にあるので、ここでは矢巾町を含めた古代の遺跡を中心に、周辺の遺跡について概観する。

当地域の古代集落（7～11世紀）の内容は、第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集「東北地方の古代集落—3」（西野1998）に集成されたものに詳しい。これには、紫波町では16遺跡、矢巾町では10遺跡が挙げられているが、対象を「概ね5棟以上検出されたもの」と限定しており、実際はこれよりも該期の遺跡数は多いものと思われる。昭和53・54年には、国道4号線欠巾地区改修事に伴う稲村遺跡・中田遺跡・古屋敷遺跡の調査が行われ、古代の住居跡が数棟確認されているが、それは上記の資料集には掲載されていない。特に稲村遺跡については、今回調査した稲村Ⅱ遺跡の南側に隣接していることから、ここで内容を紹介する。

稲村遺跡は、本遺跡の南約0.5kmの五内川北岸にある。検出された遺構は、奈良時代終わりから平安時代初期にかけての住居跡3棟、時期不明の掘立建物跡2棟と溝跡1条、縄文時代の溝状の陥し穴状遺構3基である。出土遺物は、非ロクロ成形の土師器杯・甕、須恵器甕、土玉、鉄製品などで、遺構・遺物とも本遺跡の内容とほぼ一致している。このことは、この稲村地区の該期の集落が南側に広がる可能性を示唆するものである。中田・古屋敷遺跡は、五内川南岸に隣接し、稲村遺跡より若干新しい9世紀前半以降の住居跡があわせて13棟検出されている。この2遺跡は、稲村遺跡に後続する集落と考えられる。

この他、紫波町内では、野上遺跡（9世紀後半）・田頭遺跡（9世紀後半～10世紀前半）・杉の上I遺跡（10世紀後半）・杉の上II遺跡（9世紀前半～10世紀前半）・杉の上III遺跡（10世紀前半）・宮手遺跡（10世紀前半～後半）・上平沢新田遺跡（9世紀前半～10世紀前半）・西田東遺跡（9世紀後半～10世紀後半）・下川原II遺跡（9世紀後半～10世紀後半）・古館駅前遺跡（9世紀前半）・古館橋（9世紀後半）・西田遺跡（9世紀後半～10世紀前半）などの遺跡が確認されている。

矢巾町では、徳丹城（813年創建）をはじめとし、秋森古墳群・白沢えぞ森古墳群など岩手県の古代史上重要な遺跡が存在する。集落跡では、徳丹城内の集落（7世紀～9世紀前半）・一本松遺跡（10世紀前半）・館畑遺跡（7世紀～10世紀後半）・白沢XII遺跡（9世紀後半～10世紀前半）・宮田B遺跡（10世紀中ごろ）・淡川遺跡（8世紀前半？）などの遺跡が挙げられる。

縄文時代の遺跡としては、中期中葉大木8a式期の集落跡である紫波町西田遺跡が挙げられよう。西田遺跡では、環状に配される墓塚群の周辺を取りまく柱穴状のピット群と、さらにその外側にある住居跡群や貯蔵穴群の分布から、集落自体が典型的な円環構造をとることが明らかとなった。この構造の核となるのはその中心にある墓域とされており、このことから共同墓地的な性格を有する遺跡と考えられている。これ以外では、縄文後期の集落跡である南日詰遺跡や、晩期の包含層が見つかった北日詰城内遺跡などが調査されたに過ぎない。

上記以外の時期の紫波町内の著名な遺跡としては、県指定史跡の近世瓦窯跡である川原毛瓦窯跡や中世城館の高水寺城跡・北条館跡、12世紀の比呂氏の居館とされる比呂館跡、安倍氏に関連する屏館跡とされる伝善知鳥館跡などが知られている。

なお、図5と表1には本遺跡を中心におく周辺の遺跡61箇所を図示・掲載した。これは、『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覽』（1997）から抜き出して作成したが、上に示した遺跡のすべては掲載していない。

<引用・参考文献>

- | | | |
|-----------|------|--|
| 岩手県企画開発室 | 1975 | 『北上山系開発地域 土地分類基本調査（日誌）』 岩手県 |
| 岩手県教育委員会 | 1997 | 『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覽』 |
| 南池利和ほか | 1986 | 『比呂古墳群遺跡発掘調査報告書』 岩文振報告書第113集（財）岩文振 |
| 板井方彦 | 1992 | 『紫波町の遺跡』 岩手県紫波町文化財調査報告書第26集 紫波町教育委員会 |
| 佐々木香 | 1993 | 『下川原II遺跡発掘調査報告書』 岩文振報告書第192集（財）岩文振 |
| 高橋義介ほか | 1981 | 『紫波町稲村遺跡・中田遺跡・古館遺跡』 岩文振報告書第19集（財）岩文振 |
| 高橋義介・田村社一 | 1989 | 『南日詰遺跡発掘調査報告書』 岩文振報告書第136集（財）岩文振 |
| 中川久夫ほか | 1993 | 『北上川上流沿岸の第四系および地形—北と川流域の第四紀地史（1）（2）』 『地質学雑誌』69-3 |
| 花坂政博 | 1995 | 『西田東遺跡発掘調査報告書』 岩文振報告書第221集（財）岩文振 |

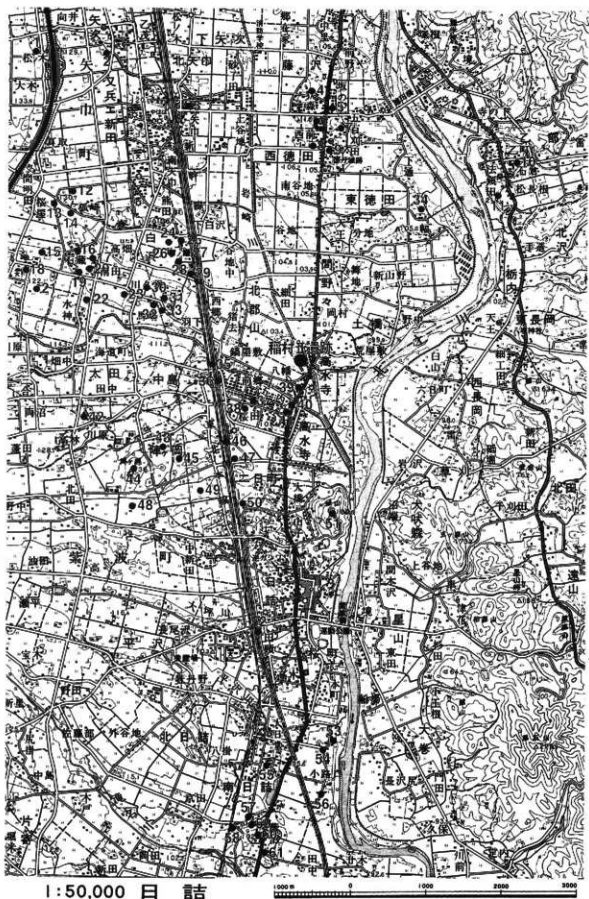


図5 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	内 容	時 代	備 考
1	煙山Ⅰ	キャンプ跡	古代(平安)	
2	下次次Ⅰ	キャンプ跡	古代(平安)	
3	南矢廻	散布地	古代(平安)	
4	狹嶽古墳	古 墳	古 代	
5	白山堂	散布地	古代(平安)	
6	田郷	散布地	古代(平安)	
7	館前	城館跡	中 世	
8	西前	散布地	古代(平安)	
9	徳丹城跡	宮 跡	古代(平安)	国指定史跡
10	松長堀	集落跡	古代(平安)	
11	乙部方八丁	散布地	縄文・原始	
12	細壘	散布地	古代(平安)	
13	下煙山	キャンプ地	古代(平安)	
14	煙山	集落跡	古代(平安)	
15	煙山Ⅱ	散布地	古代?	
16	白沢Ⅱ	集落跡	古代(平安)	
17	白沢Ⅲ	集落跡	古代(平安)	
18	白沢えぞ森古墳	集落跡・古墳	縄文・古代	
19	石蔵	散布地	古 代	
20	白沢Ⅰ	集落跡	古代(平安)	
21	室岡	集落跡	古代(平安)	
22	太田	集落跡	縄文・古代	
23	不動馬場	集落跡	縄文・古代	
24	白沢Ⅳ	集落跡ほか	縄文・古代	
25	白沢Ⅲ	集落跡	古代(平安)	
26	白沢Ⅵ	集落跡	古代(平安)	
27	白沢Ⅶ	集落跡	古代(平安)	
28	白沢Ⅷ	集落跡	古代(平安)	
29	えぞ森古墳	古 墳	古 代	
30	白沢Ⅴ	集落跡	古代(平安)	現羽下遺跡
31	白沢Ⅳ	集落跡	縄文・古代	現羽下遺跡
32	白沢Ⅴ	集落跡	縄文・古代	現羽下遺跡
33	白沢Ⅵ	集落跡	縄文・古代	
34	濱川	集落跡	古代(奈良)	
35	古館前	集落跡	古代(奈良)	
36	古館駅前	集落跡	古代(奈良)	
37	中田Ⅰ	集落跡	古代(平安)	
38	念仏堂	寺院跡		
39	稲村	集落跡	古代(奈良)	
40	中田	集落跡	古代(平安)	
41	古風敷	集落跡	古代(平安)	
42	上竹林Ⅰ	散布地	古代(平安)	
43	藤田	集落跡	古代(平安)	
44	陣ヶ岡	城館跡ほか	古代(奈良)	
45	平坊Ⅰ	集落跡	古代(平安)	
46	杉ノ上Ⅰ	窯 跡	古 代	
47	新田	窯 跡	古 代	
48	柳原	城館跡ほか	古 代	
49	川原毛竊跡	窯 跡	近 世	県指定史跡
50	杉ノ上Ⅱ	集落跡	古 代	
51	高水寺城跡	城館跡	中 世	町指定史跡
52	田原	散布地	古 代	
53	北日誌城内	散布地	縄 文	
54	北条原跡	城館跡	中 世	
55	比爪館跡	城館跡	10・12C	町指定史跡
56	南日誌小路Ⅰ	散布地	古 代	
57	南日誌藤沼Ⅰ	散布地	古 代	
58	南日誌栗田Ⅱ	散布地	古 代	
59	南日誌藤沼Ⅱ	散布地	古 代	
60	南日誌	集落跡	縄 文	
61	伝書知鳥館跡	城館跡	縄文・古代	町指定史跡

Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッドの設定

調査の開始年度である平成8年に、調査区の中央付近に3級基準点2点とその周辺に補点5点を設け、調査区内のグリッドを設定した。それ以降の調査の際にはこれらを利用し、年度毎にグリッドを再設定した。基準点1・2および補点1～5の成果値は次のとおりである。

基準点1	X=-46,500.000m	Y=29,100.000m	H=101.312m
基準点2	X=-46,400.000m	Y=29,100.000m	H=101.224m
(補点1)	X=-46,420.000m	Y=29,100.000m	H=100.948m
(補点2)	X=-46,500.000m	Y=29,120.000m	H=100.696m
(補点3)	X=-46,550.000m	Y=29,120.000m	H=101.655m
(補点4)	X=-46,350.000m	Y=29,100.000m	H=102.045m
(補点5)	X=-46,350.000m	Y=29,065.000m	H=101.522m

この7点を基に、調査区を1辺50mの大グリッドに区画し、さらにそれを1辺5mの小グリッドに区画した。大グリッドは、西から東へローマ数字のⅠ～Ⅳ、南から北へアルファベットの大文字A～Fを付した。小グリッドはさらに大グリッドを十等分し、西から算用数字の1～0、南からアルファベットの小文字a～jを付し、これらの組み合わせにより、ⅠA1a区・ⅡB2b区・ⅢC3c区のように表した。

(2) 根掘・遺構検出

調査は、各調査年度毎にまず草刈・雑物の除去を行っている。平成8年度の調査時には、県教委文化課が実施した試掘部分の位置確認とそのトレンチのクリーニングを行い、土層の堆積状況等を確認した。さらに表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で、2m幅のトレンチを調査区内に適宜設定した。その後、遺構検出面までの深さや層序を把握し、重機及び人力によって表土除去を行った。

遺構は、ほとんどがⅡ層（黒褐色土）中で検出されている。

(3) 遺構名の付け方

検出された遺構は、その属するグリッド名を付け、ⅠA1a住居跡・ⅡB2b土坑などのように呼称した。1つのグリッドに同種の遺構が複数ある場合は、ⅡB2b土坑-1・ⅡB2b土坑-2などとした。なお、本書では第1号住居跡・第2号土坑などとすべて遺構名を付け替えているが、同時に旧遺構名も記載した。

(4) 精査・実測・遺物の取り上げ

住居跡は4分法で、土坑・焼土等は2分法で精査し、必要に応じて使い分けた。実測は簡易造り方で行い、遺構の平・断面図は、20分の1の縮尺を基本とした。カマド等は10分の1で実測したものもある。

遺物は、大きく埋土と床面の2つに分け、埋土の遺物は4分割したものをQ1～Q4の区画名にして取り上げた。床面の出土遺物は連番を付し、平面図に出土位置を入れた後に取り上げている。

(5) 写真撮影

野外での写真撮影は、35mm版2台（モノクローム・カラーリバーサル1台ずつ）と6×7cm版モノクローム1台を使用した。また、適宜ボラロイドカメラも使用した。各年度とも、調査終了直前にはセスナ機による空中写真撮影を行った。

2. 室内整理

(1) 遺物の処理

遺物は、各年度とも野外調査と並行して雨天時などに洗浄までを行い、その後室内で注記・接合・復元の順に進めた。土器類は報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。鉄製品・土製品・石器類は器種毎に登録し、土器類と同様に進めた。これらは、遺物観察表として本書にまとめて掲載した。

(2) 遺構図面

野外調査で得られた図面類は、平・断面図の標高等の点検を行い、必要に応じて修正・合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

(3) 図版について

遺物の図版は、遺構種別毎に作成し掲載した。縮尺は、土器実測図・拓影図とも3分の1、石器は3分の1・4分の1、鉄製品は3分の1、土製品は2分の1である。また、各国版内にはそれぞれスケールを付している。遺構図版は遺構の種類毎に掲載した。縮尺は、竪穴住居跡・土坑が50分の1、溝跡が80分の1、焼土遺構が40分の1、陥し穴状遺構が60分の1（一部50分の1）である。遺構図版に使用したスクリーン・トーンについては、図7の凡例に示した。

検出された遺構とそれに伴う遺物は、各年度毎に図版を作成した。遺構は年度毎に南西に位置するものから連番を付し、伴出遺物もその順番で図版を組み掲載した。なお、平成9年度調査では全体を精査できなかった住居跡が数棟あり、これらは平成11年度に完掘しているが、整理の都合から9年度か11年度のいずれかに含めて報告している。

(4) 写真図版について

遺物写真図版の縮尺は、土器類では土師器の坏が2分の1、土師器・須恵器の甕が3分の1、土製品は3分の2・原寸、鉄製品3分の2・原寸を原則とした。なお、一部にこの縮尺に当てはまらないものがある。

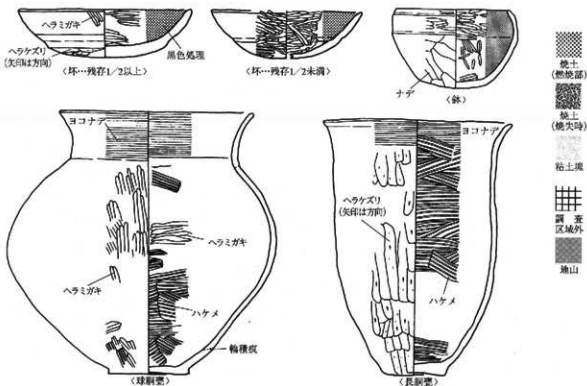


図6 実測図凡例

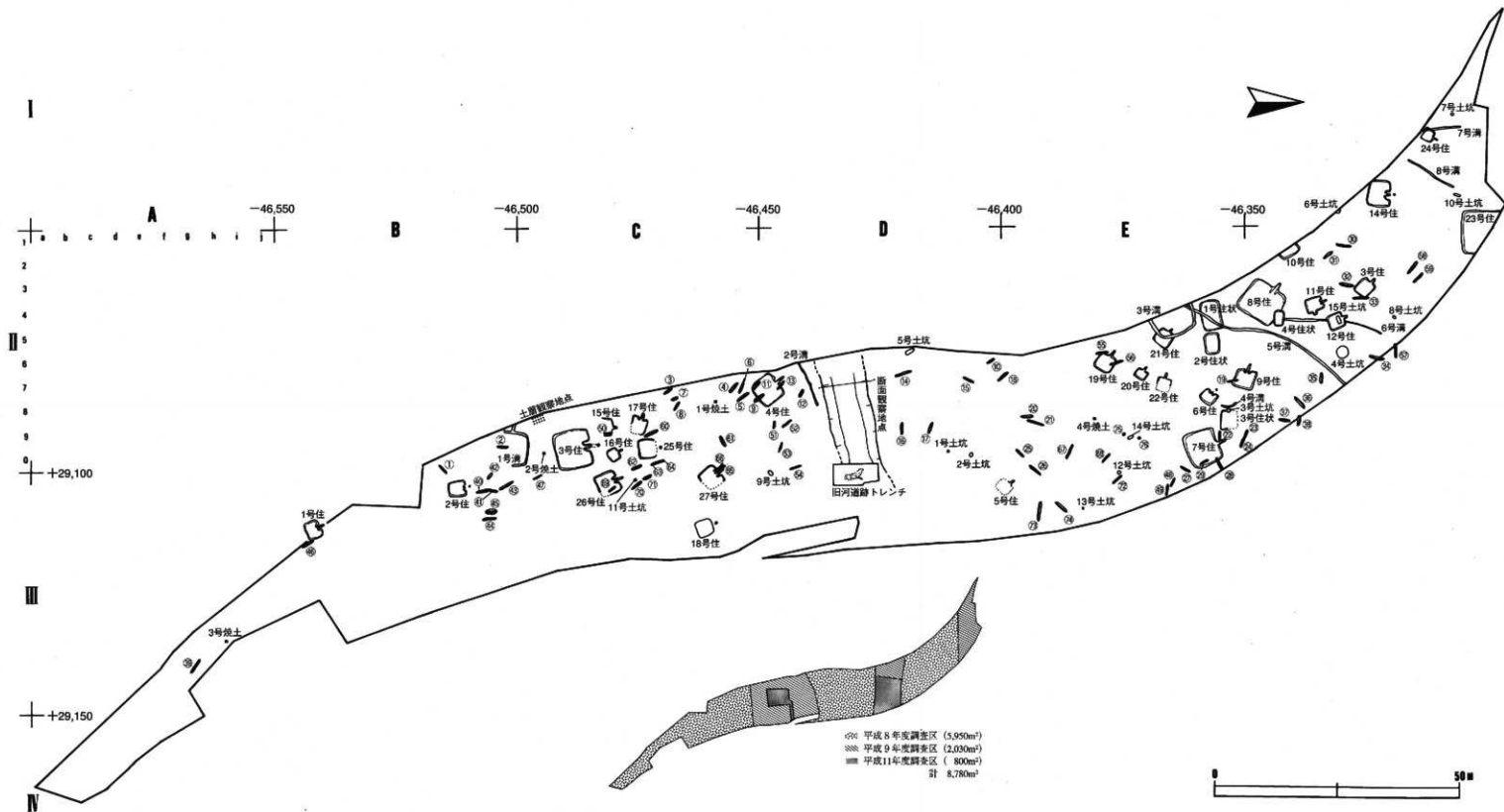


図7 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺構内出土遺物

1. 竪穴住居跡と出土遺物

今回の調査によって、本遺跡からは竪穴住居跡が27棟検出されたが、これらは奈良時代（8世紀前半～8世紀後半）のいずれかの時期に存在したものと考えられる。出土した遺物の特徴から、本報告書では、第I期（8世紀前半）・第II期（8世紀後半）・第III期（9世紀以降）の時期区分を設定し、遺物にある程度のセット関係（坏や甕等の器種構成）が認められるものについて、それを記載した。遺物が出土していなかったり、少なすぎて判断できない住居跡については、すべて「8世紀代」としている。

各住居跡から出土した遺物の図版については、章末に一括して掲載した。また、遺物の観察表は表2（132ページ～）にあるので参照されたい。

第1号住居跡（ⅢB3b住）

遺構（図8、写真図版2）

（位置・重複）調査区南側の西寄りに位置し、遺構のほぼ半分は西側の紫波町教育委員会分の調査区に延びている。このような場合には、「カマドが検出された側で全体を精査する」ことを紫波町教育委員会の調査担当者と協議の上取り決めた。よって本遺構は当センターですべての精査を行った。北側にある第2号住居跡とは約30mの距離を置く。

（堀土）黒色土・黒褐色土を主体とし、下位の黒褐色土中に炭化材を含む部分がある。

（平面形）不整形（規模）3.07×3.32m

（壁）直立気味に外傾して立ち上がる。壁高は13～53cm（深い方は床面掘り込み部分まで）である。

（床面）後述する掘り込み部分には凹凸がある。

（柱穴）（土坑）ともに検出されなかった。

（その他）床面中央に隅丸方形の掘り込みが認められた。大きさは2.12×2.15m、住居床面からの深さは30cmほどである。埋土の堆積状況が自然堆積と思われることや、その底面から出土した炭化材の検出状況などから、この掘り込みは本遺構に伴うものと考えられる。性格は不明であるが、小鍛冶等の作業場の可能性もあろう。

（カマド）＜位置＞北壁中央からやや東隅寄り＜主軸方向＞N-8°-E

＜本体＞西袖部と燃焼部焼土が残存している。袖部は地山を掘り残して構築される地山削り出しのタイプである。燃焼部焼土は3.2×3.4cmの不整形で厚さは最大で1.2cmである。焼け具合はあまり良くない。＜煙道部・煙出部＞掘り込み式の煙道をもち、その底面はほぼ水平のまま煙出部に至る。煙出部には小ピットを伴うが、煙道部底面よりさらに30cmほど掘り込まれている。各部の埋土には、焼土粒が含まれており、全体にくすんだ色調を呈している。

遺物（図71、写真図版57）

非口ロク成形の坏1点と壺敷点のほか、土製の紡錘車・勾玉が1点ずつ出土した。

1は内外面にヘラミガキ調整が施される丸底の坏である。外面胴部中央に軽い段を有し、内面のその位置にもわずかな段が見られる。底部付近にはヘラミガキ以前のヘラケズリ調整の痕跡が残る。外面の段下の胴部から底部にかけては、全面にヘラケズリ調整が施されさらにヘラミガキされたものと思われる。3は胴部

内外面ともにヘラケズリ調整が明瞭な長胴甕、5は小型の甕で、胴部にヘラナデ調整が見られるもの。4・2は球胴甕である。4の口縁部はわずかに外反して直立ぎみに立ち上がる。頭部には沈線様の段が付き、胴部は緩やかに張る。胴部内面の調整はハケメ、外面はヘラミガキが明瞭である。2は胴部中央に最大径を持ち、頭部と口縁部下端に1条ずつ細い沈線を有する。口縁部は外反して立ち上がる。器面調整は、内外面とも口縁部がヨコナデ、胴部がハケメと一部ヘラミガキである。6は土製紡錘車で、全面ヘラミガキされている。7は土製勾玉で、断面形は扁平ではなく円形に近い。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と考えられる。

第2号住居跡 (ⅢB1h住)

遺構 (図9、写真図版3)

(位置・重複) 調査区南寄りのⅢB区に位置し、第3号住居跡とは北北西方向に30mほどの距離がある。

(埋土) 埋土は黒褐色土を主体とし、その中に明褐色土・暗褐色土・黄褐色土の小ブロックを含む。

(平面形) 不整形 (規模) 3.20×3.22m

(壁) 遺構上部は削平を受けており、壁高は10cm前後と浅い。外傾して立ち上がる。

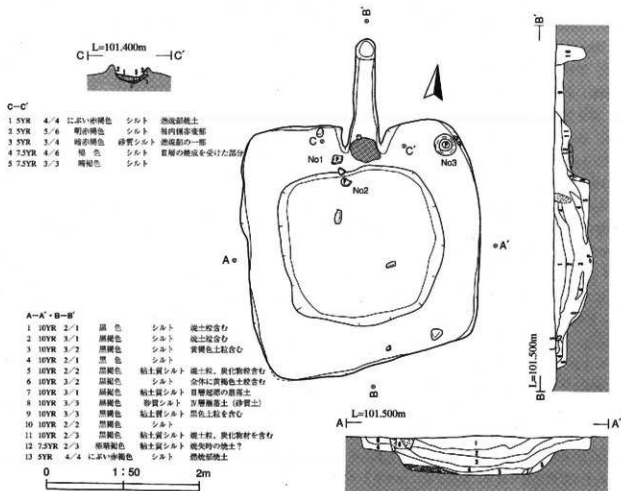


図8 第1号住居跡

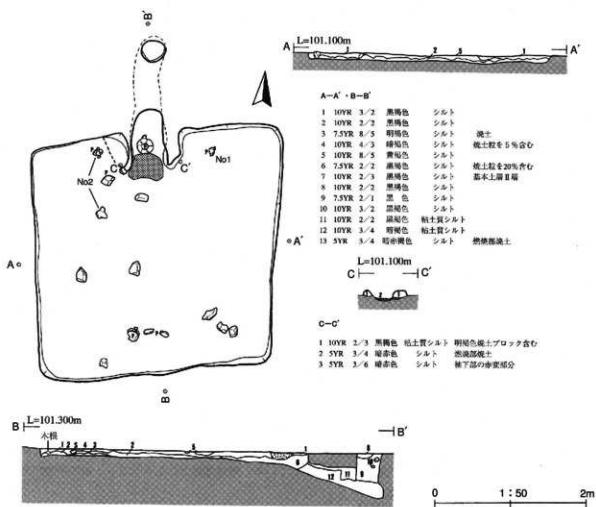


図9 第2号住居跡

(床面) 堅く締まる。また、10個あまりの礫が散在しているが、その性格は不明である。

(柱穴) (土坑) ともに検出されなかった。

(カマド) <位置>北壁中央やや西隔寄り<主軸方向>N-4°-W

<本体>右袖と左袖の一部(掘りすぎによる欠損)、支脚と思われる甕、焼燂部焼土が残存する。袖部は、芯材として地山が掘り残され、さらにシルト質土が貼り付けられている。焼燂部焼土は3.2×4.4cmの台形状を呈する。厚さは3cmと薄く、焼け具合も良くない。カマド奥壁部分には、支脚と思われるほぼ1個体の甕が倒立した状態で出土した。

<煙道部、煙出部>煙道部の構造はくり抜き式で、底面は奥壁付近から約20度の角度で緩やかに下がり、煙出部に至る。煙出部に小ピットは伴わない。各部の埋土には焼土粒が含まれる部分がある。

遺物 (図71、写真図版57)

非ロクロ成形の坏1点・鉢1点・甕数点のほか、加工痕を残す炭化した木製品の破片が1点出土した。

8は丸底の胴部中央付近に段を持つ坏である。内面には段は見られない。9は胴部から底部にかけての破片であるが、器高があることから鉢とした。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施されているが、坏に比べて胴部の器厚が薄い印象である。10・11は長胴甕、12は球胴甕の底部付近である。10は外面のヘラ

ケズリ調整が明瞭で、底部のつくりは雑である。13は何らかの工具により加工された痕跡を有する木製品の一部である。部分破片のためその種類は不明であるが、製品の一部が炭化して残ったものであろう。棒状あるいは板状の木片を斜めにくり抜いており、その加工面は平滑である。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と思われる。

第3号住居跡（ⅡC9c住）

遺構（図10-11、写真図版4）

（位置・重複）調査区中央部の南寄り、第15号住居跡の南約5mに位置している。遺構間の重複はない。
（埋土）上位は褐色土の小ブロックを含む黒褐色土、下位は焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土を主体とする。
（平面形）方形（規模）6.84×7.06m。

（壁）直立ぎみに外傾している。壁高は22～28cmを測る。

（床面）ほぼ平坦で全体によく締まっている。

（柱穴）PP1～PP8が検出された。PP1～PP4が主柱穴と思われる。PP7もその可能性があるが、PP1とPP4の間には検出されておらず不明である。PP5・PP6は主柱穴を支える補助柱の可能性はある。PP8の性格は不明である。

（土坑）Pit1～Pit8がカマド周辺に4基、南西隅周辺に4基検出された。前者は食料や道具等の貯蔵に類する用途を持つものと考えられるが、後者は不明である。長方形の形状を持つPit5からは白色の粘土塊が出土した。Pit5以外のそれは円形を基調としている。

（その他）焼土や炭化材が見られることから、焼失家屋の可能性が高い。

（カマド）＜位置＞北壁中央 ＜主軸方向＞N-13°-W

＜本体＞左右の袖部、天井部の崩落状況、燃焼部焼土等、残存状況は極めて良好である。袖部は地山を掘り残して袖の芯とし、さらにシルト質土を被覆して構築している。燃焼部焼土は4.6×5.8cmの不整形円で厚さは6cmを測り、良く焼けている。

＜煙道部、進出部＞くり抜き式の煙道で、底面はカマドの奥壁から約8度の角度で緩やかに下がり煙出部に至る。煙道部上面は、住居北壁からおよそ60cmほど張り出して地山に潜り込んでいる。煙出部の底面は若干窪んでいる。長期にわたる使用のためか、各部の埋土には焼土粒が多く含まれ、紫色に染めた感じの土が堆積している。

遺物（図72～74、写真図版58～60）

非ロクロ成形の坏・甕が中コンテナ1箱、土製紡錘車2点・砥石1点・鉄製品6点が出土した。

14～22は内面が黒色処理される坏で、14～18は胴部外面に段や沈線を有するものである。16には内面にも沈線が全周している。これら有段のものには、段下の胴部から底部にかけてヘラケズリあるいはハケメ調整が明瞭に残っているもの（14・15・18）がある。底部が丸底のものは14・15・16、平底のものは17・18、平底風の丸底のものは19・21である。22は無段丸底の坏である。23は椀とした。胴部には面取りしたかのような成形痕を残している。23は胴部と口縁部との境に1条、さらに口縁部に1条の軽い段を持つ。胴部は下の段から内湾して立ち上がり口縁部に至る。内面は丁寧なヘラミガキ調整が施されている。24～34は長胴甕である。いずれも口縁部は外反して立ち上がり頸部の段は明瞭でない。器面調整は、内外面とも口縁部ヨコナデ胴部ハケメが主体で、ヘラミガキされないものがほとんどである。24～26の最大径は、大きく開く口縁部にある。35・36は球胴甕で最大径は胴部中央にある。

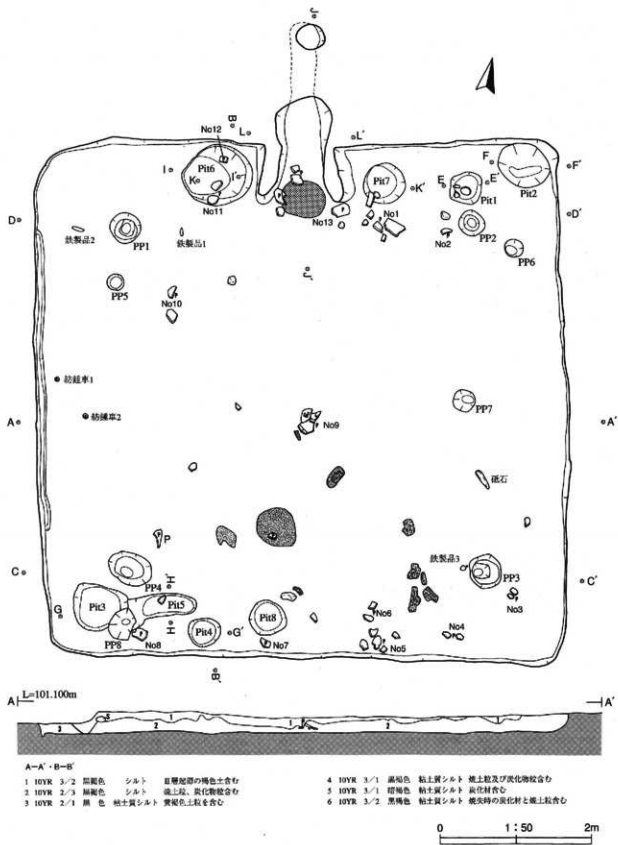


図10 第3号住居跡(1)

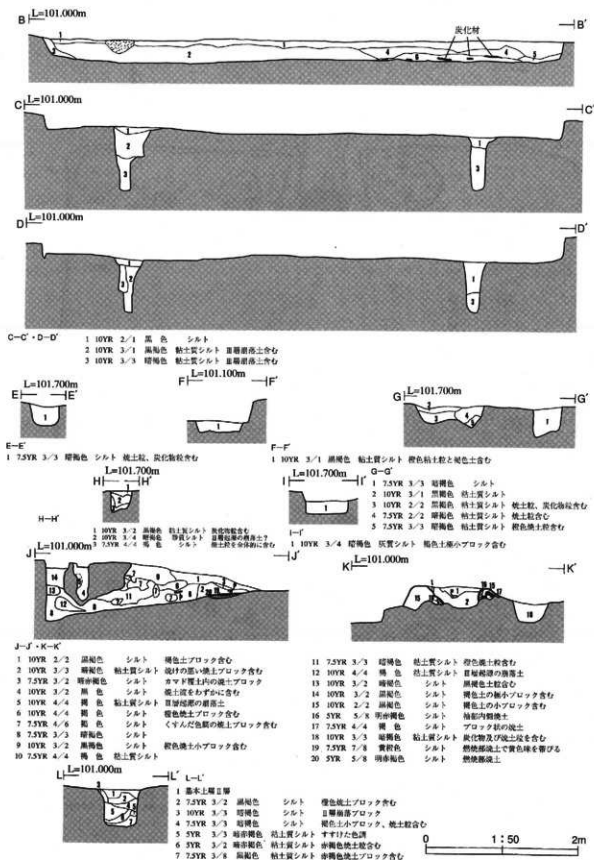


図11 第3号住居跡 (2)

35は胴部外面がヘラミガキされるのに対して、36はハケメ調整のみである。37・38は上製紡錘車である。39は凝灰岩製の砥石で、3～4面に使用痕が観察される。40～45は鉄製品で、40は鉄鏝、41は片方の端部が鉤状を呈するもの、42～45は刀子の破片である。

時期 出土遺物から、8世紀前半（第1期）の住居跡である。

第4号住居跡（ⅡD7a住）

遺構（図12・13、写真図版5）

（位置・重複）調査区中央部南寄りにある旧河道跡の南およそ8mに位置し、第3号住居跡とは北に35mの距離を置く。第9・11・13号陥し穴状遺構とそれぞれ重複している。

（埋土）焼土粒・炭化物粒をまばらに含む黒色土の単層である。

（平面形）方形（規模）5.60×5.62m

（壁）直立ぎみに外傾して立ち上がり、壁高は15cmほどである。

（床面）平坦で締まりがある。貼り床が確認されている。

（柱穴）方形に配される主柱穴PP1～PP4の4個が確認された。柱穴間の距離は、それぞれ3.20～3.40mである。

（土坑）貯蔵穴と思われるPit1～Pit6が検出された。カマドの左右、北西壁に3基、南東壁に沿って3基確認された。Pit2からは焼土塊が出土しているが、焼失に伴うものか。

（その他）焼失に伴う焼土と炭化材が見られることから焼失家屋の可能性はあるが、いずれも出土した量が少なく不明である。

（カマド）＜位置＞北西壁中央 ＜主軸方向＞N-40°-W

＜本体＞両袖部・燃焼部焼上が残存している。左右の袖部は、芯材となる礫にシルト質土を被覆し構築されている。燃焼部焼土は35×40cmの不整形で、厚さは7cmを測る。

＜煙道部、煙出部＞握り込み式の煙道で、底面は奥壁付近から5度程度の角度で下がり煙出部に至る。煙出部の底面は1つ段を持って立ち上がっている。各部の埋土には、焼土粒・炭化物粒が多く含まれている。

遺物（図74～76、写真図版60・61）

非ロクロ成形の坏・甕が中コンテナ1箱、土製紡錘車1点・土製勾玉1点・砥石1点・鉄製品1点が出土した。甕の中には、頸部から口縁部にかけて数条の沈線を有する摺文系といわれているものがある。

46は胴部下端に段を有する坏で、底部を欠くが丸底であろう。胴部外面の段下にはハケメ調整が部分的に観察される。47も丸底の坏で、胴部下端には段というよりも膨らみを有する。胴部から口縁部にかけては、外反ぎみに立ち上がっている。48～53は長胴甕である。48・49・50の口縁部は外反して立ち上がる。器面調整は口縁部内外面がヨコナア、胴部内外面がハケメ主体である。50は胴部中央に最大径を持つ。51～53は胴部外面がヘラケズリ調整されているもので、底部外面はいずれもわずかに張り出す。51の口縁部は直立ぎみに外傾して立ち上がっている。48～53のうち、頸部があるものについては、すべてそれに段を有している。54は小型甕で、胴部外面はヘラミガキ調整されている。55～57は球胴の甕で、器面調整は長胴甕の48～50のものと同じである。55・56の口縁部は外反ぎみに開く。58は口縁部に摺文系の特徴を持つ球胴と思われる甕あるいは壺である。外面の色調は黄褐色を呈し、内面は黒色処理されている。器形は、肩部から頸部にかけて大きく膨らみ、口縁部は外反ぎみに立ち上がった後、口唇部がわずかに内湾するものである。口縁部外面の調整には回転台を使用したと思われるが、10条ほどの多

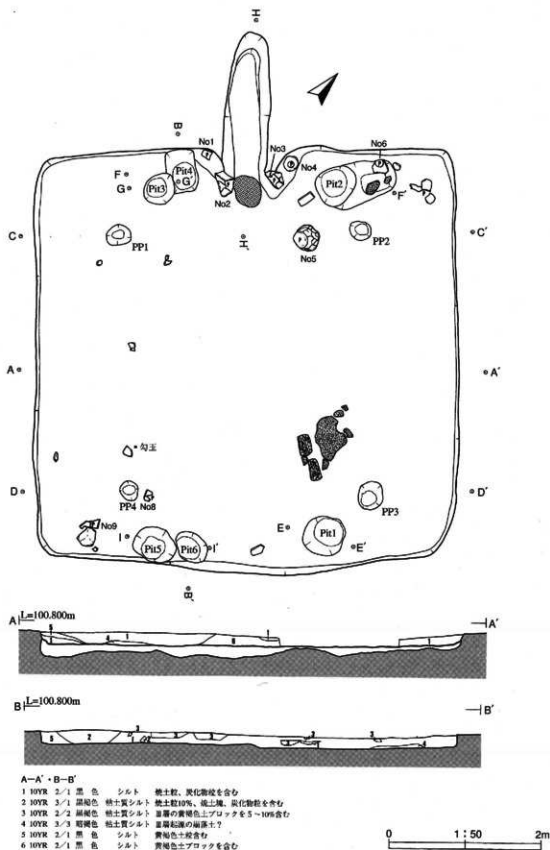


図12 第4号住居跡(1)

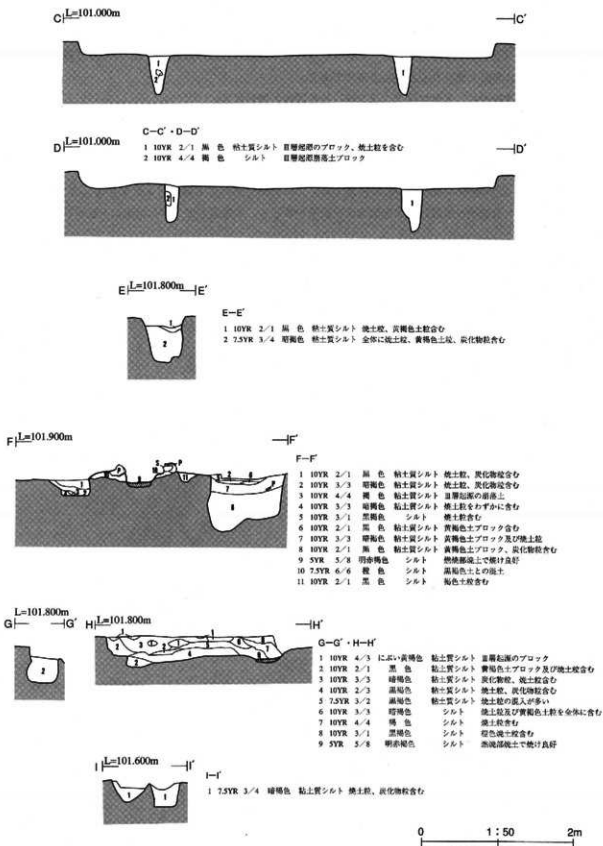


図13 第4号住居跡(2)

条沈線を有する。その内面にはヘラミガキ調整が施されている。胴部外面の調整は丁寧なヘラミガキ、内面はヘラナデである。59は土製紡錘車で、ヘラミガキされていたと思われるが、一部にしか観察されない。60は土製の勾玉で、表面はヘラミガキされている。61は凝灰岩製の置き砥石で、平らな1面のみ使用している。62は角釘と思われる鉄製品の破片である。

時期 出土遺物から、8世紀後半(第Ⅱ期)の住居跡と思われる。

第5号住居跡(ⅢD1j住)

遺構(図14、写真図版6)

(位置・重複) 旧沢跡の北側約15mに位置する。この沢跡と北側の宅地間およそ40m(南北方向)は、葡萄の栽培や水道管等の敷設により整地および削平が著しく、本遺構もカマドと床面の一部が残存するに過ぎなかった。

(埋土)(平面形)(規模) いずれも不明である。(壁) 西壁の一部が残っていた。壁高は数cmである。

(床面) 硬く締まる。(柱穴)(土坑)ともに検出されなかった。

(カマド) <位置>北西壁 <主軸方向>N-28°-W

<本体>掘削により、燃焼部焼土の一部が残存しているのみである。円形を呈していたものと思われる。厚さは10cmで、発達は良好である。

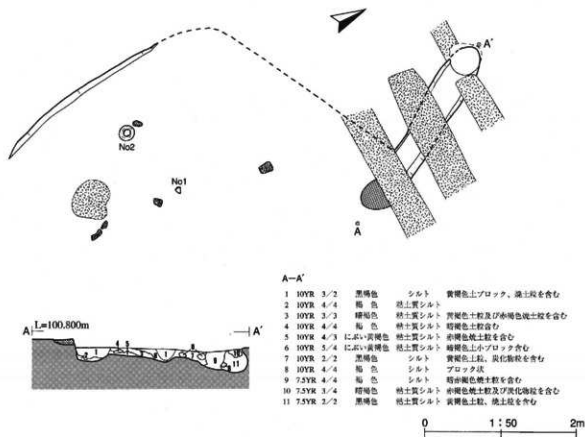


図14 第5号住居跡

<煙道部、煙出部>掘り込み式の煙道と思われる。底面は波打ちながら煙出部に至る。埋土は、赤褐色の焼土粒が含まれる黒褐色土である。

遺物 (図76、写真図版62)

3点の非ロクロ成形の土師器が出土している。

63は胴部中央に段を持つ丸底の坏である。内面に段は見られない。64は頸部有段の甕で、口縁部は外反ぎみに立ち上がっている。65は球胴甕の底部か。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と思われる。

第6号住居跡 (II E 7 i 住)

遺構 (図15、写真図版7)

(位置・重複) 調査区中央部の住居跡が密集する地区にあり、北西側6mに第9号住居跡が、東側6mに第7号住居跡がある。遺構中央部に最近の擾乱を受けている。

(埋土) 黒色土と黒褐色土を主体とし、いずれにも褐色土粒を含む。

(平面形) 隅丸方形 (規模) 3.05×3.50m

(壁) いずれも直立ぎみに立ち上がる。壁高は30~40cmである。

(床面) 全体に平坦である。貼り床が施されていた。(柱穴) 検出されなかった。

(土坑) カマド左脇に1基、南壁東寄りに1基確認された。いずれも貯蔵穴と思われる。

(その他) 東壁からPit2を挟み南壁の中央まで周溝が巡る。

(カマド) <位置>北西壁中央 <主軸方向>N-24'-W

<本体>残存状況は良好で、袖部と燃焼部焼土が検出された。袖部はシルト質土のみで構築され、一部焼土化している。燃焼部焼土は30×36cmの不整形で、厚さは最大で5cm程度である。発達は良好である。<煙道部、煙出部>くり抜き式の煙道である。底面は北壁付近から約5度の角度で下がり、煙出部では水平となる。各部の埋土は黒褐色~暗褐色土で、焼土粒をまばらに含み煤けた感じである。

遺物 (図77、写真図版62)

非ロクロ成形の坏・甕のほか、砥石が1点出土した。全体の出土量は少ない。

66は胴部中央に軽い段を有する丸底の坏である。口縁部は外反ぎみに開く。67は内外面とも黒色処理が施された丸底風の小さな平底を持つ坏である。両面とも丁寧にヘラミガキされている。68は長胴甕の口縁部破片で、頸部と口縁部にわずかな段が付く。口縁部は外反ぎみである。69・70はハケメ調整主体の長胴甕の底部である。いずれも外面は外側に張り出している。71は球胴甕で、口縁部が外反ぎみに立ち上がる。器面調整は、口縁部が内外面ともヨコナデされ、胴部はヘラミガキ調整されている。胴部内面はハケメ調整が明瞭である。72は凝灰岩製の手持ち砥石で4面が使われている。

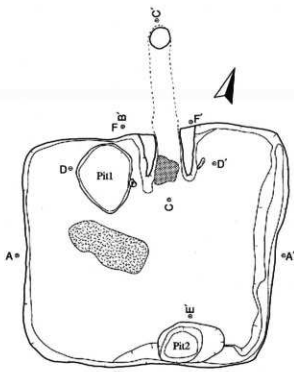
時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と考えられる。

第7号住居跡 (II E 9 i 住)

遺構 (図16・17、写真図版8)

(位置・重複) 第6号住居跡と同様に調査区中央部にあり、第3号住居状遺構と北西側で隣接する。第28・29号陥し穴状遺構と重複している。

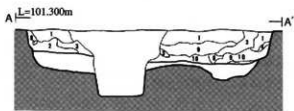
(埋土) 暗褐色土の小ブロックを含む黒褐色土の単層である。



- C-C'
- | | | | | |
|----|-----------|-------|--------|-----------------|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒、褐色粘土粒を含む |
| 2 | 10YR 4/4 | 暗色 | シルト | 褐色粘土粒を含む |
| 3 | 5YR 4/8 | 黄褐色 | 粘土質シルト | ヒマダ層土の残土 |
| 4 | 10YR 3/4 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 暗色及び赤褐色土粒を含む |
| 5 | 10YR 4/4 | 暗色 | 粘土質シルト | 遠山部アロック |
| 6 | 10YR 4/3 | 濃い黄褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒を含む |
| 7 | 7.5YR 3/2 | 赤褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒を含む |
| 8 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒を含む |
| 9 | 10YR 2/2 | 赤褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒及び黄褐色土粒を含む |
| 10 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒と赤土粒を含む |
| 11 | 10YR 2/2 | 赤褐色 | 粘土質シルト | 赤褐色 |
| 12 | 5YR 4/3 | 濃い黄褐色 | シルト | 黄褐色土粒 |



- D-D'
- | | | | | |
|---|-----------|-------|-----|--------------|
| 1 | 10YR 4/4 | 暗色 | シルト | 黒褐色土粒、粘土粒を含む |
| 2 | 7.5YR 4/4 | 暗褐色 | シルト | 暗褐色土粒を含む |
| 3 | 5YR 5/6 | 暗褐色 | シルト | 暗褐色土粒を含む |
| 4 | 7.5YR 2/1 | 暗色 | シルト | 黄褐色土のアロックを含む |
| 5 | 5YR 4/3 | 濃い黄褐色 | シルト | 濃褐色土粒 |
| 6 | 10YR 2/2 | 赤褐色 | シルト | 黄褐色土粒を含む |



A-A'・B-B'

- | | | | | |
|----|----------|-----|--------|--------------------|
| 1 | 10YR 2/1 | 黒色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |
| 2 | 10YR 2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |
| 3 | 10YR 2/2 | 暗褐色 | シルト | 黄褐色土粒を含む |
| 4 | 10YR 2/1 | 暗色 | シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |
| 5 | 10YR 2/2 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |
| 6 | 10YR 3/4 | 黄褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土上との境上 |
| 7 | 10YR 3/2 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土、赤褐色土の小ブロックを含む |
| 8 | 10YR 3/4 | 黄褐色 | シルト | 粘土粒、炭化物粒を含む |
| 9 | 10YR 3/1 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |
| 10 | 10YR 3/3 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |

E-E'



- E-E'
- | | | | | |
|---|----------|-------|--------|--------------|
| 1 | 10YR 2/2 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒を含む |
| 2 | 10YR 3/3 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒を含む |
| 3 | 10YR 4/2 | 濃い黄褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |

F-F'



- F-F'
- | | | | | |
|---|-----------|-----|--------|---------------------|
| 1 | 10YR 2/2 | 暗褐色 | シルト | 黄褐色土粒及び黄褐色土小ブロックを含む |
| 2 | 10YR 3/2 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |
| 3 | 10YR 2/2 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |
| 4 | 7.5YR 3/3 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |
| 5 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土粒、黄褐色土粒を含む |
| 6 | 7.5YR 2/3 | 暗褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを含む |

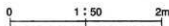


図15 第6号住居跡

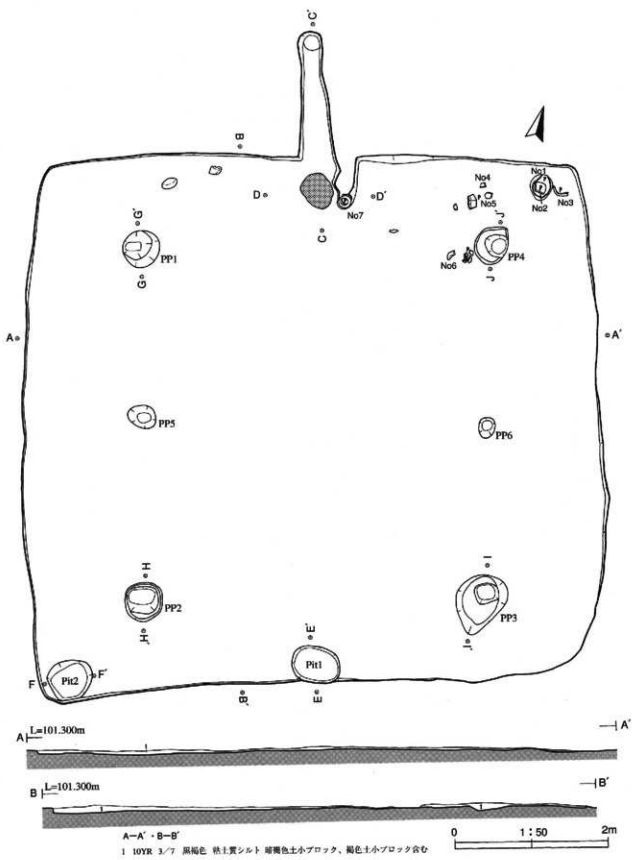


図16 第7号住居跡 (1)

(平面形) 方形 (規模) 7.30×7.58 m (壁) 壁は数cmしか立たない。

(床面) 全体に締まりがあり平坦である。

(柱穴) 主柱穴のPP1～PP4、補助柱と思われるPP5とPP6が確認された。柱穴間距離は4.50～4.70mである。PP5はPP1とPP2間、PP6はPP3とPP4間のほぼ真中にあり、規模が主柱穴よりも小さいことから補助柱的な柱穴と判断した。

(土坑) 南西隅に1基、南壁際中央部に1基の計2基検出された。ともに貯蔵穴と思われる。

(カマド) <位置>北壁中央 <主軸方向>N-19°-W

<本体>右袖部と燃焼部焼土が残存している。左袖は掘りすぎで欠損した。右袖部には、甕の胴部破片が芯材として埋め込まれていた。燃焼部焼土は38×46cmの楕円形を呈し、厚さは最大で10cmである。焼け具合は概ね良好である。

<煙道部、煙出部>掘り込み式と思われる煙道で、底面はほぼ水平に延び煙出部に至る。煙出部の底面は、10cm程度の小ピット状の窪みを有する。埋土は橙色の焼土粒を含む黒色・黒褐色土が主体である。

遺物 (図77・78、写真図版63)

非口クロ成形の坏・甕類と手づくね土器1点が出土した。

73は有段丸底の坏で、内外面とも黒色処理されている。ヘラミガキは内外面に施されるが、胴部の外面下縁と底部はハケメ調整が明瞭に残っている。74～76は長胴甕の底部および胴部破片で、ハケメが主体の調整である。75は胴部下端の立ち上がりから、球胴甕の可能性もある。77は球胴甕で、ハケメが残る

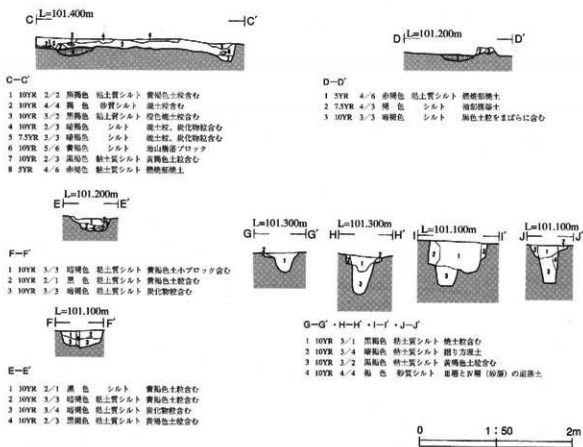


図17 第7号住居跡 (2)

がヘラミガキが全体に施されている。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部で直立している。78は手づくね土器であるが、内面をヘラケズリ調整した丁寧なつくりである。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と思われる。

第8号住居跡(ⅡF4a住)

遺構(図18-19、写真図版9)

(位置・重複) 調査区中央部北側の住居群内にあり、北東壁中央付近で第4号住居状遺構と重複する。また第6号溝跡とも重複関係にあるが、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

(埋土) 黒褐色土を主体とするが、混入物の違いからそれは3層に分かれる。埋土下部には炭化材を含んでいる部分がある。(平面形) 不整形方形 (規模) 7.40×7.66m

(壁) 壁はいずれも外傾して立ち上がる。壁高は40～50cmである。

(床面) 締まりがあって平坦である。全体に貼り床が施されている。床面で白色粘土の塊が5個検出された。

(柱穴) 主柱穴のPP1～PP4が確認された。柱穴間距離は4.30～4.50mである。この他に柱穴状の小ピットが4個見つかったが、これらは柱を構成するものではない。

(土坑) カマドの両袖脇や東隅に7基検出された。いずれも貯蔵に類するものと思われる。

(その他) 南西壁と北東壁に周溝が巡るが、後者は壁の中央部で途切れている。また南東壁の中央には、出入り口の階段施設の掘り込みかと思われる平行する溝が2つ確認された。深さはともに10cm程度である。

(カマド) <位置>北西壁中央 <主軸方向>N-50°-W

<本体>両袖部・燃焼部焼上・支脚と思われる土器が残存し、その状態は良好である。両袖の芯には地山を掘り残し、さらにシルト質土を貼りつけて袖部を構築している。燃焼部焼上は、4.2×5.0cmの不整形で、厚さは最大で10cmである。極めて良く焼けている。

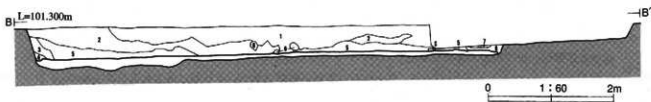
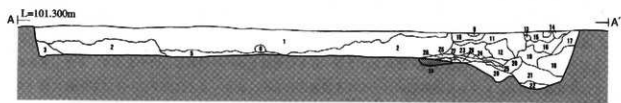
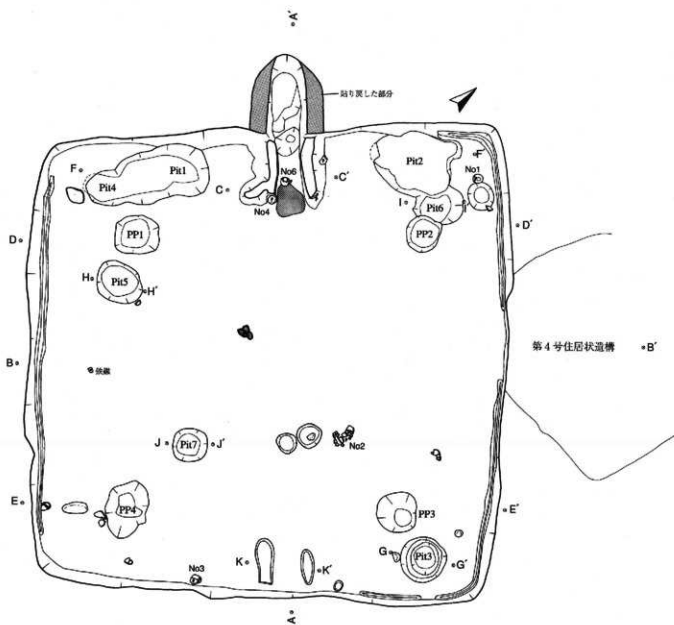
<煙道部、煙出部>掘り込み式の煙道であるが、その両壁は崩落してしまったためか、修復した痕跡が観察された。そこには、粘土質土を主体とする構築土を片側で2.5cmにわたって貼り戻している。煙道部底面は、奥壁から20度前後の角度で傾斜して煙出部に至るが、途中小ピットを1個有する。煙出部底面までの深さはおおよそ1mで、本遺跡の中でも最大規模のものである。これらの煙上は、橙色の焼土粒・炭化物を含む黒褐色土および煙道部再構築土の崩落ブロックが主体となっている。

遺物(図78-81、写真図版66)

中コンテナ1箱近くの非口縁部成形の坏・甕類、須恵器の口縁部破片1点、鎌と思われる鉄製品1点、土製品では土玉40点、紡錘車3点が出土した。土玉は、住居跡南西壁際の中央部付近から一括で出土したが、稽查時の不手際から、詳しい出土状況は不明である。

出土した坏の器形はバリエーションに富み、胴部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるものと外反して立ち上がるものがあり、器高も様々である。79～84は有段丸底の坏である。中でも80・81・84などは平底風である。いずれも内外面にヘラミガキ調整されるが、83・84は段下にハケメが明確に残っている。すべて内面は黒色処理されているが、84は外面も黒色処理が施されている。85は有段平底の坏で、胴部は内湾して口縁部に至る。86～89は無段の坏で、調整・黒色処理等は前述のものと同様である。

86のみ丸底風である。90は鉢形とした。内外面ともヘラミガキ調整は明確でない。91～101は内外面とも胴部がハケメ調整主体の長胴甕である。いずれも口縁部はヨコナデ調整される。口縁部に最大径をもつ細く見えるもの(92・97など)、最大径が口縁部か胴部上半のいずれかにある丸みのあるもの(93・



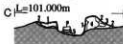
0 1:60 2m

図18 第8号住居跡 (1)

A-A' · B-B'

- 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 黄褐色土小ブロックを含む
- 2 10YR 1/1 黒色 シルト 褐色土ブロックを含む
- 3 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックを含む
- 4 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 火山噴出物
- 5 10YR 2/2 黒褐色 シルト 黄褐色土粒、炭化物を含む
- 6 5YR 4/4 黄褐色 粘土質シルト フロツク
- 7 7.5YR 5/6 明褐色 シルト 数ヶ所包圍状表面の腐土
- 8 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックを含む
- 9 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 本館による腐土
- 10 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロック、炭化物を含む
- 11 10YR 3/2 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土、暗褐色土粒を含む
- 12 10YR 3/1 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土粒、粘土粒を含む
- 13 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト
- 14 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 本館による腐土
- 15 10YR 3/1 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックを含む

- 16 10YR 4/4 暗褐色 シルト 黄褐色土との混土
- 17 10YR 3/3 暗褐色 砂質シルト 粘土質シルト
- 18 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
- 19 10YR 4/4 暗褐色 シルト 黄褐色土の含む
- 20 10YR 4/3 に近い暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土の含む
- 21 10YR 3/1 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土粒を全体に含む
- 22 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 腐葉土
- 23 10YR 3/2 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土粒を全体に含む
- 24 10YR 5/6 黄褐色 シルト 天竺石の層を含む
- 25 7.5YR 3/2 暗褐色 粘土質シルト 炭化物、粘土粒を含む
- 26 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘土粒を含む
- 27 7.5YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 粘土粒を含む
- 28 5YR 4/6 赤褐色 粘土質シルト カマド壁上の腐土
- 29 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックを含む
- 30 5YR 4/6 に近い赤褐色 粘土質シルト カマド壁の腐土、黄褐色土



- C-C'
- 1 10YR 5/8 明赤褐色 シルト 褐色粘土粒を含む
 - 2 10YR 3/2 暗褐色 シルト 流土層を含む
 - 3 10YR 4/4 暗褐色 シルト 炭化物を含む
 - 4 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト 黄褐色土の混土
 - 5 5YR 4/6 赤褐色 粘土質シルト カマド壁上の腐土



- D-D'
- 1 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 黄褐色土粒を含む
 - 2 10YR 3/2 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックを含む
 - 3 10YR 3/1 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土粒を全体に含む
 - 4 10YR 4/4 暗褐色 シルト 暗褐色土粒を全体に含む
 - 5 10YR 4/3 に近い黄褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックを含む



- E-E'
- 1 10YR 2/3 黒褐色 シルト 黄褐色土小ブロック、炭化物を含む
 - 2 10YR 4/4 暗褐色 シルト 暗褐色土粒、赤褐色土粒、炭化物を含む
 - 3 10YR 3/2 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロック、炭化物を含む
 - 4 10YR 5/3 に近い黄褐色 粘土質シルト 火山噴出物小ブロック
 - 5 10YR 3/4 暗褐色 シルト 黄褐色土、黄褐色土との混土
 - 6 10YR 5/6 黄褐色 シルト 暗褐色土小ブロック、炭化物を含む

- F-F'
- 1 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色土粒を含む
 - 2 10YR 2/4 暗褐色 粘土質シルト 粘土粒を含む
 - 3 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土、粘土粒を含む
 - 4 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土、粘土粒を含む
 - 5 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土、粘土粒を含む
 - 6 10YR 3/1 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土、粘土粒を含む
 - 7 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土、粘土粒を含む
 - 8 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土、粘土粒を含む
 - 9 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土、粘土粒を含む
 - 10 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土、粘土粒を含む



- J-J'
- 1 10YR 2/1 暗褐色 粘土質シルト 粘土粒を含む
 - 2 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 3 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 4 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土



- G-G'
- 1 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 粘土粒を含む
 - 2 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 黄褐色土粒を含む
 - 3 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 火山噴出物小ブロック
 - 4 10YR 4/6 暗褐色 粘土質シルト 暗褐色土粒を含む
 - 5 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 6 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 7 7.5YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 8 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土



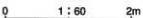
- H-H'
- 1 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックとの混土
 - 2 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックを含む
 - 3 10YR 5/6 黄褐色 粘土質シルト
 - 4 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 土層下部腐葉土小ブロック
 - 5 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロックを含む
 - 6 10YR 4/5 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土



- I-I'
- 1 10YR 2/3 暗褐色 シルト 黄褐色土、炭化物を含む
 - 2 10YR 4/4 暗褐色 シルト 炭化物、粘土粒を含む
 - 3 10YR 3/2 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 4 10YR 4/3 に近い黄褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 5 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 6 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土



- J-J'
- 1 10YR 2/1 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 2 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 3 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
 - 4 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土



- K-K'
- 1 10YR 2/2 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土粒を含む

図19 第8号住居跡 (2)

94など)の2種がある。いずれも口縁部と胴部の境に段を持つが、より明瞭なものは97である。
 102・103は小型の甕で、器面調整等は長胴甕と同様である。103は口縁部・胴部とも丸味を持って立ち上がっているため、両者の見た目の雰囲気は異なっている。105・106は球胴甕で、いずれも胴部中央から下を欠く。器面調整は105はハケメ主体、106はヘラミガキ主体である。107は須恵器甕の口縁部破片である。2列の指描波状文が施されている。108-(1)~(40)は土玉で直径は9~14mmを計る。形状は扁平なものではなく、すべて球状を呈している。109~111は土製紡錘車である。厚さはいずれも2.5cm程度であろう。112は基部と先端部を欠く鎌と思われる鉄製品である。若干反りがあることから鎌とした。113は鉄斧、114・115は釘であろう。

時期 出土遺物から、8世紀前半(第I期)の住居跡と思われる。

第9号住居跡(ⅡF7a住)

遺構(図20、写真図版10)

(位置・重複)調査区中央部北側の住居群内、第6号住居跡の北西およそ4mに位置する。第19号陥し穴状遺構と南側で重複している。

(埋土)褐色土粒を含む黒褐色土を主体とする。(平面形)長方形(規模)3.92×4.50m

(壁)直立ぎみに外傾して立ち上がり、壁高は20~28cmである。

(床面)平坦で締まりがある。床面からは白粘土が2個出土した。全体に10cm程度の貼り床が確認されている。(柱穴)検出されていない。

(土坑)貯蔵穴と思われる円形のPit1・3・4、何らかの作業用土坑の可能性がある長方形のPit2・5の計5基が確認された。後者のうちPit2については、その形状と埋土が人為堆積である点から、本遺構よりも古い墓塚の可能性がある。Pit5の墓塚の可能性については、埋土の状況から否定したい。

(カマド)〈位置〉西岸中央 〈主軸方向〉N-74°-W

〈本体〉両袖部・燃焼部焼土が残存している。左袖には芯材に礫を、右袖には壘を埋め込みシルト質土を被覆している。燃焼部焼土は30×32cmの不整形形で、厚さは最大で10cmを測る。発達は良好である。〈煙道部、煙出部〉掘り込み式の煙道で、底面は奥壁付近から13度程度の角度で下がり煙出部に至る。煙出部の底面には小ピットは見られない。各部の埋土には、地山崩落土のブロックと炭化物の混入が著しい。

遺物(図22、写真図版66)

非ロクロ成形の変数点、土玉1点・鉄製品が1点出土した。

116~118は長胴甕である。117・118は同一個体か。ともに口縁部に最大径を持ち、頸部に軽い段を有する。116の器面調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部内面はハケメ主体でその後一部ヘラミガキ、外面はハケメ後ヘラミガキである。119は円形の土玉、120は釘状の鉄製品である。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と思われる。

第10号住居跡(ⅡF1b住)

遺構(図21、写真図版11)

(位置・重複)調査区北部寄りのⅡF区で、紫波町教育委員会調査区との境界に検出されたが、当センター調査分は住居跡東側約3分の1程度である。第8号住居跡の北西約6mに位置する。

(埋土)黄褐色土粒を含む黒褐色土の単層である。(平面形)隅丸方形? (規模)不明

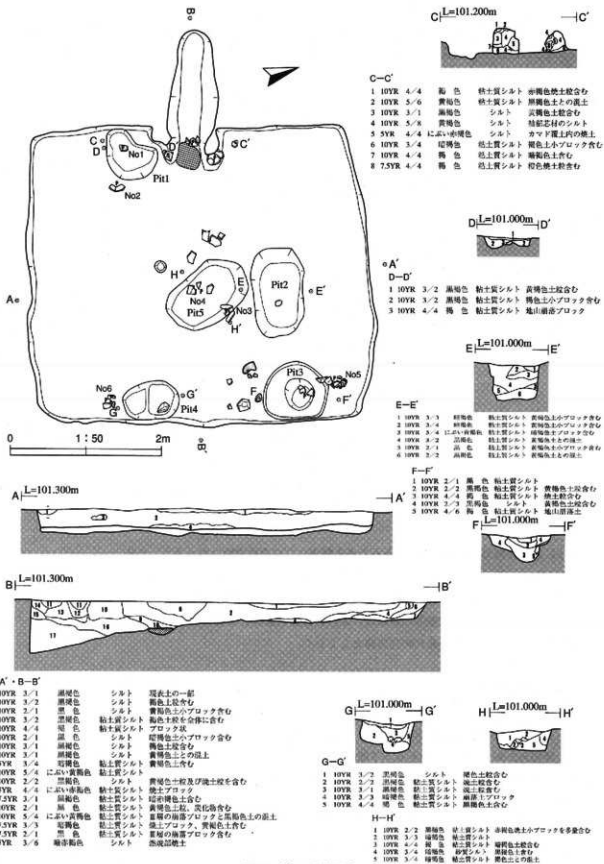


図20 第9号住居跡

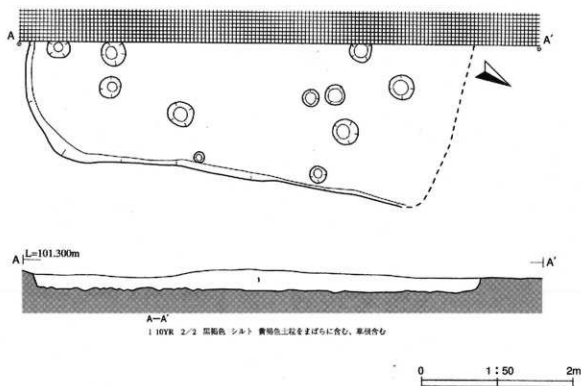


図21 第10号住居跡

(壁) 外傾して立ち上がる。壁高は15cmである。(床面) 小さな凹凸がある。

(柱穴) 11個確認された小ピットのうち、PP1・2が主柱穴であろう。

(土坑) 検出されなかった。

(カマド) 調査区域外(紫波町分)にあるため未精査。〈主軸方向〉N-25°-E

遺物(図82、写真図版66)

遺物は非ロクロ成形の壺の破片が数点出土したのみである。3点(121~123)掲載したが、いずれも小破片である。これらの調整等の特徴は、他の住居跡の遺物とほぼ同様である。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡としておく。

第11号住居跡(ⅡF4c住)

遺構(図22、写真図版12)

(位置・重複) 調査区中央部北側にあり、第8号住居跡とは北に4mの距離を置く。

(埋土) 黒褐色シルト質土を基調とし、下部には木根によって持ち上げられた地山の褐色土ブロックを含む。

(平面形) 不整形の張り出しを持つ不整形(規模)3.17×3.45m

(壁) 緩やかに外傾している。壁高10cm前後。

(床面) わずかな凹凸がみられる。(柱穴)(土坑)ともに検出されない。

(その他) 東壁中央に不整形の張り出しが確認された。検出状況や埋土の様相、床面に検出された焼土から、本遺構に伴うものとした。性格は不明であるが、鍛冶等の作業場を想定しておく。

(カマド) <位置>北壁中央 <主軸方向>N-5' -W

<本体>両袖部と燃焼部焼土が残存している。袖部は地山を掘り残して芯としている。燃焼部焼土は24×30cmの不整形で、厚さは最大4cmである。焼け具合は概ね良好である。

<煙道部、煙出部>掘り込み式の煙道を持ち、底面は緩やかに延び、15度の角度で煙出に続く。埋土は焼土粒を含む黒褐色土・暗褐色土が主体である。

遺物 (図82、写真図版66)

非クロコ成形の甕(124)の口縁部破片が1点のみ出土した。

時期 出土遺物から、一応8世紀代の住居跡としておく。

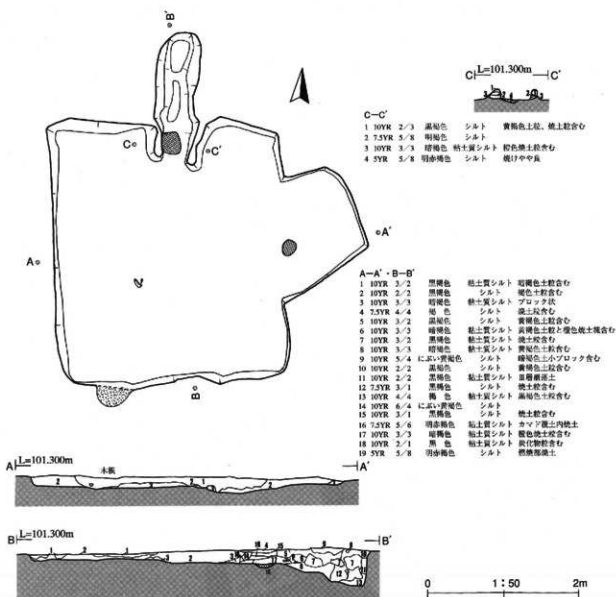


図22 第11号住居跡

第12号住居跡 (II F 4 d 住)

遺構 (図23、写真図版13)

(位置・重複) 調査区北部の住居跡群内にあり、最も隣接する住居跡は、南西方向約2mにある第11号住居跡である。第15号土坑と重複しているが、本遺構のほうが古い。また、中央部は第6号溝跡によって切られ、一部攪乱も受けている。

(埋土) 上位は黒色土・黒褐色土、下位は焼土粒を含む褐色土を基調とする。

(平面形) 不整形 (規模) 3.28×3.24m

(壁) いずれも外傾して立ち上がる。壁高は20～34cmである。

(床面) 大きく波打つ。(柱穴) 検出されなかった。

(土坑) 南東壁側に1基確認された。深さは30cm前後である。

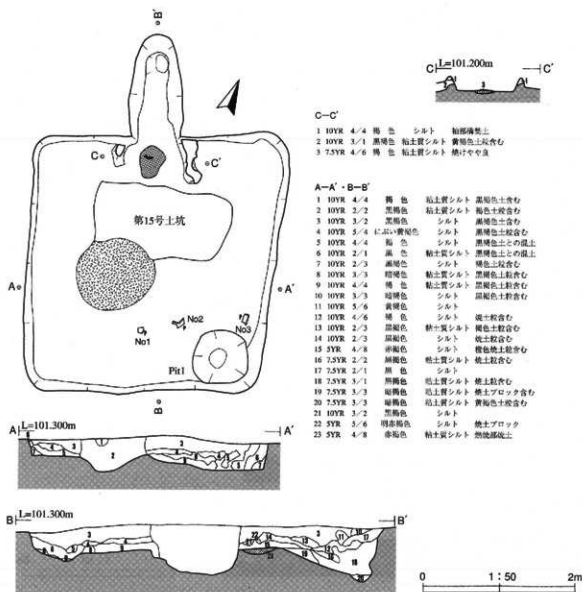


図23 第12号住居跡

(カマド) <位置>北西壁西寄り <主軸方向>N-20°-W

<本体> 胴部と燃焼部焼土が検出されたが、左袖は残りが悪い。袖は地山を掘り残して、シルト質土を被覆している。燃焼部焼土は30×42cmの楕円形で、厚さは最大で6cm程度である。

<煙道部、煙出部> 掘り込み式の煙道で、底面は奥壁付近から約20度の角度で傾斜し煙出部に至る。煙出部の底面は若干掘り込まれ、小ピット状になっている。各部の埋土は、黒褐色および暗褐色土が主体で、焼土粒をまばらに含む煤けた色調を呈している。

遺物 (図82、写真図版66)

非ロクロ成形の甕数点と高台1点のほか、鉄製品が1点出土した。全体の出土量は少ない。

125-129は長胴甕の破片である。125・126は口縁部に最大径があり、器面調整は口縁部ヨコナア、胴部ハケメである。いずれも頸部に段を有している。129は胴部上半に最大径を持つもので、調整等は125・126と同様である。127・128は底部破片で、底部外面の張り出しは128にはほとんど見られない。130は高坪の胴部、131は刀了と思われる欠損品である。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と考えられる。

第13号住居跡 (ⅡF3e住)

遺構 (図24、写真図版14)

(位置・重複) 調査区北部の住居群内にあり、南東方向5~7mに第11・12号住居跡が、南西15mに第10号住居跡がある。第33号陥し穴状遺構と南東隅で重複している。

(埋土) 暗褐色土粒を含む黒褐色土が主体である。(平面形) 隅丸長方形 (規模) 3.25×3.65m

(壁) いずれも外傾して立ち上がる。壁高は20cm前後である。

(床面) 平坦である。(柱穴) 検出されなかった。

(土坑) カマド両脇に1基ずつ、南・東隅に1基ずつ、カマド前に1基の計5基が確認された。Pit 1・2は貯蔵穴と思われるが、他は深さが極端に浅く用途は不明である。

(カマド) <位置>北西壁北寄り <主軸方向>N-50°-W

<本体> 両袖の一部と燃焼部焼土が検出された。袖はシルト質土を被覆しているだけのもので、燃焼部の広がりから判断すると、焚き口部の両袖は大分欠落しているようである。燃焼部焼土は43×58cmの不整形で、広範囲に発達している。厚さは最大で7cmである。

<煙道部、煙出部> 掘り込み式の煙道を持ち、底面はほぼ水平に延びてわずかに傾斜しながら煙出部に続く。各部の埋土は、焼土粒・炭化物を含む黒色土や黒褐色土である。

遺物 (図83、写真図版67)

非ロクロ成形の甕数点、手づくね土器1点、土玉1点、鉄製品1点が出土した。坏は出土していない。

132-134は、胴部ヘラナア・ハケメ調整主体の甕である。132・133の底部外面はわずかに張り出す。134は最大径を胴部上半に持つ球胴甕である。口縁部は反外気味に立ち上がり、頸部には軽い段を有している。136はつくりの雑な手づくね土器、137は直径9mmの土玉、138は釘かと思われる鉄製品である。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と考えられる。

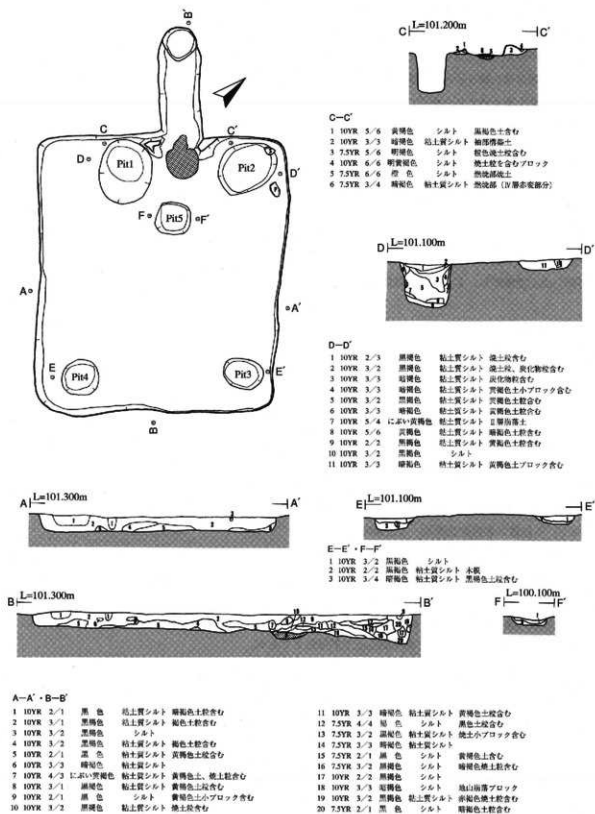


図24 第13号住居跡

第14号住居跡 (IF9e住)

遺構 (図25、写真図版15)

(位置・重複) 調査区北部の紫波町教育委員会調査区との境界付近で確認された。第24号住居跡とは北西に11mの距離がある。精査の結果、煙道が確認されなかったことから、上部は水田造成の際に削平を受けたものと思われる。

(埋土) 黒色土粒を含む黒褐色土の単層である。(平面形) 長方形 (規模) 5.10×5.45m

(壁) 直立ぎみに外傾して立ち上がる。壁高は8~17cmである。

(床面) 平坦で締まりがある。20cm前後の貼り床が施されていた。

(柱穴) 方形に配される主柱穴PP1~PP4の4個のほか、柱穴状の小ピットが4個確認された。柱穴間の距離は、それぞれ3.00~3.20mである。いずれも柱痕は確認できなかった。

(土坑) 検出されていない。

(カマド) <位置>北壁西寄り <主軸方向>N-7°-E

<本体>両袖部・燃焼部焼土が残存している。左袖はシルト質土の被覆のみで構築されているが、右袖は芯材に円礫を用いている。燃焼部焼土は26×40cmの楕円形で、厚さは8cmを測る。発達は良好である。<煙道部、煙出部>既述のとおり煙道は検出されなかった。煙出部も上部が削られており、残存していた深さは28cmである。この埋土には焼土粒・炭化物粒が多く含まれている。

遺物 (図83・84、写真図版67・68)

非ロクロ成形の坏・甕類、手づくね土器1点、鉄製品が1点出土した。

139・140は外面有段丸底の坏で、いずれも全体に丁寧なヘラミガキ調整が施されている。140は外面も黒色処理され、底部はヘラケズリ後にハケメ調整し、部分的にヘラミガキしている様子が観察される。141は口縁部が外反して立ち上がる他のものとは異なる器形である。141・142の器面調整はともに明瞭でない。143は内外面が黒色処理される無段丸底の坏で、ヘラミガキはいずれも入念に施されている。144は碗とした。胴部は、平底風の底部から直線的に開き立ち上がる。底部にはヘラケズリ調整が残っている。145~151は甕類で、145・147・148は口縁部に、146と151は胴部上半に最大径を持つ。145には頸部に軽い段がみられるが、147・148には認められない。甕類の器面調整は、外面がハケメ後ヘラミガキ、内面がハケメかヘラナデが主体であるが、148の外面調整はヘラケズリが明瞭で、他とは若干趣が異なっている。152は小型の甕で、153・154は152より大きい中型のもの。154は底部内面が卵形を呈し、また胴部下半が丸味を持って立ち上がる古手の特徴を有している。155は手づくね土器、156は釘の先端部と思われる鉄製品である。

時期 出土遺物の特徴から、8世紀前半(第I期)の住居跡と考えられる。

第15号住居跡 (IC9e住)

遺構 (図26、写真図版16)

(位置・重複) 調査区中央部の住居群内にあり、第3号・16号・17号住居跡に取り囲まれるように存在する。これらの住居跡との距離は2~3mである。本遺構の東寄りは南北方向の新しい溝に切れ、南側は調査時に失ってしまった。

(埋土) 黄褐色土粒を含む黒褐色土層である。(平面形) 方形? (規模) 3.77×?m

(壁) 遺構上部が大きく削り取られており、壁は数cmしか立たない。

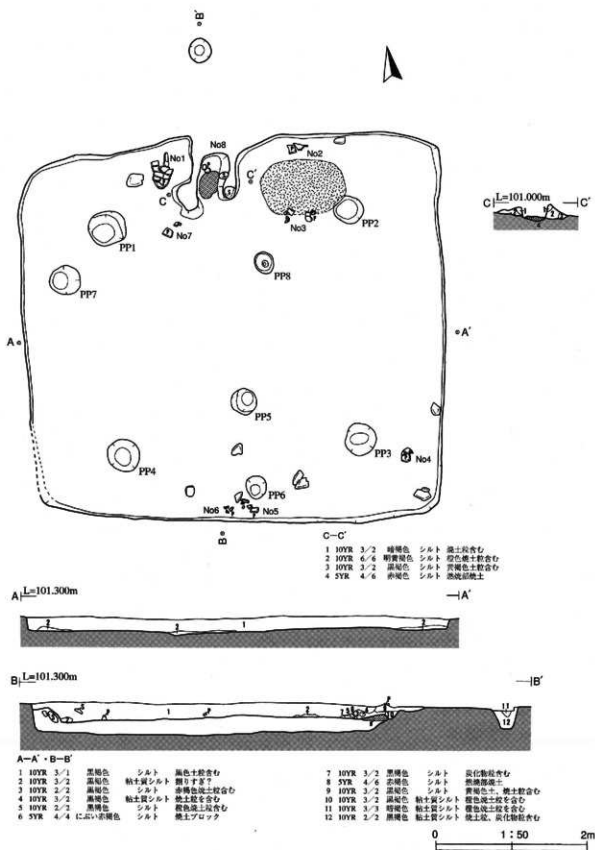


図25 第14号住居跡

(床面) 平坦で締まりがある。部分的に10cm程度の貼り床が施されている。

(柱穴) (土坑) ともに検出されていない。

(カマド) <位置>北壁中央 <主軸方向>N-2' -W

<本体>左右の袖の一部と燃焼部焼土が残存している。両袖はいずれも攪乱を受けているが、黒褐色のシルト質土が貼り付けられていた様子が観察される。燃焼部焼土は24×40cmの不整形で、厚さは4cm程度である。良く焼けている。

<煙道部、煙出部>煙道部底面は、奥壁から緩やかに傾斜して下がり煙出部に至る。煙出部に掘り込みは見られない。埋土は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土が主体である。

遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないが、他と同様8世紀代の住居跡としておく。

第16号住居跡 (II C 0 e 住)

遺構 (図27、写真図版17)

(位置・重複) 調査区中央部の住居群内にあり、周辺には5棟の住居跡が存在する。それらとの距離は1.5~4.0mである。遺構上部は削平され、南西壁は攪乱を受けている。

(埋土) 焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土の単層で、一部に褐色土のブロックを含む。

(平面形) 南東壁が明瞭でなかったが、不整形としておく。(規模) 2.90×3.10m

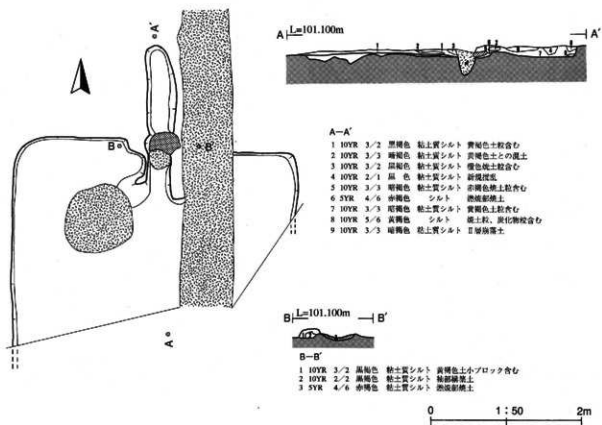


図26 第15号住居跡

(壁) いずれも外傾して立ち上がる。壁高は8～12cmである。

(床面) 平坦である。全体に貼り床が施され、深さは最大で15cm程度である。

(柱穴) 1個検出されたが、位置的に住居に伴うものではない。(土坑) 検出されなかった。

(カマド) <位置>北西壁西寄り <主軸方向>N-35°-W

<本体>燃焼部焼土のみ確認された。袖は失われている。燃焼部焼土は、28×50cmの楕円形を呈し、厚さは最大で6cmである。

<煙道部、挿出部>掘り込み式の煙道で、底面は奥壁から約30度の角度で傾斜して下がり挿出部に続く。埋土は、焼土粒・炭化物を含む黒褐色土を主体とし、暗褐色・褐色土の小ブロックを含んでいる。

遺物 (図85、写真図版69)

非口ロ成形の甕が2点で、坏は出土していない。

157は内外面ともヘラナデ調整される中型甕の胴部、158は最大径を胴部中央に持つ長胴甕で、頸部の段は明瞭でなく口縁部も短い。

時期 出土した甕の特徴から、8世紀代の住居跡と思われる。

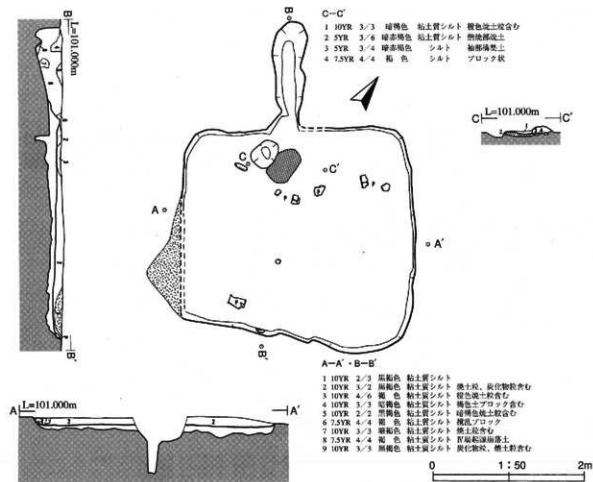


図27 第16号住居跡

第17号住居跡 (II C 9 f 住)

遺構 (図28、写真図版18)

(位置・重複) 調査区中央部、住居群内のほぼ真ん中にあり、第25号住居跡と隣接する。本遺構の南側の4mには第15号住居跡がある。遺構上部は削られている。

(埋土) 焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土の単層である。

(平面形) 南隅は木根による攪乱、西隅付近は掘りすぎにより、確かな平面形は不明であるが、元々は方形基調と思われた。(規模) 3.23×3.32m

(壁) いずれも外傾して立ち上がり、壁高は7cm前後である。

(床面) 小さな凹凸を有する。全体に20cm程度の貼り床が施されている。

(柱穴) 5個検出されたが、住居に伴うものではない。(土坑) 検出されなかった。

(カマド) <位置>西壁中央 <主軸方向>N-75°-W

<本体>袖の一部と燃焼部焼土が検出された。左袖の焚き口側は掘りすぎているが、どちらの袖の残りも良くない。燃焼部焼土は、2.2×2.7cmの円形で、厚さは最大5cmである。焼け具合は概ね良好である。

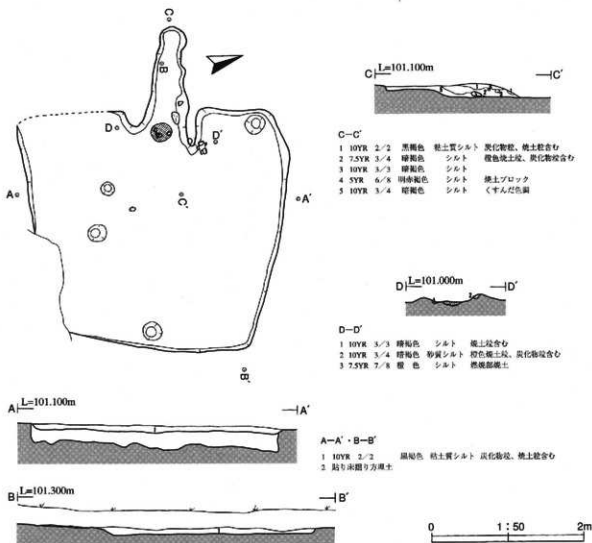


図28 第17号住居跡

<煙道部、煙出部>挿り込み式の煙道であるが、底面が煙出し方向に向けて立ち上がっていくタイプのものである。埋土は、いずれも焼土粒を含む暗褐色土が主体である。

遺物 (図85、写真図版69)

非ロクロ成形の小型甕と鉢が1点ずつ出土したのみである。

159・160とも、器面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメカヘラナア後ヘラミガキ調整が施されるが、後者は胴部下端が括れることなく丸みをもって立ち上がっており、特に後者は小型の甕というよりは鉢といったほうが適切かもしれない。

時期 出土遺物から8世紀代の住居跡と思われるが、坏が伴っていないことから詳細な時期は不明としておく。

第18号住居跡 (ⅢC3h住)

遺構 (図29、写真図版19)

(位置・重複) 調査区中央部西寄りの宅地内にあり、遺構上部は造成の際に削られている。本遺構の西北西約6mに第27号住居跡がある。

(埋土) 床面が検出面となるため不明である。(平面形) 隅丸方形 (規模) 3.45×3.80m

(壁) 残存していない。(床面) 全体に20~30cm程度の貼り床が施されている。

(柱穴) 3個検出されたが、住居に伴うものか不明である。

(土坑) カマド左脇に貯蔵穴が1基確認された。

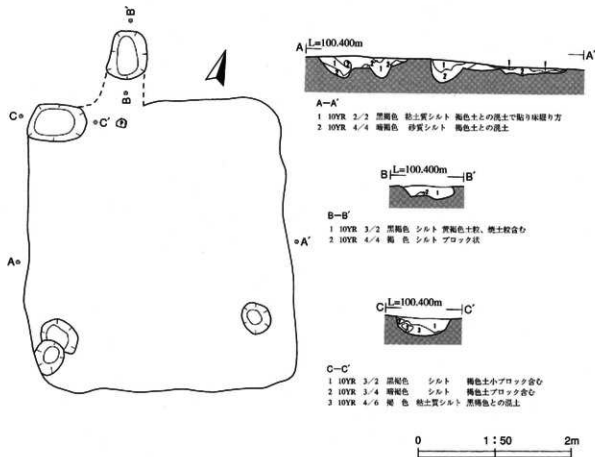


図29 第18号住居跡

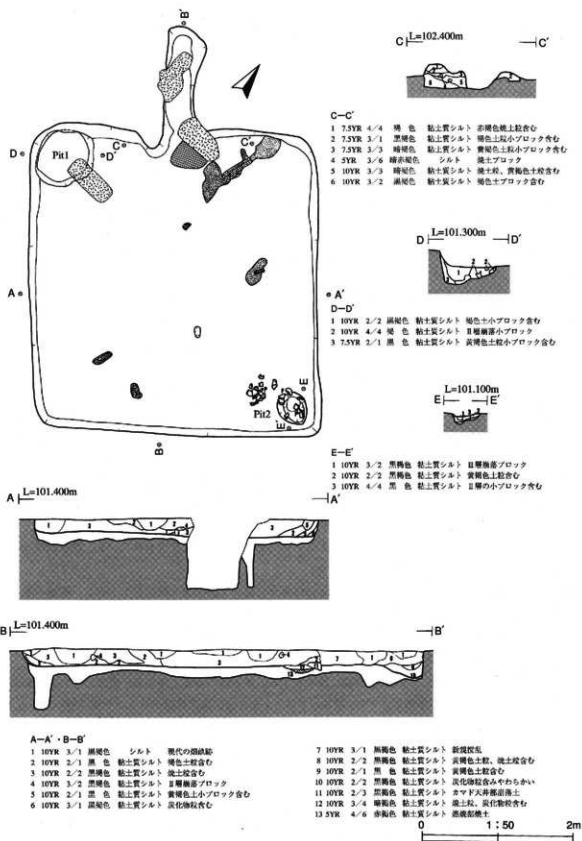


図30 第19号住居跡

(カマド) <位置>北西壁西寄り <主軸方向>N-20°-W

<本体>袖部・燃焼部焼土とも検出されなかった。後者が認められないことから、本遺構の床面は若干削り取られているものと思われる。

<煙道部、煙出部>煙出部付近のみ残っている。埋土は、焼土粒を含む黒褐色土である。

遺物 (図85、写真図版69)

非ロクロ成形の坏3点が出土した。

161は有段丸底と思われるの坏で、外面の段下に明瞭なハケメ調整が残る。162は平底風の坏で、外面胴部中央より上位に段を有し、口縁部にかけてハケメ調整が認められる。163は外面に僅かに段を持つ大振りな坏である。

時期 出土遺物から8世紀代の住居跡と思われるが、坏に若干古手のものがみられる。

第19号住居跡 (II E 6 住)

遺構 (図30、写真図版20)

(位置・重複) 調査区中央部北寄りの住居群内南端にあり、北北東5mには第20号住居跡がある。本遺構の北隅で第55号、西隅で第56号陥し穴状遺構と重複している。

(埋土) 焼土粒・褐色土粒をまばらに含む黒褐色土の単層である。現代の畜の跡跡や擾乱が観察される。

(平面形) 不整形 (規模) 3.80×4.00m

(壁) 直立ぎみに外傾して立ち上がる。壁高は20cm前後である。

(床面) 平坦で締まりがある。20~30cmほどの貼り床が確認されている。

(柱穴) 確認されなかった。

(土坑) 貯蔵穴と思われるPit1が検出された。位置は西隅である。

(その他) 床面及びその直上に焼成不良の焼土と炭化材が見られることから焼失家屋の可能性はあるが、いずれも出土した量が少なく不明である。

(カマド) <位置>北西壁中央 <主軸方向>N-40°-W

<本体>左袖の一部・燃焼部焼土の一部が残存している。右袖は擾乱により失われている。燃焼部焼土の厚さは最大で4cmを測り、発達は概ね良好である。

<煙道部、煙出部>掘り込み式の煙道で、底面はほぼ水平に延びて煙出部で傾斜して下がる。各部の埋土には、焼土粒・炭化物粒が含まれている。

遺物 (図85・86、写真図版69・70)

非ロクロ成形の甕類と鉄製品1点、材質等が不明な遺物が1点出土した。坏は見られない。

164・165は長胴甕で、いずれも頸部に段を有する。後者は口縁部上端が若干肥厚している。器面調整は、164が内外面とも口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、165は口縁部外面がヨコナデ後一部ヘラミガキ、内面はヨコナデのみで、胴部は内外面ともヘラナデ主体であるが、外面は一部ヘラミガキ調整が観察される。166は胴部に最大径を持つ長胴甕の口縁部で、頸部に段は見られない。167・168・169は小型の甕で、167は頸部に沈線状の段を持つ。170は球胴甕の胴部から底部で、外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラナデ後一部にヘラミガキ調整が施されている。171は器種不明の鉄製品、172は割口を見ると思曜石とも思える遺物であるが、外面には錆が付着している。製品のようだが、不明である。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と思われる。

第20号住居跡 (II E 7 f 住)

遺構 (図31、写真図版21)

(位置・重複) 調査区中央部北寄りの住居群内にあり、周辺には第19・21・22号の3種の住居跡がある。その距離は2.0～5.0mである。重複する遺構はない。

(埋土) 焼上粒・炭化物粒を含む黒褐色土が主体である。部分的に黒色土の帯を含んでいる。

(平面形) 隅丸不整形 (規模) 2.70×2.82m

(壁) いずれも直立気味に立ち上がる。壁高は12～20cmである。

(床面) 平坦である。全体に貼り床が施され、深さは最大で20cmである。

(柱穴) 2個検出されたが、住居に伴うものではない。(土坑) 検出されなかった。

(カマド) <位置>西壁北寄り <主軸方向>N-75°-W

<本体>僅かに残る左袖と燃焼部焼土が検出された。燃焼部焼土は、28×40cmの楕円形を呈し、厚さは最大で6cmである。焼け具合は極めて良好である。

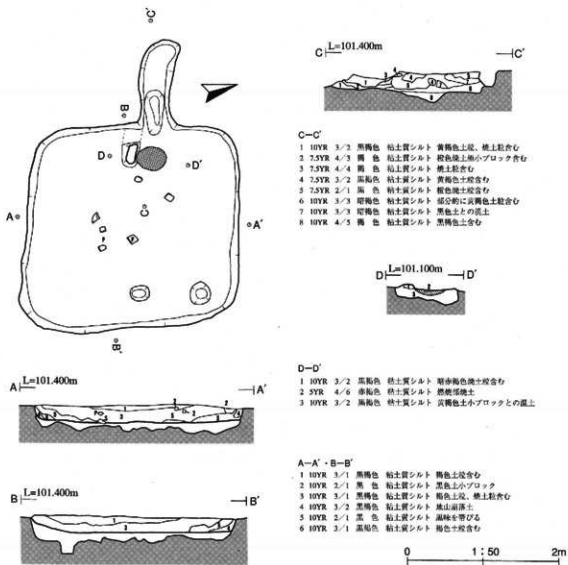


図31 第20号住居跡

<煙道部、煙出部>掘り込み式の煙道である。底面は、奥壁から約15度の角度で一且下がってピット状になり、再び立ち上がって煙出部に至る。この小ピットは雨水等の逆流防止用のものか。各部の煙土は、焼土粒を含む黒色土と黄褐色土粒を含む暗褐色土を主体としている。

遺物 (図86、写真図版70)

非ロクロ成形の坏・甕類と瓶が1点出土した。

173は底部を欠く坏で、内面のみ黒色処理される。174は中型の長胴甕で、胴部の調整はヘラナデが主体である。175は多孔式の甕で、胴部下端にも孔を有する。内外面の器面はヘラナデ調整されるが、外面の一部にヘラミガキ調整が見られる。

時期 出土した遺物から、8世紀代の住居跡と思われる。

第21号住居跡 (II E 5 g 住)

遺構 (図32、写真図版22)

(位置・重複) 調査区中央部北側の住居群内にあり、北6mには第1号・2号住居跡遺構がある。本遺構の北西壁中央から北隅にかけて、第3号溝跡と重複する。後者が新しい。また、擾乱も著しい。

(埋土) 上位は黄褐色土粒を含む黒褐色土、下位は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土を基調とする。

(平面形) 方形 (規模) 3.22×3.40m

(壁) いずれも直立気味に立ち上がり、壁高は22~30cmである。

(床面) 若干の凹凸があるがほぼ平坦である。貼り床が全体に認められた。

(柱穴) 検出されなかった。

(土坑) 北隅と東隅に1基ずつ計2基検出された。前者は深さ60cmを測る深いもので、貯蔵穴であろう。後者はそれに類するものとしておく。

(カマド) <位置>北西壁中央 <主軸方向>N-48°-W

<本体>両袖の一部と支脚とした円礫2個、燃焼部焼土が確認された。右袖は焚き口側を欠いている。袖は褐色のシルト質土を被覆して構築している。燃焼部焼土は、43×46cmほどの不整形で、厚さは最大で10cm、極めて良く焼けている。

<煙道部、煙出部>掘り込み式の煙道で、底面はカマド奥壁から緩やかに凹凸をもって下がり煙出部に至る。煙出部は、煙道底面より20cmほど掘り下げられている。埋土は、焼土粒・炭化物を含む黒褐色土と暗褐色土の他、褐色の地山崩落土のブロックを含んでいる。

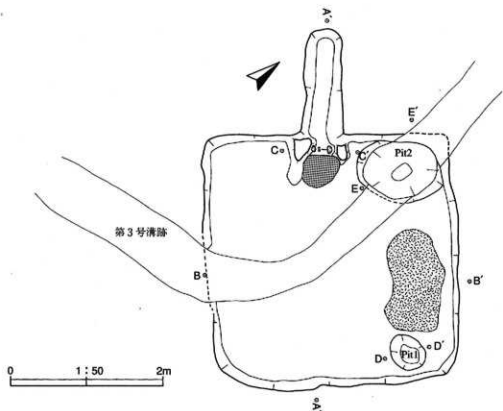
遺物 (図86-87、写真図版70-71)

非ロクロ成形の坏・甕類と鉄製品が1点出土している。

176~178は外面に段を有する坏である。176のみ丸底と思われる。178は内面にのみ僅かな段が見られる。179は胴部下端から底部にかけてヘラケズリ調整が明瞭な坏で、内外面とも段を持たない。

180は黒色処理されない坏である。外面の胴部上半に沈線状の段が見られる。181は口縁部を欠く長胴甕で、頸部に段を有する。胴部外面下端にはヘラケズリ調整が残っている。182は口唇部が上方に引き出される甕の口縁部、183は球胴甕で頸部に段を持つ。184は釘と思われる鉄製品である。

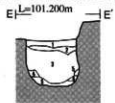
時期 出土した遺物から、8世紀後半(第II期)の住居跡と思われる。



- 16 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 厚層凝灰土
- 17 10YR 3/2 黒褐色 粘土質シルト 灰褐色土小ブロック含む
- 18 10YR 5/8 褐色 砂質シルト 砂礫と厚層凝灰土の混土
- 19 5YR 5/8 明赤褐色 粘土質シルト 焼成凝灰土
- 20 7.5YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 瓦片埋入り方柱土

A-A・B-B'

- 1 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 現代の樹の根跡
- 2 10YR 3/3 黒褐色 粘土質シルト 第3号溝跡
- 3 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 黄褐色土粒含む
- 4 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 凝灰土
- 5 10YR 3/2 黒褐色 粘土質シルト 厚層凝灰土
- 6 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 灰褐色土粒含む
- 7 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 厚層凝灰土
- 8 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土粒含む
- 9 10YR 4/2 灰黄褐色 粘土質シルト セザイク状
- 10 10YR 3/2 黒褐色 粘土質シルト 炭化物粒、濃土粒含む
- 11 7.5YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 凝灰土、炭化物粒含む
- 12 10YR 4/4 褐色 粘土質シルト 黒褐色土との混土
- 13 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 黒褐色土との混土
- 14 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 黄褐色土小ブロック含む
- 15 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 灰土と黄褐色土の混土



C-C'

- 1 10YR 4/6 褐色 シルト 焼土粒含む
- 2 5YR 4/8 赤褐色 シルト 赤化した厚層凝灰土
- 3 7.5YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト
- 4 7.5YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 瓦片埋入り方柱土

D-D'

- 1 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 黄褐色土含む
- 2 10YR 3/2 黒褐色 粘土質シルト 厚層凝灰土ブロック
- 3 10YR 4/4 褐色 粘土質シルト 厚層凝灰土ブロック
- 4 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 褐色凝灰土粒含む

E-E'

- 1 10YR 3/2 暗褐色 シルト 炭化物粒含む
- 2 10YR 4/4 褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
- 3 10YR 2/3 黒褐色 粘土質シルト 黄褐色土との混土
- 4 10YR 4/6 褐色 砂質シルト 黄褐色土小ブロック含む
- 5 10YR 4/6 褐色 砂

図32 第21号住居跡

第22号住居跡 (II E 7 g 住)

遺構 (図33、写真図版23)

(位置・重複) 調査区中央部北側の住居群内にあり、第20号住居跡とは南南西方向に約2mの距離を置く。

東側半分は、住宅建築の際であろうか、失われていた。遺構の上部も削られている。

(埋土) 褐色土粒を含む黒褐色土の単層で、現代の畑の畝が明瞭に残る。

(平面形) 方形? (規模) 2.68×?m

(壁) いずれも直立気味に立ち上がる。10cm前後しか壁が立たない。

(床面) ほほ平坦である。深さ6~20cmの貼り床が認められた。

(柱穴) 検出されなかった。(土坑) 貼床除去後に1基検出された。深さは55cmを測る。

(カマド) <位置>西壁中央 <主軸方向>N-76°-W

<本体>両袖と燃焼部焼土が確認された。袖は黄褐色のシルト質土を被覆して構築している。燃焼部焼土は21×24cmの円形で、厚さは最大で6cmである。

<煙道部、煙出部>掘り込み式の煙道で、底面は緩い凹凸を持ちながら下がり煙出部に至る。煙出部は、煙道底面よりも若干掘り込まれている。

遺物 (図87、写真図版71)

非ロクロ成形の埴1点、鉄製品1点のみ出土した。

185は胴部外面に段を持つ埴で底部を欠く。186は釘と思われる鉄製品の一部分である。

時期 出土遺物から、8世紀前半(第1期)の住居跡と思われる。

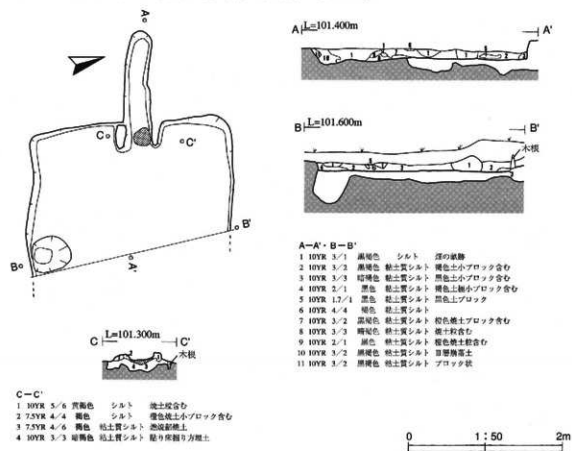


図33 第22号住居跡

第23号住居跡(ⅡF1j住)

遺構(図34・35、写真図版24)

(位置・重複) 調査区北端にある本遺跡の中で最大規模の住居跡である。本遺構の北側は調査区域外(岩崎川の堤防)となっており、カマドが設置されているであろう北側部分は未精査である。南南西方向約15mには第14号住居跡、南西方向16m付近に第24号住居跡があり、隣接する住居跡との距離が大きいのが特徴的である。

(埋土) 焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土の単層で、部分的に暗褐色土の小ブロックを含んでいる。

(平面形) 方形? (規模) 9.17×?m

(壁) いずれも直立気味に立ち上がる。壁高は13~25cmを測る。

(床面) ほほ平坦である。深さ5~20cmの貼り床が確認され、それを除去後に検出された土坑・柱穴類がある。粘土の塊が6カ所確認されている。

(柱穴) 方形に配される主柱穴PP1~4のほか、柱穴状の小ピットが10個あまり検出された。主柱穴以外はいずれも浅く、位置的にも補助柱となるようなものはない。これらの性格は不明である。PP9などは、材に四角く加工したものを使用していたことがわかるものである。主柱穴の柱穴間距離は、5.6~5.9mである。

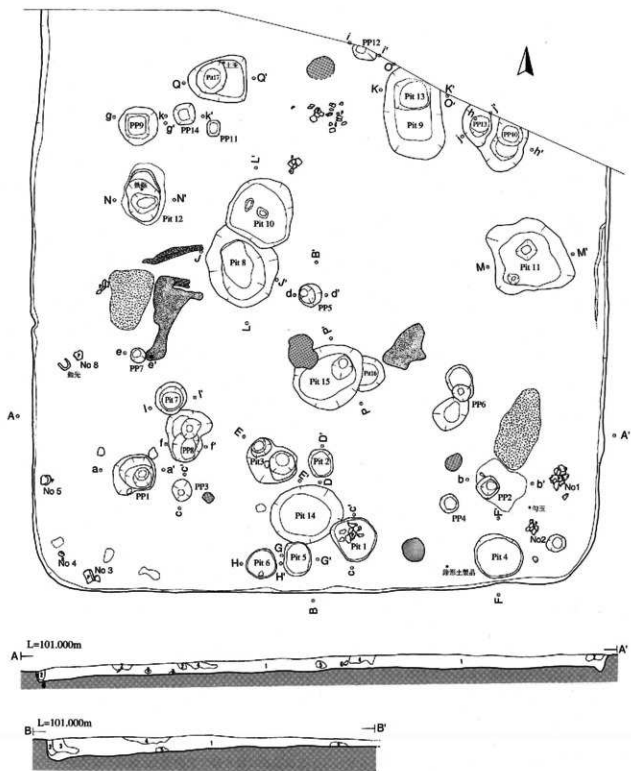
(土坑) 15基検出された。平面形は円形のものが多いが、Pit9は長楕円形を呈し、埋土は人為的に埋め戻された様相である。形状などから墓塚の可能性もあるが不明である。また、Pit13がこの下に確認された。床面からの深さは1mに及び、埋土には遺物を多数含んでいる。性格は不明である。前者は後者を埋め戻してから底面に土を戻しており、このことから別遺構として扱った。なお、これ以外の土坑の用途は、貯蔵に類するものとしておく。

(カマド) 調査区域外にあるものと思われる。

遺物(図87~91、写真図版71~75)

大コンテナ1箱弱の非ロクロ成形の坏・甕類のほか、勾玉・土玉等の土製品17点、小型土器4点、鉄製品10点、砥石1点が出土した。特徴のある遺物としては、撥文系とされる口縁部に多条沈線有する長胴甕が2点、鈴を模したと思われる土製品が1点出土している。

187は内外面有段の丸底の坏で、口縁部は外反気味に開く。器面は内外面ともヘラミガキ調整されるが、底部の外面にはヘラケズリ調整が残る。188~195は外面にのみ段を有する丸底と思われる坏である。器面は内外面ともヘラミガキ調整されるが、190は胴部外面の段下にヘラケズリ調整が、191にはハケメ調整が観察される。このうち外面まで黒色処理されているものは、191・195の2点である。196~201は内外面無段の丸底と思われる坏で、いずれも丁寧なヘラミガキ調整が施される。うち197のみが外面も黒色処理されている。これらは口縁部の立ち上がりそれぞれ特徴を持っている。202・203は平底の坏か。204は丸底の坏の底部、205はハケメ調整の明瞭な平底の坏である。206は高坏の脚部で、内面はきれいに成形されている。207・208は口縁部に多条沈線を有する長胴甕で、いずれも沈線というよりは条線風の浅いものである。209~213は頸部に段を持つ長胴甕で、胴部の器面がハケメ、またはハケメ後ヘラミガキ調整されるものである。このうち、211は胴部下半が丸味を持って立ち上がる下膨れタイプで、これらの中では若干古手と思われる。214は中型の長胴甕、215は口縁部が短く頸部に段のない長胴甕である。216は無底式の甕である。内面調整はヘラナデ後ヘラミガキである。217~219は球胴甕で、器面調整は長胴甕とほぼ同様であるが、ハケメがヘラナデになるものもある。220は



- A-A' B-B'
- 1 10YR 2/3 黒褐色 粘土質シルト 炭化物粒、幾十枚を含む
 - 2 10YR 2/1 黒色 粘土質シルト 褐色土を含む
 - 3 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色土小ブロックを含む
 - 4 10YR 2/3 黒褐色 粘土質シルト 褐色土小ブロックを含む
 - 5 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト プロソク状
 - 6 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 炭化物粒、塵上粒を含む

図34 第23号住居跡 (1)

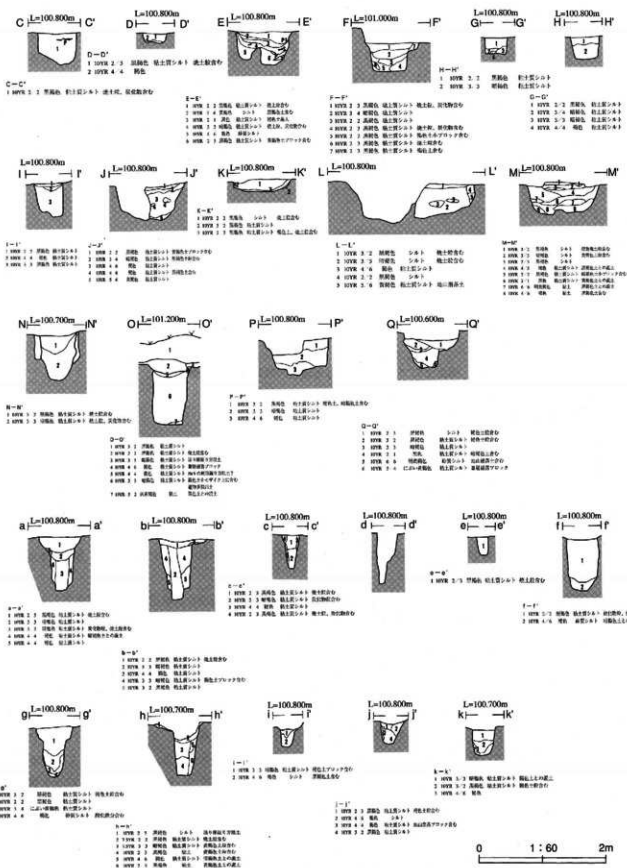


图35 第23号住居跡 (2)

球胴になるかわからない。221・222は土製品類である。221は床面から出土した中実の鈴形土製品である。吊り下げたものか、上部に小さく穿孔されたつまみが付く。本体部分には沈線が十字に巡っている。222は製品とするか判然としない。223～235は上玉で、断面形が円形のものと同平なものがある。228～232は勾玉で、断面形はいずれも円形を基調としている。236・237は紡錘車の欠損品である。238～241は小型土器とした。いずれも手づくね土器のような粗雑なつくりではない。238は小型の甕の可能性もある。241は蓋を模したものであろう。242は砥石とはし難いが、平滑面を有するレキで用途不明なもの。243～254は鉄製品である。243は鋤先、244は鉄鎌、245は環状鉄製品としたが、これはソケット状の止め金具のようなものか。246は幅1cmほどの薄い板状のものを折り重ねたもので、断面は湾曲している。種類は不明である。247・248、250～252は刀子、249・253・254は釘と思われる。

時期 出土遺物の特徴から、8世紀前半(第I期)の住居跡と思われる。

第24号住居跡(1F7h住)

遺構(図36、写真図版25)

(位置・重複)調査区北端部の西寄りにあり、第14号住居跡とは南東方向に約11mの距離がある。第7号溝跡に切られている。

(埋土)焼土粒や炭化物粒、褐色土のブロックを含む黒色土・黒褐色土が主体である。

(平面形)長方形(規模)3.25×3.68m

(壁)いずれも直立気味に立ち上がり、壁高は27cm前後である。

(床面)平坦である。深さ2～20cmの貼り床が確認された。

(柱穴)検出されなかった。(土坑)住居跡中央から北東壁寄りに貯蔵穴が1基検出された。

(その他)カマドの周辺を除き、周溝が巡る。

(カマド)〈位置〉北東壁中央 〈主軸方向〉N-45°-E

〈本体〉両袖と燃焼部焼土、支脚となる円礫と甕が確認された。袖は地山を掘り残して、暗褐色のシルト質土を被覆し構築している。燃焼部焼土は、直径約4.5cmの円形で厚さは最大で4cmである。支脚はカマド奥壁に原位置を保ったまま出土した。

〈煙道部、煙出部〉掘り込み式の煙道で、底面は煙出部までほぼ水平に延びる。煙出部は、煙道底面よりも10cmほど掘り込まれて小ピット状を呈している。各部の埋土は、焼土粒を含む黒褐色土や暗褐色土、地山の崩落土からなる。

遺物(図91～94、写真図版76～78)

非ロクロ成形の環・甕・鉢類と土製品が3点出土した。中でも甕類が多く、口縁部や頸部の形状等バリエーションに富む。

255・256・257は平底の環で、255は外面の口縁部に段を有する。255・257?はヘラミガキ調整が不明瞭で、内面は黒色処理されない。258は底部を欠くが丸底と思われるもので、口縁部が強く外反している。259は鉢とした。器面は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部は内面のみヘラミガキ調整されている。261～264は長胴甕か球胴甕の口縁部と思われる破片で、261・262の口縁部は外反して立ち上がり、263・264は口唇部が直立気味に立ち上がっている。260～270・275は、内外面とも口縁部がヨコナデ調整、胴部がハケメあるいはハケメ後ヘラミガキ調整が施される長胴甕である。頸部の段の有無や口唇部の立ち上がり等に違いが見られる。271・272・273は内外面ともハケメ調

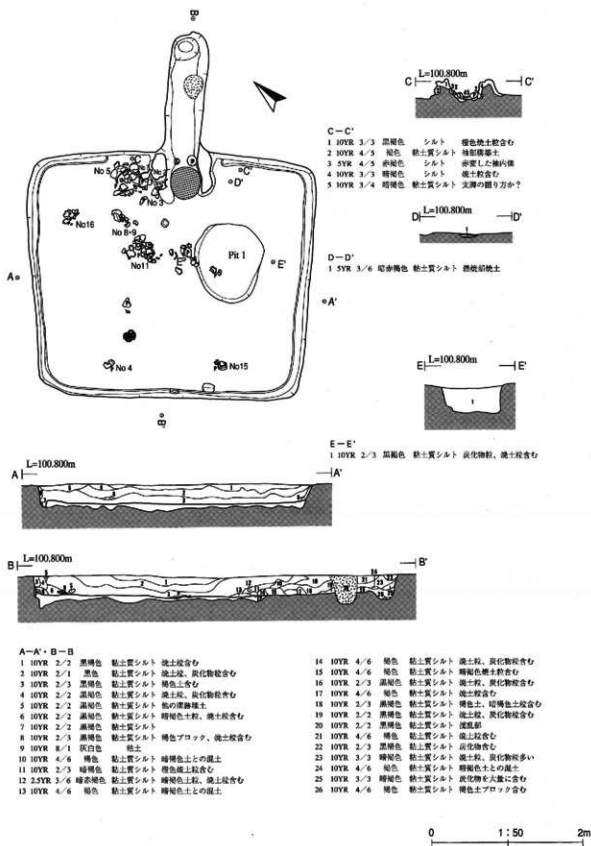


図36 第24号住居跡

築される長胴甕の底部付近、276・277はヘラナテ調整の長胴甕底部である。274は中型の甕で、頸部の括れと口縁部の開きがほとんど見られない。260・278は球胴甕と思われる甕の底部破片、279は頸部に段を有する球胴甕である。280・281は土製の勾玉、282は土玉である。

時期 出土遺物から、8世紀後半（第Ⅱ期）の住居跡と考えられる。

第25号住居跡（ⅡC0f住）

遺構（図37、写真図版26）

（位置・重複）調査区中央部の住居群内にあり、第60号陥し穴状遺構を挟んで西側1mに第17号住居跡がある。本遺構の北側は宅地で、煙道部・煙出部は造成の際に上部を削られている。

（埋土）褐色土粒をまばらに含む黒褐色土の単層である。

（平面形）方形？（規模）3.74×?m

（壁）いずれも緩やかに立ち上がる。壁高は17cm前後である。

（床面）ほぼ平坦である。貼り床は10～15cmの厚さで全体に施されている。また、東壁際の北寄りに不整形の焼土が確認されたが、本遺構に伴うものかは不明である。

（柱穴）検出されなかった。（土坑）東壁中央と南西隅に貯蔵穴が2基検出された。

（カマド）<位置>北壁中央 <主軸方向>N-6°-W

<本体>22×30cmの燃焼部焼土が確認されたのみである。厚さは4cm程度だが、発達は良好である。

<煙道部、煙出部>既述のとおり、煙出部の下部しか残存していない。

遺物（図94、写真図版78）

非クロコ成形の坏と甕が数点ずつ出土した。

283・284は有段丸底の坏で、その段は外面の胴部上半にある。285は丸底の底部破片で、ハケメ・ヘラミガキ調整が見られるもの。286は長胴甕で頸部の段は不明瞭である。287は球胴甕の底部付近と思われるが、胴部の立ち上がりは開き気味で直線的である。

時期 出土遺物から、8世紀代の住居跡と思われる。

第26号住居跡（ⅢC1e住）

遺構（図38、写真図版27）

（位置・重複）調査区中央部の住居群内にあり、西北西2mに第16号、西南西2.5mに第3号住居跡がある。床面に第69号陥し穴状遺構が検出された。本遺構の東側は工事によって削られ、またごく最近の溝によって攪乱される部分がある。

（埋土）焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土が主体で、部分的に褐色土のブロックを含む。

（平面形）方形？（規模）5.32×?m

（壁）直立ぎみに外傾して立ち上がる。壁高は20cm前後である。

（床面）僅かに凹凸がある。貼り床は施されていない。

（柱穴）方形に配されたと思われる主柱穴PP1～PP3の3個が確認された。柱穴間距離は3.0mである。いずれも柱痕は確認できなかった。

（土坑）カマドの両脇に1基ずつ検出されたが、他の住居跡の例と比べるといずれも小さめである。深さは20～30cmほどである。

（その他）カマド周辺と西隅以外には深さ5～10cmの周溝が巡る。また、床面から炭化材が多く出土し

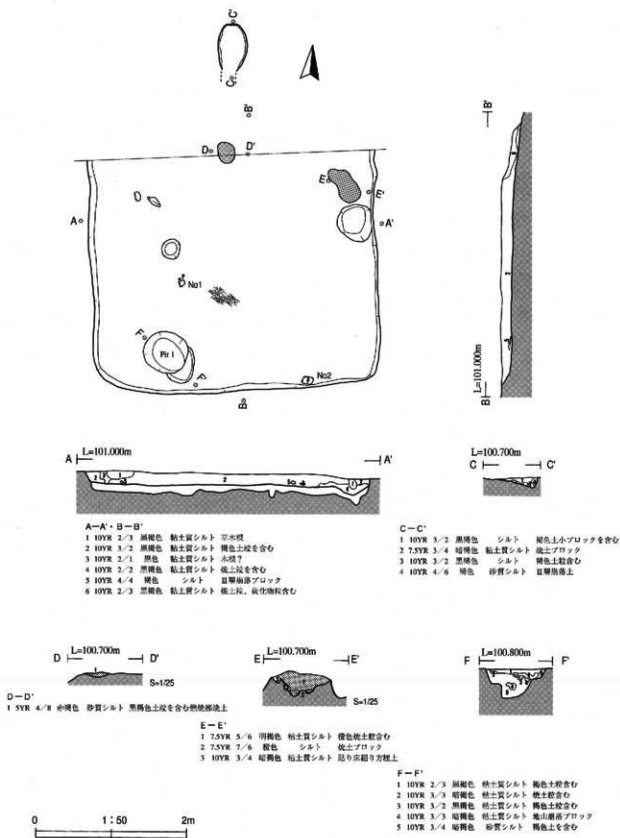


図37 第25号住居跡

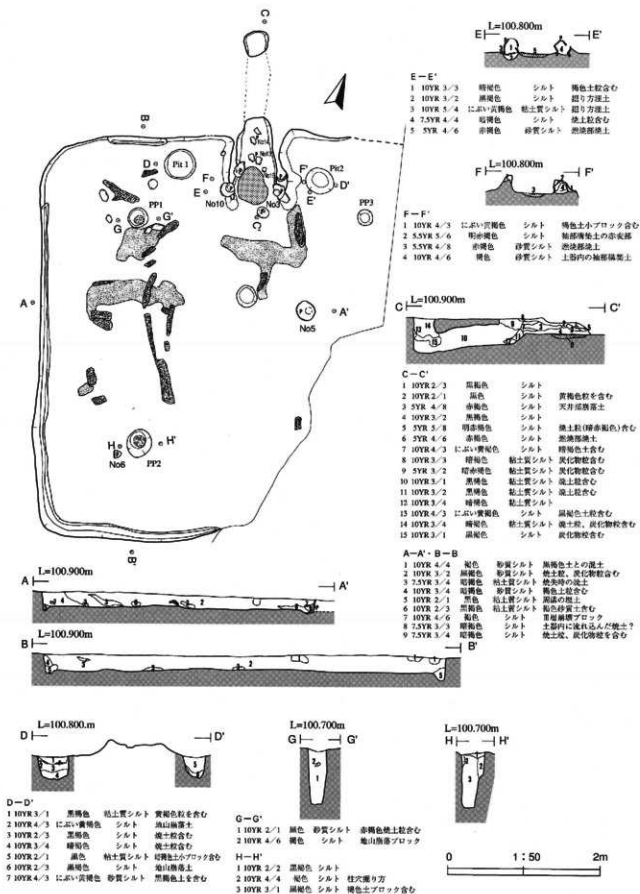


図38 第26号住居跡

ており、焼失家屋である可能性が高い。

(カマド) <位置>北西壁中央 <主軸方向>N-18°-W

<本体>残存状況は極めて良好であった。両袖部には、芯材として1ないし2個の甕が直立状態で埋め込み、さらにシルト質土を貼り付けて構築している。燃焼部の焼土は、38×48cmの楕円形で厚さは4cm前後で、良く焼けている。なお、カマドの埋土中から鳥骨と思われる細かく砕けた焼骨が出土している。

<煙道部、煙出部>くり抜き式の煙道を持つ。煙道部に向けて奥壁付近から急激に下がり、あとは緩やかに傾斜していく。各部の埋土は、炭化物を含む黒褐色や暗褐色が主体となり、遺物を多く包含している。

遺物 (図95・96、写真図版79・80)

非ロクロ成形の坏・甕類と土製品2点・磁石が1点出土した。

288-292は外面有段の坏で、いずれも底部は平底である。288・289は胴部上半にも段を有している。これらの器面調整は、外面が段上にヘラミガキ、段下にヘラケズリ、内面ヘラミガキであるが、292のみ外面段下のヘラケズリが見られない。293-298は外面無段の坏で、293・294は九底、295・296・297は平底風の底部である。底部付近にヘラケズリ調整の痕跡を有するものは295・296で、それ以外は内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施されている。なお、291・294・298は再火熱により黒色処理がとんでいる。また、内外面とも黒色処理されているものは293・295・297の3点である。299-305は長胴甕で、底部資料のほかはいずれも頸部に段を持つ。器面調整は、口縁部外面ヨコナデ・ヘラミガキ、胴部外面がヘラミガキ、内面がハケメ・ヘラミガキを主体とするが、303・304のように胴部下端にヘラケズリ調整が残るものもある。306・307は中型の甕で、306は胴部が丸みを持って立ち上がる。基本的な器面調整は長胴甕と共通しているが、306の胴部内面はヘラナデ調整である。308・309は小型甕でともに輪積み痕を明瞭に残す。310は口縁部を欠く球胴甕である。311は土玉、312は小型土器である。313は3面に使用痕を有する手持ち磁石である。

時期 出土した遺物から、8世紀前半(第1期)の住居跡と思われる。

第27号住居跡(ⅢC1住)

遺構 (図39、写真図版28)

(位置・重複) 調査区中央部の住居群内、第18号住居跡の西7mに位置する。第65号陥し穴状遺構と西隅で重複している。本遺構の東側は平成8年度の調査区であるが、その際にはこれを確認できずにいたものである。

(埋土) 褐色土粒・炭化物粒を含む黒褐色土と黒色土が主体である。壁際に地山の崩落土を含んでいる。

(平面形) 方形? (規模) 4.43×?m

(壁) 直立ぎみに外傾するものと緩やかな立ち上りのものがある。壁高は25cm前後である。

(床面) 全体に平坦である。貼り床は施されていない。

(柱穴) 方形に配されたと思われる主柱穴のPP1~PP3と柱穴状の小ピットが4個検出された。主柱穴の柱穴間距離は2.7~2.8mである。いずれも柱痕は確認できなかった。

(土坑) 西隅に1基、カマド左脇に1基、南隅に1基の計3基が確認された。いずれも、位置的には貯蔵穴と思われるものである。

(その他) 南東壁の南寄り床面の高まりが観察され、階段状の出入り口の一部である可能性がある。

(カマド) <位置>北西壁中央 <主軸方向>N-45°-W

<本体>これも残存状況は極めて良好で、袖部の構造は第26号住居跡と同様である。甕を伏せた状態の支

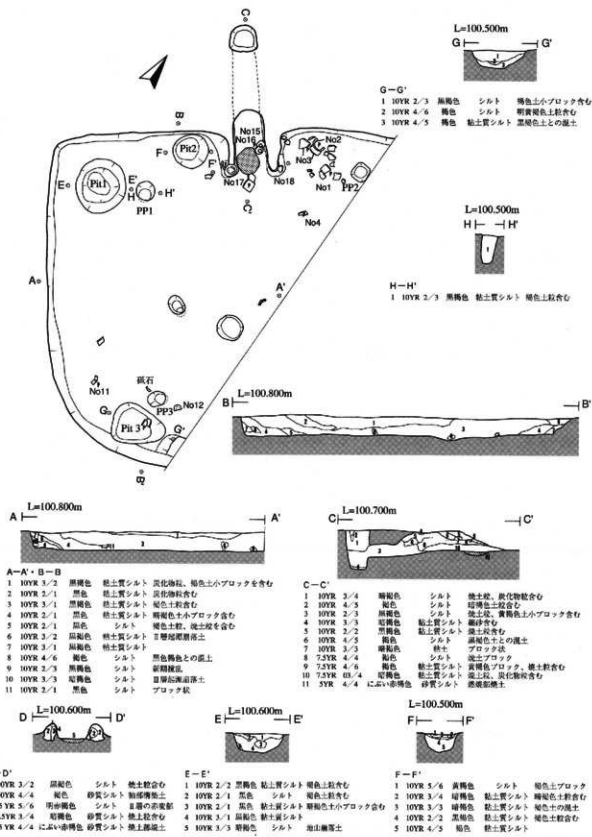


図39 第27号住居跡

脚が燃焼部奥に2個確認されている。燃焼部焼土は30×34cmの不整形円形、厚さは最大6cmである。<煙道部、煙出部>くり抜き式の煙道である。底面は煙出部に向けてほぼ水平に延び、緩やかに傾斜して煙出部に至る。煙出部は煙道底面より15cmほど掘り込まれ、雨水等の逆流を防ぐ構造になっている。各部の埋土は、焼土粒や炭化物を含む黒褐色や暗褐色が主体である。なお、煙出部の埋土から炭化した竹が出土している。

遺物 (図96・97、写真図版81・82)

非ロクロ成形の坏・甕類のほか、高坏の脚部1点と砥石が1点出土した。

314・315は外面有段の坏である。前者は平底、後者は丸底を呈する。314は胴部の段下から底部にかけてハケメ調整が残る。315の外面調整は、口縁部から段までヨコナデ調整されヘラミガキは明瞭でない。316・317は内外面無段の坏で、丸底の底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。ともに丁寧なヘラミガキ調整が施されている。318は高坏の坏部を欠く破片である。外面はヘラミガキされている。319・320は長胴の甕で、320は頸部に沈線状の段を有する。器面調整は、いずれも口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ・ハケメが主体である。321・322は中型の甕である。321は口縁部に段を持ち、その段から口唇部にかけて上方に立ち上がっている。器面は内外面ともヘラミガキ調整が明瞭である。322は短い口縁部が特徴的である。323～326は中型から小型の甕で、323のみ頸部に段を有する。いずれも器面は、口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ後ヘラミガキ調整されている。327・328は球胴甕で、327は内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施されている。328は底部に数条の条線が見られる。明らかに木葉痕ではない。329は4面に使用痕が認められる手持ち砥石で、その1面には人工的にあけられた円形の凹みを有している。

時期 出土遺物の特徴から、8世紀前半(第I期)の住居跡と思われる。

2. 住居状遺構

平面形は長方形を基調とし、カマド施設をもたないものを住居状遺構として報告する。平成8年度調査の際に、調査区中央部のⅡF・ⅡE区に4棟検出された。これらには、柱穴を伴うもの（第1号住居状遺構）や床面に炉としての使用が想定される焼土があるもの（第2・3号住居状遺構）、焼失に伴う焼土が認められるもの（第4号住居状遺構）がある。また、第1号住居状遺構床面からは、良質な白色粘土が出土している。これらのことから、炉の燃焼部焼土を有するものについては小鍛冶関係の、粘土を有するものは土器製作の工房的な性格をもつ遺構の可能性はある。

これらの時期は、第1号住居状遺構については、出土した遺物から平安時代の遺構と考えられるが、他の3棟は概ね8世紀代と思われる。

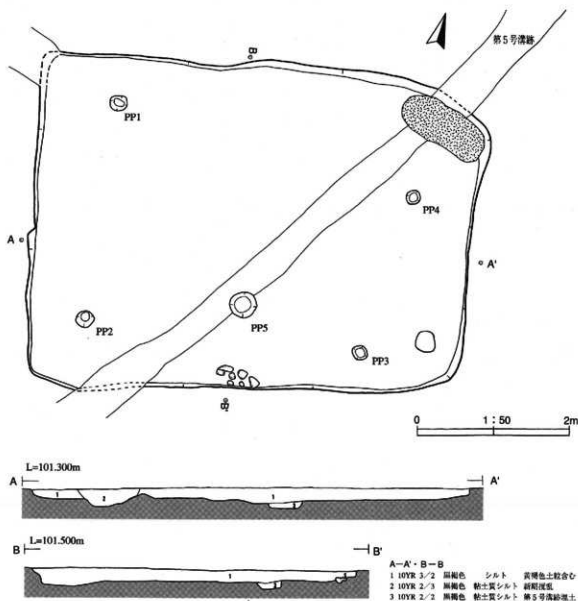


図40 第1号住居状遺構

第1号住居状遺構 (ⅡE4; 住居状遺構)

遺構 (図40、写真図版29)

(位置・重複) 調査区中央部の住居跡・住居状遺構が密集する地区にあり、第2号住居状遺構と東側で隣接している。本遺構の北東から南西にかけての対角線上を第1号溝に切られている。北東隅の長方形土坑は電柱の埋め込み穴、北西隅も一部攪乱を受けている。

(埋土) 黄褐色の小ブロックを含む黒褐色土主体である。(平面形) 不整長方形

(規模) 4.25m×4.83m (壁) 直立ぎみに立ち上がる。(床面) Ⅲ層褐色土を床面とする。

(柱穴) PP1～5の5個確認されたが、PP5は本遺構に伴わない。PP1～4は長方形に配されている。

(その他) 前述の白色粘土は南東隅に検出されたが、土器製作に使用したものか。南壁中央付近には円礫が数個確認されたが、その性格は不明である。

遺物 (図98、写真図版82)

ロクロ成形の坏、非ロクロ成形の甕がともに数点ずつ出土している。4点掲載した。

330・331は内面が黒色処理される坏で、330は底部を欠く。331は底部を回転糸切りで切り離した後、高台風に仕上げがなされている。332・333は甕で、332は頸部に軽い段を有する。最大径は胴部中央にあり、底部外面はわずかに張り出す感じである。器面調整はヘラナゲが主体と思われる。333も底部に若干の張り出しが見られる。内外面ともハケメ調整されている。

時期 出土遺物から9世紀以降(第Ⅲ期)と考えられる。本遺構は、稲村Ⅱ遺跡の住居群の中で最も新しい時期に相当する。

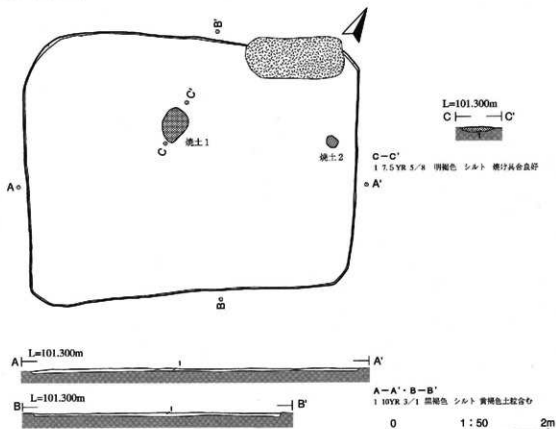


図41 第2号住居状遺構

第2号住居状遺構 (II E 5 i 住居状遺構)

遺構 (図41、写真図版30)

(位置・重複) 調査区中央部の住居群内にある。前述のとおり、第1号住居状遺構と西側で接し、第8号住居跡の南東約7mに位置する。北東隅には電柱敷設の際の攪乱が及んでいる。

(埋土) 黄褐色土粒を含む黒色土の単層である。

(平面形) 不整形 (規模) 3.37m×4.35m

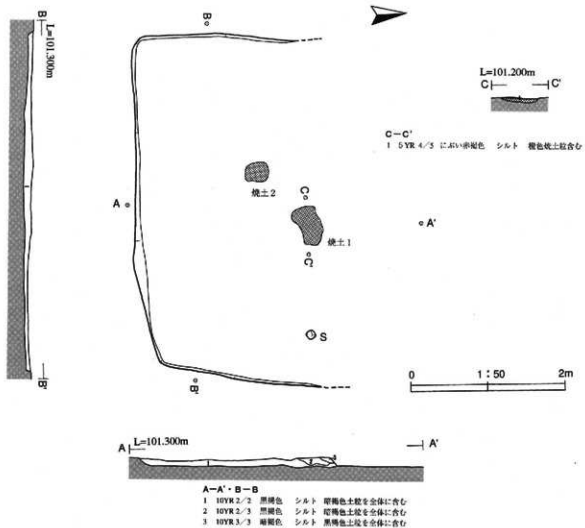
(壁) 数cmしか残存していない。(床面) III層の褐色土を床面とし、平坦である。

(柱穴) 検出されなかった。

(その他) 炉としての使用によりできたと思われる焼土が2カ所見つかった。焼土1は32cm×46cmの楕円形、焼土2は直径15cm程度の不整形円形を呈する。焼土1の厚さは最大で12cmである。いずれも焼け具合は良好である。

遺物 (図98、写真図版82)

334は外面がハケメ調整、内面がヘラナデ後ヘラミガキ調整される小型甕の底部である。底部外面の張



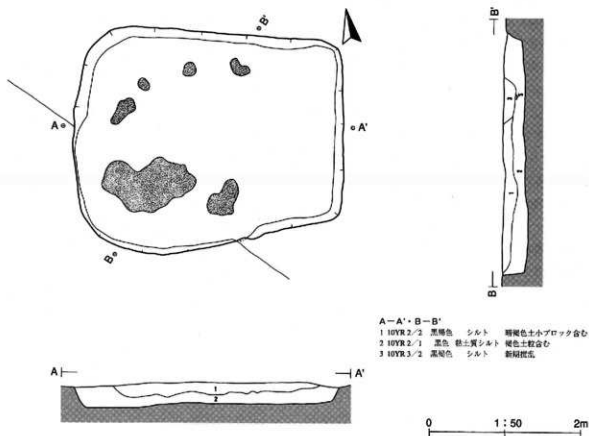


図43 第4号住居状遺構

り出しは弱いが、内面は卵形を呈する。

時期 出土遺物から、8世紀代と考えられる。

第3号住居状遺構 (ⅡE8j住居状遺構)

遺構 (図42、写真図版31)

(位置・重複) 調査区中央部東寄りの住居群内にあり、第7号住居跡とは南東隅で接する。第3号土坑と西壁で重複している。本遺構の方が古い。北側には削平を受けており、全体のほぼ3分の1しか残存していなかった。

(埋土) 暗褐色土・褐色土の小ブロックを含む黒褐色土が主体である。部分的に暗褐色土層が見られる。

(平面形) 長方形か? (規模) 4.5 m × ?

(壁) 立ち上がりは10 cmほどである。(床面) III層を床面とし、硬く締まる。

(柱穴) 検出されなかった。

(その他) 住居中央部に地床炉様の焼土が2基確認された。焼土1は27 cm × 50 cmの不整形、焼土2は26 cm × 30 cmの隅丸方形形状を呈する。焼土1の最大の厚さは10 cm、その発達は良好である。

遺物 (図98、写真図版82)

335は堯の底部破片であるが、細片のため詳細は不明である。

時期 8世紀代としておく。

第4号住居状遺構（ⅡF4b住居状遺構）

遺構（図43、写真図版32）

（位置・重複）調査区中央部の住居群内にある。重複関係は、第8号住居跡で記載したとおりである。

（埋土）暗褐色土小ブロックを含む黒褐色土と、褐色土粒が混じる黒色土の2層からなる。

（平面形）不整形形状（規模）3.00m×3.57m

（壁）各壁とも緩く外傾する。（床面）Ⅳ層を床面とする。平坦で硬く締まる。

（柱穴）（土坑）ともに検出されなかった。

（その他）住居のほぼ中央から西寄りに、焼けの悪い焼土が6カ所検出された。検出状況から、いずれも焼失に伴うものと考えられる。

遺物（図98、写真図版82）

336・337の2点を掲載した。いずれも非ロクロ成形の坏である。337は内面が黒色処理され、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。

時期 出土遺物から、8世紀代としておく。

3. 土坑類

3カ年の調査で確認された土坑の総数は15基で、調査区の中央部から北側に点在している。これらは、形状が円形を基調とするものと長方形のものがあり、後者は住居群とはほぼ同時期の墓塚である可能性が高い(第5号・10号・15号土坑)。特に第10号土坑からは、非ロクロ成形の上師器の他、鉄斧・ガラス玉などの副葬品や白色粘土塊が出土しており、墓塚であることはほぼ確定である。なお、これを古墳主体部と想定し周辺に周濠を探したが、確認できなかった。一方前者では、出土遺物が無く時期が特定できないものが多いが、第7号土坑には非ロクロの上師器を伴っており、これも住居群とはほぼ同時期の土坑と思われる。また、第6号土坑は井戸跡の可能性があるが、時期が不明である。以下、検出された土坑15基の詳細を記述する。

第1号土坑(ⅡD0h土坑)

遺構(図44、写真図版33)

(位置) 調査区中央部やや北寄りにある。

(埋土) 橙色の焼土ブロックが主体で、一部その焼土粒を含む暗褐色土が見られる。

(平面形) 不整形円形 (規模) 0.48×0.50m (深さ) 0.24m

(壁) 外傾して立ち上がる。(底面) Ⅲ層

遺物は出土していない。

時期は不明である。

第2号土坑(ⅡD0i土坑)

遺構(図44、写真図版33)

(位置) 第1号土坑の北5mにある。

(掘上) 精査時の不手際により不明である。

(平面形) 円形 (規模) 0.90×1.00m (深さ) 0.46m

(壁) 直立する。(底面) Ⅲ層を底面とし、副穴を2個有する。

(性格) 副穴があることから、陥し穴状遺構の可能性がある。

遺物は出土しなかった。

時期は不明である。

第3号土坑(ⅡE8j土坑)

遺構(図44、写真図版33)

(位置) 調査区北部の住居群内にあり、第3号住居状遺構の西壁を切っている。

(埋土) 上位は焼土粒を含む黒褐色土、下位は炭化物・焼土粒を含む暗褐色土である。

(平面形) 楕円形 (規模) 0.84×0.96m (深さ) 0.32m

(壁) 西壁は緩やかに外傾、東壁は段を持って立ち上がる。(底面) Ⅲ層

遺物は出土しなかった。

時期は不明である。

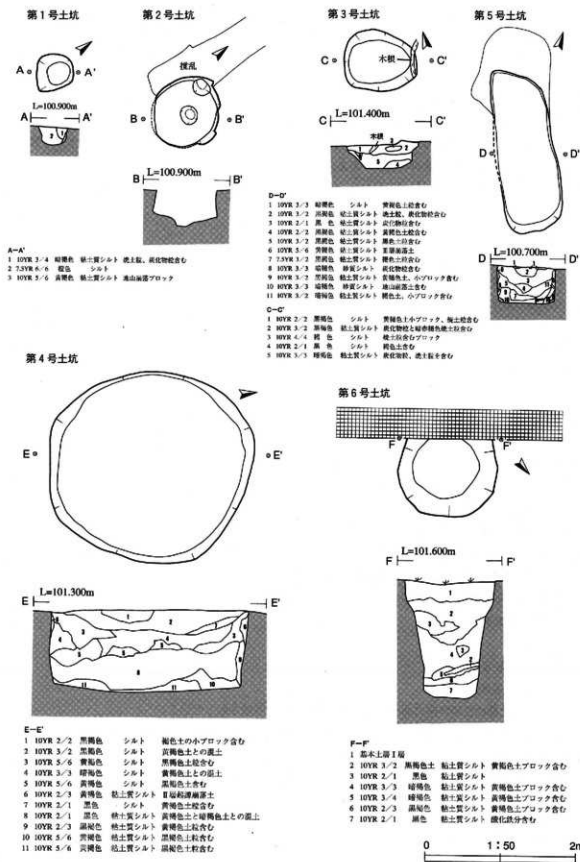


図44 土坑 (1)

第4号土坑（ⅡF6d土坑）

遺構（図44、写真図版33）

（位置）調査区北部の住居群内東側にある。

（埋土）人為的に埋め戻された大型の土坑である。上位は黄褐色のブロックを含む黒褐色土、中位は黒褐色土と暗褐色土の混上、下位は黒色土と黄褐色土の混上からなる。

（平面形）円形（規模）2.52m×2.69m（深さ）1.09m

（壁）直立して立ち上がる。（底面）Ⅲ層を底面とし平坦である。

遺物は出土しなかった。

時期 埋土の状況から、ごく最近の土坑の可能性はある。

第5号土坑（ⅡD6g土坑）

遺構（図44、写真図版34）

（位置）調査区中央部の住居群の北側にある。本遺構の周辺には、陥し穴状遺構以外の遺構は見られない。

（埋土）人為的に埋め戻された黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土の混上からなり、焼土粒や炭化物粒を含む。土師器甕の破片を数点出土した。

（平面形）不整長方形（規模）0.78×2.20m（深さ）0.48m

（壁）直立している。（底面）Ⅲ層を底面とし、平坦である。溝等は確認されなかった。

（性格）形状や埋土の状況から墓塚と思われる。周壁の有無は確認したが見つけられなかった。

遺物（図98、写真図版83）

338は小型の甕であるが、頸部の段は不明瞭である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整され、胴部には外面がハケメ、内面はヘラナデ調整が見られる。339は甕の胴部上半である。器面調整は338とほぼ同じである。これも頸部の段が明瞭でない。

時期 出土した遺物から、8世紀代の墓塚と考えられる。

第6号土坑（ⅡE0d土坑）

遺構（図44、写真図版34）

（位置）調査区北部の住居群内の西端にあり、本遺構西側の一部は、紫波町教育委員会の調査区にある。

（埋土）上位は黄褐色土粒を含む黒褐色土、中位は暗褐色土、下位には泥炭化した黒色土が堆積する。

（平面形）円形（規模）直径1.30m前後（深さ）1.54m

（壁）外傾して立ち上がり、開口部が若干開く。（底面）礫層を底面とする。

（性格）水が湧き出す礫層まで掘り込んでいることから、井戸であった可能性がある。

遺物は出土しなかった。

時期は不明である。

第7号土坑（ⅠF6h土坑）

遺構（図45、写真図版34）

（位置）調査区の北端部にある。（埋土）焼土粒や炭化物を含む黒褐色土からなる。遺物を含む。

（平面形）不整円形（規模）0.96×1.11m（深さ）0.10m

(壁) 緩く立ち上がる。(底面) III層を底面とし、皿状を呈する。焼土のブロックが1カ所見られる。

(性格) 焼土と遺物を伴っている土坑であるが、用途等は不明である。

遺物 (図98、写真図版83)

340は有段丸底の坏で、内面に段は見られない。内外面とも丁寧にヘラミガキ調整されている。341は無段丸底の坏、342は甕の底部破片であるが、その内面は卵形を呈し外面は外側に張り出している。調整はハケメが明瞭である。

時期 出土遺物から、8世紀代の土坑と思われる。

第8号土坑 (IF5f土坑)

遺構 (図45、写真図版34)

(位置) 調査区の北端部の住居群内東寄りにある。(埋土) 焼土粒や炭化物を含む黒褐色土である。

(平面形) 不整形円形 (規模) 0.96×1.28 m (深さ) 0.13 m

(壁) 緩く外傾して立ち上がる。(底面) III層を底面とし、皿状を呈する。

遺物は出土していない。

時期は不明である。

第9号土坑 (III D1a土坑)

遺構 (図45、写真図版35)

(位置) 調査区のはは中央に位置する。(埋土) 黒褐色土の単層で、褐色土の小ブロックや炭化物を含む。

(平面形) 長楕円形 (規模) 0.74×1.41 m (深さ) 0.22 m

(壁) 緩やかに外傾して立ち上がる。(底面) III層を底面とし凹凸がある。

(性格) 形状からは墓塚とも予想されるが、第5号土坑と比べて規模等に違いがあることから、墓塚とはしなかった。

遺物は出土していない。

時期は不明である。

第10号土坑 (IF9i土坑)

遺構 (図45、写真図版35)

(位置) 調査区北端部、第23号住居跡の西南西約3.5mに位置する。

(埋土) 明らかに人為的に埋め戻されていた。上位に黒色土粒を含む暗褐色土、中位以下は焼土粒・炭化物粒、黄褐色土の小ブロックを含む黒褐色土が堆積している。土師器坏・甕の破片のほか、鉄斧やガラス玉・土製品等が出土した。また、白色粘土の塊が2カ所で確認された。

(平面形) 長方形 (断面形・底面) 長軸方向の断面形は浅い皿状を呈し、床面は細かな凹凸を有する。(規模) 0.80×2.07 m (深さ) 0.50 m (壁) 緩やかに弧を描くように立ち上がる。

(性格) 形状や埋土の状況、特殊な副葬品ともとれる遺物が出土していることから墓塚と思われる。出土遺物の内容から、古墳主体部の可能性も想定されたため、周埴の有無を確認したが検出できなかった。水田造成の際に削られてしまったことも考えられるが、ここでは墓塚として報告しておく。

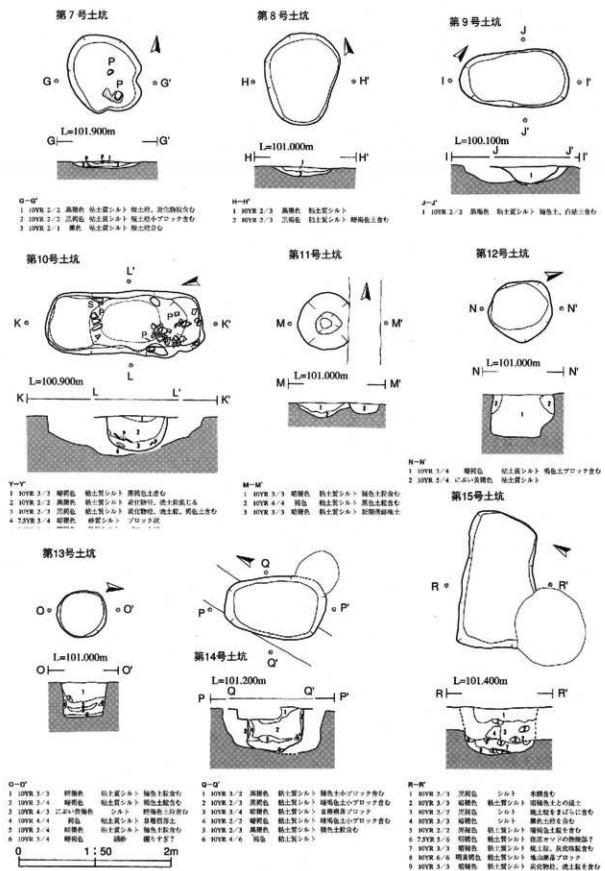


図45 土坑 (2)

遺物 (図99・100、写真図版83・84)

343・344は外面有段の坏である。前者は丸底、後者は平底と思われる。345～352は甕類で、350・351は胴部に最大径を持つ球胴甕、それ以外は口縁部にそれを持つものである。349以外は頸部に段を有している。346は口縁部が大きく外反して開いている。352は小型の甕であろう。これらの器面調整は、口縁部がいずれもヨコナデ、胴部外面がハケメカヘラナデ、あるいはその後ヘラミガキ、胴部内面はハケメカヘラナデが施されている。353は須恵器甕の胴部である。354～356は手づくね土器で、356には高台が付く。357も手づくね土器か。358は土製勾玉の先端部と思われるもの。359は円盤状の土製品であるが、用途等全く不明である。360～362は鉄製品で、360は鉄斧、361・362は角釘と思われる。363は本遺構から1点のみ出土した直径4.8mmのガラス玉である。

時期 出土遺物から8世紀代の墓塚と思われるが、8世紀前半の可能性はある。

第11号土坑 (ⅢC1e土坑)

遺構 (図45、写真図版35)

(位置) 調査区中央部の住居群内にある。最近の溝に切られている。

(埋土) 上位は暗褐色土、下位は褐色土が堆積する。(平面形) 円形

(規模) 直径0.74m (深さ) 0.22m (壁) 緩やかに立ち上がる。(底面) 若干凹凸がある。

遺物は出土していない。

時期は不明である。

第12号土坑 (ⅢE1e土坑)

遺構 (図45、写真図版35)

(位置) 調査区中央部北寄りの住居跡が検出されていない地域にある。

(埋土) 褐色土のブロックを含む暗褐色土の単層である。(平面形) 円形

(規模) 直径0.80m (深さ) 0.56m (壁) 若干オーバーハングして立ち上がる。

(底面) 平坦である。

遺物は出土していない。

時期は不明である。

第13号土坑 (ⅢE2d土坑)

遺構 (図45、写真図版36)

(位置) 調査区中央部、第12号土坑の南東およそ10mにある。

(埋土) 上位は褐色土粒を含む暗褐色土、下位は地山崩落土を含むにぶい黄褐色土である。

(平面形) 円形 (規模) 直径0.62m (深さ) 0.42m (壁) 直立して立ち上がる。

(底面) 掘りすぎのため不明である。

遺物は出土していない。

時期は不明である。

第14号土坑(ⅡE9f土坑)

遺構(図45、写真図版36)

(位置) 調査区中央部北寄りの住居群の南側にあり、第12号土坑の西約8mに位置する。

(埋土) 暗褐色土の小ブロックを含む黒褐色土を主体とし、Ⅲ層の地山崩落土を含む。人為的に埋め戻されているようである。

(平面形) 隅丸長方形(規模) 0.82×1.34m(深さ) 0.56m

(壁) 短軸方向の壁は直立して立ち上がるが、長軸方向のそれは外傾して緩やかに立ち上がる。

(底面) 大きい凹凸がある。

(性格) 平面形状・底面や埋土の状況が第10号土坑と類似していることから、本遺構は墓塚としておく。

遺物は出土していない。

時期 遺物は出土していないが、時期は8世紀代としておく。

第15号土坑(ⅡF4d住内土坑)

遺構(図45、写真図版36)

(位置) 調査区北部の第12号住居跡内北寄りにある。当初は重複関係にあることがわからず、住居の精査開始後に断面観察から、それよりも新しい遺構であることが判明した。

(埋土) 上位は黒褐色土、中位は焼土粒・褐色土粒を含む黒褐色土、下位は炭化物や焼土粒を含む暗褐色土である。人為的に埋め戻されている様相である。

(平面形) 隅丸長方形(規模) 0.96×1.79m(深さ) 0.62m

(壁) 外傾して立ち上がる。(底面) 平坦ではなく、短軸方向に丸味がある。

(性格) 平面形状・底面や埋土の状況から、本遺構は墓塚の可能性はある。

遺物は甕の破片が1点出土した。

時期 第12号住居跡(8世紀中～後)が埋没後の8世紀代かその直後の時期としておく。

4. 焼土

厚さ4～8cm規模の現地性焼土が4基検出された。平面形は円形の方が1基見られるほかは、いずれも不整形である。第1号・2号・4号焼土は古代に属する可能性があるが、第3号焼土は時期が不明である。

第1号焼土(ⅡC8i焼土)

遺構(図46、写真図版37)

(位置) 調査区中央部、第4号住居跡の南8m程に位置する。(検出面) Ⅱ層上面

(焼成) 橙色を呈する現地性焼土で、焼け具合は極めて良好である。

(平面形) 円形(規模) 47×50cm(最大厚) 6cm

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、古代と思われる。

第2号焼土 (II C 0 b 焼土)

遺構 (図46、写真図版37)

(位置) 調査区中央部南寄り、第3号住居跡の南3mに位置する。(検出面) II層上

(焼成) 暗赤褐色の現地性焼土で、上部に橙色の焼土粒を含む。良く焼けている。

(平面形) 不整長楕円形 (規模) 30~50×12.3cm (最大厚) 8cm

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、古代に属するものと思われる。

第3号焼土 (III A 6 i 焼土)

遺構 (図46、写真図版37)

(位置) 調査区南部、第39号陥し穴状遺構の北西6.5mに位置する。(検出面) II層上

(焼成) 赤褐色を呈する現地性の焼土である。

(平面形) 不整形のもの3カ所 (規模) 1.4×1.5mの範囲に3基 (最大厚) 7cm

遺物は出土しなかった。

時期 不明である。

第4号焼土 (II E 8 d 焼土)

遺構 (図46、写真図版37)

(位置) 第19号住居跡の東約10mに位置する。(検出面) II層上

(焼成) におい赤褐色を呈する現地性焼土で、その発達はあまり良好でない。

(平面形) 不整楕円形 (規模) 30×44cm (最大厚) 4cm

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、古代に属する可能性がある。

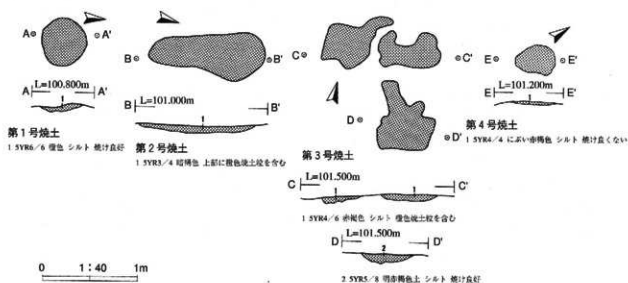


図46 焼土

5. 溝跡

平成8年度の調査で6条、9年度に2条の計8条確認された。住居跡等と重複しているものもあるが、いずれもそれより新しい。これらの時期は、埋土の状況から近世以降の可能性が高いが、どの溝跡からも遺物が出土しておらず、詳細は不明である。

この中で、第3号溝跡は方形か長方形を呈するものと思われ、掘り込みがしっかりとて深さもあり、いわゆる方形周溝としても差し支えないものである。この溝跡の西側半分は、紫波町教育委員会調査区に延びており、その部分は未精査である。この溝跡の時期も不明であるが、8世紀代の住居跡を切っていることからそれ以降ということになるが、埋土の状況から近・現代の新しい溝ではないものと考えている。また、第5号溝跡はこの第3号溝跡に切られている。

第1号溝跡（ⅡB9j溝跡）

遺構（図47、写真図版38）

（位置・重複）調査区中央部南寄り、第3号住居跡の南約5.5mに位置する。西側からの他の溝跡を切っている。（検出面）Ⅱ層上（形態）「コ」の字状を呈し、断面形は逆台形状

（規模）幅20～50cm、全長約13.0m 深さ15.0cm前後

（方向）ほぼグリッド方向と同じ軸線にある。南側は途中で消滅している。（埋土）黒色土の単層

遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、近世以降と思われる。

第2号溝跡（ⅡD7b溝跡）

遺構（図47、写真図版38）

（位置・重複）調査区のほぼ中央、第4号住居跡の北側約5mに位置する。

（検出面）Ⅱ層上（形態）直線状に延びる。断面形は緩い[U]字状。

（規模）幅53～90cm、全長約10.45m、深さ15cm前後

（方向）ほぼ東西方向。西側は調査区域外に延びている。（埋土）混入物の異なる黒褐色土2層からなる。

遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、近世以降と思われる。

第3号溝跡（ⅡE4h溝跡）

遺構（図47、写真図版39）

（位置・重複）調査区中央部北側の住居群内にある第21号住居跡と重複して確認された。検出プランから本遺構のほうが新しい。また、第5号溝跡とも重複し、西側は調査区域外に延びている。

（検出面）Ⅱ層上（形態）全体は方形か長方形と思われる。断面形は[V]字状を呈する。

（規模）上端幅40～82cm、下端幅20cm前後、全長15.0m、深さ66～78cm。

（方向）ほぼグリッド方向に軸線が合うが、若干東に振れる。

（埋土）上位は褐色土粒や黄褐色土粒を含む黒褐色土、中・下位はその間に灰黄褐色土の帯を挟んで、黒色土が堆積する。その境界は非常に明瞭であり、このことから本遺構は人為的な埋め戻しがなされたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、先に述べたように近・現代の溝跡ではなく、古代の方形溝跡に類する遺構の可能性
がある。

第4号溝跡（ⅡE8j 溝跡）

遺構（図47、写真図版39）

（位置・重複）調査区中央部北側の住居群内、第3号住居状遺構・第3号土坑の西側に隣接する。

（検出面）Ⅱ層上（形態）半円形を呈する。断面形は緩い[U]字状。

（規模）幅10～46cm、全長約5.7m、深さ10cm前後。

（方向）南北向きで、どちらの端も西に向いてすぐ消滅する。

（埋土）黄褐色土粒を含む黒褐色土の単層である。

遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、近世以降と思われる。

第5号溝跡（ⅡF5b 溝跡）

遺構（図47、写真図版40）

（位置・重複）調査区中央部北側の住居群内にあり、調査区を南西から北東に横断している。重複関係は前
述のとおりであるが、さらに第1号住居状遺構とも重複しており、本遺構はそれを切っている。

（検出面）Ⅱ層上（形態）緩く曲線を描いて延びている。断面形は浅い[U]字状を呈している。

（規模）幅28～35cm、全長約36.0m、深さ10cm前後。

（方向）南西から北東方向に向く。西側は調査区域外にあり、北東端は自然に消滅する。

（埋土）草木根を含む黒褐色土の単層である。

遺物は出土しなかった。

時期 重複関係から、古代の溝跡の可能性はある。

第6号溝跡（ⅡF4c 溝跡）

遺構（図48、写真図版40）

（位置・重複）調査区北側の住居群内にあり、第4号住居状遺構と第12号住居跡を切っている。両端部は
自然に消滅している。

（検出面）Ⅱ層上（形態）直線状に延びている。断面形は緩い[U]字状を呈している。

（規模）幅30～44cm、全長約19.0m、深さ6cm前後。

（方向）南北で、北端で緩く東側にカーブしている。

（埋土）黄褐色土の小ブロックを含む黒褐色土の単層である。

遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが、近世以降のものか。

第7号溝跡（ⅠF7i 溝跡）

遺構（図48、写真図版41）

（位置・重複）調査区北端部にあり、第24号住居跡の西隅を切っている。

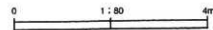
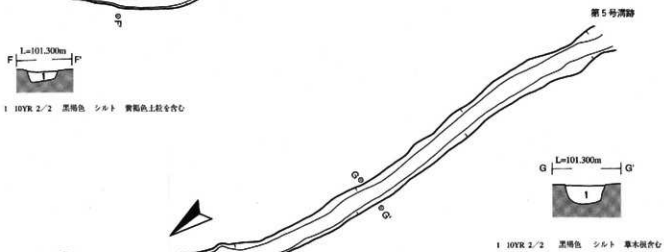
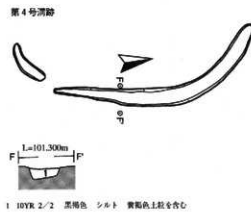
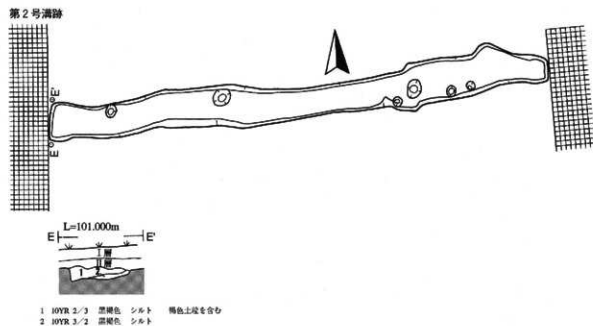
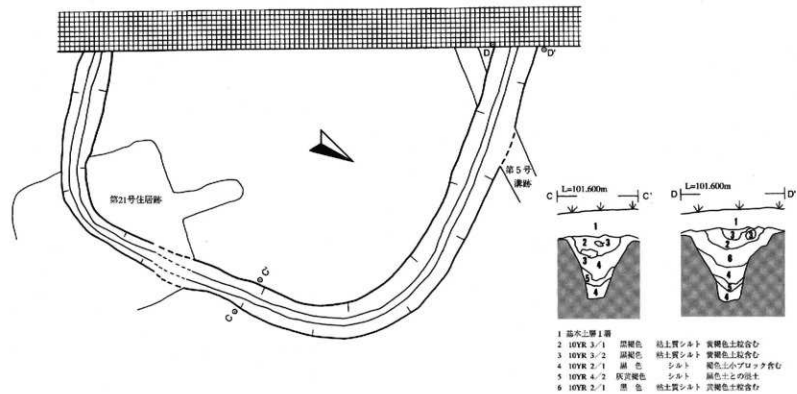
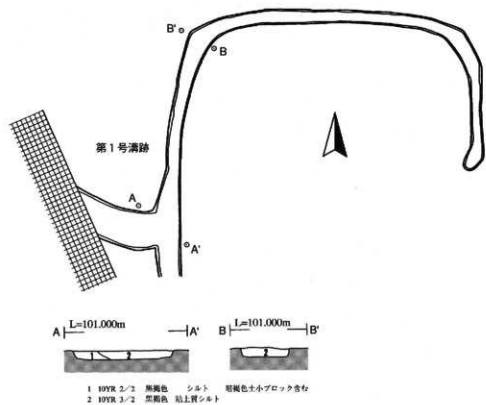


図47 溝跡 (1)

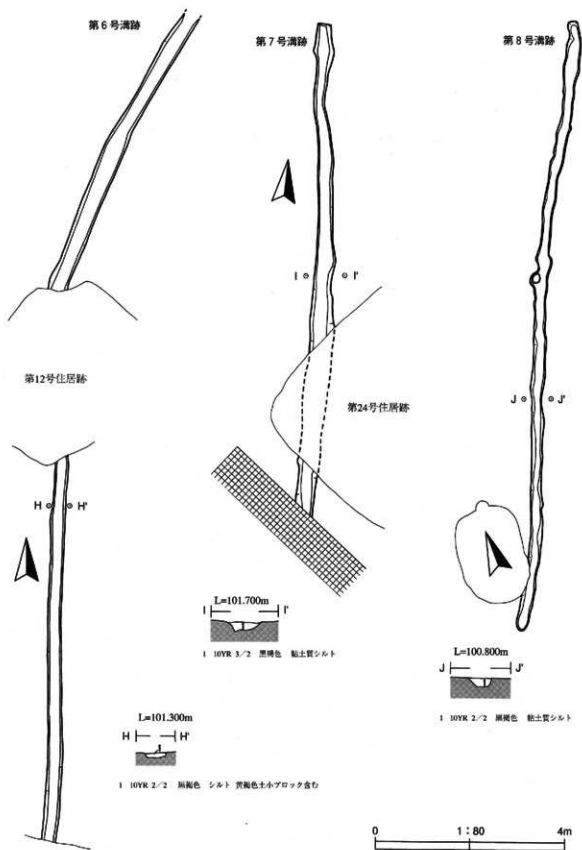


図48 溝跡 (2)

(検出面) III層上 (形態) 直線状に延びている。断面形は緩い[U]字状を呈している。
 (規模) 幅2.2~4.9cm、全長約10.5m、深さ9cm前後。
 (方向) 南北方向で、南側は調査区域外に延びている。(埋土) 黒褐色土の単層である。
 遺物は出土しなかった。
 時期 不明であるが、近世以降と思われる。

第8号溝跡 (IF8g溝跡)

遺構 (図48、写真図版41)
 (位置・重複) 調査区北端部、第24号住居跡の東約5.5mにある。
 (検出面) III層上 (形態) 直線状に延びる。断面形は緩い[U]字状を呈している。
 (規模) 幅1.8~3.4cm、全長約12.9m、深さ10cm前後。
 (方向) 南南西から北北東方向で、南側は調査区域外に延びる。(埋土) 黒褐色土の単層である。
 遺物は出土しなかった。
 時期 不明であるが、近世以降と思われる。

6. 陥し穴状遺構 (図50~68、写真図版42~56)

3年にわたる調査で検出された陥し穴状遺構の総数は76基に及ぶ。これらはすべて、縄文時代のいずれかの時期に属するものと思われる。このうち、形状が溝状を呈するものは74基、副穴を有する円形のもの2基である。これらは、主に調査区の中央部南側から北端部にかけて分布するが、いずれも意識的に複数基を並べたり、ある場所だけに集中して配置しているような箇所は見受けられない。

この陥し穴状遺構については、個々の観察表を平面・断面図とともに掲載した。なお溝状のものは、平面・断面形の形状の組み合わせからいくつかのタイプに分類した。分類基準は下に示したとおりであり、その結果は観察表中に記載している。この形態分類等の詳細については、「VI. まとめ」で述べることにする。

なお、第76号陥し穴状遺構からは、2面に使用痕のある磨石が1点出土している(図101、写真図版85)。

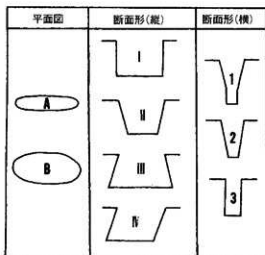
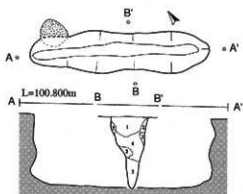
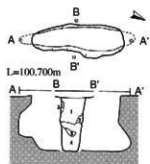
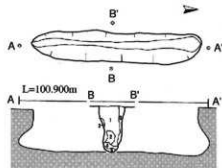
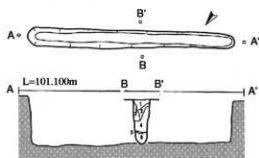


図49 陥し穴状遺構分類図



遺跡名	第1号陥し穴状遺構 (目B0g)
図	50
写真図版	42
標準関係	
形状	平面図 A
状況	断面図 ㊦ ㊧ ㊨
概 算口縁径	22×324
概 算底径	15×308
深さ	78
埋 土	1 09W 2-1 褐色 粘土質シルト ①-④散在 2 09W 3-1 黒褐色 粘土質シルト 3 09W 3-2 黒褐色 粘土質シルト 4 09W 4-1 ①-②間褐色 粘土質シルト ⑤層の埋土 5 09W 2-1 白色 粘土質シルト ⑥層にのみ散在 6 09W 4-4 褐色 粘土質シルト ⑤層の埋土⑦-⑧の間に散在
底 面	西傾は中心、東傾は壁状を呈す
長軸方向	N56° W

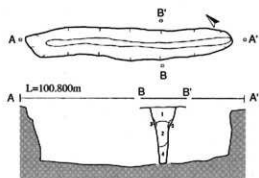
遺跡名	第2号陥し穴状遺構 (目B0j)
図	50
写真図版	42
標準関係	
形状	平面図 A
状況	断面図 ㊦ ㊧ ㊨
概 算口縁径	41×264
概 算底径	10×203
深さ	73
埋 土	1 09W 2-2 暗褐色 粘土質シルト 2 09W 3-2 暗褐色 粘土質シルト 3 09W 3-4 暗褐色 粘土質シルト 4 09W 2-3 褐色 粘土質シルト 5 09W 4-6 褐色 粘土質シルト ⑤層の埋土
底 面	平坦
長軸方向	N1° E

遺跡名	第3号陥し穴状遺構 (目C7g)
図	50
写真図版	42
標準関係	
形状	平面図 A
状況	断面図 ㊦ ㊧ ㊨
概 算口縁径	44×144
概 算底径	32×180
深さ	84
埋 土	1 09W 2-3 暗褐色 粘土質シルト ⑥層にのみ散在 2 09W 2-3 暗褐色 粘土質シルト 3 09W 4-4 褐色 シルト ⑤層の埋土 4 09W 4-6 褐色 シルト ⑤層の埋土⑦-⑧にのみ散在 5 09W 3-3 暗褐色 粘土質シルト ⑤層の埋土
底 面	平坦
長軸方向	N23° E

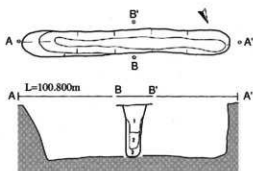
遺跡名	第4号陥し穴状遺構 (目C7j)
図	50
写真図版	42
標準関係	
形状	平面図 A
状況	断面図 ㊦ ㊧ ㊨
概 算口縁径	58×180
概 算底径	20×160
深さ	108
埋 土	1 09W 2-1 白色 粘土質シルト 2 09W 2-3 黒褐色 粘土質シルト ⑤層の埋土 3 09W 4-6 褐色 粘土質シルト ⑤層の埋土 4 09W 2-3 暗褐色 粘土質シルト 5 09W 4-3 ①-②間褐色 粘土質シルト ⑤層の埋土⑦-⑧にのみ散在
底 面	平坦
長軸方向	N56° E

図50 陥し穴状遺構 (1)

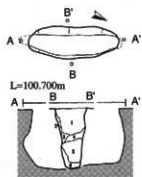
0 1:60 2m



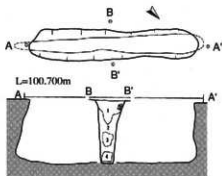
遺構名	第5号陥し穴状遺構 (図C7j-1)		
図	51		
写真図番	42		
遺物附帯			
別	平面図	A	
状	断面図	9-F	目 南口 2
縦	開口幅径	46×322	
横	底面径	9×287	
寸	深さ	80	
埋土	1	10YR 2.1	褐色 土壌
	2	10YR 3.4	暗褐色 粘土質シルト
	3	10YR 4.0	褐色 砂質シルト 遺物附帯
	4	10YR 4.0	褐色 砂質シルト 遺物附帯層下層
底面	中央に向かってわずかに傾斜している		
長軸方向	N42° E		



遺構名	第6号陥し穴状遺構 (図C7j-2)		
図	51		
写真図番	43		
遺物附帯			
別	平面図	A	
状	断面図	9-F	目 南口 1
縦	開口幅径	37×326	
横	底面径	18×268	
寸	深さ	78	
埋土	1	10YR 2.1	褐色 粘土質シルト 褐色土層のわずかに含む
	2	10YR 4.4	褐色 砂質シルト 遺物附帯
	3	10YR 4.0	褐色 砂質シルト 褐色土層をまじらせた含む
底面	南側に向かってわずかに傾斜している		
長軸方向	N65° E		



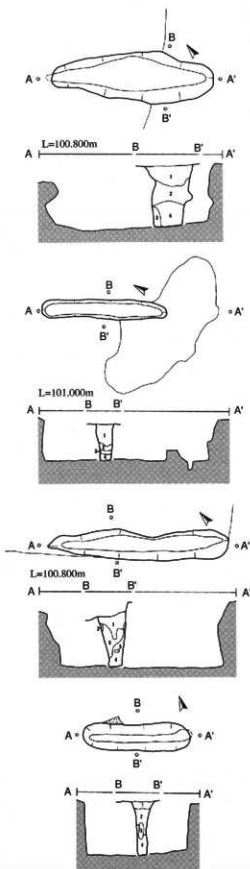
遺構名	第7号陥し穴状遺構 (図C8g-1)		
図	51		
写真図番	43		
遺物附帯			
別	平面図	A	
状	断面図	9-F	目 南口 2
縦	開口幅径	52×141	
横	底面径	33×179	
寸	深さ	95	
埋土	1	10YR 2.9	淡褐色 粘土質シルト 褐色土層をわずかに含む
	2	10YR 4.0	褐色 粘土質シルト 遺物層をプロット
	3	10YR 3.4	暗褐色 粘土質シルト 褐色土層をプロット含む
	4	10YR 4.3	褐色 粘土質シルト 砂質土層をプロット含む
	5	10YR 4.0	褐色 粘土質シルト 遺物の付着土
6	10YR 3.3	暗褐色 砂質シルト 遺物の砂質プロット	
底面	南側部分がわずかに凹んでいる		
長軸方向	N42° E		



遺構名	第8号陥し穴状遺構 (図C8g-2)		
図	51		
写真図番	43		
遺物附帯			
別	平面図	A	
状	断面図	9-F	目 南口 2
縦	開口幅径	46×365	
横	底面径	20×296	
寸	深さ	80	
埋土	1	10YR 2.1	褐色 シルト 褐色土層のプロットをわずかに含む
	2	10YR 4.3	褐色 粘土質シルト 目録記録の付着土
	3	10YR 3.2	淡褐色 粘土質シルト プロットを含む
	4	10YR 4.4	褐色 粘土質シルト プロットを含む
底面	ほぼ平坦		
長軸方向	N48° E		

図51 陥し穴状遺構 (2)

0 1:60 2m



遺構名	第5号船形穴状遺構 (ⅡC 5)		
図	52		
写真図版	43		
遺構関係	第1号住居跡に併せられる		
形状	平面図	A	
形状	断面図	ア	イ
縦	開口幅	84×255	ヨコ 3
横	底前後	55×251	
深さ	深さ	93	
埋土	1	砂質土	粘土質シルト
	2	砂質土	砂質シルト
	3	砂質土	砂質シルト
	4	砂質土	砂質シルト
位置	北面方向に傾斜し下がる		
長軸方向	N55° E		

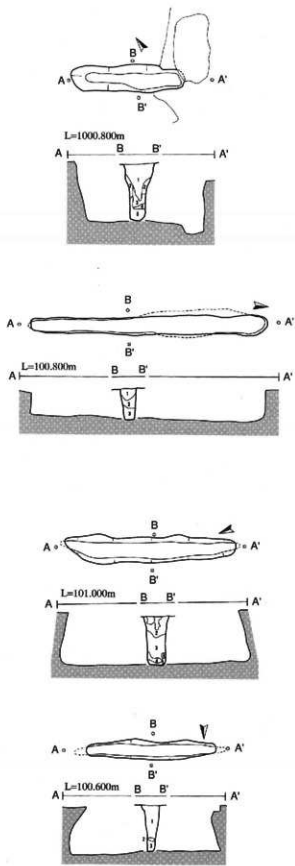
遺構名	第10号船形穴状遺構 (ⅡD 6)		
図	52		
写真図版	43		
遺構関係	南側後土壁に併せられる		
形状	平面図	A	
形状	断面図	ア	イ
縦	開口幅	30×7	ヨコ 3
横	底前後	19×7	
深さ	深さ	67	
埋土	1	砂質土	シルト
	2	砂質土	粘土質シルト
	3	砂質土	砂質シルト
	4	砂質土	砂質シルト
位置	北西方向に傾斜し下がる		
長軸方向	N28° E		

遺構名	第14号船形穴状遺構 (ⅡD 7 a)		
図	52		
写真図版	44		
遺構関係	第6号住居跡に併せられる		
形状	平面図	A	
形状	断面図	ア	イ
縦	開口幅	46×385	ヨコ 3
横	底前後	25×254	
深さ	深さ	86	
埋土	1	砂質土	粘土質シルト
	2	砂質土	砂質シルト
	3	砂質土	砂質シルト
	4	砂質土	砂質シルト
位置	北西方向に傾斜し下がる		
長軸方向	N49° E		

遺構名	第12号船形穴状遺構 (ⅡD 7 b-1)		
図	52		
写真図版	44		
遺構関係	第6号住居跡に併せられる		
形状	平面図	A	
形状	断面図	ア	イ
縦	開口幅	40×68	ヨコ 1
横	底前後	12×140	
深さ	深さ	66	
埋土	1	砂質土	シルト
	2	砂質土	粘土質シルト
	3	砂質土	砂質シルト
	4	砂質土	砂質シルト
位置	西側に内側からわずかに傾斜し下がる		
長軸方向	S07° E		

図52 船形穴状遺構 (1)

0 1:60 2m



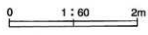
通称名	第14号陥し穴状遺構 (目D7b-2)		
図	53		
写真図様	44		
遺物種別	第4号住居跡に付属する		
期	平家期 A		
状況	形状	並	並
幅	開口部径 44×7		
横	遺構径 25×7		
深さ	86		
埋土	1	砂質土	粘土質シルト
	2	砂質土	粘土質シルト、砂質粘土
	3	砂質土	粘土質シルト
	4	砂質土	粘土質シルト
	5	砂質土	粘土質シルト
断面	形状はほぼ円形		
長軸方向	N55° E		

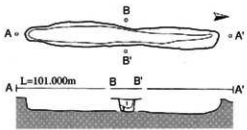
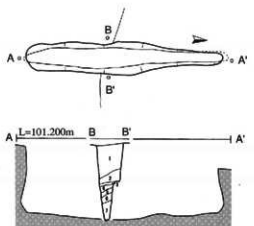
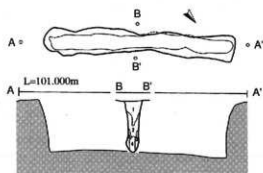
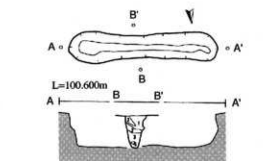
通称名	第14号陥し穴状遺構 (目D7c)		
図	53		
写真図様	44		
遺物種別	第4号住居跡に付属する		
期	平家期 A		
状況	形状	並	並
幅	開口部径 28×370		
横	遺構径 22×370		
深さ	46		
埋土	1	砂質土	粘土質シルト、砂質粘土
	2	砂質土	粘土質シルト、砂質粘土
	3	砂質土	粘土質シルト
断面	形状は不定形		
長軸方向	N12° E		

通称名	第15号陥し穴状遺構 (目D7f)		
図	53		
写真図様	44		
遺物種別	第4号住居跡に付属する		
期	平家期 A		
状況	形状	並	並
幅	開口部径 41×260		
横	遺構径 26×260		
深さ	82		
埋土	1	砂質土	粘土質シルト
	2	砂質土	粘土質シルト、砂質粘土
	3	砂質土	粘土質シルト、砂質粘土
	4	砂質土	粘土質シルト
断面	形状は不定形		
長軸方向	N21° W		

通称名	第16号陥し穴状遺構 (目D8f)		
図	53		
写真図様	45		
遺物種別	第4号住居跡に付属する		
期	平家期 A		
状況	形状	並	並
幅	開口部径 29×214		
横	遺構径 17×230		
深さ	73		
埋土	1	砂質土	粘土質シルト、砂質粘土
	2	砂質土	粘土質シルト、砂質粘土
	3	砂質土	粘土質シルト
断面	ほぼ円形		
長軸方向	N66° W		

図53 陥し穴状遺構 (4)





遺構名	第17号陥し穴状遺構 (目E6g)		
図	54		
写真図版	45		
遺構関係			
別注	平面図	A	
形状	断面図	タテ	ヨコ 2
規模	開口幅径	36×733	
積	底面径	10×206	
深さ	30		
埋土	1	IVR 2 2	赤褐色 粘土質シロト 褐色土のブロックを含む
	2	IVR 2 3	赤褐色 粘土質シロト 赤褐色土
	3	IVR 4 4	褐色 粘土質シロト 褐色土のブロックを含む
底面	ほぼ平坦		
発見方向	NW-E		

遺構名	第18号陥し穴状遺構 (目E7a)		
図	54		
写真図版	45		
遺構関係			
別注	平面図	A	
形状	断面図	タテ	ヨコ 3
規模	開口幅径	32×300	
積	底面径	20×268	
深さ	77		
埋土	1	IVR 2 1	赤色 粘土質シロト
	2	IVR 4 4	褐色 粘土質シロト 赤褐色土
	3	IVR 4 1	紅褐色 赤褐色シロト 下部の赤褐色シロト
	4	IVR 3 1	褐色 粘土質シロト
底面	北西側に傾斜してわずかに傾斜して下がる		
発見方向	NW-E		

遺構名	第19号陥し穴状遺構 (目E7j)		
図	54		
写真図版	45		
遺構関係	塔台等位置関係に密着する		
別注	平面図	A	
形状	断面図	タテ	ヨコ 1
規模	開口幅径	45×307	
積	底面径	32×322	
深さ	107		
埋土	1	IVR 2 3	赤褐色 粘土質シロト 赤褐色土を含む
	2	IVR 2 3	赤褐色 粘土質シロト 赤褐色土のブロックを含む
	3	IVR 4 4	褐色 粘土質シロト 赤褐色土
	4	IVR 2 2	赤褐色 粘土質シロト 褐色土のブロックを含む
	5	IVR 4 2	紅褐色 粘土質シロト 赤褐色土を含む
	6	IVR 4 4	褐色 粘土質シロト 赤褐色土を含む
	7	IVR 4 4	褐色 砂質シロト
底面	東端から中央に向かってわずかに傾斜して下がる		
発見方向	NW-W		

遺構名	第20号陥し穴状遺構 (目E8b)		
図	51		
写真図版	45		
遺構関係			
別注	平面図	A	
形状	断面図	タテ	不明
規模	開口幅径	28×305	
積	底面径	30×289	
深さ	120		
埋土	1	IVR 3 2	赤褐色 粘土質シロト 褐色土のブロックを含む
	2	IVR 3 1	赤褐色 粘土質シロト 褐色土のブロックを含む
底面	平坦		
発見方向	NW-S		

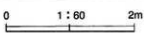
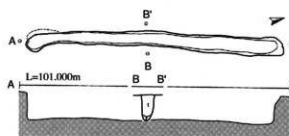
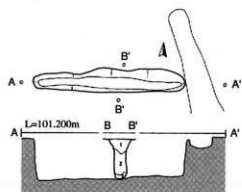


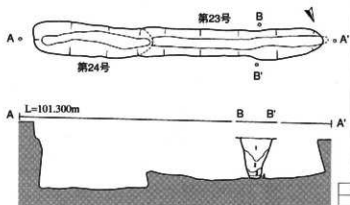
図54 陥し穴状遺構 (5)



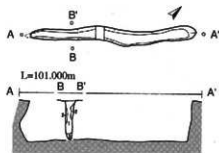
遺構名	第21号陥し穴状遺構 (正E9b)		
図	55		
写真図番	46		
遺構形状			
部	平面図	A	
部	断面図	99	不明
部	開口形状	22×308	
部	底形状	17×300	
部	深さ	36	
埋土	1	HYR. 3-1	灰褐色 粘土質シルト 褐色土の上のフロッグ目
	2	HYR. 4-4	褐色 粘土質シルト 灰褐色土敷きをばらかき
位置	平法		
長軸方向	N46° W		



遺構名	第22号陥し穴状遺構 (正E91)		
図	55		
写真図番	46		
遺構形状	第7号住居跡遺構と接する		
部	平面図	A	
部	断面図	99	1
部	開口形状	26×240	
部	底形状	18×227	
部	深さ	64	
埋土	1	HYR. 2-1	灰色 粘土質シルト 暗褐色土敷きをばらかき
	2	HYR. 2-3	灰褐色 粘土質シルト 暗褐色土の上のフロッグ目
	3	HYR. 4-4	褐色 粘土質シルト 灰褐色土敷きをばらかき
位置	平法		
長軸方向	N50° E		



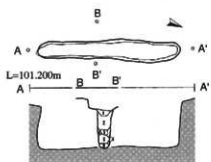
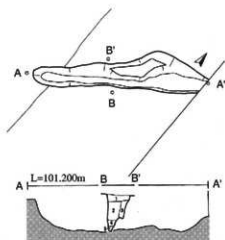
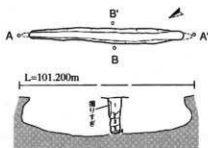
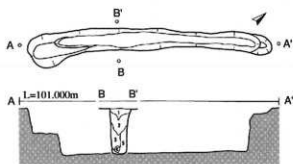
遺構名	第23号陥し穴状遺構 (正E9a)		
図	55		
写真図番	46		
遺構形状	R1号住居跡遺構と接する		
部	平面図	A	
部	断面図	97	
部	開口形状	6×7	
部	底形状	16×7	
部	深さ	76	
埋土	1	HYR. 1-1	灰色 粘土質シルト
	2	HYR. 2-3	灰褐色 粘土質シルト
	3	HYR. 3-4	褐色 粘土質シルト
	4	HYR. 3-1	灰褐色 粘土質シルト
位置	平法		
長軸方向	N47° E		



遺構名	第24号陥し穴状遺構 (正E9a)		
図	55		
写真図番	46		
遺構形状			
部	平面図	A	
部	断面図	99	1
部	開口形状	24×280	
部	底形状	15×250	
部	深さ	63	
埋土	1	HYR. 3-1	灰褐色 粘土質シルト
	2	HYR. 4-4	褐色 粘土質シルト 暗褐色土敷きをばらかき
	3	HYR. 3-4	褐色 粘土質シルト
位置	平法		
長軸方向	N46° W		

図55 陥し穴状遺構 (6)

0 1:60 2m



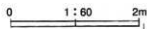
遺構名		第26号陥し穴状遺構 (E 0 0 a)	
図	56		
写真図録	46		
発掘設備			
別表	平面図	A	
別表	断面図	99a	I 390 3
規模	開口部径	34×314	
ce	表面積	18×298	
	深さ	75	
埋土	1	IVR 3 1	埋砂色 粘土質シルト
	2	IVR 4 4	褐色 粘土質シルト 埋砂色より
	3	IVR 4 3	粘土質埋砂色 粘土質シルト
	4	IVR 3 3	埋砂色 粘土質シルト 埋砂色よりやや赤む
	5	IVR 4 3.2	粘土質埋砂色 褐色
位置	平坦		
長軸方向	N29° W		

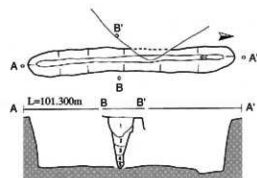
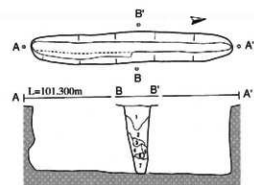
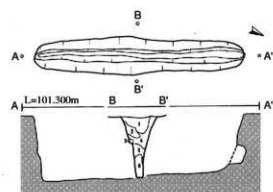
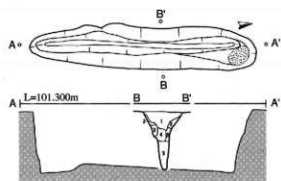
遺構名		第27号陥し穴状遺構 (E 0 0 b)	
図	56		
写真図録	47		
発掘設備			
別表	平面図	A	
別表	断面図	99a	II 390 3
規模	開口部径	23×243	
ce	表面積	13×268	
	深さ	56	
埋土	1	IVR 3 3	埋砂色 粘土質シルト 埋砂色より
	2	IVR 3 2	埋砂色 粘土質シルト 埋砂色よりやや赤む
	3	IVR 4 4	褐色 粘土質シルト 埋砂色よりやや赤む
	4	IVR 4 3	粘土質埋砂色 粘土質シルト 埋砂色より
	5	IVR 2 3	埋砂色 粘土質シルト 埋砂色よりやや赤む
位置	平坦→せり上がる		
長軸方向	N27° W		

遺構名		第28号陥し穴状遺構 (E 0 0 c-1)	
図	56		
写真図録	47		
発掘設備	第7号住居跡に併せられる		
別表	平面図	A	
別表	断面図	99a	II 390 3
規模	開口部径	34×7	
ce	表面積	8×7	
	深さ	82	
埋土	1	IVR 2 1	埋砂色 埋砂色より赤む
	2	IVR 3 1	埋砂色 埋砂色より赤む
	3	IVR 2 3	埋砂色 赤褐色より赤む
	4	IVR 2 2	埋砂色 赤褐色
	位置	成状も定まる	
長軸方向	N34° W		

遺構名		第29号陥し穴状遺構 (E 0 0 c-2)	
図	56		
写真図録	47		
発掘設備	第7号住居跡に併せられる (本館で発掘)		
別表	平面図	A	
別表	断面図	99a	I 390 3
規模	開口部径	30×225	
ce	表面積	20×223	
	深さ	87	
埋土	1	IVR 2 3	埋砂色 粘土質シルト 埋砂色より赤む
	2	IVR 3 3	埋砂色 粘土質シルト 埋砂色より赤む
	3	IVR 2 1	埋砂色 粘土質シルト 埋砂色より赤む
	4	IVR 2 4	埋砂色 粘土質シルト 赤褐色より赤む
	5	IVR 2 3	埋砂色 粘土質シルト 赤褐色より赤む
	6	IVR 3 4	埋砂色 赤褐色
位置	平坦		
長軸方向	N22° W		

図56 陥し穴状遺構 (7)





遺構名		第29号陥し穴状遺構 (目F 1 a)	
図	57		
写真図版	47		
基礎図様			
別	平準図	A	
状況	断面図	少	多
種	開口部径	60×352	
構	総深径	10×290	
寸	深さ	91	
埋土	1	09R 2.1	赤色 粘土質シルト 赤土層面付
	2	09R 2.3	暗褐色 粘土質シルト
	3	09R 4.3	山吹色褐色 粘土質シルト 土層面付
	4	09R 3.3	暗褐色 粘土質シルト 赤土層面付
	5	09R 3.2	暗褐色 粘土質シルト 赤褐色 赤土層面付
断面	遺構付近に遺構があって 高さくなり、そこから北側に傾いて傾斜し下がる		
長軸方向	NW-W		

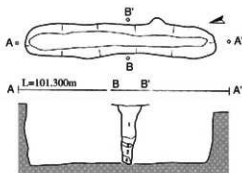
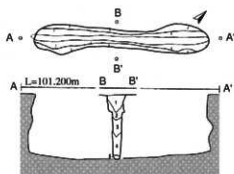
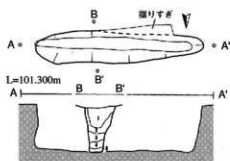
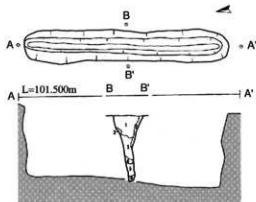
遺構名		第31号陥し穴状遺構 (目F 2 c)	
図	57		
写真図版	47		
基礎図様			
別	平準図	A	
状況	断面図	少	多
種	開口部径	59×320	
構	深径	73×206	
寸	深さ	94	
埋土	1	09R 2.1	赤色 粘土質シルト 赤土層面付
	2	09R 2.3	暗褐色 粘土質シルト 赤褐色赤土層面付
	3	09R 4.3	褐色 粘土質シルト 赤褐色赤土層面付
	4	09R 2.3	暗褐色 粘土質シルト 赤褐色 100gプロット付
	5	09R 3.3	暗褐色 粘土質シルト 赤褐色赤土層面付
	6	09R 3.3	暗褐色 粘土質シルト 赤褐色 100gプロット上の粘土
断面	流況を呈しながら東側に傾いて下がる		
長軸方向	N25° E		

遺構名		第30号陥し穴状遺構 (目F 3 d)	
図	57		
写真図版	48		
基礎図様			
別	平準図	A	
状況	断面図	少	多
種	開口部径	48×314	
構	深径	18×312	
寸	深さ	108	
埋土	1	09R 2.1	赤色 粘土質シルト 赤土層面付
	2	09R 2.3	暗褐色 粘土質シルト 赤褐色赤土層面付
	3	09R 1.7	赤色 粘土質シルト 赤褐色赤土層面付
	4	09R 4.4	褐色 粘土質シルト 赤褐色赤土層面付
	5	09R 4.7	山吹色 暗褐色 粘土質シルト
	6	09R 2.1	赤色 粘土質シルト 100gプロット付、褐色土の100gプロット付
	7	09R 3.4	暗褐色 粘土質シルト 100gプロット付、赤褐色赤土層面付
断面	北側に傾いて傾斜し、下がる		
長軸方向	N7° W		

遺構名		第33号陥し穴状遺構 (目F 4 a)	
図	57		
写真図版	48		
基礎図様	第13号の瓦礫に埋め込まれる		
別	平準図	A	
状況	断面図	少	多
種	開口部径	56×320	
構	深径	8×291	
寸	深さ	78	
埋土	1	09R 2.1	赤色 粘土質シルト 赤土層面付
	2	09R 2.3	暗褐色 粘土質シルト
	3	09R 2.3	暗褐色 粘土質シルト 赤褐色赤土層面付
	4	09R 4.4	褐色 粘土質シルト 赤褐色赤土層面付
	5	09R 2.2	暗褐色 粘土 赤褐色赤土の100gプロット付
断面	流況を呈し北側に一段下がる		
長軸方向	N1° E		

図57 陥し穴状遺構 (8)

0 1 : 60 2m



遺構名		第24号陥し穴状遺構 (目F6e)	
図	58		
写真記録	48		
基礎形状			
別	平面図	A	
材	断面図	タテ	ヨコ
規	開口形状	45×230	30×1
幅	底形状	9×229	
深さ	103		
埋土	1	0YR 2.1	黄褐色 粘土質シルト
	2	0YR 2.2	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構上
	3	0YR 2.3	黄褐色 粘土質シルト
	4	0YR 2.2	黄褐色 粘土質シルト
	5	0YR 1.2	黄褐色 粘土質シルト 埋土層下部
6	0YR 2.4	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の埋土	
底面	中央部から前後へ約1mで掘断し、下がる		
方位	N14° W		

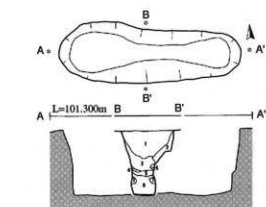
遺構名		第25号陥し穴状遺構 (目F7e)	
図	59		
写真記録	48		
基礎形状			
別	平面図	A	
材	断面図	タテ	ヨコ
規	開口形状	30×260	
幅	底形状	18×246	
深さ	71		
埋土	1	0YR 2.2	黄褐色 粘土質シルト
	2	0YR 2.3	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上
	3	0YR 2.2	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上のわずかな層
	4	0YR 2.4	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上のわずかな層
	5	0YR 3.1	黄褐色 粘土質シルト 埋土層下部
底面	ほぼ平面		
方位	N85° E		

遺構名		第26号陥し穴状遺構 (目F8b)	
図	58		
写真記録	48		
基礎形状			
別	平面図	A	
材	断面図	タテ	ヨコ
規	開口形状	28×273	
幅	底形状	9×269	
深さ	102		
埋土	1	0YR 2.2	黄褐色 粘土質シルト
	2	0YR 2.3	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の埋土上
	3	0YR 2.2	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上層部
	4	0YR 2.4	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上層部
	5	0YR 3.1	黄褐色 粘土質シルト 埋土層下部
底面	中央部がわずかに低くなっている		
方位	N42° W		

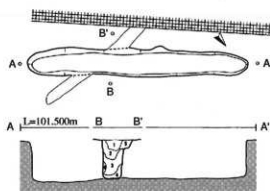
遺構名		第27号陥し穴状遺構 (目F9a)	
図	58		
写真記録	49		
基礎形状			
別	平面図	A	
材	断面図	タテ	ヨコ
規	開口形状	45×298	30×3
幅	底形状	18×279	
深さ	99		
埋土	1	0YR 2.2	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上のわずかな層
	2	0YR 2.4	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上
	3	0YR 3.3	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上
	4	0YR 2.1	黄褐色 粘土質シルト 自然遺構の上のわずかな層
底面	平坦		
方位	N13° W		

図58 陥し穴状遺構 (9)

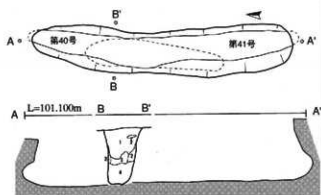
0 1:60 2m



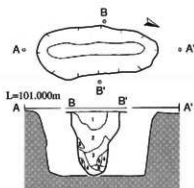
遺構名	第39号陥し穴状遺構 (注F B b)				
図	39				
写真図数	40				
遺構関係					
形状	平面図				
状況	ナブ	Ⅱ	Ⅲ 1		
規模	開口形状	84×253			
	底形状	25×249			
cm	深さ	800			
遺土	1	IVY 2 2	赤褐色	シルト	石灰土を含む
	2	IVY 2 4	暗褐色	粘土質シルト	黒褐色腐葉土
	3	IVY 2 3	赤褐色	粘土質シルト	黒褐色腐葉土
	4	IVY 2 1	赤褐色	粘土質シルト	黒褐色腐葉土
	5	IVY 2 3	暗褐色	粘土質シルト	黒褐色腐葉土
	6	IVY 2 2	赤褐色	粘土質シルト	黒褐色腐葉土
遺層	平層				
長短方向	NS4° E				



遺構名	第40号陥し穴状遺構 (注A 6 g)				
図	39				
写真図数	40				
遺構関係					
形状	平面図				
状況	ナブ	Ⅱ	Ⅲ 3		
規模	開口形状	45×344			
	底形状	34×334			
cm	深さ	42			
遺土	1	IVY 2 2	赤褐色	シルト	陥し穴と埋り方1層の遺土
	2	IVY 2 3	暗褐色	シルト	遺構の周囲のフロッタを含む
	3	IVY 4 4	褐色	粘土質シルト	黒褐色腐葉土
	4	IVY 3 3	暗褐色	砂	埋層と骨子の中層の遺土
	5	IVY 4 4	可成暗褐色	シルト	黒褐色腐葉土
遺層	平層				
長短方向	NS1° E				



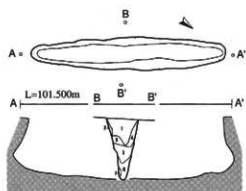
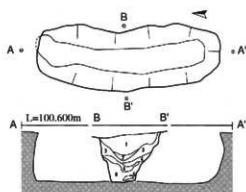
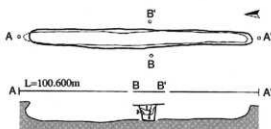
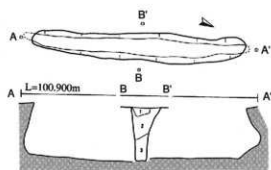
遺構名	第41号陥し穴状遺構 (遺構11-1-2)				
図	39				
写真図数	40				
遺構関係	2号の遺構とつながる。長短方向が必ず平層に平行している。				
形状	平面図				
状況	ナブ	Ⅱ	Ⅲ 3		
規模	開口形状	67×407			
	底形状	40×423			
cm	深さ	79			
遺土	1	IVY 2 2	赤褐色	粘土質シルト	遺構周囲のフロッタを含む
	2	IVY 3 4	褐色	粘土質シルト	黒褐色腐葉土
	3	IVY 3 3	暗褐色	粘土質シルト	遺構周囲のフロッタを含む
	4	IVY 3 3	暗褐色	砂	埋層と骨子の中層の遺土
遺層	平層				
長短方向	NS1° E				



遺構名	第42号陥し穴状遺構 (遺構11-1-2)				
図	39				
写真図数	40				
遺構関係					
形状	平面図				
状況	ナブ	Ⅱ	Ⅲ 1		
規模	開口形状	75×186			
	底形状	20×150			
cm	深さ	180			
遺土	1	IVY 3 4	暗褐色	シルト	陥し穴を充填した遺土
	2	IVY 3 1	褐色	粘土質シルト	陥し穴のフロッタを含む
	3	IVY 3 2	赤褐色	粘土質シルト	遺構周囲のフロッタを含む
	4	IVY 4 4	褐色	粘土質シルト	遺構周囲のフロッタを含む
	5	IVY 2 2	暗褐色	粘土質シルト	遺構周囲のフロッタを含む
	6	IVY 2 2	暗褐色	粘土質シルト	遺構周囲のフロッタを含む
	7	IVY 4 4	褐色	砂	遺構下層の骨子の中層のフロッタ
遺層	平層				
長短方向	NS1° E				

図59 陥し穴状遺構 (10)

0 1:60 2m



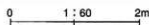
遺構名		第44号陥し穴状遺構 (目録 1)	
図	40		
写真図版	50		
遺構図版			
別紙	平面図	A	
別紙	断面図	9-P	目録 1
規模	開口長さ	43×315	
規模	遺跡径	25×255	
DB	深さ	84	
埋土	1	HVX 4-4	黄褐色 シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
	2	HVX 3-2	灰白色 シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
	3	HVX 3-3	灰白色 粘土質シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
底面	埋藏から中央に向かってわずかに下がる		
長軸方向	N25° E		

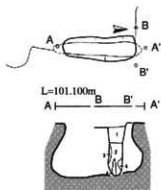
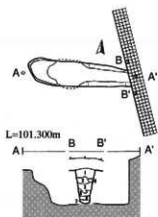
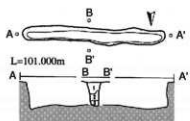
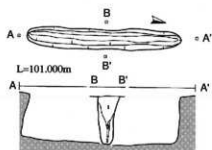
遺構名		第44号陥し穴状遺構 (目録 2)	
図	40		
写真図版	50		
遺構図版			
別紙	平面図	A	
別紙	断面図	9-P	不明 目録 不明
規模	開口長さ	20×350	
規模	遺跡径	20×351	
DB	深さ	124	
埋土	1	HVX 2-2	黄褐色 粘土質シルト
	2	HVX 4-4	灰色 粘土質シルト
	3	HVX 2-4	黄褐色 砂状シルト 砂を含む
	4	HVX 2-3	黄褐色 砂状シルト
底面	ほぼ平直		
長軸方向	N1° W		

遺構名		第45号陥し穴状遺構 (目録 2)	
図	40		
写真図版	50		
遺構図版			
別紙	平面図	D	
別紙	断面図	9-P	I 目録 2
規模	開口長さ	95×264	
規模	遺跡径	39×266	
DB	深さ	79	
埋土	1	HVX 2-2	黄褐色 シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
	2	HVX 2-3	黄褐色 粘土質シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
	3	HVX 3-2	黄褐色 粘土質シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
	4	HVX 3-3	黄褐色 粘土質シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
	5	HVX 3-4	黄褐色 粘土質シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
	6	HVX 3-4	黄褐色 粘土質シルト 土層の最底の小ブロッコ状心
底面	平直		
長軸方向	N1° E		

遺構名		第46号陥し穴状遺構 (目録 4)	
図	40		
写真図版	50		
遺構図版			
別紙	平面図	A	
別紙	断面図	9-P	目録 2
規模	開口長さ	48×307	
規模	遺跡径	25×295	
DB	深さ	107	
埋土	1	HVX 3-3	黄褐色 シルト 基本層心
	2	HVX 3-3	黄褐色 粘土質シルト 遺構 (層心) まで
	3	HVX 4-3	粘土質シルト 粘土質シルト
	4	HVX 4-4	粘土質シルト 粘土質シルト
	5	HVX 3-3	黄褐色 粘土質シルト 遺構 (層心) まで
	6	HVX 2-2	黄褐色 粘土質シルト 遺構 (層心) まで
	7	HVX 3-4	黄褐色 粘土質シルト 遺構 (層心) まで
底面	埋藏から中央に向かってわずかに下がる		
長軸方向	N30° E		

図60 陥し穴状遺構 (11)





遺構名	第47号掘し穴状遺構 (目C1a)		
図	61		
写真図版	50		
遺構種別	基礎跡		
形状	平面図 A		
部法	平面図	A	
材	断面図	タテ 2	ヨコ 2
幅	開口形状	30×239	
横	基礎径	9×251	
縦	深さ	72	
埋土	1	10YR 3 3	暗褐色 粘土質シルト
	2	10YR 3 4	暗褐色 粘土質シルト
	3	10YR 4 4	褐色 粘土質シルト
	4	10YR 4 4	褐色 粘土質シルト
断面	中央に向かって傾斜し下がる		
長軸方向	N10° E		

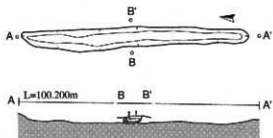
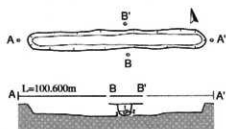
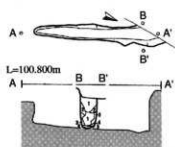
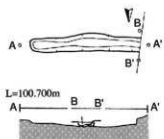
遺構名	第48号掘し穴状遺構 (目C1b)		
図	61		
写真図版	51		
遺構種別	基礎跡		
形状	平面図 A		
部法	断面図	タテ 不明	ヨコ 不明
幅	開口形状	21×222	
横	基礎径	13×210	
縦	深さ	37	
埋土	1	10YR 2 3	黄褐色 粘土質シルト
	2	10YR 4 4	褐色 粘土質シルト
	3	10YR 5 2	灰褐色 粘土質シルト
断面	西端へわずかに傾斜し下がる		
長軸方向	N84° E		

遺構名	第49号掘し穴状遺構 (目C1c)		
図	61		
写真図版	51		
遺構種別	基礎跡		
形状	平面図 A		
部法	断面図	タテ 2	ヨコ 2
幅	開口形状	28×?	
横	基礎径	16×?	
縦	深さ	55	
埋土	1	10YR 1 3	濃褐色 粘土質シルト
	2	10YR 3 4	暗褐色 粘土質シルト
	3	10YR 3 3	暗褐色 粘土質シルト
	4	10YR 3 3	暗褐色 粘土質シルト
	5	10YR 4 3	褐色 粘土質シルト
	6	10YR 1 3	濃褐色 粘土質シルト
	7	10YR 3 3	暗褐色 粘土質シルト
断面	ほぼ水平		
長軸方向	EW		

遺構名	第50号掘し穴状遺構 (目C9a)		
図	61		
写真図版	51		
遺構種別	第15号往期跡に付随する		
形状	平面図 A		
部法	断面図	タテ 2	ヨコ 2
幅	開口形状	38×114	
横	基礎径	20×138	
縦	深さ	77	
埋土	1	10YR 2 3	黄褐色 粘土質シルト
	2	10YR 3 3	暗褐色 粘土質シルト
	3	10YR 4 3	褐色 粘土質シルト
	4	10YR 3 3	暗褐色 粘土質シルト
断面	わずかに傾斜している		
長軸方向	NS		

0 1:60 2m

図61 掘し穴状遺構 (12)



遺構名		第61号陥し穴状遺構 (目D9a)	
図	62		
写真図版	51		
遺構関係	西側溝渠		
形状	平面図	99	90
規模	開口部径	29×7	
構造	底径径	13×7	
材質	層名	(10)	
埋土	1	01R 3 2	砂礫土 シルト 粘土混入
	2	01R 4 4	礫土 粘土混入 シルト 砂色土(シルト)混入
	3		
遺基	18号平屋		
長軸方向	N85° E		

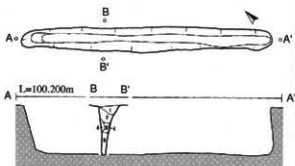
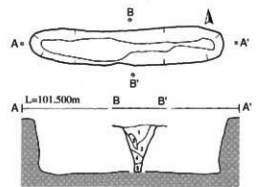
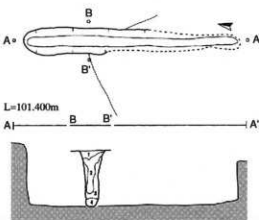
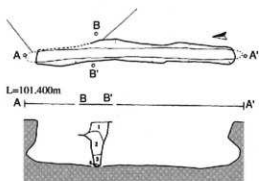
遺構名		第62号陥し穴状遺構 (目D9b)	
図	63		
写真図版	51		
遺構関係	北側溝渠		
形状	平面図	[A]	
規模	開口部径	99 (1)	90 (2)
構造	底径径	24×7	
材質	層名	17×7	
材質	層名	63	
埋土	1	01R 3 3	砂礫土 粘土混入 シルト 砂色土(粘土)混入
	2	01R 3 2	砂礫土 粘土混入 シルト 砂色土(シルト)混入 炭酸カルシウム混入
	3	01R 3 3	砂礫土 粘土混入 シルト 砂色土(粘土)混入
4	01R 4 4	礫土 粘土混入 シルト 砂色土(シルト)混入	
5	01R 3 2	砂礫土 粘土混入 シルト 砂色土(粘土)混入	
遺基	わずかに残存する		
長軸方向	N27° W		

遺構名		第63号陥し穴状遺構 (目D9a)	
図	62		
写真図版	55		
遺構関係			
形状	平面図	(A)	
規模	開口部径	99	90
構造	開口部径	29×29	
材質	層名	17×26	
材質	層名	(10)	
埋土	1	01R 3 1	砂礫土 粘土混入 シルト 砂色土(粘土)混入
	2	01R 3 1	砂礫土 粘土混入 シルト 砂色土(粘土)混入
	3	01R 3 2	砂礫土 粘土混入 シルト 砂色土(粘土)混入
遺基	わずかに残存する		
長軸方向	N85° W		

遺構名		第64号陥し穴状遺構 (目D9b)	
図	62		
写真図版	52		
遺構関係			
形状	平面図		
規模	開口部径	99	90
構造	開口部径	31×36	
構造	底径径	13×33	
材質	層名	(11)	
埋土	1	01R 4 3	粘土混入 シルト 砂色土(シルト)混入
	2	01R 3 2	砂礫土 粘土混入 シルト 砂色土(粘土)混入
	3	01R 4 4	礫土 粘土混入 シルト 砂色土(シルト)混入
遺基	わずかに残存する		
長軸方向	N5° W		

図62 陥し穴状遺構 (13)

0 1:60 2m



遺構名	第66号掘し穴状遺構 (目 66 a-1)		
図	63		
写真図版	52		
遺構図説	第19号台図説に添われる		
部 位	平面図	A	
剖 視	断面図	オア 目	ウウ 3
規 模	開口部径	32×310	
	底面径	15×336	
材 質	深さ	72	
埋 土	1	1978.2.3	埋砂土 シルト
	2	1978.2.1	褐色 粘土質シルト 厚約5cmのブロッコ状物
	3	1978.2.3	埋砂土 粘土質シルト 厚約5cmのブロッコ状物
	4	1978.2.3	埋砂土 粘土質シルト 厚約5cmのブロッコ状物
底 面	平削		
長軸方向	N1° E		

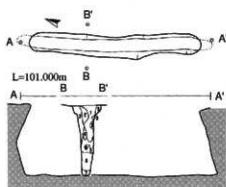
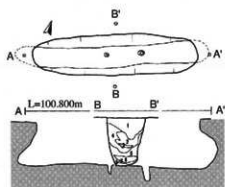
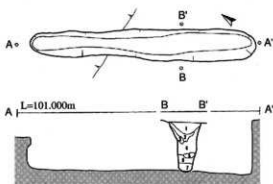
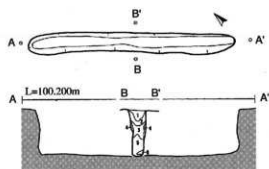
遺構名	第59号掘し穴状遺構 (目 59 a-2)		
図	63		
写真図版	52		
遺構図説	第19号台図説に添われる		
部 位	平面図	A	
剖 視	断面図	オア 目	ウウ 3
規 模	開口部径	40×340	
	底面径	15×332	
材 質	深さ	90	
埋 土	1	1978.2.3	埋砂土 シルト
	2	1978.2.1	褐色 粘土質シルト 厚約5cmのブロッコ状物
	3	1978.2.3	埋砂土 粘土質シルト マヨナカ状に厚さ約5cmの布状物
	4	1978.2.6	埋砂土 粘土質シルト 厚約5cm
底 面	平削		
長軸方向	N14° W		

遺構名	第57号掘し穴状遺構 (目 57 f)		
図	63		
写真図版	52		
遺構図説			
部 位	平面図	B	
剖 視	断面図	オア 目	ウウ 1
規 模	開口部径	55×303	
	底面径	11×271	
材 質	深さ	89	
埋 土	1	1978.2.3	埋砂土 粘土質シルト
	2	1978.2.1	褐色 粘土質シルト ブロッコ状
	3	1978.2.3	埋砂土 粘土質シルト 4粒褐色土のブロッコ状物
	4	1978.2.3	埋砂土 粘土質シルト 厚約5cmの布状物
	5	1978.2.1	埋砂土 粘土質シルト 厚約5cmの布状物
底 面	平削		
長軸方向	NW		

遺構名	第67号掘し穴状遺構 (目 67 g)		
図	63		
写真図版	53		
遺構図説			
部 位	平面図	A	
剖 視	断面図	オア 目	ウウ 1
規 模	開口部径	40×305	
	底面径	14×360	
材 質	深さ	80	
埋 土	1	1978.2.1	褐色 粘土質シルト
	2	1978.2.2	埋砂土 粘土質シルト
	3	1978.2.3	埋砂土 粘土質シルト
	4	1978.4.6	褐色 粘土質シルト 厚約5cm
	5	1978.2.3	埋砂土 粘土質シルト
底 面	平削		
長軸方向	N44° W		

0 1:60 2m

図63 陥し穴状遺構 (14)



遺構名		第80号竈し穴状遺構 (正 F 3 g)	
図	64		
写真図版	53		
基礎図番			
形状	平面図	△	
規模	前後長	99	B
	開口幅	29×320	※コ 1
構造	基礎幅	17×300	
cm	深さ	71	
埋土	1	MYR 2 1	灰白 粘土 粘土質シロト
	2	MYR 2 2	灰褐色 粘土質シロト
	3	MYR 2 3	黄褐色 粘土質シロト
	4	MYR 4 0	褐色 粘土質シロト 焼物遺跡土
	5	MYR 2 3	黄褐色 粘土質シロト
	6	MYR 4 0	褐色 粘土質シロト 灰褐色にシロツブテ入る
底面	平坦		
長軸方向	N47° W		

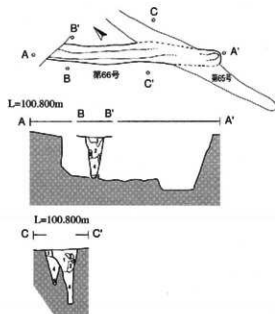
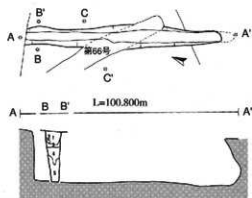
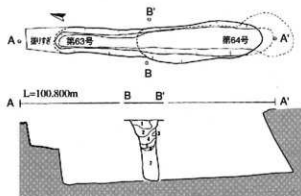
遺構名		第80号竈し穴状遺構 (正 C 9 f)	
図	64		
写真図版	53		
基礎図番			
形状	平面図	△	
規模	前後長	99	I
	開口幅	50×354	※コ 1
構造	基礎幅	33×343	
cm	深さ	78	
埋土	1	MYR 2 1	白濁 粘土質シロト
	2	MYR 2 3	黄褐色 粘土質シロト
	3	MYR 2 3	黄褐色 粘土質シロト 粘土質赤土含む
	4	MYR 2 2	黄褐色 粘土質シロト 粘土質赤土質シロト含む
	5	MYR 2 2	黄褐色 粘土質シロト
	6	JYR 4 0	褐色 粘土質シロト 灰褐色土にシロツブテ含む
	7	JYR 3 4	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土との混じり
底面	南北側に若干傾斜あり		
長軸方向	N34° W		

遺構名		第81号竈し穴状遺構 (正 C 9 i)	
図	64		
写真図版	53		
基礎図番			
形状	平面図	△	
規模	前後長	99	B
	開口幅	64×256	※コ 2
構造	基礎幅	36×302	
cm	深さ	76	
埋土	1	MYR 2 3	灰褐色 粘土質シロト 灰褐色土質赤土含む
	2	MYR 2 3	黄褐色 粘土質シロト 粘土質赤土含む
	3	MYR 2 3	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土にシロツブテ含む
	4	MYR 2 3	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土にシロツブテ含む
	5	MYR 4 0	褐色 砂質赤褐色土質
	6	MYR 2 2	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土にシロツブテ含む
底面	東西方向に開口あり (深さ16~22cm)		
長軸方向	N73° E		

遺構名		第82号竈し穴状遺構 (正 C 9 j)	
図	64		
写真図版	53		
基礎図番			
形状	平面図	△	
規模	前後長	99	B
	開口幅	32×266	※コ 1
構造	基礎幅	20×305	
cm	深さ	112	
埋土	1	MYR 3 2	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土質赤土含む
	2	MYR 1 3	黄褐色 粘土質シロト
	3	MYR 1 3	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土質赤土含む
	4	MYR 1 3	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土質赤土含む
	5	MYR 1 3	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土質赤土含む
	6	MYR 4 3	褐色 粘土質シロト 灰褐色土質赤土含む
	7	MYR 1 4	黄褐色 粘土質シロト 灰褐色土質赤土含む
底面	平坦		
長軸方向	N22° W		

図84 竈し穴状遺構 (15)

0 1:60 2m



遺構名	第63号陥し穴状遺構 (目C 0 g-1)		
図	65		
写真図版	54		
遺構関係	2基の遺構とつながるが、詳細は不明。		
計測	平面図	A	
状況	断面図	9×7	30×2
規模	開口幅	42×7	
構造	底面	18×7	
cm	深さ	97	
埋土	1	1978.2.2	泥炭土 粘土質シルト
	2	1978.2.7	粘砂土 粘土質シルト 褐色土層状
	3	1978.4.1	褐色 粘土質シルト 褐色土層状
	4	1978.2.2	泥炭土 粘土質シルト 褐色土層状
	5	1978.4.1	褐色 粘土質シルト 褐色土層状
	6	1978.2.7	粘砂土 粘土質シルト
	7	1978.4.1	褐色 粘土質シルト
断面	図の中心に埋設する		
長軸方向	N12° W		

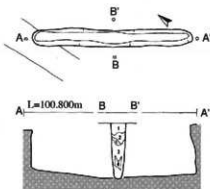
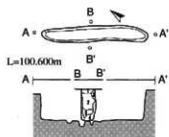
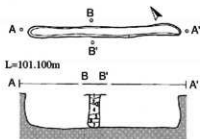
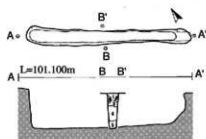
遺構名	第64号陥し穴状遺構 (目C 0 g-2)		
図	65		
写真図版	54		
遺構関係	第63号陥し穴状遺構と重複。細目不明。		
計測	平面図	B	
状況	断面図	9×7	30×1
規模	開口幅	60×7	
構造	底面	38~62×7	
cm	深さ	106	
埋土			
断面	48°傾斜		
長軸方向	N15° W		

遺構名	第65号陥し穴状遺構 (目C 0 i-2)		
図	65		
写真図版	54		
遺構関係	北側遺構、第66号陥し穴状遺構とつながる。		
計測	平面図	A	
状況	断面図	9×7	30×2
規模	開口幅	29×7	
構造	底面	12~18×7	
cm	深さ	54	
埋土	1	1978.2.2	泥炭土 粘土質シルト 褐色土層状
	2	1978.4.1	褐色 粘土質シルト 褐色土層状
	3	1978.2.7	粘砂土 粘土質シルト 褐色土層状
	4	1978.2.7	粘砂土 粘土質シルト 褐色土層状
	5	1978.4.1	褐色 粘土質シルト 褐色土層状
断面	南側に埋設する		
長軸方向	N18° W		

遺構名	第66号陥し穴状遺構 (目C 0 i-1)		
図	65		
写真図版	54		
遺構関係	北側遺構、第65号陥し穴状遺構とつながる。		
計測	平面図	A	
状況	断面図	9×7	30×1
規模	開口幅	28×7	
構造	底面	12×7	
cm	深さ	54	
埋土	1	1978.2.3	褐色土 粘土質シルト 褐色土層状
	2	1978.3.1	泥炭土 粘土質シルト 褐色土層状
	3	1978.4.1	褐色 粘土質シルト 褐色土層状
	4	1978.3.3	粘砂土 粘土質シルト 褐色土層状
	5	1978.2.1	泥炭土 粘土質シルト 褐色土層状
断面	洗打つ		
長軸方向	N5° W		

0 1:60 2m

図65 陥し穴状遺構 (16)



通称名		第07号陥し穴状遺構 (E07a)			
図	66				
写真図版	54				
遺構説明					
別状	平面図	点			
形式	断面図	タイプ	Ⅰ		
種	開口部径	30×254			
構	底部径	17×254			
寸	長さ	57			
埋土	1	IVR 2 3	赤褐色	シルト	褐色土粒含む
	2	IVR 4 6	褐色	シルト	粘土混着マッド
	3	IVR 2 3	赤褐色	シルト	粘土混着マッド
	4	IVR 2 2	赤褐色	粘土シルト	褐色土小ブロック含む
	5	IVR 2 2	赤褐色	砂質シルト	粘土混着マッド含む
底面	平坦				
長軸方向	N33° W				

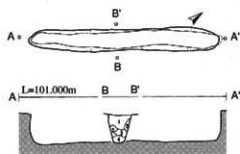
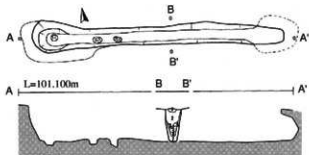
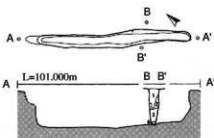
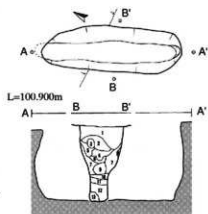
通称名		第08号陥し穴状遺構 (E08a)			
図	66				
写真図版	54				
遺構説明					
別状	平面図	点			
形式	断面図	タイプ	Ⅰ		
種	開口部径	17×290			
構	底部径	13×232			
寸	長さ	52			
埋土	1	IVR 3 3	赤褐色	シルト	褐色土粒含む
	2	IVR 3 3	赤褐色	粘土質シルト	褐色土粒含む
	3	IVR 3 2	赤褐色	粘土質シルト	褐色土粒マッド
	4	IVR 2 3	赤褐色	粘土質シルト	褐色土小ブロック含む
	5	IVR 2 1	赤褐色	粘土質シルト	
	6	IVR 3 2	赤褐色	粘土質シルト	褐色土小ブロック含む
7	IVR 2 2	赤褐色	粘土質シルト	下部に褐色土粒含む	
底面	平坦				
長軸方向	N60° W				

通称名		第09号陥し穴状遺構 (E09a)			
図	66				
写真図版	35				
遺構説明	第29号住居跡に切られる。所定で復旧。				
別状	平面図	点			
形式	断面図	タイプ	Ⅰ		
種	開口部径	25×187			
構	底部径	18×154			
寸	長さ	40			
埋土	1	IVR 2 3	赤褐色	粘土質シルト	褐色土粒含む
	2	IVR 3 4	褐色	粘土質シルト	
	3	IVR 3 2	赤褐色	粘土質シルト	
	4	IVR 4 6	褐色	粘土混着土	
5	IVR 2 3	赤褐色	褐色土ブロック含む		
底面	平坦、礎石あり (長さ3~10cm)				
長軸方向	N36° W				

通称名		第10号陥し穴状遺構 (E10a)		
図	66			
写真図版	35			
遺構説明	遺構形状に切られる。			
別状	平面図	点		
形式	断面図	タイプ	Ⅰ	
種	開口部径	26×248		
構	底部径	18×240		
寸	長さ	88		
埋土	1	IVR 3 3	赤褐色	粘土質シルト
	2	IVR 3 3	褐色	粘土質シルト
	3	IVR 3 4	褐色	粘土質シルト
	4	IVR 2 1	赤褐色	粘土質シルト
底面	わずかに陥没する			
長軸方向	N65° W			

0 1:60 2m

図66 陥し穴状遺構 (17)



遺構名	第71号陥し穴状遺構 (図E 1 f)		
図	67		
写真図録	55		
基礎図録			
測	平面図	A	
状	断面図	9 P	図 3
規	開口部径	23×230	
模	基礎径	14×233	
cm	深さ	31	
埋	1	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
	2	30YR 2-4	暗褐色 粘土質シロ土
	3	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
	4	30YR 2-1	暗褐色 粘土質シロ土
	5	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
	6	30YR 2-4	暗褐色 粘土質シロ土
	7	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
注	1:100 1:100 1:100 1:100 1:100 1:100 1:100		
断面	平面		
基礎方向	N27° W		

遺構名	第72号陥し穴状遺構 (図E 1 g)		
図	67		
写真図録	35		
基礎図録			
測	平面図	A	
状	断面図	9 P	図 3
規	開口部径	23×240	
模	基礎径	14×233	
cm	深さ	35	
埋	1	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
	2	30YR 2-4	暗褐色 粘土質シロ土
	3	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
	4	30YR 2-1	暗褐色 粘土質シロ土
注	1:100 1:100 1:100 1:100		
断面	概中心部斜断面		
基礎方向	N40° E		

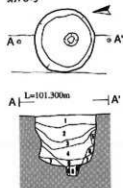
遺構名	第73号陥し穴状遺構 (図E 2 b)		
図	67		
写真図録	55		
基礎図録			
測	平面図	A	
状	断面図	9 P	図 2
規	開口部径	28×52×364	
模	基礎径	17×402	
cm	深さ	31	
埋	1	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
	2	30YR 4-2	暗褐色 粘土質シロ土
	3	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
	4	30YR 4-4	暗褐色 粘土質シロ土
	5	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
	6	30YR 2-3	赤褐色 粘土質シロ土
7	30YR 4-6	暗褐色 粘土質シロ土	
注	1:100 1:100 1:100 1:100 1:100 1:100 1:100		
断面	断面あり (図E 2 f~11cm)		
基礎方向	N34° W		

遺構名	第74号陥し穴状遺構 (図E 2 c)		
図	67		
写真図録	56		
基礎図録			
測	平面図	A	
状	断面図	9 P	図 2
規	開口部径	34×298	
模	基礎径	25×299	
cm	深さ	44	
埋	1	30YR 3-2	赤褐色 粘土質シロ土
	2	30YR 4-6	暗褐色 粘土質シロ土
	3	30YR 3-3	赤褐色 粘土質シロ土
	4	30YR 3-2	赤褐色 粘土質シロ土
注	1:100 1:100 1:100 1:100		
断面	1:100 断面		
基礎方向	N34° E		

0 1:60 2m

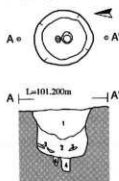
図67 陥し穴状遺構 (18)

第75号



- 1 10YR 2/3 黒褐色 粘土質シルト 褐色土粒を含む
- 2 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト
- 3 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 薄層薄帯小ブロックを含む
- 4 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト 褐色土小ブロックを含む
- 5 10YR 4/6 褐色 粘土質シルト 少量粘土
- 6 10YR 4/4 暗褐色 粘土質シルト 少量粘土
- 7 10YR 4/3 濃い黄褐色 粘土質シルト 褐色土粒を含む
- 8 10YR 4/6 褐色 粘土質シルト 少量粘土
- 9 10YR 3/3 暗褐色 粘土質シルト

第76号



- 1 10YR 3/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色土粒を含む
- 2 10YR 2/3 暗褐色 粘土質シルト 褐色土粒を含む
- 3 10YR 4/5 褐色 粘土質シルト 火山噴出ブロック
- 4 10YR 3/2 黒褐色 砂質シルト 腐穴状土

0 1:50 1m

遺構名		第75号陥し穴状遺構 (目E 8 a)	
図	68		
写真枚数	56		
遺体関係			
形	平面形	円形	
法	掘削形	バケツ形	
開口部径	78 × 83		
底部径	64 × 67		
深さ	68		
備考	陥穴1部あり		

遺構名		第76号陥し穴状遺構 (目E 9 a)	
図	68		
写真枚数	50		
遺体関係			
形	平面形	円形	
法	掘削形	バケツ形	
開口部径	73 × 77		
底部径	56 × 58		
深さ	64		
備考	陥穴2部あり		

図68 陥し穴状遺構 (19)

7. 旧河道跡 (図69・70、写真99a~c)

調査区中央部北寄りのⅡD・ⅢD区に、最大上端幅10m、長さ30m以上、最深部2.8mを測る旧河道が確認された。これは、西側の紫波町教育委員会の調査区から東西方向に50m以上続くもので、東にある岩崎川に向かって広く深くなっている。

今回精査した河道東側であるが、最下層が泥炭化していたことから、現岩崎川との合流点に近い最も深い地点と思われる。この泥炭層からは、全長4.4m、直径70cmを越える根反りを起こしたと思われるコナラ属の大木が出土した。この木の根本からは、縄文時代晩期中葉に属する台付きの鉢が出土しており、泥炭層の形成時期を示すものであるが、それから出土した遺物はこの1点のみである。また、この層からはトチノキの堅果などの植物遺存体が出土した。

これより西側の河道跡の状況は、断面図を作成した地点で深さが1m程度と、西に向かって次第に浅くなっていく。この地点の埋土は、上位は小礫を含む黒褐色の現表土、中位は非ロクロ成形の土師器の坏や甕類を含む黄褐色土粒混じりの黒褐色土・黒色土、下位は泥炭層となっている。中位の古代の遺物を含む層は、本遺跡で検出された住居跡の埋土とよく似ており、またここから出土した遺物の特徴も8世紀代のものである。このことから、この河道跡はほとんどの住居群が存在したその時期まで埋まりきらずに、深さ1m程度の溝状になっていたと考えられる。

遺物 (図101、写真図版84・85)

364は、前述の流木と共に出土した晩期中葉(大洞C2式)の台付鉢である。若干脚部を欠くが、ほぼ完形の状態で出土した。口縁部には刻みが巡り、平行する沈線間には列点が上下2列に施される。胴部は磨消縄文と平行沈線からなる。365・366は非ロクロ成形の外面有段の坏である。365は丸底、366は丸底風の平底である。365の口縁部が外反気味に立ち上がるのに対して366は内湾している。367～371は非ロクロ成形の長胴甕である。368～370は頸部に明瞭な段を有し、368については口縁部内面も段を持つ。これらの器面調整は、胴部調整のハケメとヘラナダが異なったり、ヘラミガキがさらに加えられるか、といった違いがある。372はハケメ調整が明瞭な球胴甕である。373は須恵器坏で口縁部を欠くもの。374・375は須恵器甕の破片である。376は手づくね土器、377・378は丁寧に磨かれた土製紡錘車である。

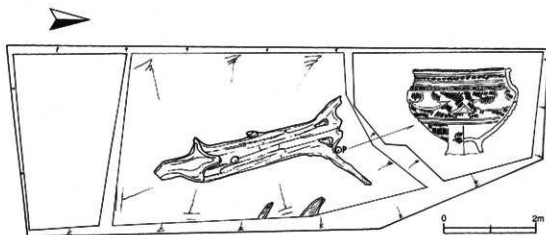


図69 旧河道跡出土流木



第図69・70の位置は図7にある

旧河道跡記号

	(土種)	(しまり)	(傾斜)	(備考)
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	有	やや有り 2~5層の礫を含む
2	10YR 4/6 褐色	粘土質シルト	有	有 黒褐色土との混入
3	10YR 5/2 黒褐色	+	有	有 黒褐色土粒をまばらに含む
4	10YR 2/6 褐色	+	有	有 黒褐色土を全体に含む
5	10YR 2/2 黒褐色	+	有	やや有り 黒褐色土粒を含む
6	10YR 5/6 黒褐色	砂質シルト	有	やや有り 基本二層厚層部まで
7	10YR 2/2 黒褐色	粘土質シルト	有	やや有り まばらに黒褐色土粒を含む
8	10YR 5/6 黒褐色	+	有	有 黒褐色土との混合土
9	10YR 2/1 黒色	+	有	有 古代の礫床で以上の層まで土層部を含む
10	7.5YR 2/2 黄褐色	+	やや有り	有 礫性混含む
11	10YR 2/1 黒色	粘土	有	有 黄褐色の小アロックスを全体に含む(脱鉄層相出)
12	7.5YR 4/4 褐色	粘土質シルト	有	有 礫化して基盤を穿びる

図70 旧河道跡断面図



流木の出土状況

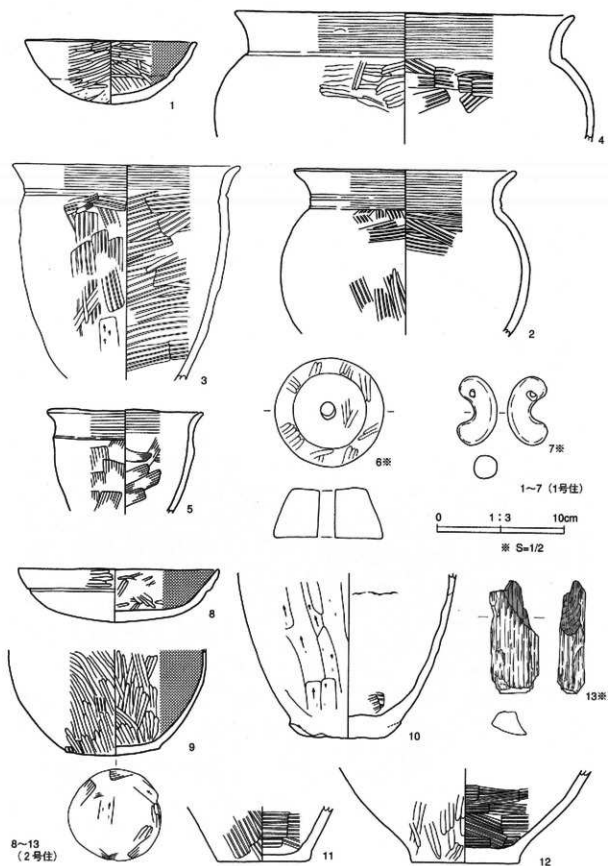


图71 遺構内出土遺物(1)

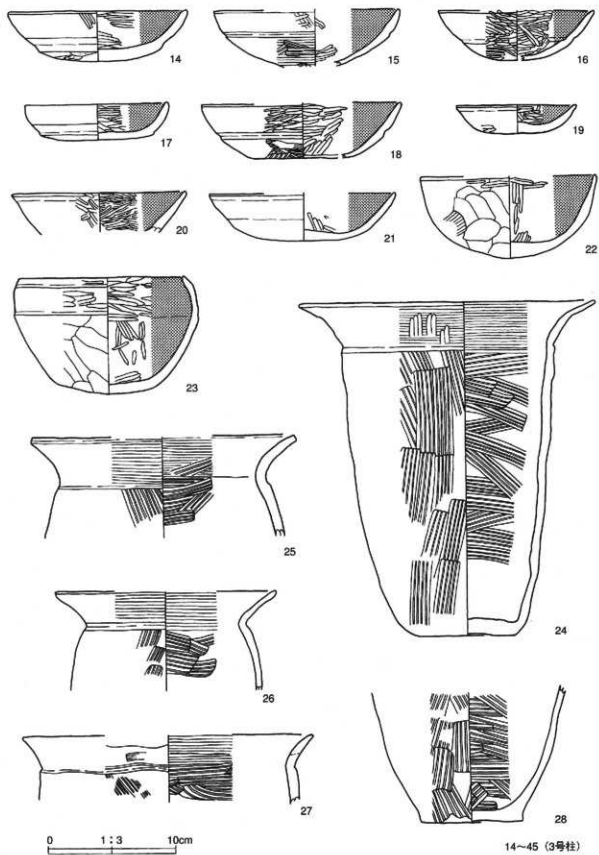


图72 遺構内出土遺物(2)

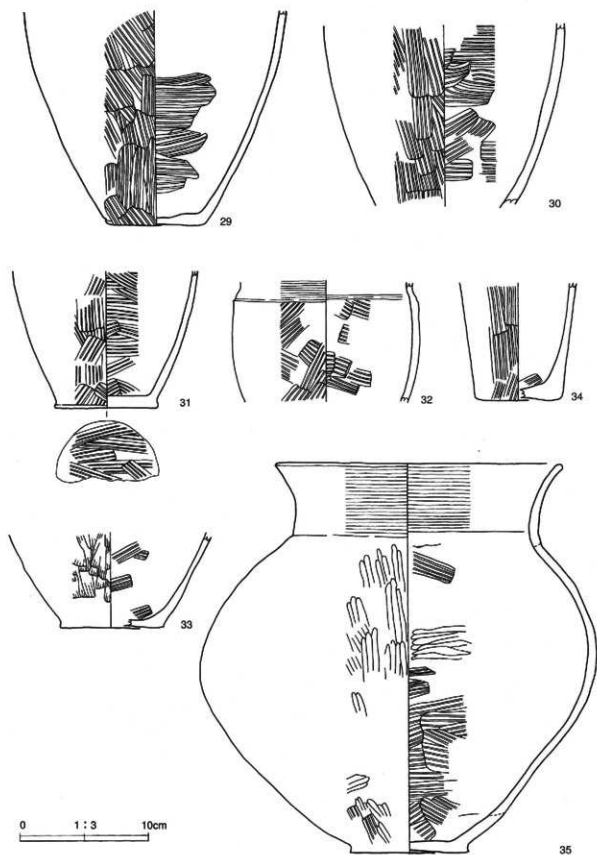
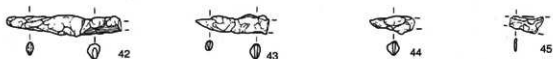
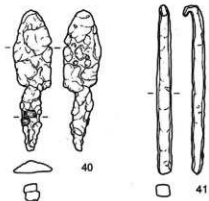
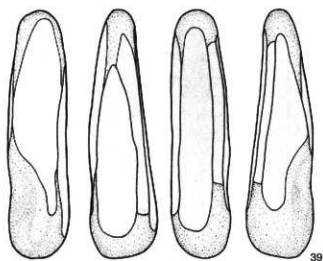
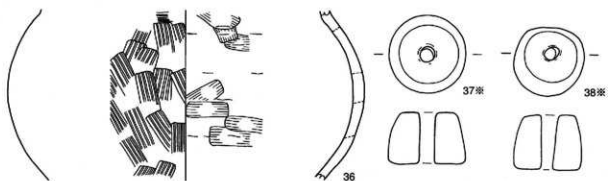
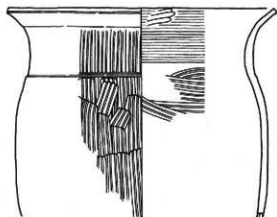


图73 遗柄内出土遗物 (3)



0 1:3 10cm
※ S=1/2

46~62 (4号住)



48

图74 遺構内出土遺物(4)

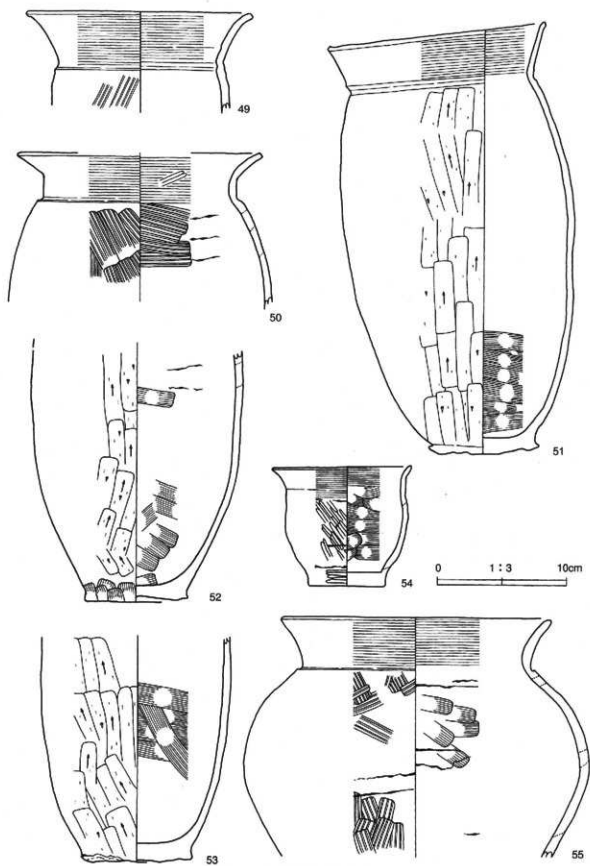


图75 遗構内出土遺物 (5)

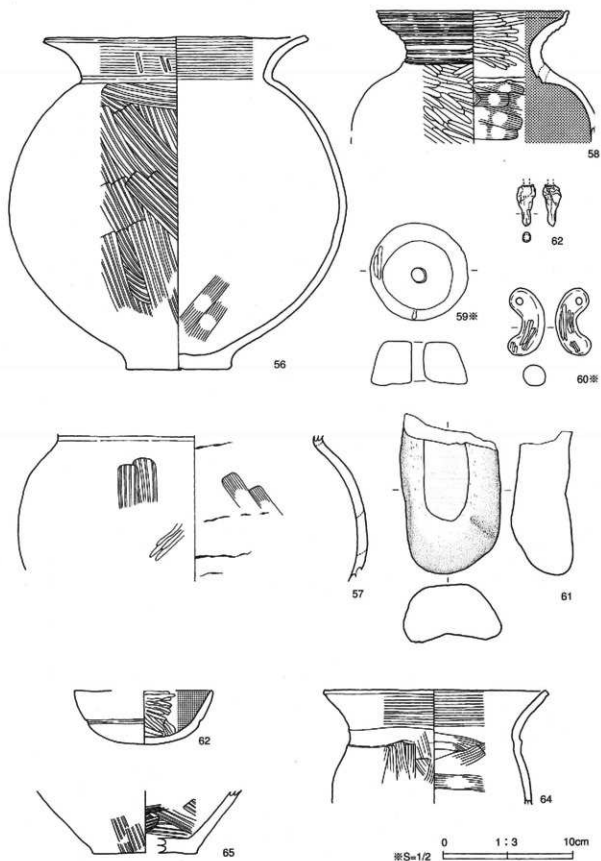


图76 遺構内出土遺物(6)

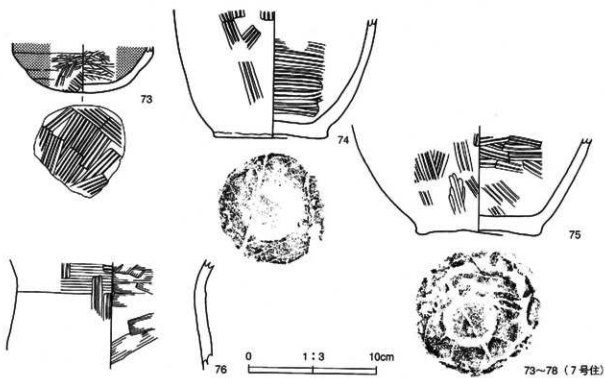
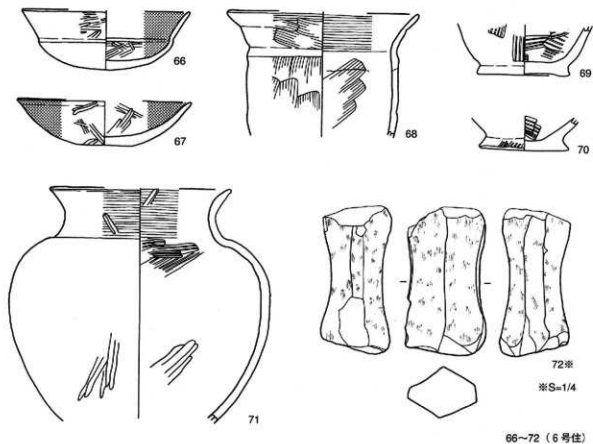
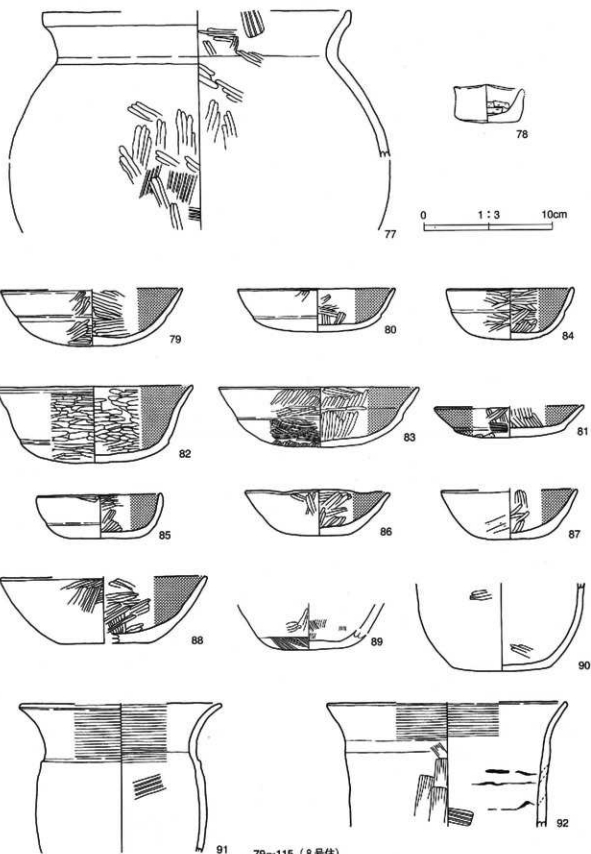


图77 遺構内出土遺物 (7)



79~115 (8号住)

图78 遺構内出土遺物(8)

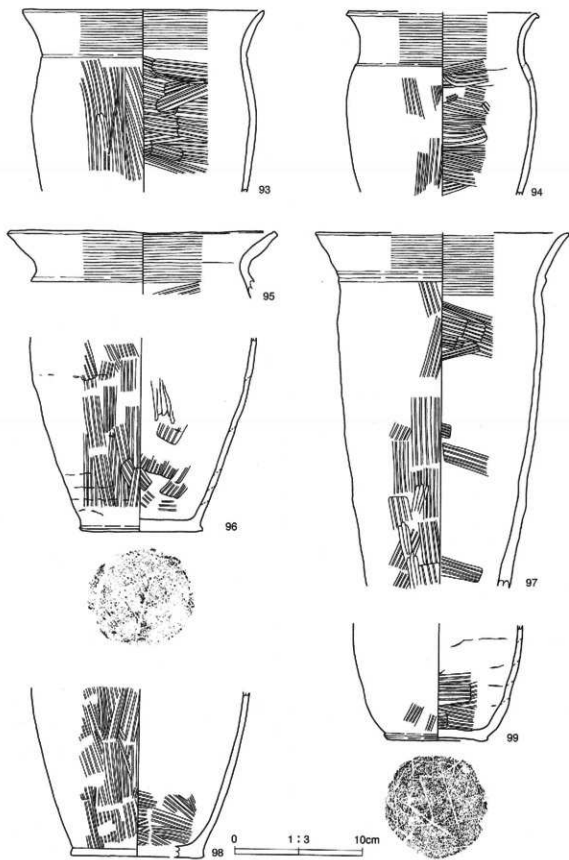


图79 遗構内出土遺物(9)

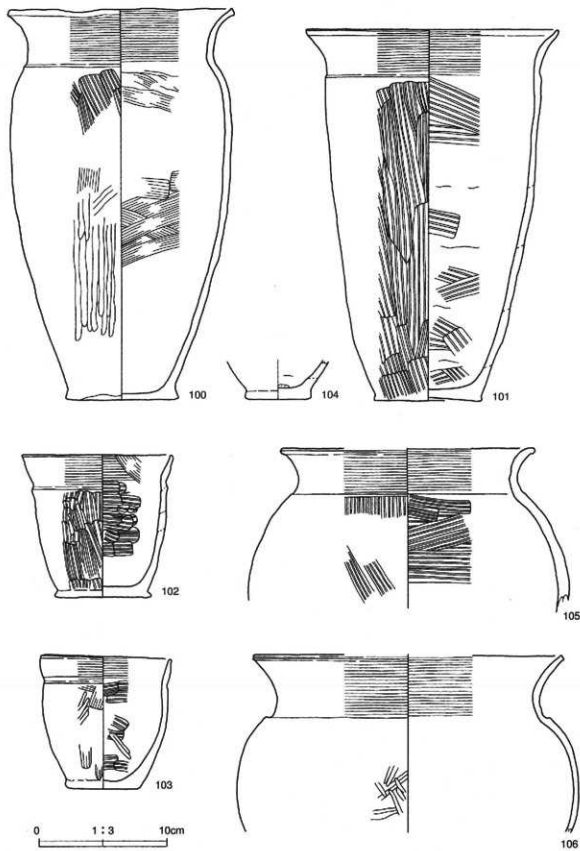


图80 遺構内出土遺物 (10)

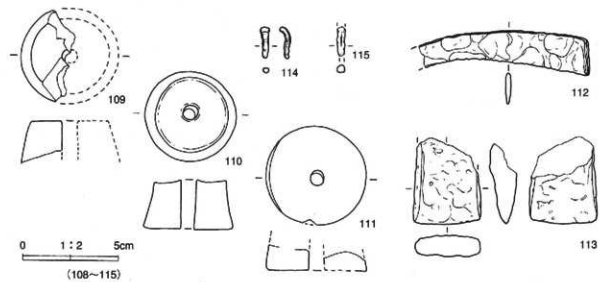
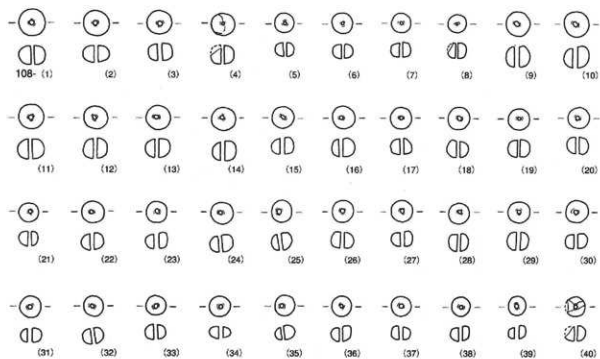


图81 遺構内出土遺物 (11)

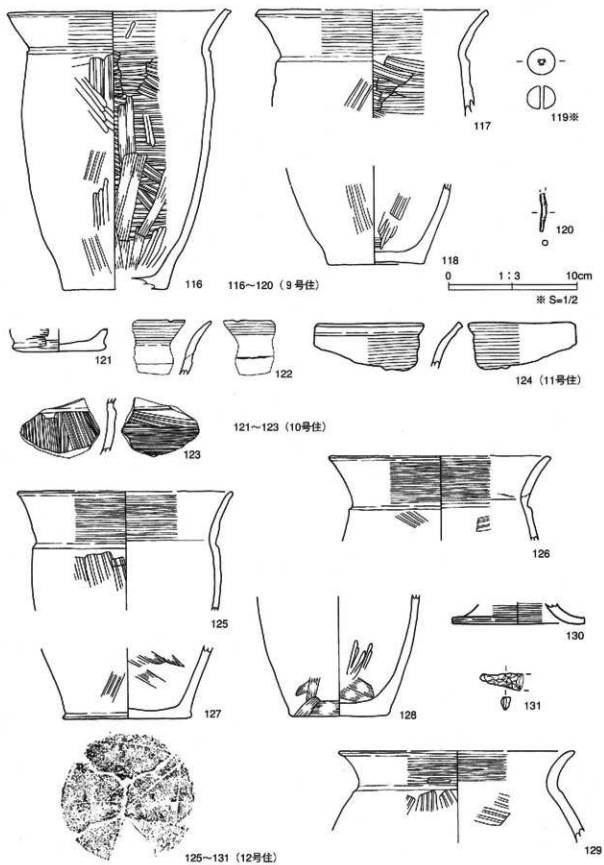


図82 遺構内出土遺物 (12)

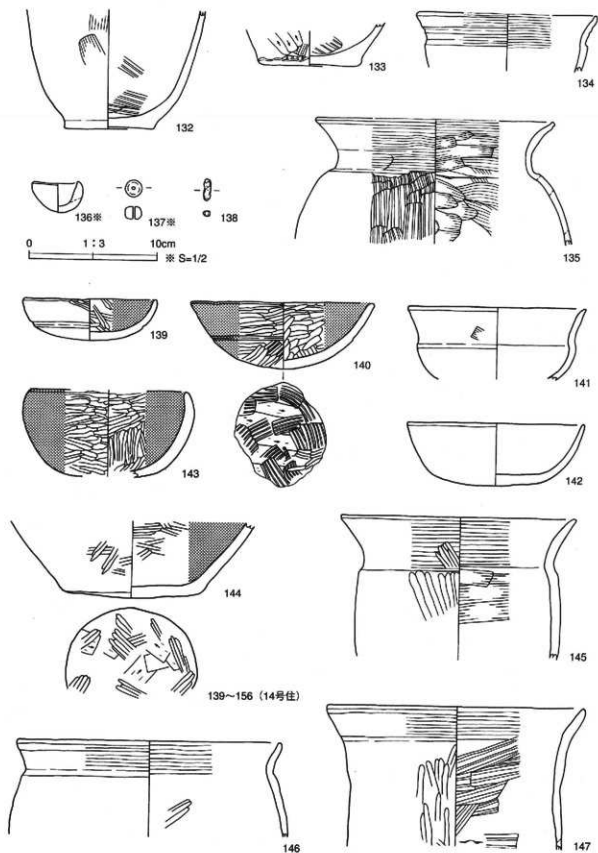


图83 遺構内出土遺物 (13)

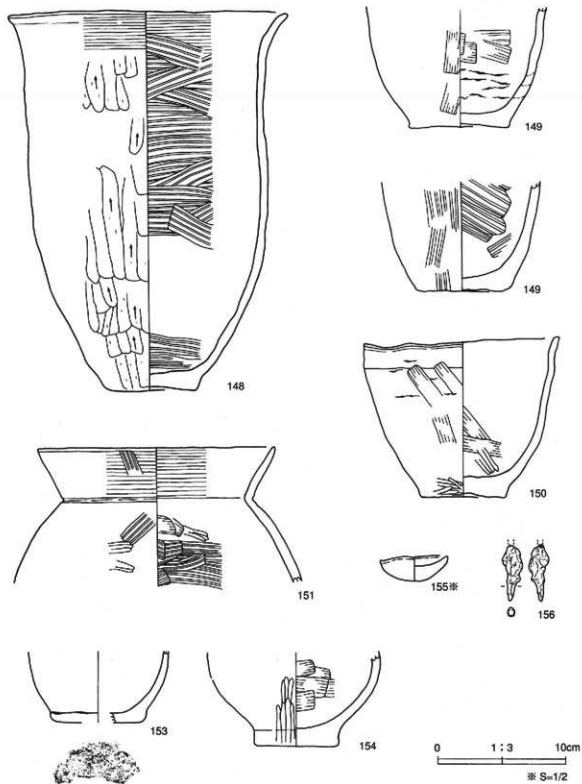
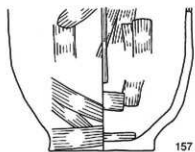
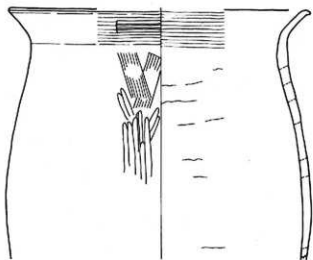


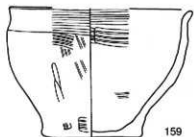
图84 遺構内出土遺物 (14)



157



158



159

157・158 (16号住)



160



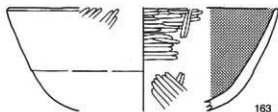
161

159・160 (17号住)

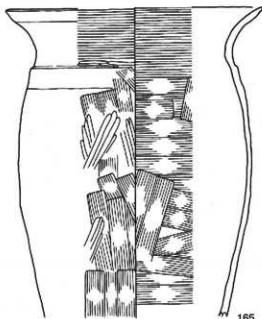


162

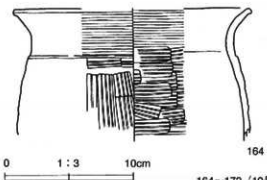
161~163 (18号住)



163



165



164

0 1:3 10cm

164~172 (19号住)

図85 遺構内出土遺物 (15)

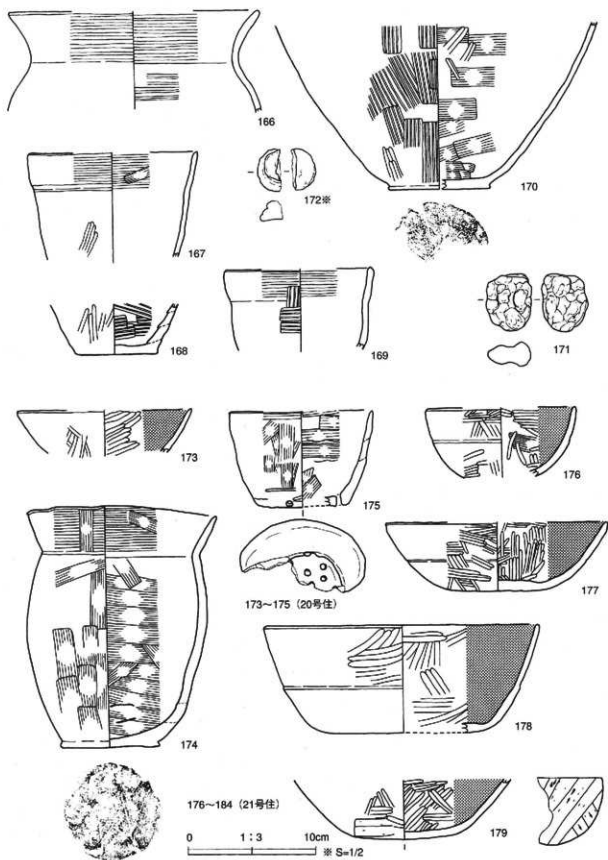


図86 遺構内出土遺物 (16)

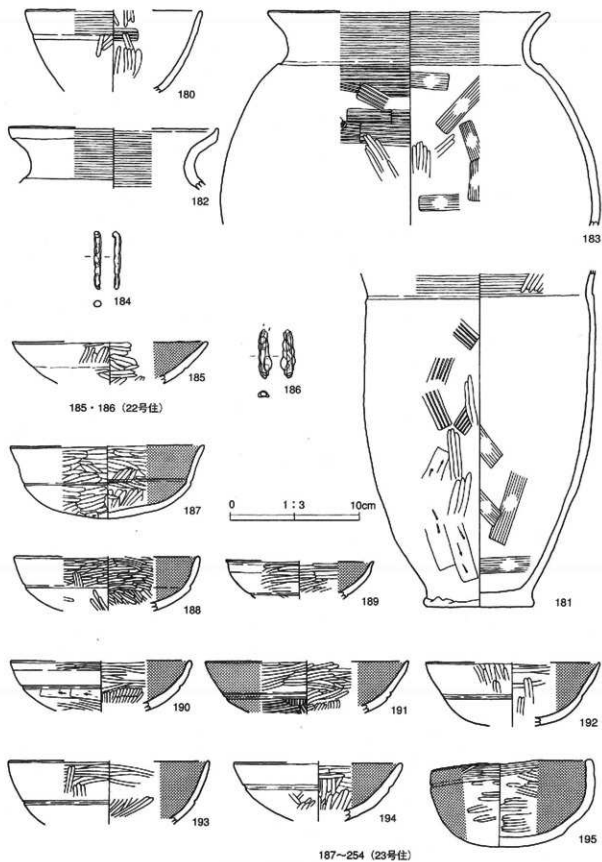


图87 遺構内出土遺物 (17)

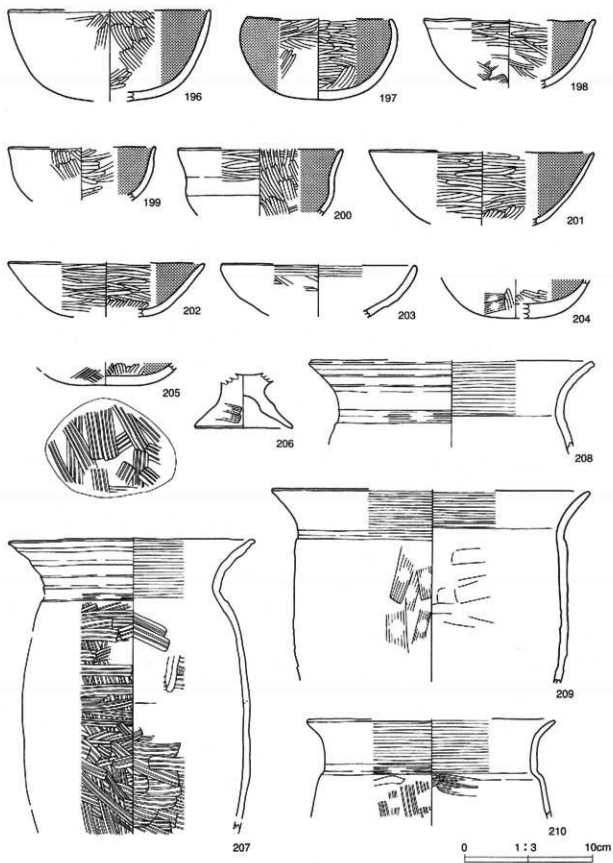


图88 遺構内出土遺物 (18)

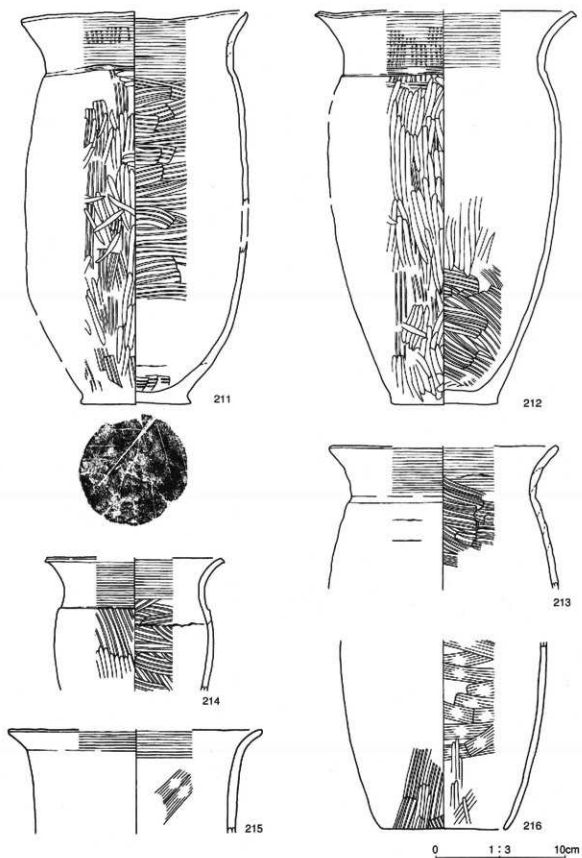


图89 遼構内出土遺物 (19)

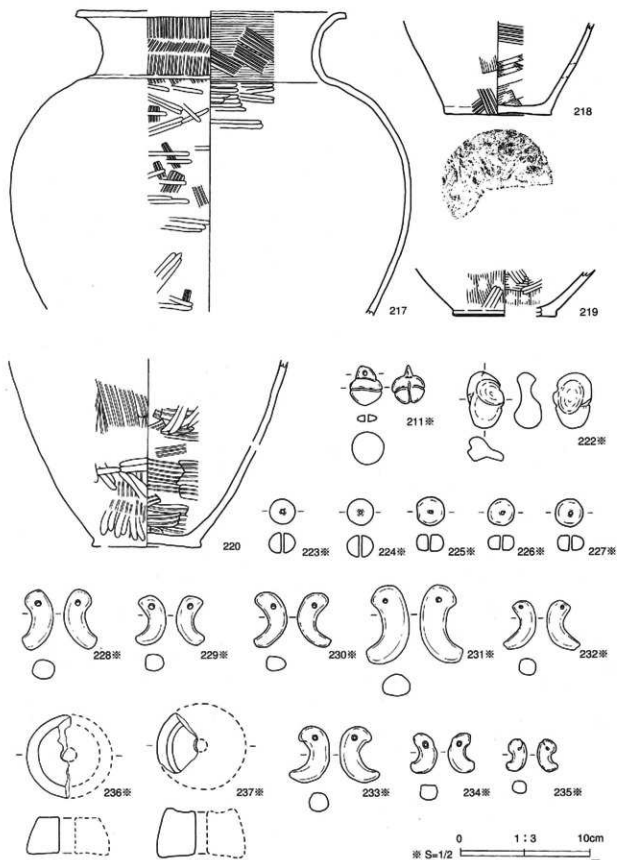


图90 遗坑内出土遗物 (20)

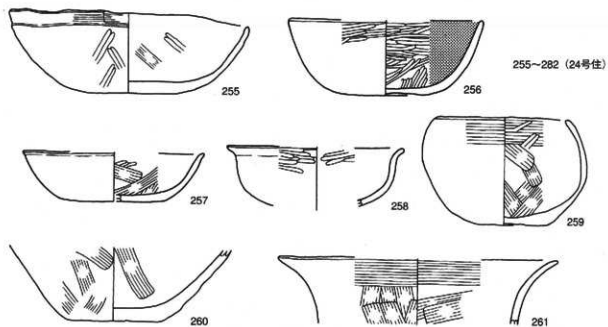
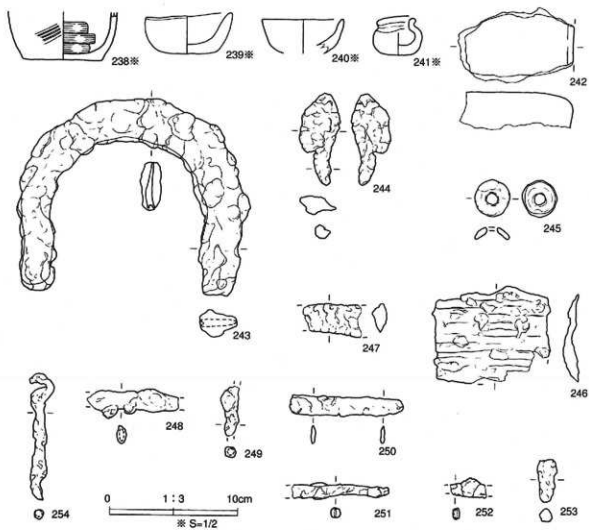
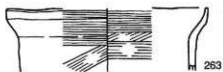


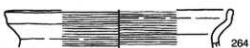
图91 遺構内出土遺物 (21)



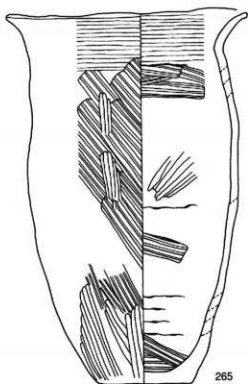
262



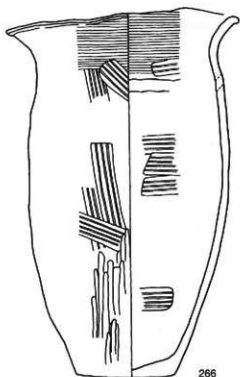
263



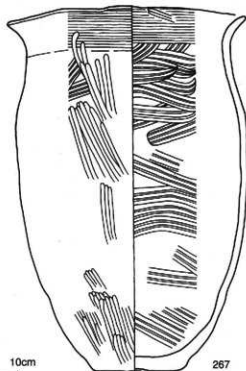
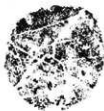
264



265



266



267

0 1:3 10cm

図92 遺構内出土遺物 (22)

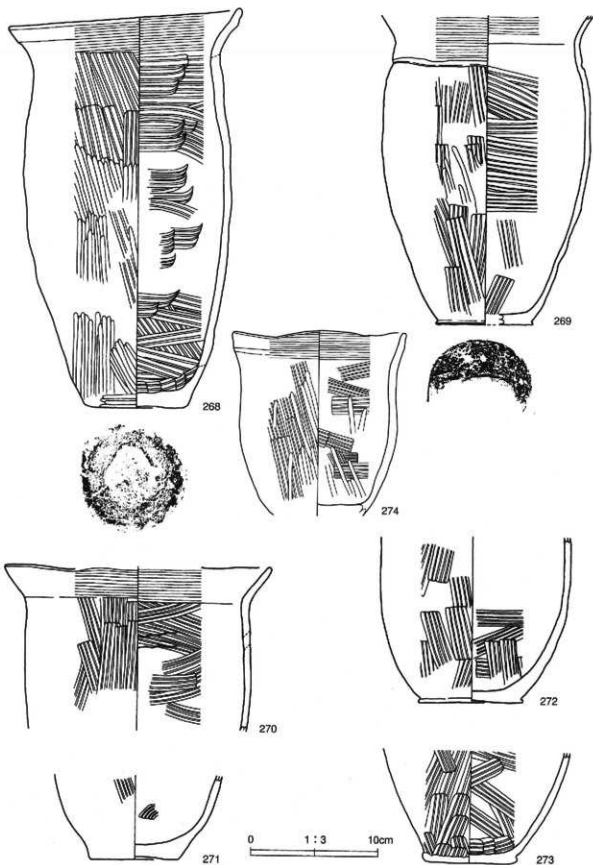


图93 遺構内出土遺物 (23)

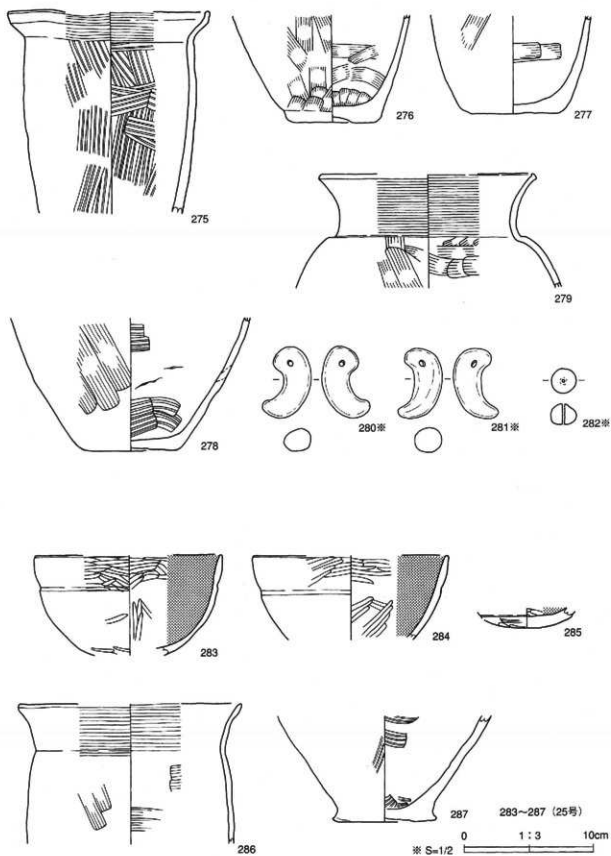


图94 遺構内出土遺物 (24)

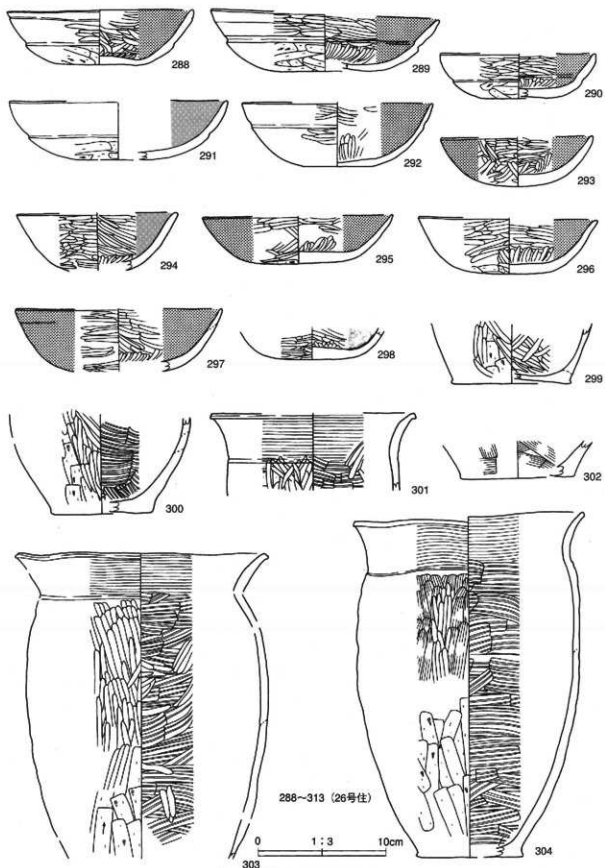


图95 遺構内出土遺物 (25)

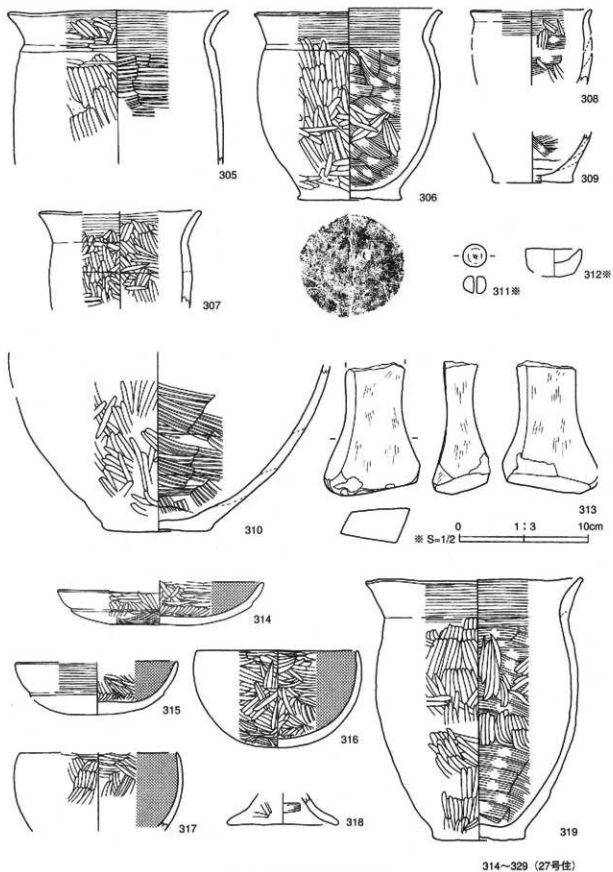


图96 遺構内出土遺物 (26)

314~329 (27号住)

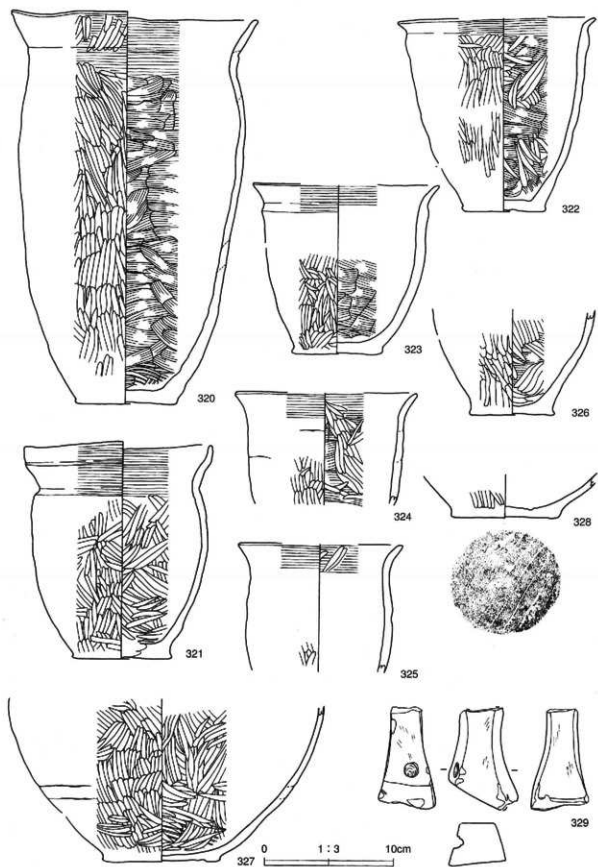


图97 墓内出土遗物 (27)

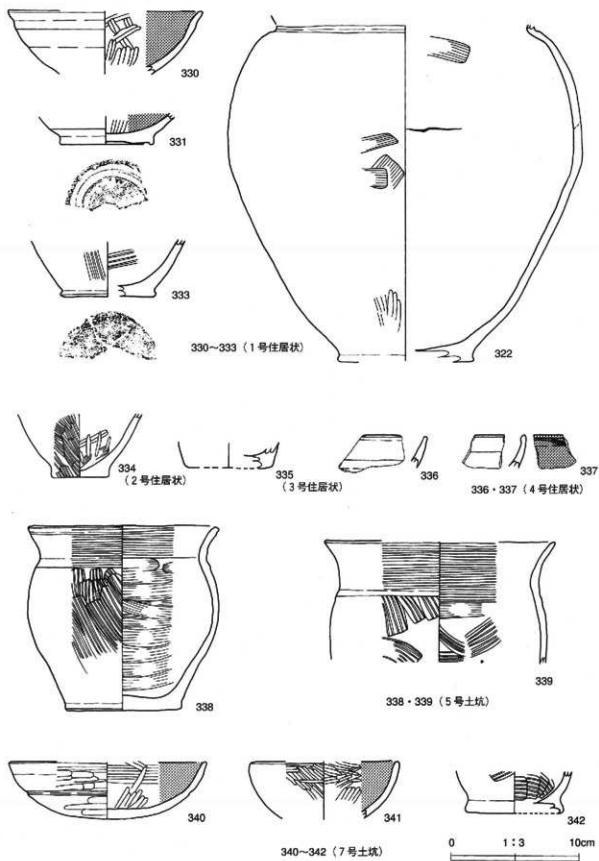


图98 濠沟内出土遗物 (28)

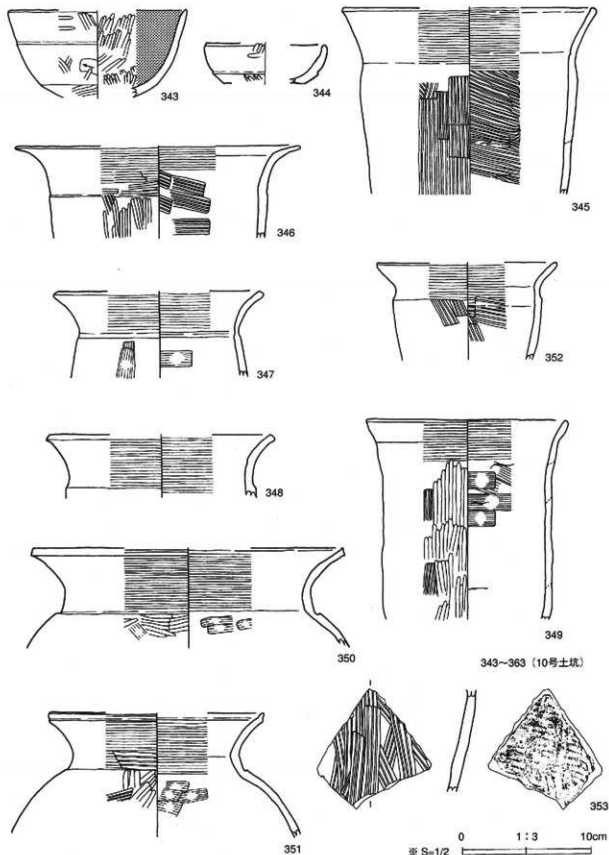
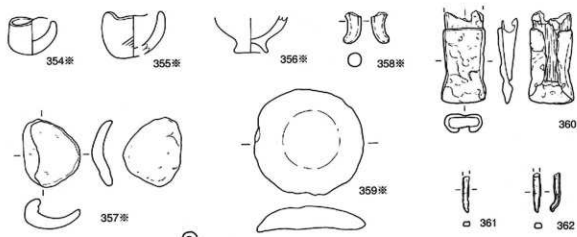
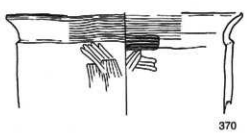
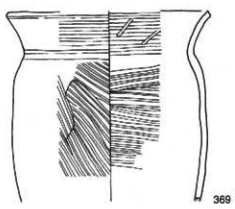
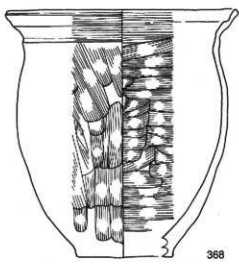
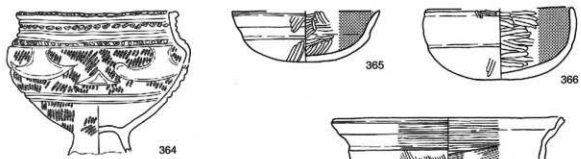


图99 遗構内出土遺物 (29)



363 (S=1/1)



0 1:3 10cm

364~378 (旧河道) ※ S=1/2
 图100 遺構内出土遺物 (30)・旧河道出土遺物 (1)

V 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物の総数は、50点に満たない。これは総出土量の数%であり、調査で出土したほとんどの遺物が何らかの遺構に伴っていたことを示している。ここで遺構外として扱った遺物のほとんどは、本来遺構に伴ったものと思われ、出土した地点周辺のいずれかの遺構に帰属するものであろう。

ここでは実測可能であった10点を掲載した。(図102、写真図版85)

380・381は非ロクロ成形の坏である。380は外面にのみ段を有する。底部は丸底風の平底である。381は丸底と思われる内外面無段の坏である。382は非ロクロ成形の高台付きの坏である。383は数少ないロクロ成形の小型の坏で、内面は黒色処理されない。384は広口の壺形の器形を呈し、内面が黒色処理される特徴のあるもので、胴部下を欠くため器種が定かでない。385は長胴壺の口縁部の破片、386は頸部有段の長胴壺、387は短い口唇部が特徴的な長胴壺で、9世紀以降に属するものか。388は須恵器坏の口縁部破片、389は同じく壺の胴部破片である。390は断面形がY字状を呈する土製紡錘車、391は土製勾玉である。

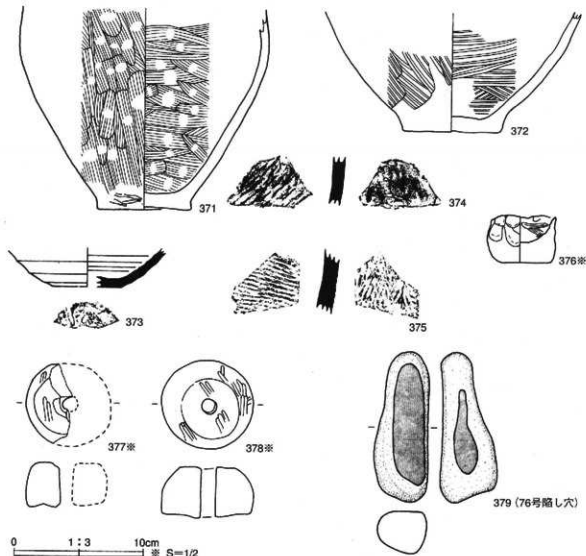


図101 旧河道出土遺物(2)ほか

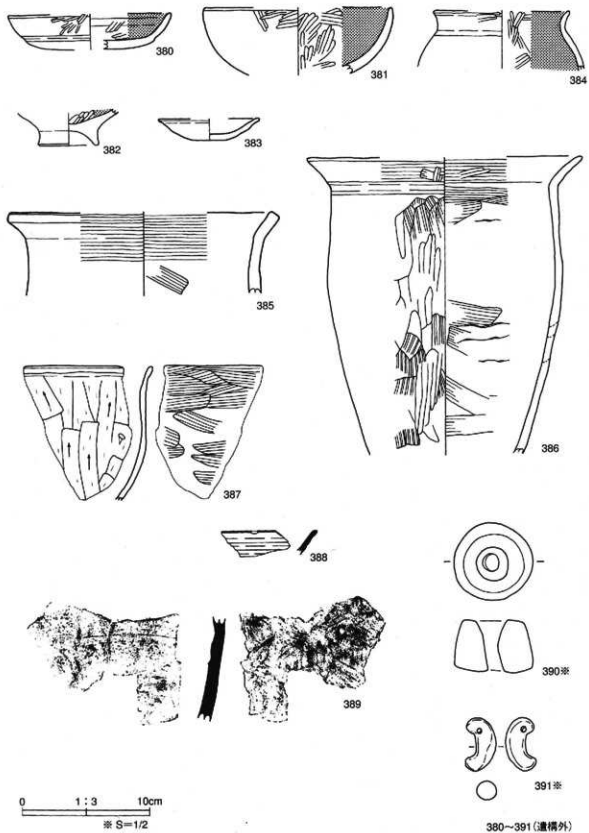


图102 遺構外出土遺物

表2 運輸路線表

番号	出止地点・方位	区	路線	外周線路(口線部)	外周線路(側部)	内周線路(口線部)	内周線路(側部)	系統の名称・形状	口 径(φ)	長さ(φ)	設置(φ)	黄色区画	備 考
1	11号住	区	外周線路	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ナリ	134			内周	外周折反
2	12号住折反	区	外周線路	ハケム→ミガキ	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	172			内周	外周折反
3	13号住折反	区	外周線路	ハケム→ミガキ	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	18			内周	外周折反
4	14号住折反	区	外周線路	ハケム→ミガキ	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	27			内周	外周折反
5	15号住折反	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
6	16号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
7	17号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
8	18号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
9	19号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
10	20号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
11	21号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
12	22号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
13	23号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
14	24号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
15	25号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
16	26号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
17	27号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
18	28号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
19	29号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
20	30号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
21	31号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
22	32号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
23	33号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
24	34号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
25	35号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
26	36号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
27	37号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
28	38号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
29	39号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
30	40号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
31	41号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
32	42号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
33	43号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
34	44号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
35	45号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
36	46号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
37	47号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
38	48号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
39	49号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反
40	50号住	区	外周線路	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	ナリ	124			内周	外周折反

番号	出土地点・部位	器種	外周形状(口縁部)	外周形状(胴部)	内周形状(口縁部)	内周形状(胴部)	蓋部の形状・形状	口徑	高さ	着色処理	備考
41	3号住居遺品3	除去灰製品						長31.9	幅9		
42	3号住居遺品1	刀子						長58.9	幅1.2		
43	3号住居遺品3	刀子						長55.8	幅1.1		
44	3号住居遺品2	不明灰製品						長53.5	幅1.1		
45	3号住居遺品	不明灰製品						長52.4	幅0.9		
46	4号住居遺品1	灰	ハケテ	ハケテ	ミガキ	ミガキ	ハケテ	<151>	4.5	内面	外周有灰
47	4号住居遺品2	灰	ハケテ	ハケテ	ミガキ	ミガキ	ハケテ	<140>	4.5	右側	外周有灰
48	4号住居遺品3	灰	ハケテ	ハケテ	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ハケテ	20.9	17.6		外周有灰
49	4号住居遺品4	灰	ナデ	ナデ	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ハケテ	<192>			外周有灰、輪郭不明
50	4号住居遺品5	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	17.2	8.5	34.3	外周有灰、輪郭不明
51	4号住居遺品6	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<81>			外周有灰、輪郭不明
52	4号住居遺品7	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	8.8			外周有灰、輪郭不明
53	4号住居遺品8	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	11.1	6.1	9.6	外周有灰、輪郭不明
54	4号住居遺品9	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	21.2			外周有灰
55	4号住居遺品10	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	20.6	8.2	26.4	外周有灰
56	4号住居遺品11	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ				外周有灰
57	4号住居遺品12	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ				外周有灰
58	4号住居遺品13	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ				外周有灰
59	4号住居遺品14	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	15.1			内面
60	4号住居遺品15	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	21.0	22.3		
61	4号住居遺品16	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	16.3	6.3		
62	4号住居遺品17	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	14.4	5.5		
63	4号住居遺品18	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
64	5号住居	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<81>			
65	5号住居遺品1	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<131>	4.7	内面	外周有灰
66	5号住居遺品2	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<151>		内側	外周有灰
67	5号住居遺品3	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
68	5号住居遺品4	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
69	5号住居遺品5	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
70	5号住居遺品6	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
71	5号住居遺品7	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
72	5号住居遺品8	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
73	5号住居遺品9	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
74	5号住居遺品10	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
75	5号住居遺品11	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
76	5号住居遺品12	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
77	5号住居遺品13	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
78	5号住居遺品14	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
79	5号住居遺品15	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			
80	5号住居遺品16	灰	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケテ	<117>			

番号	出立地点・単位	品種	外国産種 (口産種)	外国産種 (外国)	産地の状態・形状	口産	基準	高さ	備考
81	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	H1	41	内産	外国産種
82	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	156	61	内産	外国産種
83	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	159	47	内産	外国産種
84	名取少子	牝	ハクメ→ミナギ	ミナギ	ナズリ	<113>	25	内産	外国産種
85	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	99	35	内産	外国産種
86	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	115	36	内産	外国産種
87	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	<103>	39	内産	外国産種
88	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ハクメ	<163>	<69>	内産	外国産種
89	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ハクメ	<138>			外国産種
90	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ハクメ	<188>			外国産種
91	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	188			外国産種
92	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	<132>			外国産種
93	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	<311>			外国産種
94	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ→ミナギ	ハクメ→ミナギ	<109>			外国産種
95	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	<103>			外国産種
96	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	81			外国産種
97	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	177	89	31.1	外国産種
98	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	198	85	29.4	外国産種
99	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	106	7.5	11.3	外国産種
100	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	104	58	10.5	外国産種
101	名取少子	牝	ハクメ	ハクメ	ハクメ	<109>			外国産種
102	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	<102>			外国産種
103	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	100→14	無名0.65→1.1		外国産種
104	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	17産種38	下産種17	原産5	外国産種
105	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ	長→14.8	産種21→32		外国産種
106	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
107	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
108	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
109	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
110	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
111	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
112	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
113	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
114	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
115	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
116	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
117	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
118	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
119	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種
120	名取少子	牝	ミナギ	ミナギ	ミナギ				外国産種

番号	出土地・部位	品種	外観特徴(口縁部)	外面調整(胴部)	内面調整(口縁部)	内面調整(胴部)	調整の履歴・形状	口径	重量	器高	黒色処理	備考
121	10号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	外底面り出し		7.3			輪郭心長
122	10号瓦	瓦										
123	10号瓦	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ						
124	11号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		<(R)>				黒色処理
125	12号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		<(R)>				黒色処理
126	12号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		<(R)>				黒色処理
127	12号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	外底面り出し小、内面調整		10.2			黒色処理
128	12号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	外底面り出し小、内面調整		7.9			黒色処理
129	12号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		<(R)>				黒色処理
130	12号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		<(R)>				黒色処理
131	12号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		長さ34	66.06			
132	13号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	外底面り出し小、内面調整		7.1			
133	13号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	外底面り出し小、内面調整		7.8			
134	13号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	外底面り出し小、内面調整					黒色処理、黒色処理
135	13号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		<(R)>				黒色処理、黒色処理
136	13号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		<(R)>				黒色処理、黒色処理
137	13号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		3.5	2.5			
138	13号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		6.09	厚さ0.6			
139	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		長さ218	66.5			
140	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		10.6				
141	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ	14.4	3.3			外底面調整の痕
142	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ	12.1	5.2			外底面調整の痕
143	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ		7.1	5.1			外底面調整の痕
144	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ	12.4	6.9			外底面調整の痕
145	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
146	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
147	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
148	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
149	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
150	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
151	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
152	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
153	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
154	14号瓦	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
155	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
156	14号瓦葺土	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
157	15号瓦	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
158	15号瓦	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
159	17号瓦	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕
160	17号瓦	瓦	ナナ	ハナナ	ナナ	ナナ	ナナ					外底面調整の痕

番号	出土地点・単位	国籍	外国経歴(口頭型)	外国経歴(筆頭)	内面経歴(口頭型)	内面経歴(筆頭)	経歴の調書・形状	口番	監修	番号	業種	備考
161	1.8分住	水	ミガキ	ハナメ・ミガキ	ミガキ	ミガキ	事務所下層から底層外廻りハナメ	<R8>			業種不明	海外有定尺
162	1.8分住	水	ハナメ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		132		3.6	内証	海外有定尺
163	1.8分住	水	ハナメ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<214>			内証	海外有定尺
164	1.8分住	水	ナナ	ハナメ・ミガキ	ナナ	ハナメ		<R6>			内証	海外有定尺
165	1.8分住	水	ナナ	ハナメ・ミガキ	ナナ	ハナメ		202			内証	海外有定尺
166	1.8分住	水	ナナ	ミガキ	ナナ	ナナ		<R3>			内証	海外有定尺
167	1.8分住	水	ナナ	ミガキ	ナナ	ナナ		<R4>	6.3		内証	海外有定尺
168	1.8分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		<R1>			内証	海外有定尺
169	1.8分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		<R1>			内証	海外有定尺
170	1.8分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		長345		長319	内証	海外有定尺
171	1.8分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		幅12		幅2	内証	海外有定尺
172	1.8分住	水	ナナ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R3>			内証	海外有定尺
173	2.0分住	水	ナナ	ハナメ・ハナメ	ナナ	ナナ		<R3>			内証	海外有定尺
174	2.0分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		148	7.4	192	内証	海外有定尺
175	2.0分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		<R4>			内証	海外有定尺
176	2.0分住	水	ナナ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R1>		7.6	内証	海外有定尺
177	2.0分住	水	ナナ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R4>			内証	海外有定尺
178	2.0分住	水	ナナ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R4>			内証	海外有定尺
179	2.1分住	水	ナナ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R1>			内証	海外有定尺
180	2.1分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		<R3>			内証	海外有定尺
181	2.1分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		<R3>			内証	海外有定尺
182	2.1分住	水	ナナ	ナナ	ナナ	ナナ		8.4			内証	海外有定尺
183	2.1分住	水	ナナ	ナナ	ナナ	ナナ		<R3>			内証	海外有定尺
184	2.1分住	水	ナナ	ハナメ	ナナ	ナナ		223			内証	海外有定尺
185	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		長347		幅16	内証	海外有定尺
186	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R5>			内証	海外有定尺
187	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		長339		幅15	内証	海外有定尺
188	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R2>		5.8	内証	海外有定尺
189	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R4>			内証	海外有定尺
190	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R5>			内証	海外有定尺
191	2.2分住	水	ミガキ	ナナ	ナナ	ナナ		<R7>			内証	海外有定尺
192	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R3>		5.1	内証	海外有定尺
193	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R5>			内証	海外有定尺
194	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R3>		4.6	内証	海外有定尺
195	2.2分住	水	ナナ	ミガキ	ナナ	ナナ		122		7.1	内証	海外有定尺
196	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R5>		7.3	内証	海外有定尺
197	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R4>		8.5	内証	海外有定尺
198	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R4>			内証	海外有定尺
199	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R5>			内証	海外有定尺
200	2.2分住	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<R1>			内証	海外有定尺

番号	出土地点・単位	器種	外周線装(口縁部)	外周線装(胴部)	内周線装(口縁部)	内周線装(胴部)	器形の複製・形状	口縁	底径	器高	器色記号	備考
201	23号庄	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<173>			内底	
202	23号庄	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		<154>	4.3		内底	
203	23号庄	水	ナナ	ナナ	ナナ	ナナ		<152>			内底	
204	23号庄	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ					内底	
205	23号庄	水	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ					内底	
206	23号庄	水	ナナ	ナナ	ナナ	ナナ					内底	
207	23号庄P1113埋土	多量灰泥	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		19.3	7.2		底面平ら	
208	23号庄P1113埋土	多量灰泥	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<224>			底面平ら	
209	23号庄	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<208>			底面平ら	
210	23号庄P1111	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<194>			底面平ら	
211	23号庄P1113	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<181>	8.7	31.2	底面平ら	
212	23号庄P1111	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		20.4	<8.2>	31.2	底面平ら	
213	23号庄P1113埋土	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<174>			底面平ら	
214	23号庄	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<146>			底面平ら	
215	23号庄	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<201>			底面平ら	
216	23号庄	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<210>	9.6		底面平ら	
217	23号庄	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ			8.6		底面平ら	
218	23号庄	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<82>			底面平ら	
219	23号庄	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ		<84>			底面平ら	
220	23号庄埋土	瓦	ハナメ	ハナメ	ハナメ	ハナメ					底面平ら	
221	23号庄埋土	不明土製品						長さ21	幅1.7		1号貯伊札	
222	23号庄P116	不明土製品						長さ33	幅1.9		底面平ら	
223	23号庄埋土	土						幅1.3	高さ1.1			
224	23号庄	土						幅1.4	高さ1.4			
225	23号庄P1112埋土	土						幅1.5	高さ0.9			
226	23号庄埋土	土						幅1.4	高さ0.8			
227	23号庄P1118埋土	土						幅1.4	高さ0.8			
228	23号庄P1116	土						長さ32	幅1.3			
229	23号庄	土						長さ2.6	幅1.2			
230	23号庄	土						長さ2.9	幅1.1			
231	23号庄P116	土						長さ4.1	幅1.7			
232	23号庄埋土	土						長さ2.6	幅1.1			
233	23号庄P111埋土	土						長さ2.9	幅1.1			
234	23号庄埋土	土						長さ3.1	幅0.9			
235	23号庄P1112埋土	土						長さ3.7	幅0.7			
236	23号庄	土							下部64.4	高さ1.9		
237	23号庄埋土	土							高さ3.6			
238	23号庄	土						4.5	2.8	2.2		
239	23号庄埋土	土						<42>				
240	23号庄P1110埋土	小黄土器										

番号	出土地・単位	基 礎	分類調整 (口調整)	外面調整 (歩別)	内面調整 (口調整)	内面調整 (歩別)	底層の調整・形状	口 径	差 差	差 高	黒色処理	備 考
241	2号作付直道	小柄生身						21	1.8	21		
242	2号作付直道	根不!						長26.1	幅0	重29.27		仁美地区岩製
243	2号作付直道	根不!										
244	2号作付直道	根不!										
245	2号作付直道	根不!										
246	2号作付直道3期立	不明な製品										
247	2号作付直道	不明な製品										
248	2号作付直道	不明な製品										
249	2号作付直道	不明な製品										
250	2号作付直道	不明な製品										
251	2号作付直道	不明な製品										
252	2号作付直道	不明な製品										
253	2号作付直道	不明な製品										
254	2号作付直道	不明な製品										
255	2号作付直道	不明な製品										
256	2号作付直道	不明な製品										
257	2号作付直道	不明な製品										
258	2号作付直道	不明な製品										
259	2号作付直道	不明な製品										
260	2号作付直道	不明な製品										
261	2号作付直道	不明な製品										
262	2号作付直道	不明な製品										
263	2号作付直道	不明な製品										
264	2号作付直道	不明な製品										
265	2号作付直道	不明な製品										
266	2号作付直道	不明な製品										
267	2号作付直道	不明な製品										
268	2号作付直道	不明な製品										
269	2号作付直道	不明な製品										
270	2号作付直道	不明な製品										
271	2号作付直道	不明な製品										
272	2号作付直道	不明な製品										
273	2号作付直道	不明な製品										
274	2号作付直道	不明な製品										
275	2号作付直道	不明な製品										
276	2号作付直道	不明な製品										
277	2号作付直道	不明な製品										
278	2号作付直道	不明な製品										
279	2号作付直道	不明な製品										
280	2号作付直道	不明な製品										

番別	当士様名・職位	京橋	外周調整 (口調整)	外周調整 (側面)	内周調整 (口調整)	内周調整 (側面)	基部の調整・形状	口径	底径	高さ	着色処理	備 考
201	2.4号位置工	工主						φ33.7	φ13.8			基礎高直、蓋面平直とくひ社
202	2.4号位置工	水	ミダキ	ミダキ	ミダキ	ミダキ		φ13	φ31.1			
203	2.5号柱	水	ミダキ	ミダキ	ミダキ	ミダキ		<146>		8.1	内面 内面 内面	外周有段 外周有段 外周有段
204	2.5号柱	水	ミダキ	ミダキ	ミダキ	ミダキ		<152>			内面	
205	2.5号位置工	水	ナブ	ヘウチナブ	ナブ	ヘウチナブ		<176>				定形同心形
206	2.5号柱	水	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム	外周有段出し、内周調整	<82>				
207	2.5号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	外周有段出し、内周調整	144	6.9	4.6	内面	外周有段、口径調整
208	2.5号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<178>		5.1	内面	外周有段
209	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<122>		3.6	内面	内周有段
200	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<171>		4.7	内面	内周有段
201	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<149>		5.1	内面	外周有段
202	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<121>		4.1	内面	内周有段
203	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<126>			内面	内周有段
204	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<149>		3.8	内面	内周有段
205	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<141>		4.6	内面	内周有段
206	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ	<162>			内面	内周有段、蓋面高直
207	2.6号柱	水	ミダキ	ナブ	ミダキ	ナブ	ナブ				内面	
208	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<84>				蓋面高直
209	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ		8.1			
300	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	外周有段出し、内周調整	<82>				
301	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<81>				
302	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	20.1				
303	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	8.4	27.4			蓋面有段、蓋面高直
304	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	17.3				蓋面有段、石版有段
305	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	8.2	15.3			蓋面有段、石版有段
306	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<122>				蓋面有段、石版有段
307	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<96>				蓋面有段、石版有段
308	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<84>				蓋面有段、石版有段
309	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	φ1.2	φ50.9			蓋面有段、石版有段
310	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<19>	1.5			蓋面有段、石版有段
311	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	φ5.105	φ5.2852			蓋面有段、石版有段
312	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<162>		3.5	内面	外周有段
313	2.6号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<128>		4.2	内面	外周有段
314	2.7号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	12.6		7.7	内面	内周有段
315	2.7号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<124>			内面	内周有段
316	2.7号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ					
317	2.7号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	<88>				
318	2.7号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	17.1	7.2	20.7		蓋面有段、蓋面高直
319	2.7号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	19.3	7.8	31.2		蓋面有段、蓋面高直
320	2.7号柱	水	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	ナブ					

番号	出土地点・単位	器種	外周形状(口縁部)	外周形状(胴部)	内周形状(口縁部)	内周形状(胴部)	底縁の形状・形状	口径	器体	器高	黒色部	備考
321	27号住居1号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦	14.7	<12.7>	17.3		黒色不渡
322	27号住居1号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦	<15.5>	6.6	15.5		黒色不渡
323	27号住居1号住居1号	土	ハケム	ハケム	ハケム	ハケム	外縁部平坦	<15.6>	7.2	13.5		黒色不渡
324	27号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦	<14.2>				黒色不渡
325	27号住居2号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦	<12.8>	6.7			黒色不渡
326	27号住居2号1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
327	27号住居2号7号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
328	27号住居2号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
329	27号住居3号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
330	27号住居4号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
331	1号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
332	1号住居2号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
333	1号住居3号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
334	2号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
335	3号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
336	4号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
337	4号住居2号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
338	5号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
339	5号住居2号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
340	7号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
341	7号住居2号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
342	7号住居3号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
343	10号住居1号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
344	10号住居2号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
345	10号住居3号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
346	10号住居4号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
347	10号住居5号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
348	10号住居6号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
349	10号住居7号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
350	10号住居8号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
351	10号住居9号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
352	10号住居10号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
353	10号住居11号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
354	10号住居12号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
355	10号住居13号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
356	10号住居14号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
357	10号住居15号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
358	10号住居16号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
359	10号住居17号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡
360	10号住居18号	土	ナ	ナ	ナ	ナ	外縁部平坦					黒色不渡

番号	出土地点・単位	器種	外蓋形状(口縁部)	外蓋調製(胴部)	内蓋調製(口縁部)	内蓋調製(胴部)	蓋の形状・形状	口径	底径	高さ	重量	備考
361	1号土壇	灰打						長さ29	幅0.6			
362	1号土壇	灰打						長さ31	幅0.6			
363	1号土壇	ガラス玉						直径04				陶師印
364	池田池原遺跡	土師鉢	扇形、列点、平口流注	器形文				12.1				陶師印
365	池田池原土壇	灰	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	<110>	11.4	4.1	3.9		内蓋 外口が大きく深い筒、内蓋流注
366	池田池原土壇	灰	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	<110>	11.4	4.1	3.7		内蓋 外口流注流の流
367	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム・ミガキ	ナブ	ハケム	<110>			18.5		口縁部外蓋に文
368	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム	<157>					口縁部外蓋に文
369	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム	<157>					口縁部外蓋に文
370	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム	<110>					口縁部外蓋に文
371	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム			7.5			口縁部外蓋に文
372	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム			7.9			
373	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
374	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
375	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
376	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
377	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
378	池田池原土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
379	7号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
380	11号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
381	文徳寺土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
382	文徳寺土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
383	11号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
384	11号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
385	11号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
386	文徳寺土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
387	11号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
388	11号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
389	11号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
390	文徳寺土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						
391	11号土壇	灰	ナブ	ハケム	ナブ	ハケム						

VI まとめ

三年にわたる調査によって、この稲村Ⅱ遺跡は縄文時代には狩り場として、奈良時代には一大集落として存在していたことが明らかとなったが、特に古代城柵「徳丹城」創建直前期の集落跡として重要な意味を持つものと思われる。確認された当該期の竪穴住居跡の総数は、紫波町教育委員会調査分と合わせるとおよそ100棟におよび、すべてが同時存在していなかったにしても、一定期間内における集落規模は極めて大きいと言える。また、これらの他にこの直前・直後を含めた古代の遺構がほとんどないことも特徴の一つである。

このような内容を検証すべく、本遺跡で得られた遺構・遺物の特徴について、若干の考察と私見を加えてまとめたい。

1. 遺構

(1) 竪穴住居跡

表3に今回報告した竪穴住居跡27棟の観察一覧表を掲載した。

規模別にみると、一辺が(1)2m後半台のもの3棟、(2)3~4m台のもの15棟、(3)5~6m台のもの3棟、(4)7m台のもの3棟、(5)9m以上のもの1棟(規模不明2棟)となる。一般的にこの時期の集落は、大型住居1棟を核として中型や小型の住居数棟から構成されるブロック構造を成す(木本:1998)といわれている。本遺跡の住居跡の規模も概ね上記の5つのグループに分類され、かつ時期にあまり差がないと思われる住居間の重複が見られないことから、集落内がいくつかのブロック構造をとっていた可能性は高い。ただ、例えば(4)(5)をもって大型とするか、(4)は中型とし(5)のみ大型とするか、

表3 竪穴住居跡観察表

※(括弧)掘り込み式
(く)くり抜き式

遺構名	旧遺構名	規模(m)	平面形	カマド位置	カマド規模(m)	カマド煙道(m)	支脚
第1号住	ⅡB3b住	3.07×3.32	不整形	北壁東寄り	0.48×0.71	1.20(掘)	なし
第2号住	ⅡB1h住	3.20×3.22	不整形	北壁西寄り	0.66×0.90	1.24(く)	あり
第3号住	ⅡC9c住	6.84×7.06	方形	北壁中央	0.95×1.32	1.60(く)	なし
第4号住	ⅡD7a住	5.60×5.62	方形	北壁中央	0.80×0.90	1.55(掘)	なし
第5号住	ⅡD1j住	不明	不明	北壁壁	不明	不明	なし
第6号住	ⅡE7i住	3.05×3.50	隅丸長方形	北壁中央	0.75×0.76	1.37(く)	なし
第7号住	ⅡE9i住	7.30×7.58	方形	北壁中央	0.70×?	1.65(掘)	なし
第8号住	ⅡF4a住	7.40×7.66	不整形	北壁中央	1.24×1.30	1.24(掘)	あり
第9号住	ⅡF7a住	3.92×4.50	長方形	西壁中央	0.50×0.80	1.31(掘)	なし
第10号住	ⅡF1b住	不明	隅丸方形?	調査区域外	不明	不明	不明
第11号住	ⅡF4c住	3.17×3.45	不整形	北壁中央	0.58×0.75	1.17(掘)	なし
第12号住	ⅡF4d住	3.28×3.24	方形	北壁西寄り	0.65×1.10	1.33(掘)	なし
第13号住	ⅡF3e住	3.25×3.65	隅丸長方形	北壁北寄り	0.27×1.00	1.47(?)	なし
第14号住	ⅡF9e住	5.10×5.45	長方形	北壁西寄り	0.84×0.90	1.27(?)	あり
第15号住	ⅡC9c住	3.77×?	(方形)	北壁中央	0.90×?	1.18(掘)	なし
第16号住	ⅡC0e住	2.90×3.10	(方形)	北壁西寄り	不明	1.40(掘)	なし
第17号住	ⅡC9f住	3.23×3.32	不整形	西壁中央?	0.62×1.06	1.02(掘)	あり
第18号住	ⅡC3h住	3.45×3.80	隅丸方形?	北壁西寄り	不明	0.98(?)	なし
第19号住	ⅡE6e住	3.80×4.00	不整形	北壁中央	不明	1.42(掘)	なし
第20号住	ⅡE7f住	2.70×2.82	隅丸方形	西壁北寄り	不明	1.10(掘)	なし
第21号住	ⅡE5g住	3.22×3.40	方形	北壁中央	0.64×0.80	1.38(掘)	あり
第22号住	ⅡE7g住	2.68×?	(方形)	西壁中央	0.40×0.62	1.19(掘)	なし
第23号住	ⅡF1j住	9.17×?	方形	不明	不明	不明	不明
第24号住	ⅡF7h住	3.25×3.68	長方形	北壁中央	0.68×0.84	1.55(掘)	あり
第25号住	ⅡC0f住	3.74×?	(方形)	北壁中央	不明	不明	不明
第26号住	ⅡC1e住	5.32×?	方形	北壁中央	0.94×0.94	1.40(く)	あり
第27号住	ⅡC1i住	4.43×?	(方形)	北壁中央	0.56×0.87	1.47(く)	あり

といったブロック構造の核がいくつあるかといった問題は残る。これについては、出土遺物や住居配置などを詳細に検討すべきであろう。

平面形については、不整形のものを含んでいるが、ほぼ方形・隅丸方形・長方形を呈するものが多く、これまで言われている当該期の傾向と変わるものではない。

カマドについては、まず設置される位置であるが、ほとんどが北西壁か北壁の中央にあって、西側に設置されるものは2棟、北東壁は1棟である。いずれ、住居北壁を中心とする壁の中央部に設置される傾向は、これまでの調査例と同様である。本遺跡においては、カマドの設置場所の差異が時期差を示すという状況は、見受けられない。次に煙道部構造についてであるが、掘り込み式の煙道部を持つものは20棟中15棟、くり抜き式のもの5棟となっている。前者の中には、本来くり抜き式であったものが後に削平され、掘り込み式の状態で見出されているものも含まれている可能性があるが、主体は掘り込み式であったものと思われる。本体袖部に関しては、「地山を掘り残すタイプ」、「シルト質土で構築するタイプ」、「土師器臺を芯材として埋め込みシルト質土を貼り付けるタイプ」の3種が認められた。最後に挙げた土師器臺を転用するタイプは、8世紀前半期における住居形態の細部変化の1つ(宇部：1999)と捉える考え方があり、本遺跡の場合にも時期的には問題はないが、他の2つのタイプとの時期差の有無などは再検討すべきものである。

柱穴に関しては、一辺が5m以上の規模をもつ上記の(3)~(5)に属する9棟に確認されている。その他の5m以下の住居跡には検出されないと言う事実も、例えば二戸市中曾根Ⅱ遺跡の状況と同じである。貯蔵用と思われる土坑類については、17棟で検出されている。カマド脇に設けられるもののほか、カマドのある反対側の壁際に設置されている例がある。

床面に炭化材が確認された住居跡が7棟あるが、いずれも量が少なく家屋の焼失に伴うものかは不明である。その可能性があるものは、第26・27号住居跡ぐらいであろうか。

次に、特徴のある住居跡について記す。まず第1号住居跡では、床面の中央に長方形の掘り込みが確認さ

れている。類例は畦米町水吉Ⅱ遺跡古代第2号住居跡にあり、時期的にもほぼ同時期と見られる。いずれも小鍛冶等の作業場の可能性を指摘したが確証はない。第3号・9号・24号住居跡からは、白色粘土の塊が出土した。土器や土製品の製作工房を兼ねた住居の可能性があろう。

次に、27棟の中で最大の規模を持つ第23号住居跡についてであるが、これは一辺が9mを越えるもので、この時期では県内でも最大級の住居跡と思われる。既述したように、住居北側は調査が不可能であったため、カマドの有無は確認できなかったが住居跡として報告した。柱穴の数が貼り床下からも柱穴・土坑が検出されたことなどから、建て替え拡張されたものと思われる。出土遺物も坏・甕のほか、土製品・鉄製品といったものも数多くみられ、集落のブロック構造の核となる住居の1つに違いないものと思われる。

主軸方向	柱穴	周溝	土坑	炭化材	備考
N8°E	なし	なし	なし	なし	床面中央に掘り込み
N4°W	なし	なし	なし	なし	床面礎石多数
N13°W	4	あり	8	あり	白粘土出土
N40°W	4	なし	4	あり	
N28°W	なし	なし	2	あり	掘乱著しく規模等不明
N24°W	なし	あり	2	なし	一部掘乱受ける
N19°W	6	なし	2	なし	上部削平
N50°W	4	あり	7	なし	煙道面蓋粘土の貼り戻し
N74°W	なし	なし	5	なし	床面に白粘土出土
N25°E	2	なし	なし	なし	カマド等調査区域外
N3°W	なし	なし	なし	なし	東壁に方形の張り出し
N20°W	なし	なし	2	なし	一部掘乱受ける
N50°W	なし	なし	5	なし	
N7°E	8	なし	なし	なし	一部掘乱受ける
N2°W	なし	なし	なし	なし	一部掘乱受ける
N35°W	なし	なし	なし	なし	一部掘乱受ける
N75°W	なし	なし	なし	なし	掘乱受ける
N20°W	なし	なし	1	なし	床面に残存
N32°W	なし	なし	1	あり	一部掘乱受ける
N75°W	なし	なし	なし	なし	
N48°W	なし	なし	2	なし	第3号溝跡と重複する
N76°W	なし	なし	1	なし	ほぼ半分削平される
N5°W	13	あり	18	なし	北側調査区域外
N45°E	なし	あり	1	なし	ほぼ半分削平出土
N6°W	なし	なし	1	あり	北側上部削平深い
N18°W	3	あり	2	あり	東側削平
N45°W	3	なし	2	あり	東側削平

(2) 陥し穴状遺構

平・断面形の形状から、分類に必要な属性を有する溝状の陥し穴状遺構63基について、形態分類した集計結果を表4に掲げた。まず、開口部の平面形で見ると、ほぼ9割が開口部が狭い細長い形状のA型に分類された。縦断面形では、I～III型にそれぞれ20基余りが属し、IV型のような特異な形状を持つものは1基のみであった。横断面形では、1型・2型・3型とも21基ずつとなった。この3つの属性の組み合わせは全部で24群あるが、今回の分類では14群が存在した。各群属数は表中にあるとおりである。この集計結果から、本遺跡で確認された陥し穴状遺構は、開口部平面形が溝状の細長いタイプが主体で、縦・横断面形の組み合わせはIV型を除いてバリエーションに富んでいることがわかる。一方B型の幅広タイプでは、横断面形が直立気味の3型はなく1・2型に限られているが、これは開口部が広いことによる壁の崩落が原因となっている可能性がある。

次にこれらの配置・配列についてであるが、複数基で軸方向を同一にしたり、配置される距離が同程度といったものは見受けられない。このことは、溝状タイプの陥し穴状遺構が187基検出されている紫波町西田東遺跡の分析結果においても同様の傾向が示され、限られた地域に方向性や規則性のある配列を把握できそうな箇所が若干ある程度ようである。本遺跡の場合は、群の異なる陥し穴状遺構同士の重複も明瞭な規則性も認められなかった。

2. 遺物

(1) 土師器の年代

ここでは、出土した遺物の9割以上を占める非ロクロ成形の土師器について、器種毎に器形や器面調整等の特徴を示し、その共伴関係から個々の遺構の年代を住居跡を中心に検討してみる。

八木氏は、昭和53・54年に発掘調査された稲村遺跡E16住居跡・B23住居跡・H10住居跡出土の一括資料を「8世紀後半」に位置づけ（八木：1993）、その特徴として「坏類・外面に沈線あるいは無段、内面無段、平底主体。甕類一口唇部に丸味、強い外反、外面ハケメ多い。坏・甕のいずれもロクロ未使用」などを挙げた。

本遺跡で確認された住居群は、地形的にみてもこれと連の集落に属し、年代も概ね「8世紀代」を中心とする時期と考えられる。しかし、すべての住居が同時存在していたかという問題（8世紀前半と後半に大別が可能かどうか）については、まず詳細な遺物の比較・検討が必要と思われたため、八木氏が挙げた土師器の特徴を参考として、今回出土した坏・甕類のそれを遺構毎に一覧表（表5）にまとめた。既述しているが、この中で坏・甕のいずれかを欠いていた、個体数が少なく単純に比較できない遺構については、年代を「8世紀代」とだけ記載した。また、第1号住居状遺構については、ロクロ成形の坏が出土していることから「9世紀以降」した。よってこれら以外の住居跡、第3号・4号・8号・14号・21号・22号・

表4 陥し穴状遺構集計表

縦断面形	横断面形	開口部平面形		合計
		A	B	
I	1	7		23
	2	5	1	
	3	10		
II	1	6	3	19
	2	6		
	3	4		
III	1	3	2	20
	2	7	1	
	3	7		
IV	1			1
	2	1		
	3			
合計		56	7	63

23号・24号・26号・27号について、土器個々の特徴とその構成から「8世紀前半」と「8世紀後半」の二時期の年代観を示した。判断基準は、以下のとおりである。

「8世紀前半」

坏—丸底が主体で内外面有段・外面有段・無段のもの含む。器高のある碗状のものあり。

甕—胴部下端下膨れタイプあり。胴部調整ハケメ・ヘラミガキが主体。

「8世紀後半」

坏—丸底風の平底主体で外面有段のものも含む。

甕—胴部調整ハケメ・ヘラミガキに加えヘラケズリがみられる。

このような観点から検討した結果、本遺跡の住居群は概ね「8世紀前・後半」の二時期にわたる集落構成をとる可能性が高いことがわかった。1つの遺物としてみた場合には、若干古手と思われるものが出土している住居跡もあるが、共存する他の坏・甕の構成から、この集落がつくられた最初の時期が7世紀代に遡る可能性は低いものと思われる。

しかし、これらの住居間には重複がなく、また産地のわかる須恵器のような時期決定の根拠となる遺物がない状態での判断であり、今後修正される可能性のあるものとしていただきたい。

(2) 土製品

27様の住居跡のうち、何らかの土製品が出土しているものは11種で、総点数もかなりの数に及ぶ。主体となる製品は、土製勾玉・土玉で、その他には紡錘車や手づくね土器、壺などを模した小型土器もみられる。特に土玉が40個まとまって出土した第8号住居跡や、鈴を模倣したと思われるものをはじめとする

表5 遺構別坏・甕類の特徴

遺構名	坏	甕	年代	備考
第1号住居	内外面有段丸底	口唇部丸味、外反、ハケメ主体	8世紀代	資料少
第2号住居	外面有段丸底	ケズリ、ハケメ	8世紀代	資料少
第3号住居	外面有段丸底・平底(内面有段1)	口唇部平坦・丸味、外反、ハケメ主体	8世紀前半	
第4号住居	外面有段丸底	口唇部平坦・丸味、外反、ハケメ・ケズリ	8世紀後半	掘文系1
第5号住居	外面有段丸底	口唇部平坦	8世紀代	資料少
第6号住居	内外面有段丸底、内外面無段平底	口唇部丸味、外反	8世紀代	資料少
第7号住居	外面有段丸底	ハケメ主体	8世紀代	資料少
第8号住居	外面有段丸底・平底、無段平底	口唇部平坦・丸味、ハケメ主体	8世紀前半	
第9号住居	なし	口唇部平坦、ハケメ・ミガキ	8世紀代	資料少
第10号住居	なし	破片3点のみ	8世紀代	資料少
第11号住居	なし	破片1点のみ	8世紀代	資料少
第12号住居	高坏1	口唇部丸味、ハケメ主体	8世紀代	資料少
第13号住居	なし	口唇部丸味、ハケメ主体	8世紀代	資料少
第14号住居	外面有段丸底	口唇部丸味、外反、ケズリ・ハケメ・ミガキ	8世紀前半	
第15号住居	なし	なし	8世紀代	遺物なし
第16号住居	なし	外反	8世紀代	資料少
第17号住居	なし	縁1、小型壺1、口唇部丸味	8世紀代	資料少
第18号住居	内外面有段丸底、外面有段	なし	8世紀代	資料少
第19号住居	なし	口唇部丸味、外反、ハケメ・ミガキ・ヘラナデ	8世紀代	資料少
第20号住居	内外面無段	口唇部内凹、ヘラナデ	8世紀代	資料少、器1
第21号住居	外面有段平底風	口唇部外反・内凹	8世紀後半	器1
第22号住居	内外面有段丸底、外面有段	1点のみ	8世紀前半	
第23号住居	外面有段丸底、無段丸底	口唇部平坦・丸味、ハケメ・ミガキ主体	8世紀前半	掘文系2、器1
第24号住居	内外面無段平底	口唇部丸味、外反、ハケメ→ミガキ主体	8世紀後半	
第25号住居	外面有段丸底	外反	8世紀代	資料少
第26号住居	外面有段平底風主体、無段丸底	口唇部平坦・丸味、ミガキ主体	8世紀前半	
第27号住居	外面有段丸底、無段丸底、高坏1	口唇部丸味、ミガキ主体	8世紀前半	
第1号住居状	ロクロ成形	ヘラナデ主体	9世紀以降	資料少
第2号住居状	なし	ハケメ、底部内面彫形	8世紀代	資料少
第3号住居状	なし	破片1点のみ	8世紀代	資料少
第4号住居状	破片2点のみ	なし	8世紀代	資料少
第5号土坑	なし	口唇部丸味、ハケメ主体	8世紀代	資料少
第7号土坑	外面有段丸底、無段丸底	破片1点のみ	8世紀代	資料少
第10号芋坑	外面有段丸底	口唇部平坦・丸味、外反、ハケメ・ミガキ	8世紀前半?	

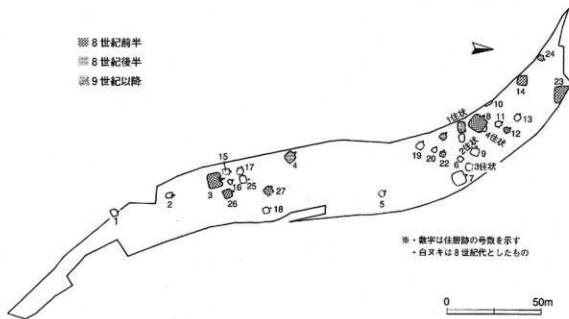


図103 福村Ⅱ遺跡の集落の変遷

多くの上製品が出土した第2・3号住居跡などは、住居規模が大きく集落のブロック構造の核となるものである。これら土製品を持つ住居と持たない住居に何らかの違いがあるかについては今後検討してみたい。その際には、単に土製品といっても勾玉・土玉、小型土器といった道具以外のものと、生産用具である紡錘車という二種の用途を異にする遺物があることは充分に考慮すべきであろう。

3. 福村Ⅱ遺跡の集落の変遷

先に述べた「8世紀前半」と「8世紀後半」のそれぞれに属する住居跡の配置を図103に示した。仮にこの二時期の年代観が正しいものとしてみると、前者では第3号・8号・23号住居跡が、後者では第4号住居跡が核となって、その周辺に存在する数棟の住居とともにブロック構造をとっていたことが想定される。その具体例については、さらに詳細な遺物の検討、住居構造の検討、住居間の距離の問題などを総合的に判断していく必要があり、現段階ではそれを示すことができない。今後、紫波町教育委員会調査分の遺構・遺物を含めた再検討を行い、別の機会に報告することとしたい。また、「惣丹城」との関連について少しでも触れるつもりであったが、ほとんど事実報告・出土資料の提示にとどまった。これについても今後あわせて検討してみたいと思っている。

<引用・参考文献>

- 相原康二 1981 『岩手県南部における古代の上器製年思案』 岩手県文化財調査報告書第60集 岩手県教育委員会
- 相原康二 1986 『岩手県の8世紀の土器』『日本土器辞典』 雄山閣出版
- 進田明朗ほか 1995 『II東北』『須恵器集成図録第四巻-東日本編II-』 雄山閣出版
- 伊藤幸彦ほか 1988 『岩手県の奈良時代土師器の諸問題』『歴史時代土器研究第1号』 歴史時代土器研究同人会
- 宇部剛保 1989 『青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として—』『北海道考古学第25号』 北海道考古学会
- 宇部剛保 2000 『馬淵川下流域における古代集落の様相』『考古学の方法第3号』 東北大学文学部考古学研究会
- 遠藤勝雄 1981 『二戸市上田向遺跡』『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』 岩塩文第23集 (財)岩塩文
- 菊池利和 1986 『古館II遺跡発掘調査報告書』 岩塩文第103集 (財)岩塩文
- 木元元治 2000 『南東北における古代集落の構造』『考古学の方法第3号』 東北大学文学部考古学研究会
- 草間俊一 1965 『岩手県沼岡町野跡遺跡』 岩手県沼岡町教育委員会
- 草間俊一 1970 『岩手県岩手町仙波地・今松遺跡』 岩手県教育委員会
- 熊谷常正ほか 1990 『岩手県須賀川遺跡・浮島古墳群発掘調査報告書』 岩手県立博物館調査研究報告第六巻 岩手県立博物館
- 斎藤邦雄 1987 『古館山』 野田村文化財調査報告書 野田村教育委員会
- 齋藤 淳ほか 1982 『盤谷地遺跡』 岩手県文化財調査報告書第71集 岩手県教育委員会
- 矢々木基武 1989 『那通遺跡発掘調査報告書』 岩塩文第138集 (財)岩塩文
- 佐藤浩彦ほか 1991 『滝田遺跡』 遠野市歴史文化財調査報告書第3集 遠野市教育委員会
- 佐藤浩彦ほか 1991 『高瀬II遺跡』 遠野市歴史文化財調査報告書第4集 遠野市教育委員会
- 佐藤良和ほか 1998 『所の沢IV遺跡発掘調査報告書』 岩塩文第287集 (財)岩塩文
- 瀬川剛男ほか 1982 『東大畑遺跡』『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書II』 岩塩文第44集 (財)岩塩文
- 岡 豊 1981 『中曾根II遺跡発掘調査報告書』 二戸市教育委員会
- 高橋義介ほか 1980 『紫波町稲付遺跡・中田遺跡・古野遺跡』 岩塩文第19集 (財)岩塩文・建設省岩手工學事務所
- 高橋信雄 1982 『東北地方北部の土師器と古代北海道系土器の対比』『北奥古代文化第13号』
- 高橋信雄ほか 1982 『岩手の土器』 岩手県立博物館
- 高橋與右衛門 1982 『水沢市関ヶ原遺跡』『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書II』 岩塩文第34集 (財)岩塩文
- 高橋與右衛門 1996 『岩手県の7世紀の土器』『日本土器辞典』 雄山閣出版
- 羽柴直人 1996 『岩手県九戸地方のクワロ使用以前の土師器』『紀要XV』 (財)岩塩文
- 花坂政博 1994 『西田東遺跡発掘調査報告書』 岩塩文第218集 (財)岩塩文
- 深田幸江ほか 1992 『鼻袋跡発掘調査報告書』 岩塩文第171集 (財)岩塩文
- 濱田宏 1994 『水吉町遺跡発掘調査報告書』 岩塩文第219集 (財)岩塩文
- 丸山浩治 2000 『上台遺跡発掘調査報告書』 岩塩文第334集 (財)岩塩文
- 三浦薫一ほか 1988 『平沢I遺跡発掘調査報告書』 岩塩文第125集 (財)岩塩文
- 八木光則 1992 『古代新波部と爾後体の上器様相』 第18回古代城柵官衙検討会資料集
- 八木光則 1998 『復興における土師器の地域性』『岩手考古学第10号』 岩手考古学会
- 八木光則 1998 『馬淵川流域の様相』『東北地方の古代集落』 第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集
- 光井文行 1992 『岩手県にみられる古代の北海道系土器について』『紀要X』 (財)岩塩文

付篇 分析・鑑定

紫波町船村Ⅱ遺跡出土材の樹種

高橋 利彦 (木工会「ゆい」)

1. 試料

試料は1点で、調査区内中央部から検出された沢跡(山河道)の最下位泥炭層から出土した自然木で、縄文時代晩期のもものとみられている。残存部の最大径は70cmを越え、出土地点に生育していた樹木が根返りを起こし埋積したものとみられる。また、同泥炭層からはコナラ属やトチノキの堅果も出土しているようである。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柀目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール (Gum Chloral) で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版(図版1)も作製した。なお作製したプレパラートは木工会「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料はコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種に同定された。試料の主な解剖学的特徴や原生種の一般的な性質は次のようなものである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形~楕円形、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状から網目状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のもの複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔組織はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属(落葉ナラ属)の中で果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、カシワ (*Quercus dentata*)・ミズナラ (*Q. crispula*)・コナラ (*Q. serrata*)・ナラガシワ (*Q. aliena*)といくつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高が20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。

1. 試料

試料はNo.1～6の6点で、奈良時代のもとのされる焼失竈穴住居址の床面から検出されたものである。No.1～4はⅡE6e住(第19号住)から、No.5-6はⅡF1j住(第23号住)から出土している。

2. 方法

試料を室内で自然乾燥させたのち木口・柀目・板目の3断面を作製、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡(無蒸着, 加速電圧10Kv)で観察・同定した。同時に顕微鏡写真回版(図版2)も作製した。電子顕微鏡観察に当たっては(株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝致します。なお、ネガ・フィルムと残りの炭化材はすべて木工会「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料はいずれもケヤキに同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」(1989)にしたがひ、一般的性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」(1979～1982)も参考にした。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No.1,2,3,4,5,6

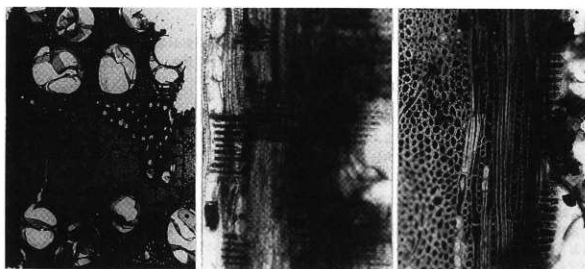
環孔材で孔部は2～3列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、小道管内壁には、らせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、時に60細胞高を越え、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きい加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のもの一つに上げられる。

引用文献

- 平井 信二 1979～1982 「木の事典 第1巻～第17巻」, かなえ書房
佐竹 義輔・原 寛・亙理 俊次・富成 忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」, 平凡社, 321,305pp

図版 1



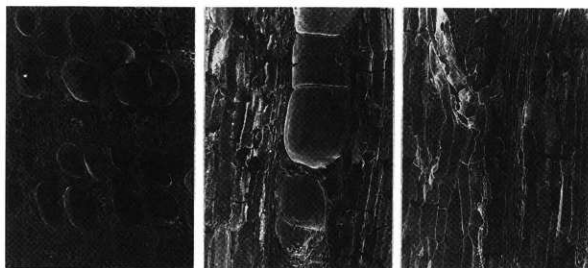
木口

×40 柀目

×100

コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柀目では左から右。

図版 2



木口

×40 柀目

×100

ケヤキ No.2
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柀目では左から右。

稲村Ⅱ遺跡出土ガラス玉の非破壊分析法による調査結果

岩手県立博物館 咲山 まどか、赤沼 英男

稲村Ⅱ遺跡の奈良時代に比定される墓塚から¹⁾、1点のガラス玉(小玉、青色)が検出された。古代のガラス玉については幾人かの研究者によって組成に関する自然科学的調査が行われている。その結果によると、6世紀ごろまでは主として青緑色のアルカリ石灰ガラスが多くみられ、7世紀になって鉛ガラスが出土するようになることが知られている^{2)~5)}。

稲村Ⅱ遺跡出土ガラス玉1点をエレクトロン・プローブ・マイクロ・アナライザー(EPMA)およびエネルギー分散型蛍光X線分析装置(X:EDS)により分析した結果、アルカリ石灰ガラスであり、着色剤としては鉄鉱物を素材としていることが明らかとなった。以下では自然科学的調査によって得られた知見について述べる。

1 分析資料

分析した資料は、稲村Ⅱ遺跡から出土したガラス玉1点である。資料の外観形状ならびに色を表1、写真1、2に示す。

2 分析方法

分析対象としたガラス玉をアルコールで超音波洗浄した後、十分に自然乾燥した。資料の変色を抑制するため蛍光X線分析装置の1mmφ資料マスクにポリプロピレンフィルムを張り、その上に資料をセットしてEDS分析を行った(図1)。次に資料をカーボン蒸着し、EPMA分析に供した。

測定条件は以下のとおりである。

EPMA	
電圧	15 kV
分光結晶	LIF, PETJ, TAP, LDE 2
EDS	
電圧	30 kV
電流	0.3 mA

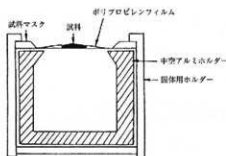


図1 微小試料の定性分析法

3 分析結果ならびに考察

No.1(小玉・青色)のEPMAによる分析結果を図2に示す。ケイ素(Si)を主成分とし、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)を含み、他に微量に鉄(Fe)、マンガン(Mn)、カリウム(k)、ナトリウム(Na)が含有されていることがわかる。また、EDSによる分析結果を図2に示す。珪素(Si)のK α 線(1.7 KeV)が2000のcps以上、その他にナトリウム(Na)のK α 線(1.0 KeV)、(Si)のK α 線(1.7 KeV)、カリウムのK α 線(3.3 KeV)、カリウム(K)のK α 線(3.7 KeV)、マンガン(Mn)のK α 線(5.9 KeV)、鉄(Fe)のK α 線(6.7 eV)、銅(Cu)のK α 線(8.0 eV)、鉛(Pb)のL α 線(10.6 eV)が確認された。これより主原料にはSiO₂、融剤にはCaO、Na₂Oが使用されており、着色剤はFe₂O₃、MnO 鉱物の可能性が高いことがわかった。

ガラスは融剤に鉛を使用した鉛ガラスと、ナトリウム・カリウムなどのアルカリ元素を使用したアルカリ石灰ガラスに分類される。図3よりNo.1はNa、Caを融剤とするNa₂O-CaO-SiO₂系ソーダ石灰ガラスであることは確実である。青淡色の着色剤はFe、Mnと推定された。

わが国では、古墳時代に入ってガラス玉の出土が一般化する。東奈良遺跡の勾玉鋳型の出土が示すように、わが国におけるガラス製作がこの頃から行われていたものと推定されている²⁾。この時代のガラス製品はアルカリ石灰ガラスが主であり、奈良時代以降は、鉛ガラスの生産が主軸であった。当時盛んに建立されていた寺院の装飾品として多量に製造されていたといわれている^{3) 4)}。アルカリ石灰ガラスが国内生産として一般化したのは、ほぼ明治16年頃からである⁵⁾。このような状況の中、稲村Ⅱ遺跡の奈良時代に比定される墓塚からソーダ石灰ガラスが出土したことは興味深く、奈良時代のガラスに関する分析結果の蓄積と、ガラス工房跡の解析を進めることによって、生産と流通の実状に迫ることができるものと思われる。

註 1) 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 浜田宏氏による

2) 富沢威他「古代ガラスの化学」〔化学の領域〕43

3) 吉武素水「ガラスの製造」・ガラス・35～73

4) 小林行雄「続古代の技術」埼玉房、東京

5) 日本の美術 37 「ガラス」

表1 稲村Ⅱ遺跡出土ガラス資料

資料No.	肉眼観察			直径	内径	推定年代
	色	形	形状			
IMⅡ970919	青	丸(小)	完形	4.8mm φ	1.3mm φ	奈良

注) 資料No.、推定年代は財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 浜田宏氏による。

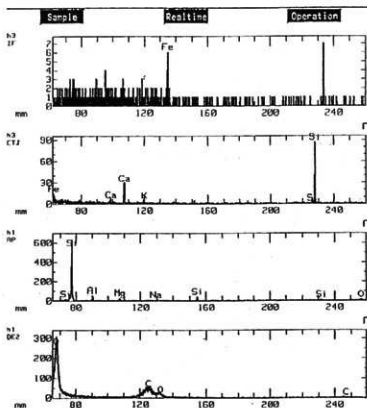


図2 EPMAによる定性分析チャート

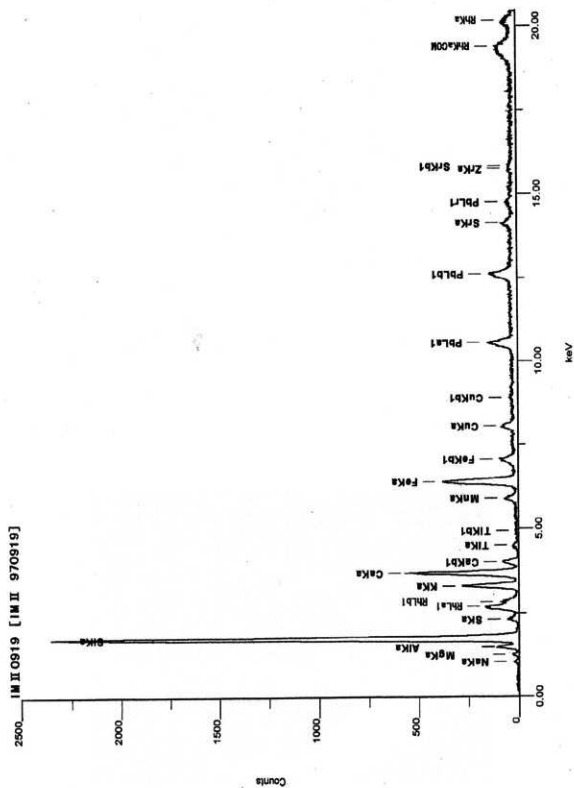


図3 EDSによる定性分析チャート

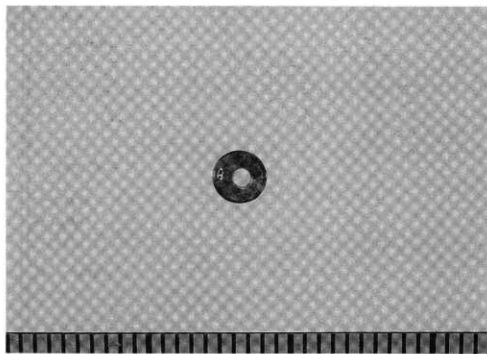


写真1 資料の外観

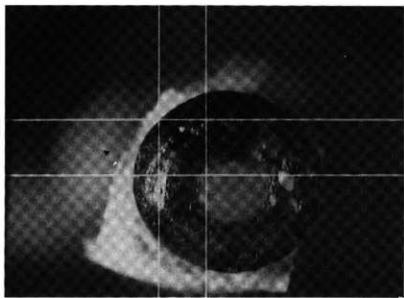


写真2 EDS測定位置写真

写 真 图 版





遺跡遺構（南から）

（1996.10.9撮影）



I—表土

II—黒褐色粘土質シルト層
（遺構検出層）

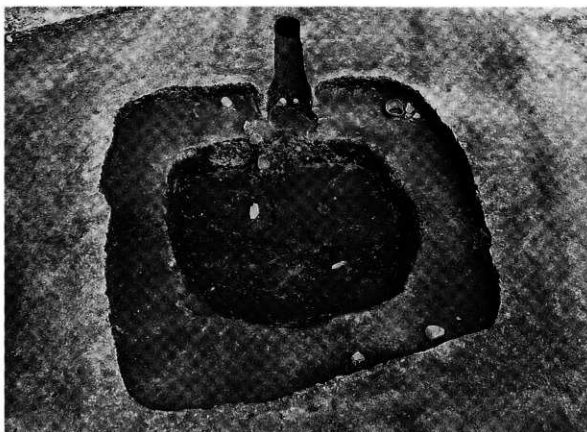
III—褐色土層
（地山）

IV—暗褐色砂層

V—褐色土層

基本層序（I区）

写真図版1 空中写真・基本層序



全 景



煙 土



カマド断ち割り

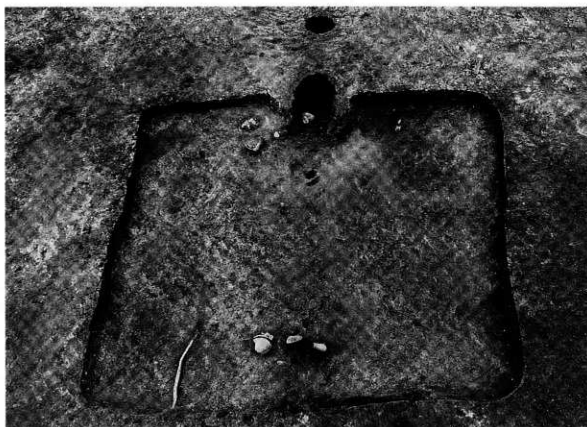


紡錘車出土状況



土製勾玉出土状況

写真図版 2 第1号住居跡



全 景



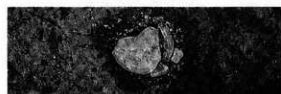
壇 土



カマド全景

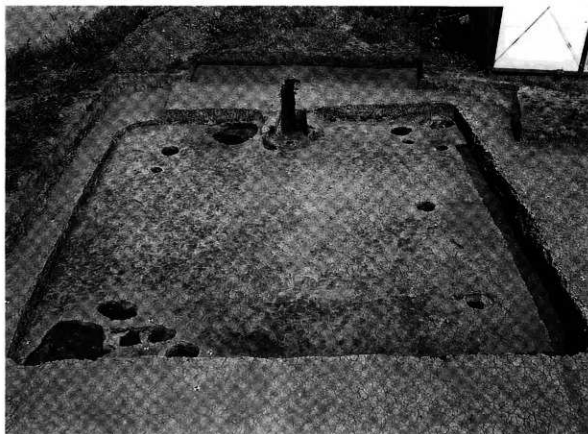


煙道切断面



土器出土状況

写真図版3 第2号住居跡



全景



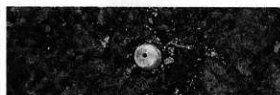
埋土



カマド全景

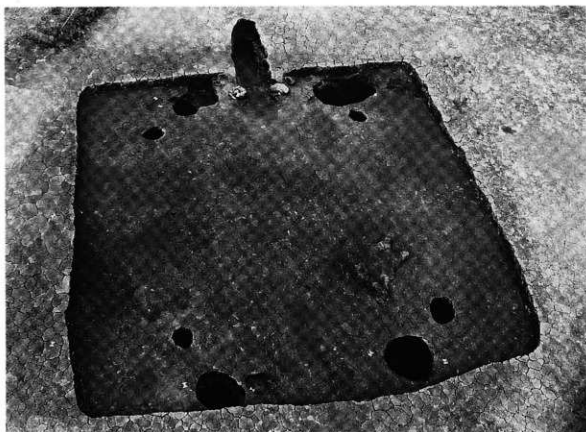


刀子出土状況



銅鏡出土状況

写真図版4 第3号住居跡



全 景



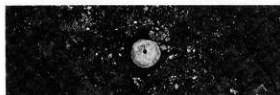
埋 土



カマド全景

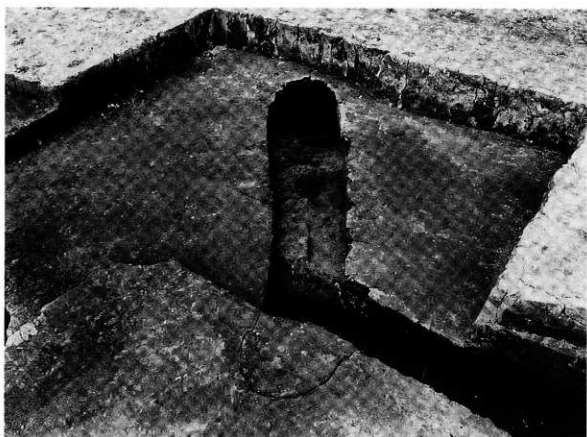


煙道部断面



紡錘車出土状況

写真図版 5 第4号住居跡



全 景



埋 土

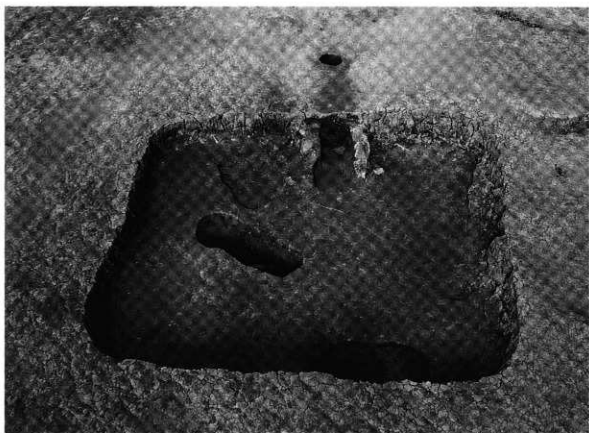


燒燒部燒土



土器出土狀況

写真図版 6 第 5 号住居跡



全景



埋土



煙道部横断面



礫石出土状況



土器出土状況

写真図版7 第6号住居跡



全景



埋土



カマド断ち割り



煙道部断面

写真図版 8 第7号住居跡



全景



堀土



カマド全景

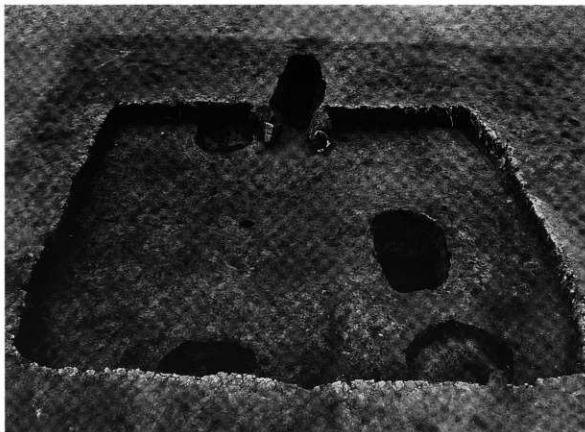


煙道部断面



須恵器出土状況

写真図版 9 第8号住居跡



全景



煙土

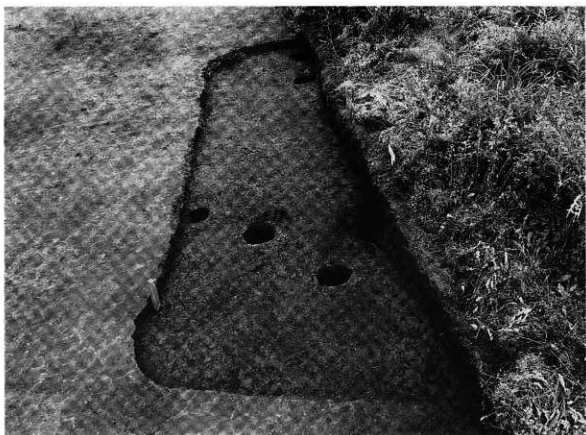


カマド全景



カマド断ち割リ

写真図版10 第9号住居跡



全 景



埋 土



作業風景

写真図版11 第10号住居跡



全景



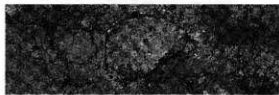
煙土



カマド断ち割り

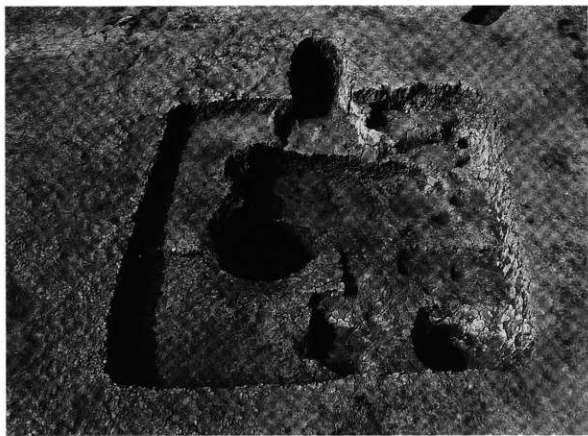


煙道断面



焼土検出状況

写真図版13 第12号住居跡



全 景



埋 土



カマド断ち割り

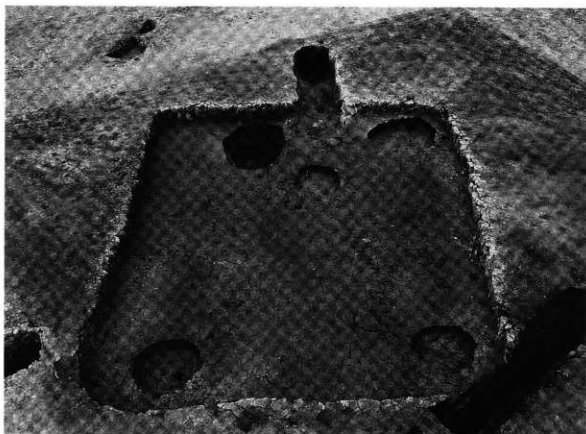


カマド埋土



煙溜部断面

写真図版13 第12号住居跡



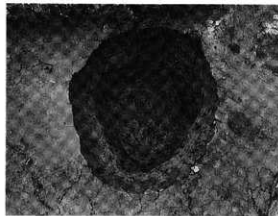
全景



埋土

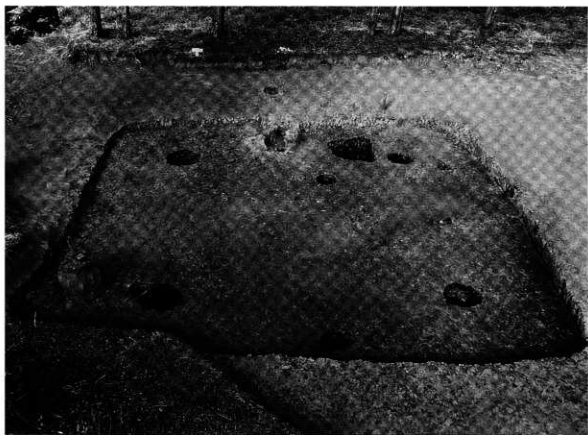


カマド断ち取り



Pit1 全景

写真図版14 第13号住居跡



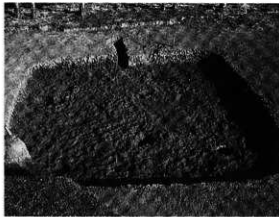
全景



堀土



カマド全景



貼り床除去後全景

写真図版15 第14号住居跡



全 景



埋 土



カマド全景



カマド断ち割り

写真図版16 第15号住居跡



全 景



埋 土



煙道部断面

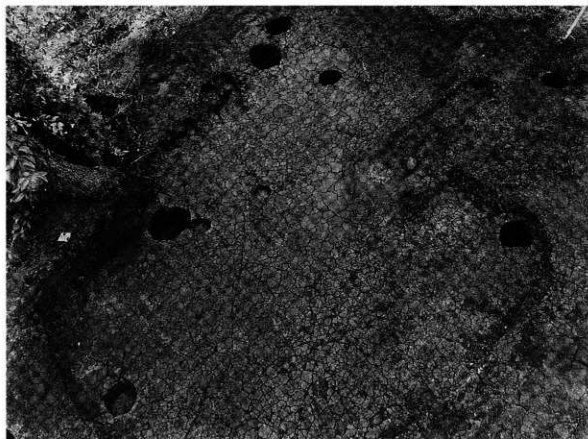


Pit 1 埋土



遺物出土状況

写真図版17 第16号住居跡



全 景



カマド煙土



煙道の断面



作業風景

写真図版18 第17号住居跡



全 景



掘り方堆土

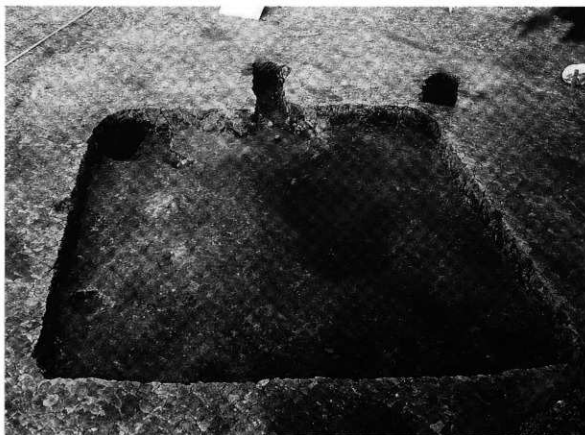


検出状況



遺物出土状況

写真図版19 第18号住居跡



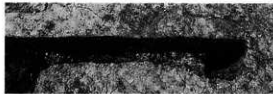
全 景



燻 土



カマド全景

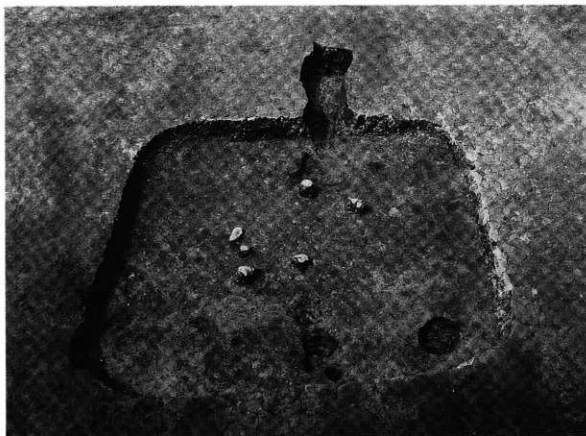


燻道部断面



燻道部断ち割り

写真図版20 第19号住居跡



全景



埋土



貼り床除去後全景



カマド全景

写真図版21 第20号住居跡



全 景



埋 土



カマド全景



カマド断ち割り

写真図版22 第21号住居跡



全 景



埋 土



カマド全景 (←)

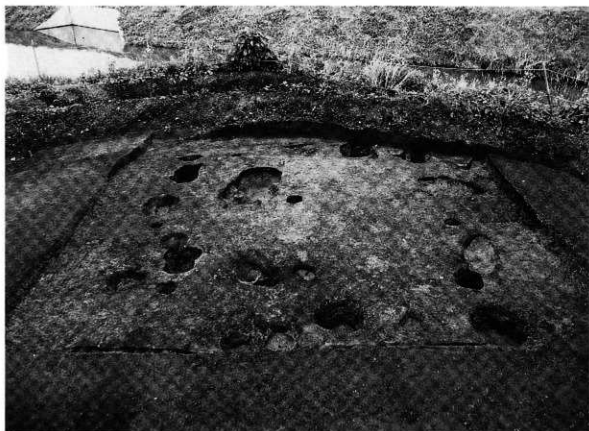


焚道部断面



カマド断面斜り (→)

写真図版23 第22号住居跡



全景



堀土



Pit13 全景



貼り床除去後写真

写真図版24 第23号住居跡



全 景



埋 土



カマド全景

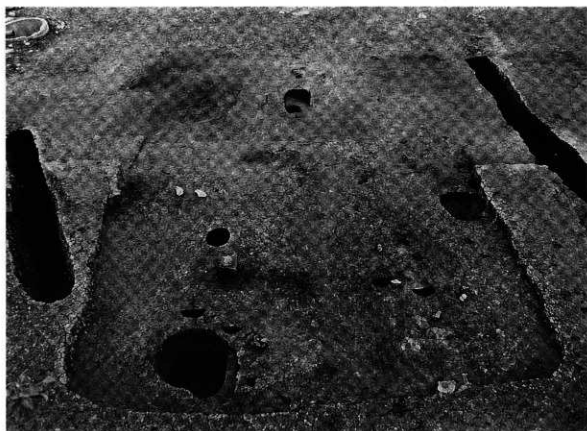


煙道部埋土



カマド断ち割り

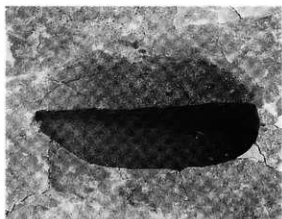
写真図版25 第24号住居跡



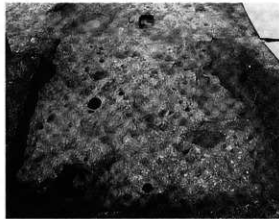
全景



埋土



掘出部埋土



肥り床除去後全景

写真図版26 第25号住居跡



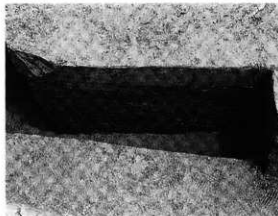
全 景



埋 土

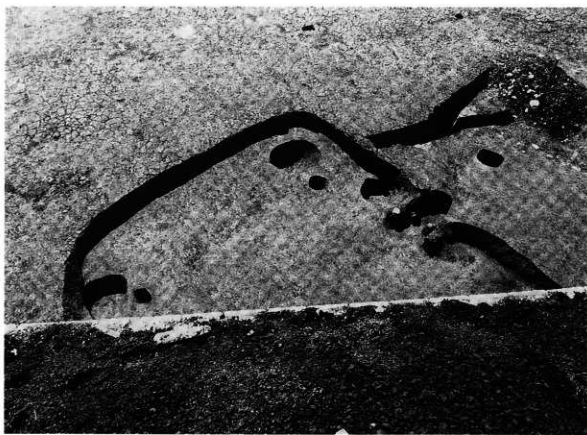


カマド内土器出土状況



煙道部断面

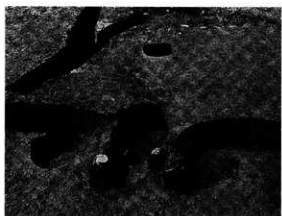
写真図版27 第26号住居跡



全 景



埋 土

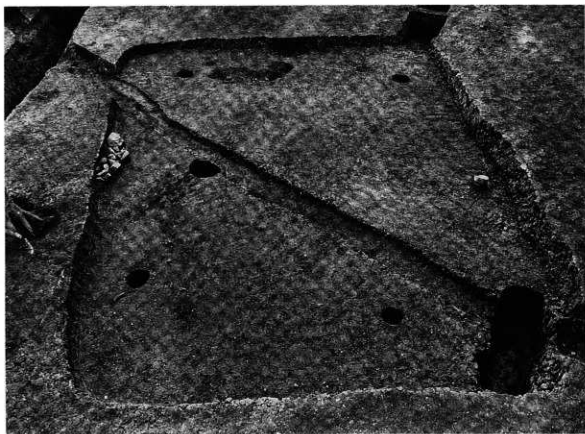


カマド全景

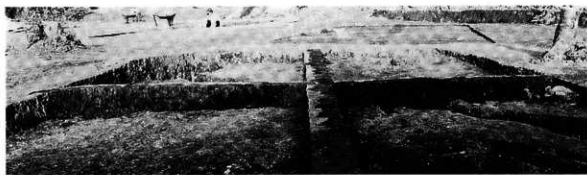


カマド断ち割り

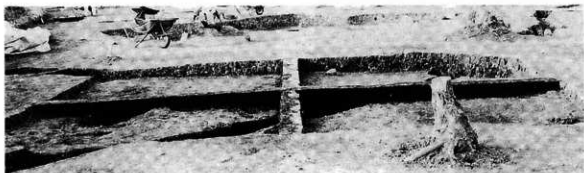
写真図版28 第27号住居跡



全景



埋土 1



埋土 2

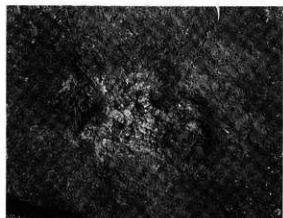
写真図版29 第1号住居状遺構



全景



堀土



焼土検出状況



焼土断ち割り

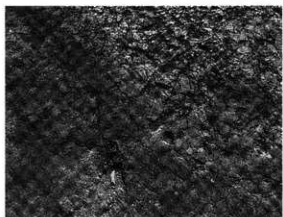
写真図版30 第2号住居状遺構



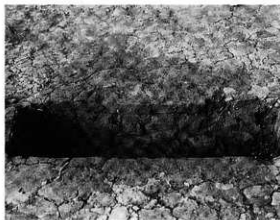
全景



埋土

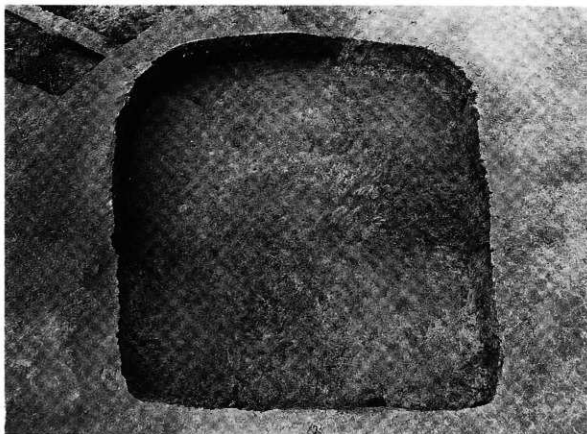


灰土検出状況



灰土断ち取り

写真図版31 第3号住居状遺構



全景

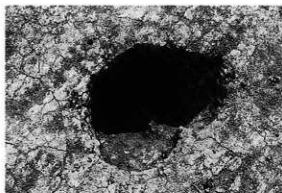


埋土 1



埋土 2

写真図版32 第4号住居状遺構



第1号土坑



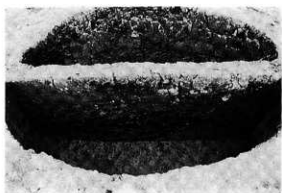
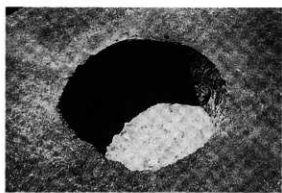
第2号土坑・作業風景



第3号土坑



第4号土坑



写真図版33 土坑(1)



第5号土坑



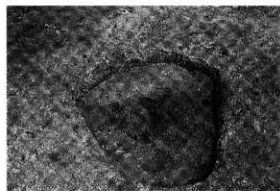
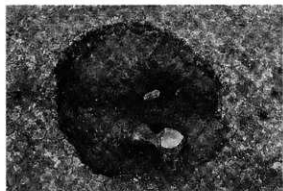
第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑

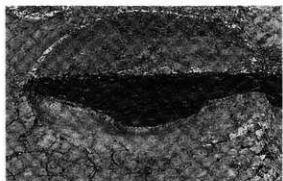
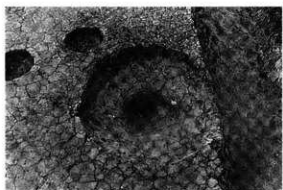


写真图版34 土坑(2)



第9号土坑

第10号土坑



第11号土坑

第12号土坑

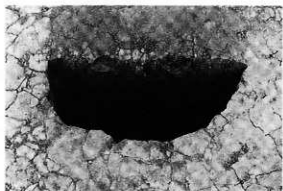
写真图版35 土坑 (3)



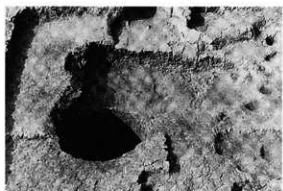
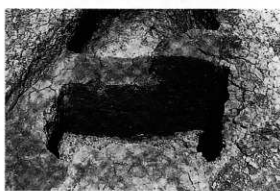
第13号土坑



第14号土坑



第15号土坑



平成8年度調査区中央部から南部
(下側は松波町教委調査区)

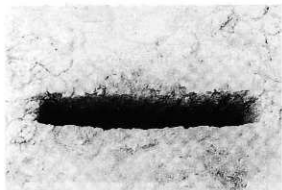
写真図版36 土坑(4)・空中写真



第1号烧土



第2号烧土



第3号烧土



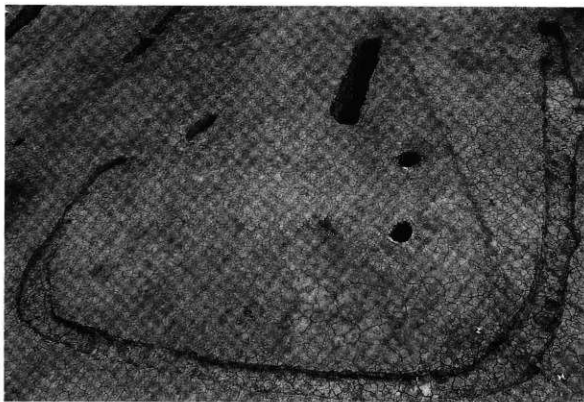
第4号烧土



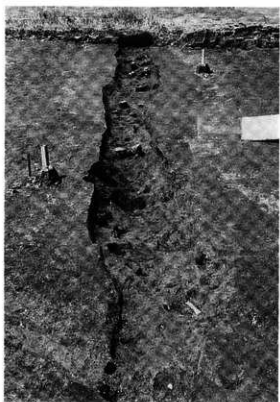
平成11年度調査 遺跡全景

(1999.6.29 撮影)

写真図版37 烧土・空中写真



第1号溝跡



第2号溝跡

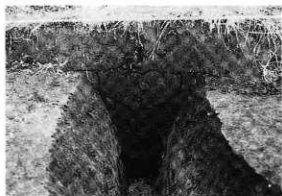


埋土

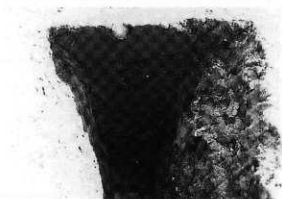
写真図版38 溝跡(1)



第3号溝跡



埋土



第4号溝跡



埋土

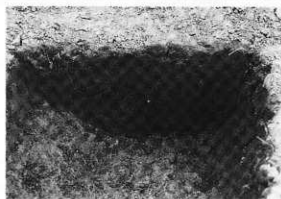
写真図版39 溝跡(2)



第5号溝跡



埋土



第6号溝跡



埋土





第7号溝跡



作突乱壁



第8号溝跡



埋土

写真図版41 溝跡(4)



標1印



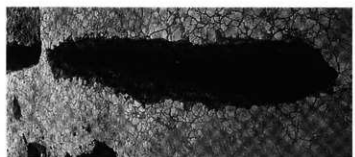
標2印



標3印



標4印



標5印

写真図版42 陥し穴状遺構(1)



第6号



第7号



第8号



第9号



第10号

写真図版43 陥し穴状遺構(2)



図11紙



図12紙



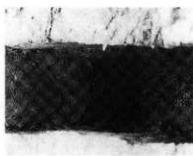
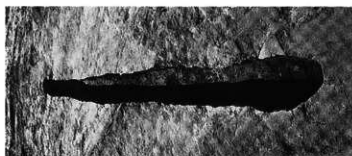
図13紙



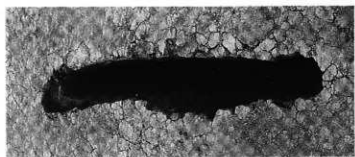
図14紙



図15紙



写真図版44 陥し穴状遺構 (3)



第16号



第17号



第18号



第19号



第20号

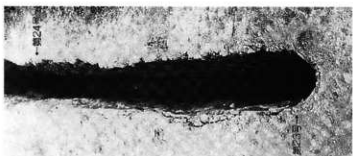
写真図版45 陥し穴状遺構 (4)



第21号



第22号



第23・24号



第25号



第26号

写真図版46 陥し穴状遺構 (5)



第27号



第28号



第29号

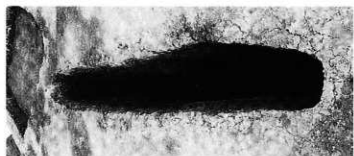


第30号



第31号

写真図版47 陥し穴状遺構 (6)



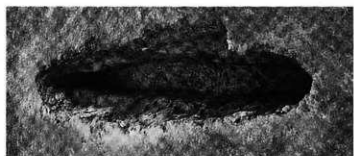
第32号



第33号



第34号

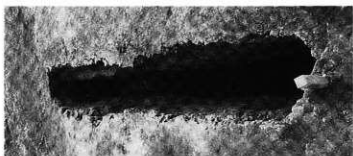


第35号

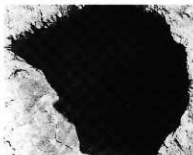


第36号

写真図版48 陥し穴状遺構 (7)



第37号



第38号



第39号



第40・41号



第42号

写真図版49 陥し穴状遺構 (8)



第43号



第44号



第45号



第46号



第47号

写真図版50 陥し穴状遺構 (9)



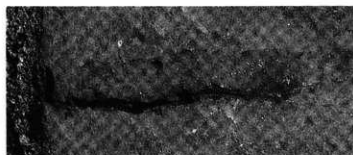
第48号



第49号



第50号

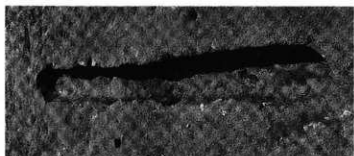


第51号

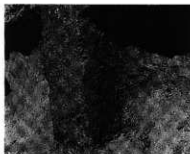


第52号

写真図版51 陥し穴状遺構 (10)



第53号



第54号



第55号



第56号



第57号

写真図版62 隠し穴状遺構 (11)



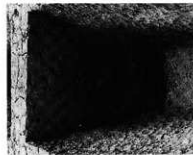
第58号



第59号



第60号



第61号



第62号

写真図版53 陥し穴状遺構 (12)



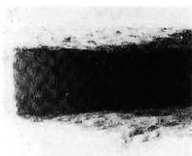
第63号 - 64号



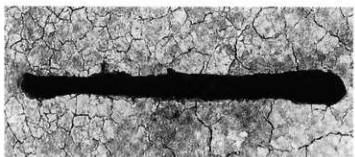
第65号



第66号



第67号



第68号

写真図版64 陥し穴状遺構 (13)



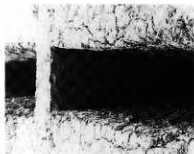
第69号



第70号



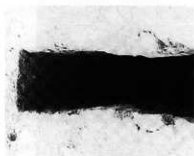
第71号



第72号



第73号



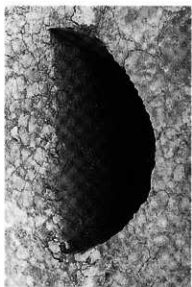
写真図版55 陥し穴状遺構 (14)



第74号

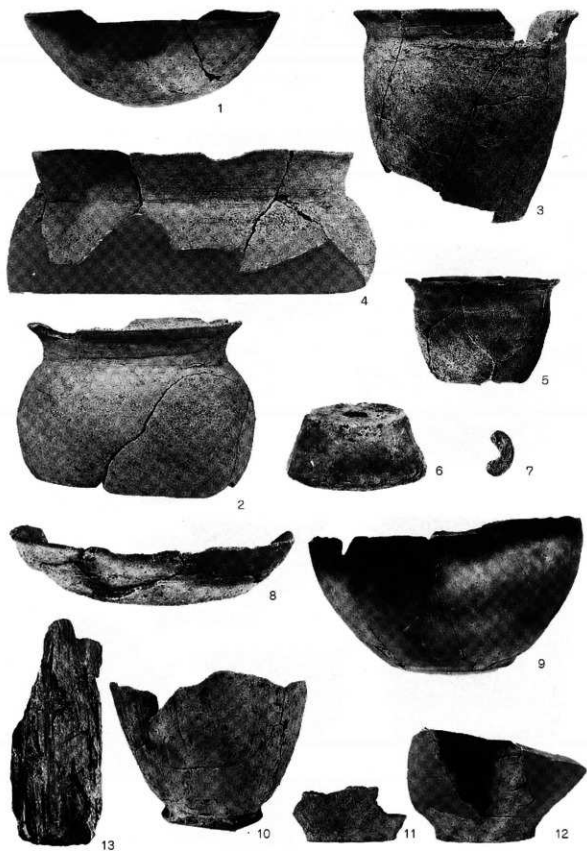


第75号

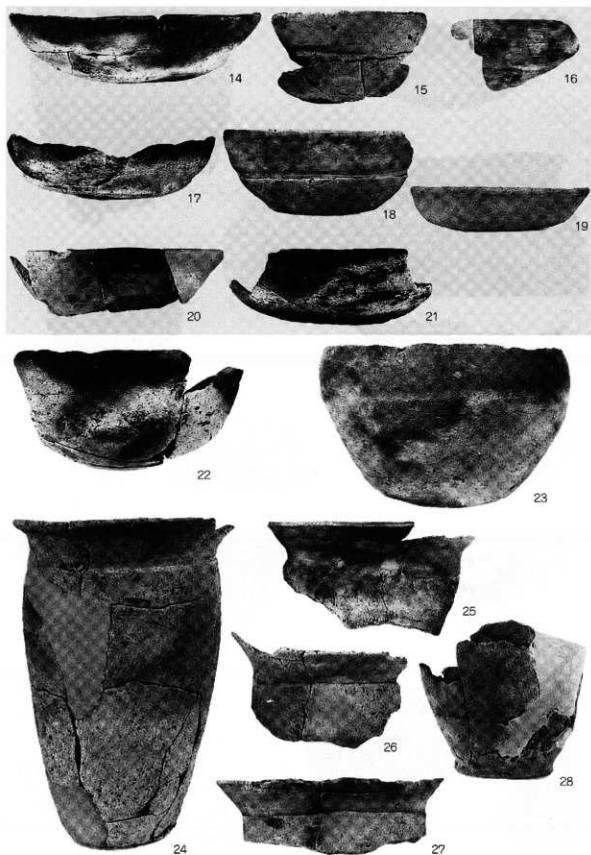


第76号

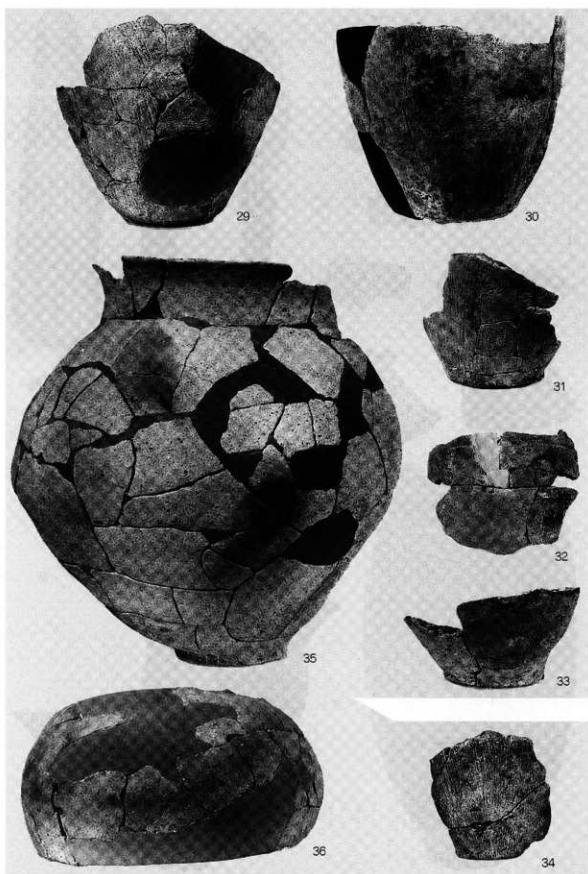
写真図版66 陥し穴状遺構 (15)



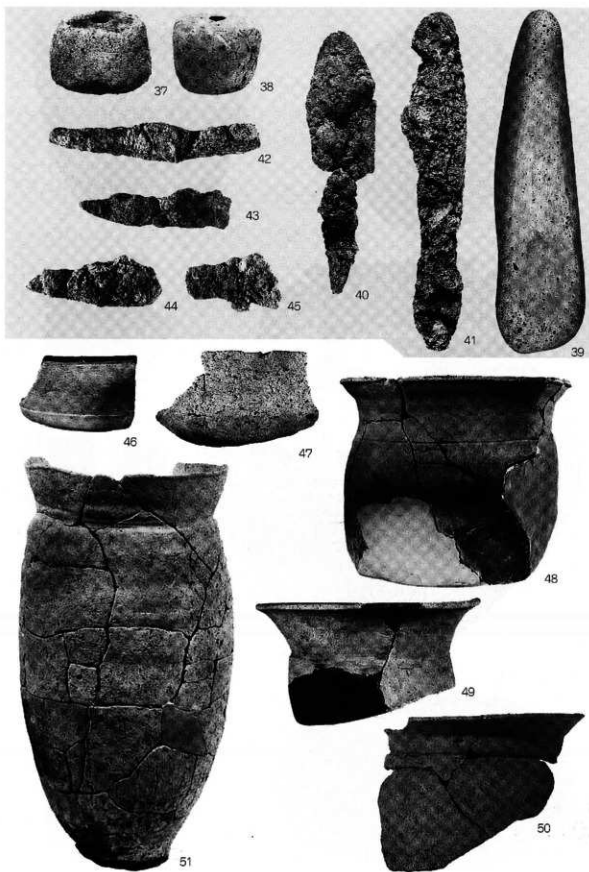
写真図版57 遺構内出土遺物(1)



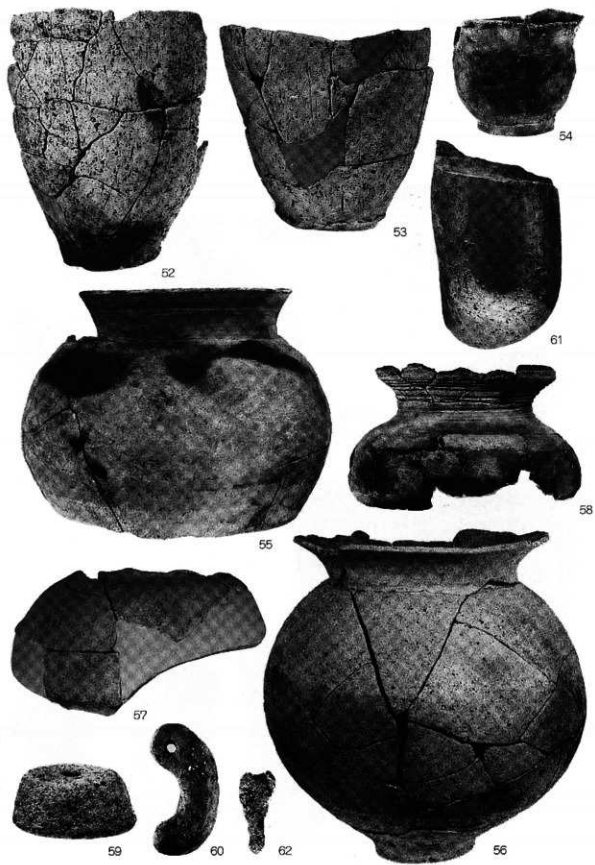
写真図版58 遺構内出土遺物(2)



写真図版59 遺構内出土遺物(3)



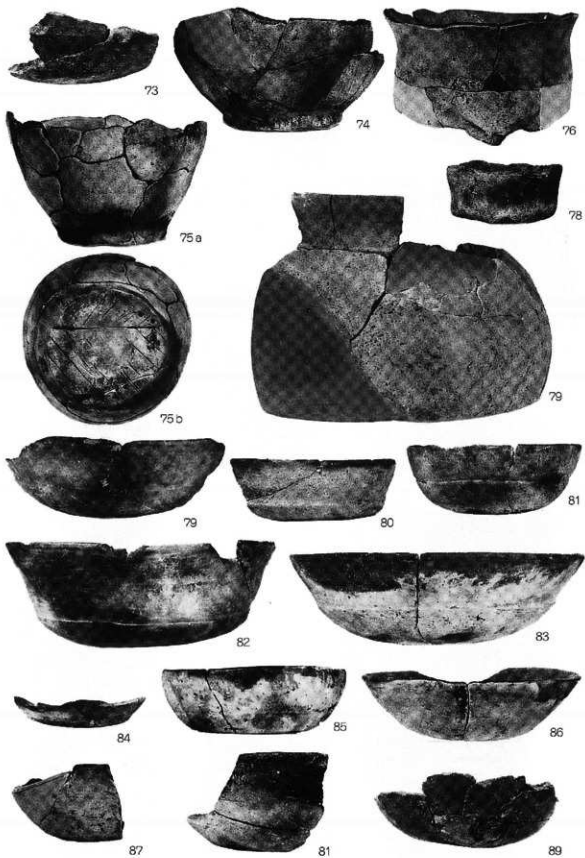
写真図版60 遺構内出土遺物(4)



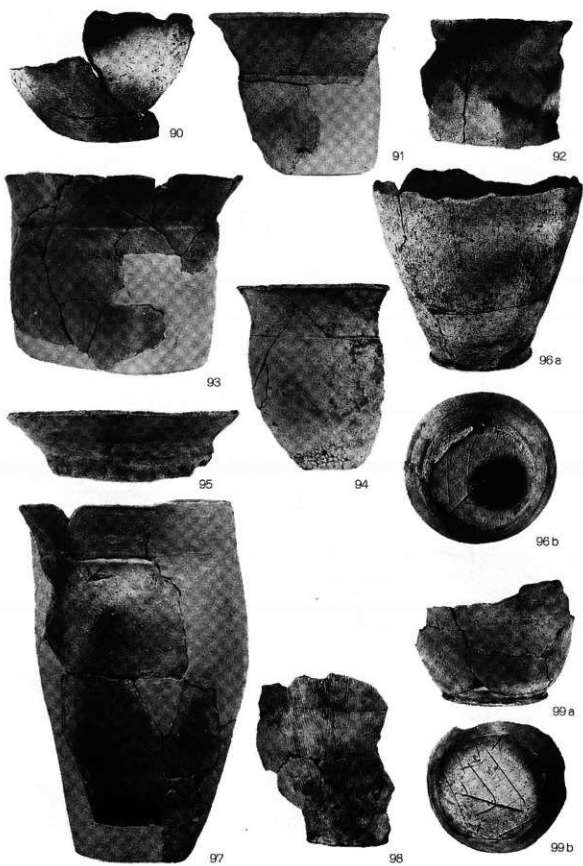
写真図版61 遺構内出土遺物(5)



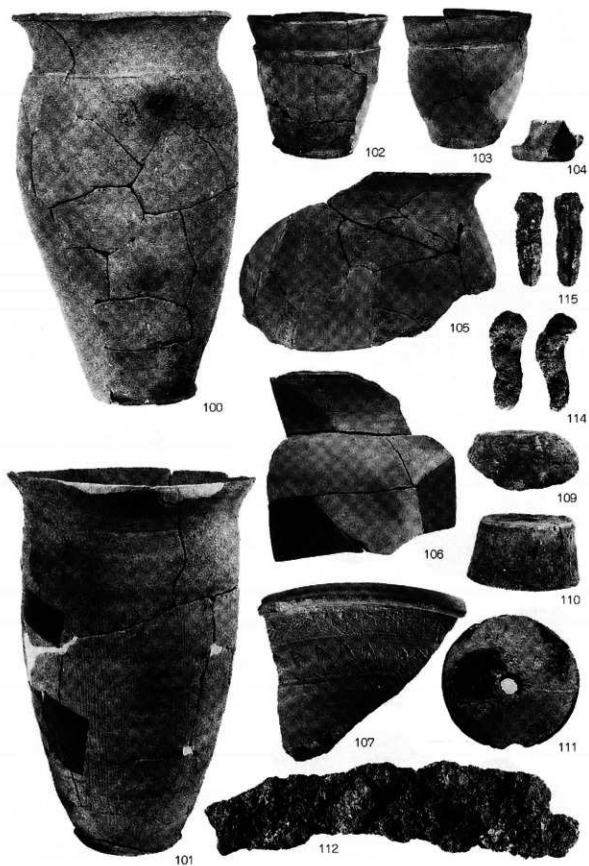
写真図版62 遺構内出土遺物 (6)



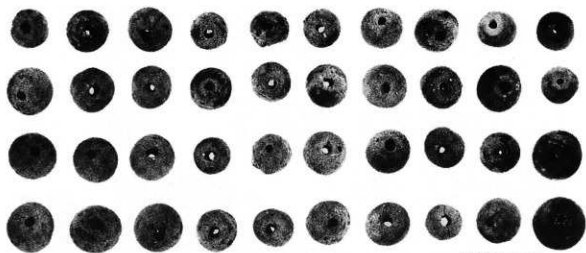
写真図版63 遺構内出土遺物 (7)



写真図版64 遺構内出土遺物(8)



写真図版65 遺構内出土遺物(9)



108 (1)~(40)



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



129



127



128



131

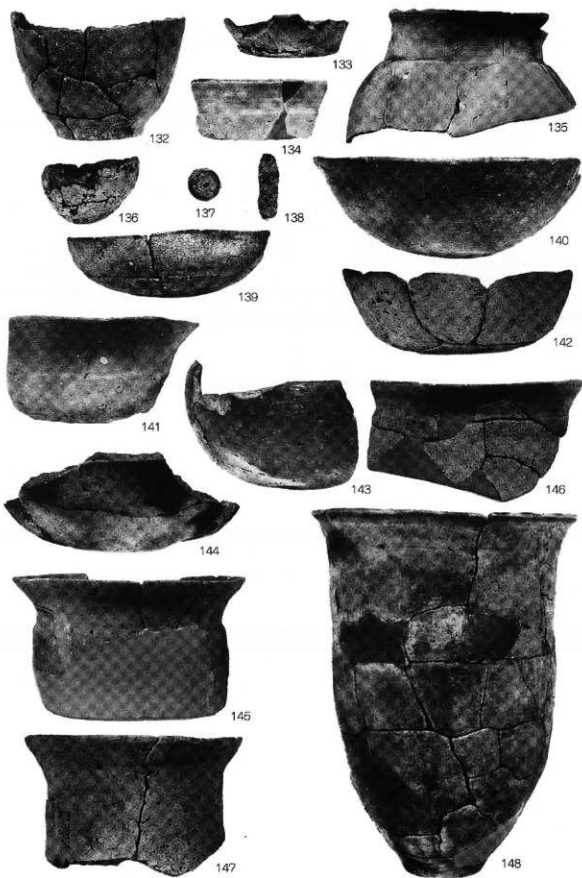


130a

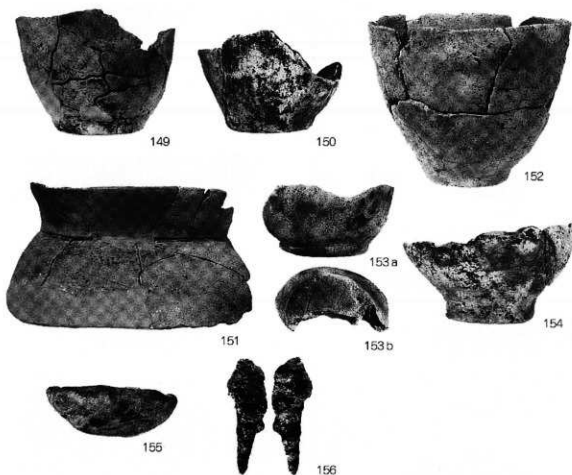


130b

写真図版66 遺構内出土遺物 (10)



写真図版67 遺構内出土遺物 (11)



出土遺物一覧

(住居跡)

1号住 1~7
 2号住 8~13
 3号住 14~45
 4号住 46~62
 5号住 63~65
 6号住 66~72
 7号住 73~78
 8号住 79~115
 9号住 116~120
 10号住 121~123
 11号住 124
 12号住 125~131
 13号住 132~138
 14号住 139~156

15号住 なし
 16号住 157~158
 17号住 159~160
 18号住 161~163
 19号住 164~172
 20号住 173~175
 21号住 176~184
 22号住 185~186
 23号住 187~254
 24号住 255~282
 25号住 283~287
 26号住 288~313
 27号住 314~329

(住居跡)

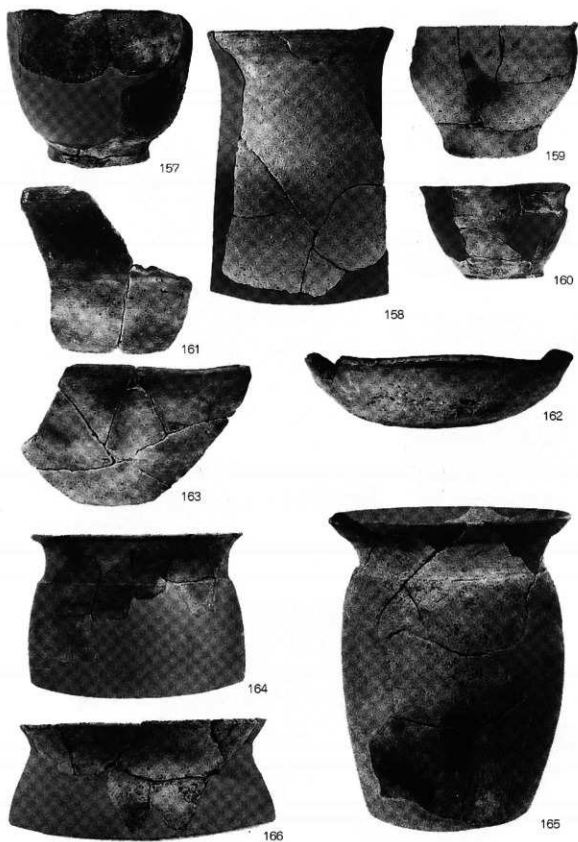
1号住状 330~333
 2号住状 334
 3号住状 335
 4号住状 336・337

(土坑)

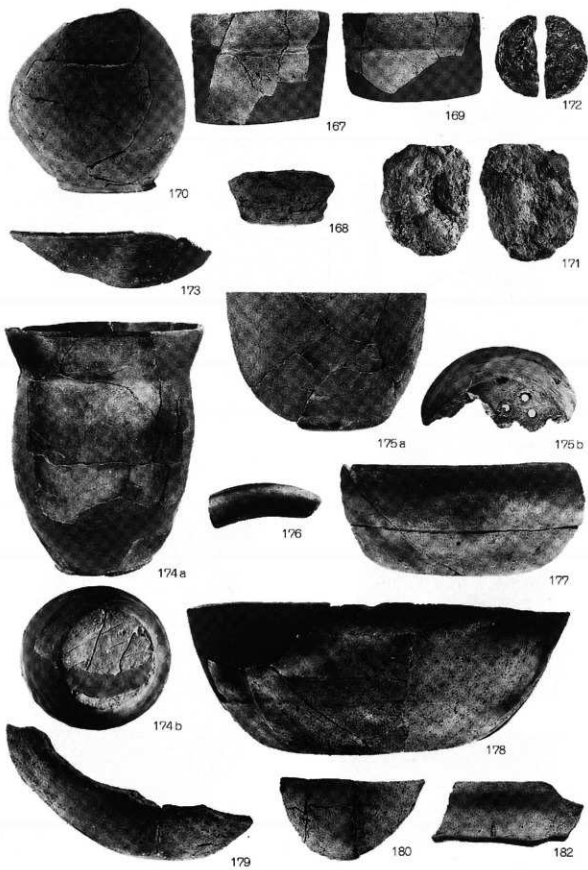
5号 338・339
 7号 340~342
 10号 343~363

(竪穴状遺構)

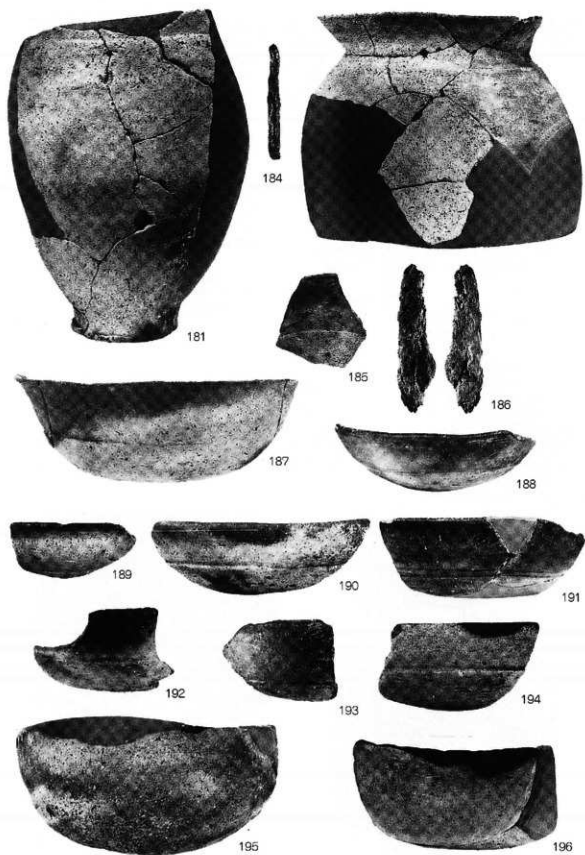
76号 379
 (旧河運) 364~378
 (遺構外) 380~391



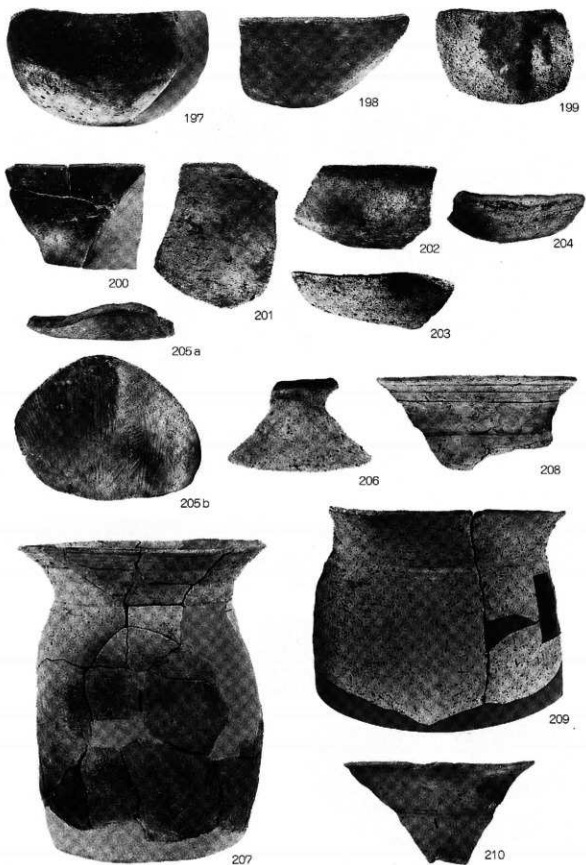
写真図版69 遺構内出土遺物 (13)



写真図版70 遺構内出土遺物 (14)



写真図版71 遺構内出土遺物 (15)



写真図版72 遺構内出土遺物 (16)



211



212



213



214



215



216



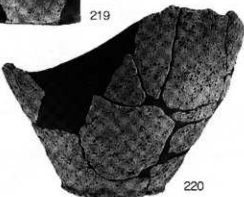
218a



219

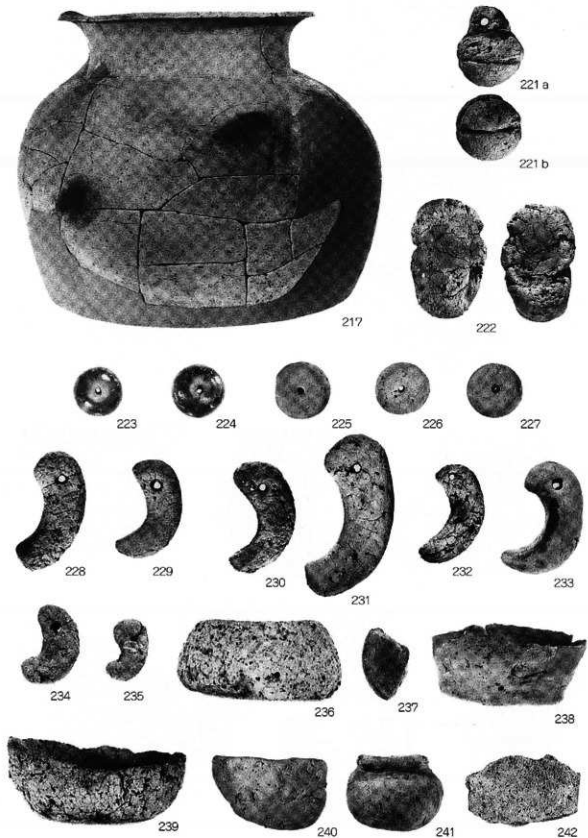


218b



220

写真図版73 遺構内出土遺物 (17)



写真図版74 遺構内出土遺物 (18)



243



244



247



245



246



248



250



249



251



252

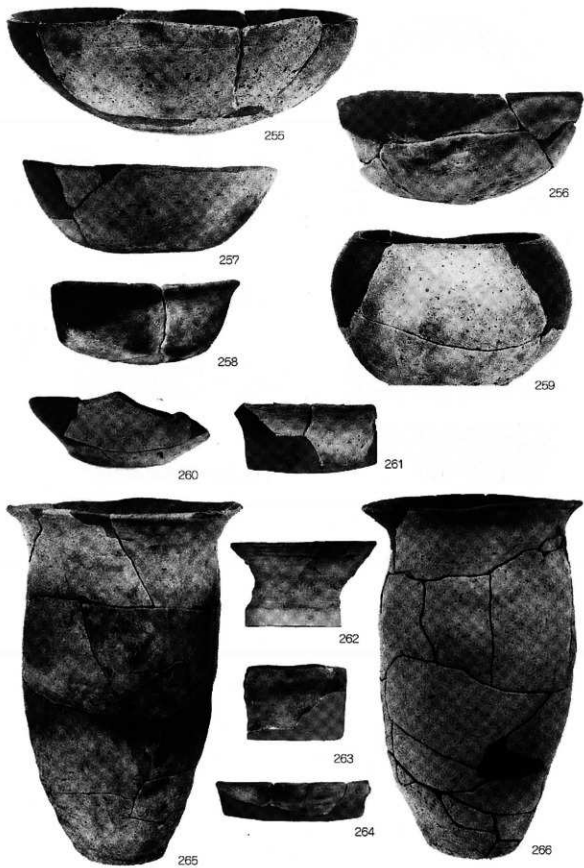


253



254

写真図版75 遺構内出土遺物 (19)



写真図版76 遺構内出土遺物 (20)



267



268



274



269



271



270

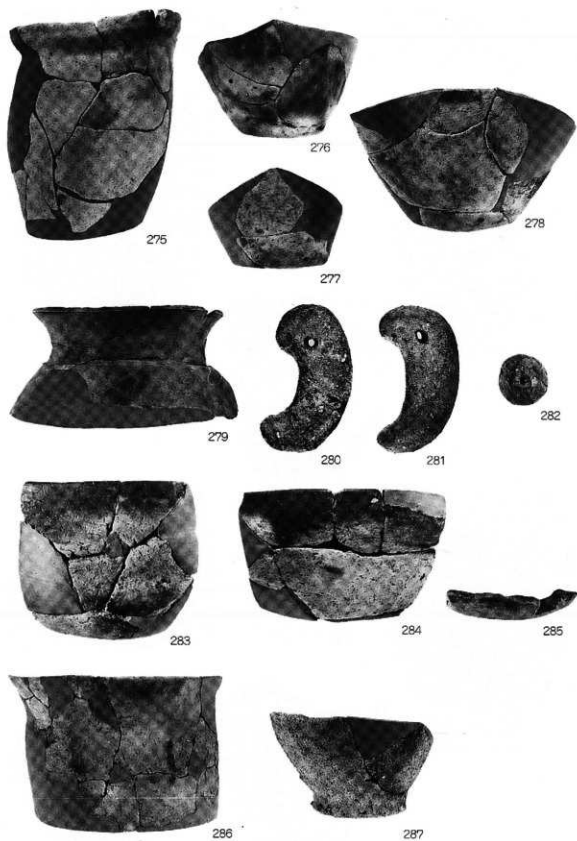


272



273

写真図版77 遺構内出土遺物 (21)



写真図版78 遺構内出土遺物 (22)



288



290



289



292



291



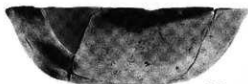
293



295



294



296



297



298



301



299



302



300

写真図版79 遺構内出土遺物 (23)



303



304



305



306



307



308



309



311



312



310



313

写真図版80 遺構内出土遺物 (24)



314



315



316



317



318



319



320



322

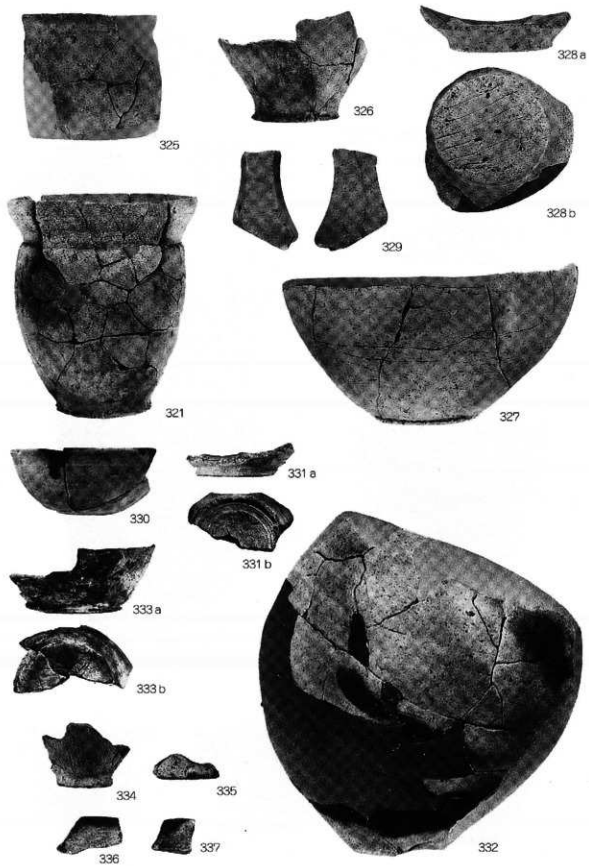


323

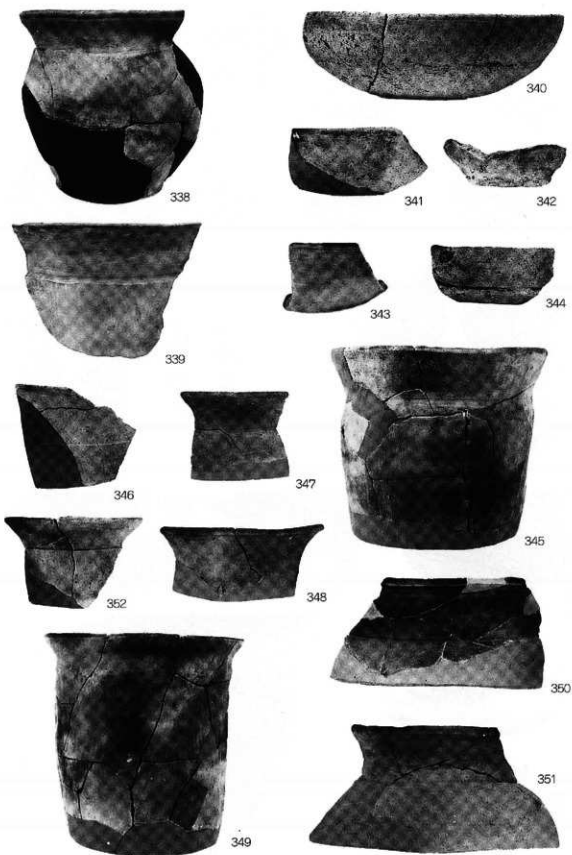


324

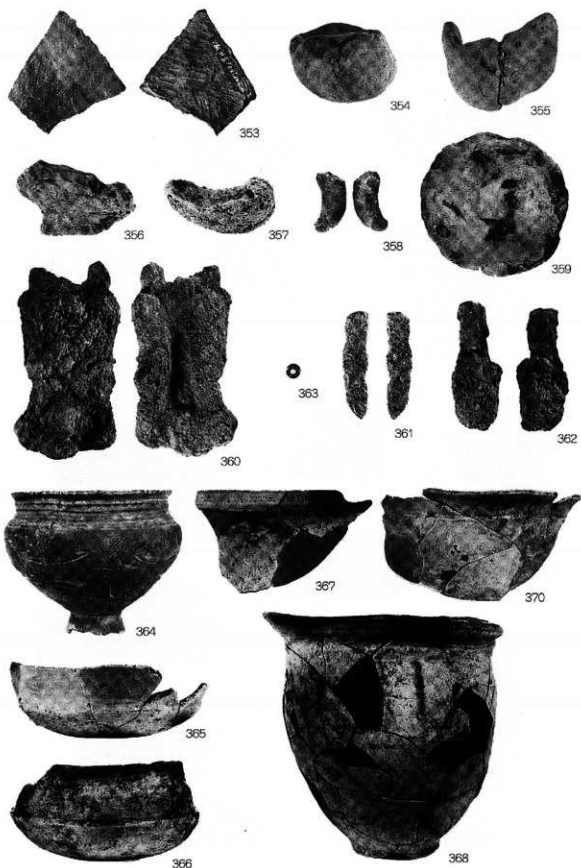
写真図版81 遺構内出土遺物 (25)



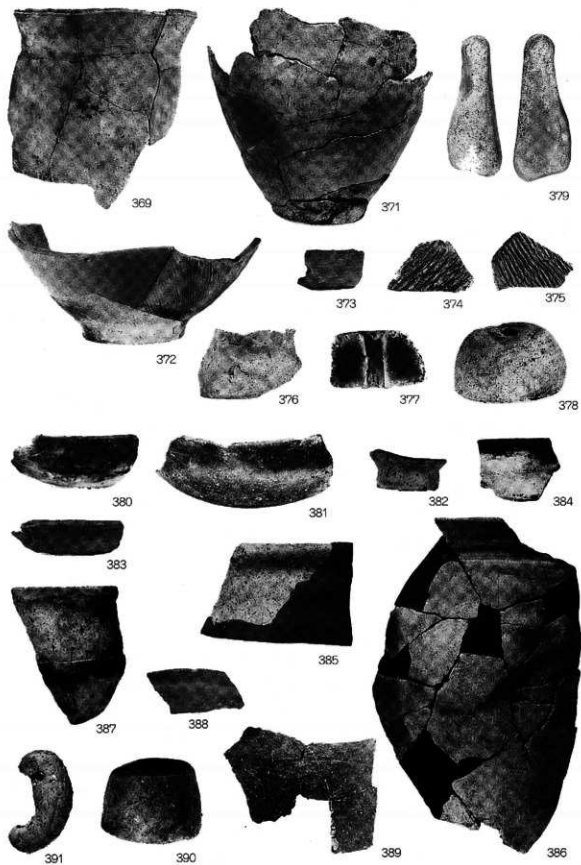
写真図版82 遺構内出土遺物 (26)



写真図版83 遺構内出土遺物 (27)



写真図版84 遺構内出土遺物(28)・旧河道出土遺物(1)



写真図版85 旧河道出土遺物(2)・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いなむらⅡいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	中小河川改修事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第348集							
編著者名	濱田 宏							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
稲村Ⅱ遺跡	岩手県紫波郡紫波町高水寺字稲村23-5ほか			39度 34分 50秒	141度 10分 19秒	19960625～ 19961031 19970805～ 19970930 19990520～ 19990715	5,950㎡ 2,030㎡ 800㎡	「中小河川岩崎川改修」に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
稲村Ⅱ遺跡	集落跡	奈良時代 (8世紀) 縄文時代 時期不明	竪穴住居跡 27棟 住居跡状遺構 4棟 土坑・墓塚 15基 溝跡 8条 焼土遺構 4基 陥し穴状遺構 76基 旧河道 1カ所	土師器・須恵器 土製品(勾玉・土玉・紡錘車) 鉄製品(刀子・銀先・鉄鏃・釘ほか) ガラス玉	徳丹城創建前の集落 土製品類多数出土 麻文系(口縁部有段の甕)			

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職員】

所長 伊藤民也 副所長 櫻田次男

【管理課】

課長 川浪清徳 嘱託 千葉芳大
 課長補佐 山崎善光 〃 葉島ト子
 主査 立花多加志 〃 藤田佑重
 主事 日影睦夫 〃 新佐々木光重

【調査第一課】

課長 佐々木 勝文
 課長補佐 佐々木 清
 主任文化財 小山内 透
 専門調査員 赤石 登
 文化財 〃 〃 充一
 専門調査員 〃 〃 眞健一郎
 〃 〃 〃 進人
 〃 〃 〃 遠昭彦美
 〃 〃 〃 海林勝則人之
 〃 〃 〃 東部直正
 〃 〃 〃 阿羽寺原村 靖克
 〃 〃 〃 菅長 浩二郎
 〃 〃 〃 溜野 池上 広拓
 〃 〃 〃 村上 多村 昭治
 〃 〃 〃 本北 山木 敬
 〃 〃 〃 小林 弘 卓
 期限付 〃 〃 教徳賢介 (6月退職)
 専門職員 〃 〃 藤原池上 又田 眞由美
 〃 〃 〃 井川 吉田 博義 (11月退職)
 〃 〃 〃 吉北 田

【調査第二課】

課長 高橋 與右衛門
 課長補佐 中川 重紀
 主任文化財 高橋 義介
 専門調査員 金子 佐知子
 文化財 中田 迪
 専門調査員 〃 〃 辛身彦
 〃 〃 〃 工古 藤館 眞眞幸
 〃 〃 〃 阿松 尾藤 芳幸
 〃 〃 〃 工前 岩田 潤徹
 〃 〃 〃 岩早 濱田 計悟
 〃 〃 〃 安濱 安藤 由紀夫
 〃 〃 〃 高千 木業 正彦
 〃 〃 〃 千佐 藤澤 武昭
 〃 〃 〃 半杉 中星 直美
 〃 〃 〃 〃 之
 期限付 鈴木 聡 (12月退職)
 専門職員 〃 〃 吉川 徹
 〃 〃 〃 北田 黒和
 〃 〃 〃 吉原 美津子
 〃 〃 〃 齋藤 麻紀子
 〃 〃 〃 島 弘 征

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第348集

稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書
中小河川改修事業関連発掘調査

印刷 平成13年3月15日

発行 平成13年3月19日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

TEL (019)638-9001

印刷 (有)橋本印刷

〒020-0015 盛岡市本町通1丁目15-29

TEL (019)652-1354

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2001

